

第四部 近世關係史料

経兼日記

自 慶長五年十二月廿七日
至 同六年正月三十日

慶長五年庚子十二月廿七日

天晴

一御旧例之御煤箒撰良辰向歳徳神之方ニ坂本対馬守定役ニ而箒初也、

一鹿兒嶋之衆徒御折袴之卷敷進之、奏者相良新右衛門於宿所ニ被請執、近習衆に被渡藤内衆、旧規ニ者寺社奉行被申次候を当時其役依無之如右矣、

廿八日天晴

一福昌寺曆軸之御礼被申、其時大門被開候、然共従大門者不被入候、常之門江被入候、御茶参候、御前も上り候、奏者伊勢兵部少輔、次ニ南林寺・興国寺被出、茶不被給、御対面候而退出候、

一三ヶ寺へ被成歳暮之御礼候、一番福昌寺、二番大乘院、三番浄光明寺、福昌寺ニ而者、小飯上り候、川上殿御相伴ニ被参候、老中一人被出座候、当年者平田太郎左衛門尉被参候、憩月之亭ニ而御参会、勲盃之興共潜ニ候、衣鉢侍者韋駄天之前まで罷出賞申、住持者玄関まで被出向

招請候、旧例如此矣、談儀所にて点心上り候、御酒三返参候、御相伴衆上ニ順ず、道場ニ而も点心上り候、別時の勤行被修ニ付而雖為禁酒、御光儀故住持も御酒被勸、寮者衆被罷出、御酒被給候、例年者廿五六日之比右之三ヶ寺へ被成、歳暮之御礼候を当年者富隈へ御越ニ付而此日御出候、

廿九日天陰

一老中諸侍古曆之御慶被申上候、

一談儀所諏訪之座主衆徒いづれも御慶被申上候、談儀所法印へハ菓子ニ而御茶参り候、其外者御対面計ニ而被退候、

一冠岡大性院住持職案堵被申祝儀被申上、両寺共ニ御礼錢百足宛進上、源長坊摩利支天領被下、御礼式白麻進上、否笠刑部少輔子息名を被下、樽肴鳥目式百足進上仕、此日、

一京都江松平内大臣家康公之御内、伊井兵部少輔殿・山口勘兵衛殿江両使者下向候、伊井殿江ハ勝五兵衛尉、山口殿江ハ和久甚兵兵衛尉と申人ニ而候、当家御内衆頼娃主水佐・白浜三四郎其外侍余多下国仕候、京都之両使者ハ日州あやの里にて年を被越候由注進候、御内衆者此日かこしまへ下着候、

慶長六年辛丑正月朔日

天晴

藤原朝臣少将忠恒、薩州鹿兒嶋屋形年甫之御旧例、元日
庚子最前小板屋ニ御出候而被成裝束、年男御櫛初申御冠
被整、御対面所へ御出候而時之奉行衆被懸御目、其後広
間ニ被成御出、諸面々町田・村田・土井・本田、何れも
被懸御目、年男なけし江奏者被申、諸侍ハ伺候所ニ候を
被成御覽候、從其五社参り候、一番諏訪大明神ニ而候、
御三献参り候、御太刀一腰、散錢百疋御拝進、二番戸柱、
御三献参り候、散錢百疋拝進、太刀者不参候、三番稻荷、
御三献参候、散錢百疋御拝進、四番春日、御塩参り候、
三献者不参候、散錢百疋御拝進、五番若宮、御塩参り候、
散錢百疋御拝進、御一家諸侍不殘御供被申、直ニ御祈念
所之不動へ御参候、御しほ参、御拝進百疋、次ニおくニ
御入候へバ各退出被申候、
一奥ニ而御三献参候、式三献也、続而御節供参候、先御齒
堅目の餅上り候、次ニ御茶上、宮仕者もろかうの童郡衆
仕候、次ニ力御台山之御台御節供大御台也、式之膳の汁
参候之間筋被食様ニ候、次ニ、
一御対面所へ御出候而老中衆へ三献御寄合候、三肴也、当

年者平田太郎左衛門尉・鎌田出雲守被有合被給候、

一鹿兒嶋諸面々御太刀進上之衆、平田殿・鎌田殿・桂殿・
村田殿・上井殿・町田殿・伊勢兵部少輔・白浜次郎左衛
門尉・相良新右衛門尉・此等之衆也、

一鹿兒嶋諸侍硴飯進上、樽三十棹ニ懸り候、十二合海山者
不参候、硴飯之樽御廉中へも参り候、御祈念所へも参り
候、旧例には元日之硴飯を伊地知家江調進被申候へ共、
當時者伊地知家衰微ニ付而如右之伊地知家江取調候時者
種々の儀式雖有之、近年者被略之、硴飯の儀式左ニ委記
スル也、晚景之御節供如前矣、

二日辛丑大雪

一夙ニ小板屋ニ被成御出、冠裝束有テ対面所へ御出、河上
上野入道出仕、例者式三献被給候へ共、為隠居故三肴ニ
而御酒被給候、御礼錢百疋進上、次ニ阿蘇玄与出仕、右
同、次ニ入道衆皆々被指出、人ニ寄三肴削物にて御酒被
給候、当年者如右、

一福昌寺へ御光儀、御劍年男被仕候、先客殿にて御三拝を
被成、次ニ菓子ニ而御茶上り候、次ニ憩月へ御座を被移
御会尺、御相伴河上殿出座被申、老中一人被出候、当年
者平田太郎左衛門尉出座候、御香典百疋被進之候、寺江

も扇進上、老中江も扇子被進之候、次ニ修正之御案内候へば仏殿へ御参り有て大般若被成頂戴候、大般若の箱をハ衣鉢侍者持而被参候、御畳をハ鎌田名字持来候而敷候、其江十文字之小路御帰駕候砌、

一 町之別当罷出、定舞台ニ而御目見え仕候、鳥目二百足進上、次ニ奥ニ御入候而御節供如常、晚景も前々日ニ同シ、昔者此日伊地知館へ被成御光儀、種々の御遊興、すわう引など候由、古き日記ニ見え候、其外委儀式共雖有之、是を不注候、

一 伊集院江御雑餉進上、三献目之時地頭被指出、御かわらけ被下候、其江諸侍召出、御酒御とをり給候、沙汰人も罷出、御酒被下候、昔者長命と申猿楽能出、音曲など唄、樽筒拝領仕候由、古き記し物ニ有之矣、

三日壬寅天晴

一 柩殿・頼娃殿出仕、三肴ニ而御酒被給候、
一 龍伯様江御使者御太刀被成進献候、使節吉田美作守三肴ニ而御酒給候、使者鳥目百足進上、
一 御弓始有て御三献削物参候、諸寺何れも弓仕御酒被下候、
一 京都より般若院本田助丞罷下候、伊井兵部少輔殿江書札并御服五ツ被進之候、田辺屋道与茶壺一ツ但宇治茶之つめ致進上候、

一 節分の埃飯又かたがへのわうはん共云、任旧例指宿より調進、当地頭

鎌田出雲守被相調候、地頭出座被申、三献目之土器地頭被始候、従夫諸侍召出御酒給候、御唄初有て御さかもり候、一扣笛など仕、種々御勸盃之興を被催候、埃飯のかきり如例御座すき、御前もおくへ御入候へバ年男二三献、地頭被寄含候、同朋衆も同座候、旧例にハ此日市来より之御雑餉参候、其時も御座之儀式如前矣、

一 惟新様より御使者御太刀被成進献候、使節本田源右衛門尉三肴にて御酒給候、一百次・隈之城・山田よりの御雑餉参候、一おくにて麦の飯上り候、かたかへの儀式也、

四日癸卯天霽

一 談儀所御参、対面所ニ而被成見参、談儀所二者菓子ニ而御茶上り候、次ニ御点心参候、御酒三返参候、諏方之座主も出座候、衆徒何れも召出御酒被給候、諏方之大夫御扶持テ参候、太夫にハなけしの内にて御かわらけ被下候、内侍も罷出、なけしの内にて御対面仕候、其より福昌寺へ御光儀、老中鎌田出雲守出座被申候、少将様も礼問なと御沙汰候、寺僧皆々新年頭之仏法被申合候、樽一ツ浴司へ被遣候、風呂二者御入候事も候、多分者無御入候、座頭など有合候へば平家一節など申事も候、左候へバ折

紙を被遣候、次ニ御帰駕を待居候而御百姓衆庭上にて御目見え仕、諸職人・伊集院之町衆、定舞台ニ而御見え申候此日山伏衆出仕候、向之嶋衆罷出候、伊集院源二郎出仕、太刀進上、三肴ニ而御酒被給候、

五日甲辰天晴

一 福昌寺御參威儀ニ而被成御対面候、先菓子ニ而御茶參候而広間ニ而威儀を被直候、其間ニ南林寺・興国寺被指出候、福昌寺掛落ニ而又出座有テ点心參候、天目ニ而御酒上り候、二献目を福昌寺御初候、当年者南林寺・興国寺同座ニ被參候、興国寺者無出也、晩達にて候へバ福昌寺御伴の僧一人必御座ニ被出候、其代として出座被申候、平僧者無其例候之間、委住之福昌寺御退出之時者、屋形様次之座ニ而一送被成候、御出之時も次之座まで被出向、被成招請候、年男者庭上まで罷出請取申候、御相伴二者老中一人被出座候、当年者平田太郎左衛門尉被出候、常者誰そ一兩人も出座候、入道衆などにても有之由候、

一 御馬乗始被成候、口添二者御厩ノ別当立申候、御鐙を八年男をさへ申候、御厩別当御かわらけ給候、昔ハ此日御犬始有之由申伝候、御犬之時者御三献ニ口伝共候歟、只御馬召初候時者三肴ニ而御酒參候、

六日乙巳天晴

一時宗衆被參候浄光明寺二者菓子ニ而御茶參候、伊集院之道場・不断光院などには御茶はかりも參候、

一 藤次郎殿出仕古鉢三献ニ而御酒被給候、

一 龍伯様より御使田代甚介被參候、鎌田出雲守・伊勢兵部少輔富隈へ御談合ニ被越候、

一 南林寺へ御光儀、香典百疋被進之候、老中平田太郎左衛門尉出座候、其外紹佐など御供被申午之刻ニ御出、酉之刻ニ御帰候、此日南林寺へ御出之事者、龍伯様御代より相始候由候也、

七日丙午天晴

一 御節供如常先糝參候、御対面之儀式如例諸侍悉出仕、

一 近衛殿より御書札到来、川上四郎兵衛等持而下国候、

一 帖佐より諸侍出仕、加世田金泉寺被參候、御茶被給候、

一 日新寺被參候、菓子ニ而御茶被給候、北郷久次郎出仕、三肴ニ而御酒被給候、

一 未之刻ニ鉄炮をそろえなされ候、申之刻ニ弓揃候、鉄炮之響天地を動、いかなる悪魔強敵も退散すへきと社聞之、乗馬の蹄者穿沙逐風粧孫呉か勇士も不可如之と見え候、

一 戌之刻之末平田殿壇飯進上、拾式御合樽御座江取直候、

海山者御掾ニ取直候竿者御庭ニ被懸候、平田殿御座に被出、式献目之盃被始、三献過候て諸面々諸侍召出御酒給候、御座へ紹佐罷出御媒芥共被申、御酒かさなり候砌、河

野猪右工門尉唄始、其後皆音曲被申御酒宴長々最前也、式献目ニ同朋珍阿弥罷出御掾より慶賀仕とか御祝申せと可申聞せ候へバ中庭にて慶賀ゆわひ言をはやし候、御宴半の時分しゆん罷出御酌申候、御前より扇を被下候、其後老中すわうをぬかれ候へば、諸面々諸侍かたきぬをぬき候、御酒宴過、おくへ御入候へバ各も退出候、老中一人被殘、年男二三献給候、御同朋も同座候、晚景は御節供如例矣、一鬼箆にて候本者年男鬼を追候へ共、近年者をと名敷人をゑらび被進せ候、当年者猿渡九郎左衛門尉おひ申候、大豆ヲ鉢ニいれながら御前へ持参候を御賞翫にて御削物にて御三献参候、

八日丁未天晴

一広濟寺被参候、菓子ニ而御茶参候、三光院被参候、御茶ばかり出候、伊集院より諏訪之太夫中嶋の御花かう持参仕候、伊作之源太夫大汝八幡の御花かう持参仕候、早晚もおくにてあかり候、一函書頭殿出仕、御太刀進上、古鉢三献参候、式献目者秘書被初候、一秋月殿より年頭之

使者被参候、書状兩通持参候、馬代三百疋進上、使鯨鮫与申者にて候、此日御簾中方よりの御振舞候、おくにての御会尺也、

九日戌申天晴

一吉利殿出仕、三肴ニ而御酒被給候、新納五郎右衛門尉入道出仕、三肴ニ而御酒被給候、いつれも太刀進上、川辺正慶寺被参候、御茶被給候、町田勝兵衛尉伊作之地頭被詰候御祝被申上、太刀折紙進上、上井（縁甚）甚六、小林之地頭被仰付、御礼太刀折紙進上、市来大日寺白麻進上、其外之聖家衆、禪家衆被参候、僧の位により御茶被給候、大日寺へは当年者御酒被給候、伊集院三郎五郎罷出、

十日己巳天陰

一又吉殿出仕、古鉢三献参候、三献目のかわらけ又吉殿被初候、談儀所へ如旧例御光儀、老中平田太郎左衛門尉供奉被仕、未之刻ニ御出、戌之刻ニ御帰、一太平寺・山内寺被参候、菓子ニ而御礼茶参候、御前へもあかり候、一御祈祷初可為転読候由、年男前より老中へ申、老中より談儀所へ其由被遂案内候旧規也、

十一日庚戌天晴

一御祈祷初、南殿之間ニ而大般若転読三部、談儀所之法印、

諏訪之座主衆いづれも被參候、開闢之時御前も被成指出候、

一御吉書老中平田太郎左衛門尉御右筆者岩切雅樂助硯文台を持參候而御吉書を被仕、御判被遊、奉行よみあけを被承候、其文二曰、

一可神社仏客修造之事、

一可專勸農之事、

一可徵納国々之年貢之事、

年号日付御判有之、次二御三献參候、御右筆も御座に被出候、老中衆御右筆いづれも鳥目百足宛被拝領候、

一御鎧の祝初候、御三献參候、年男宮仕被申候、兵具衆皆々御かわらけ被給候、御鎧の餅酒肴諸侍不殘たまわり候、

一川上左近少監罷出、太刀折紙進上、三ツ肴二而御酒給候、五代勝左衛門出仕、鳥目五十疋進上、御酒給候、

一川辺神殿寺被參候、御茶給候、日高新四郎罷出、鳥目式百疋進上、隈之城百次より猪進上、

一申之刻二御弓揃候、御前も被遊候、諸侍も仕候、的之代として削板を被立候、御前者もろ箭被遊中候、諸侍も少々射あて候、鎌田方もろ矢仕候、御道具衆まで弓仕候、弓無器用之仁者鉄炮仕候、厥後御祝儀御酒肴參候、台

所より取調之候、諸侍へも御酒給候、

十二日辛亥天晴

一右馬頭殿出仕式三献參候、御太刀進上、馬代千疋進上、村田雅樂助出仕、太刀折紙進上、三肴二而御酒たまわり候、佐多殿出仕、古躰三献二而御酒被給候、太刀折紙進上、龜山殿出仕、樽肴進上、三肴二而御酒被給候、片浦かり屋能出、樽肴白麻進上仕、定舞台二而御目見え仕候、一此月富隈へ御出、天氣うらゝなるにより御躰二而御出行候、御供之衆いづれも船にて被參候、一富隈二而山田民部少輔所に被成御宿候、御三献進上被申候、御太刀并鳥目百疋進上統而御膳上り候、藤次郎殿、又吉殿御出座、かこしま御供衆召出、御酒被下候、廳而 龍伯様へ御出樽六ツ折四ツ、台之物一ツ御進上、樽肴台之物一之台へも被進之候、廳而御寄合右馬頭殿、藤次郎殿、又吉殿老中衆出座候、御酒式返參り御進上之御酒鹿兒島富隈之諸侍召出給候、

十三日壬子天晴

一富之隈二御逗留、佐土原より高崎越前守御使二參り候、樽肴荷ぬめこ進上、三肴二而御酒たまわり候、敷根仲兵衛尉出太刀樽猪一丸進上仕候、三肴二而御酒たまわり候、

一 京都の使者和久甚兵衛尉殿・加津五兵衛尉殿御案内被申候、青銅式百疋宛進上、御肴二而御酒被成参会伊集院下野入道出仕、樽肴進上、三肴二而御酒たまわり候、

一 求麻相良殿より年頭の御礼被申候、太刀一腰・馬一疋進上、

一 京都之使節へ被灰御礼候、加津五兵衛尉殿に鉄放一挺被進之候、

但青貝之筒酉之刻ニ富之隈を御打立、帖佐へ亥之刻ニ御着、直に屋形へ御参、惟新様より御馬太刀被成進覽候、おくにて御会尺、

十四日癸丑天風吹

一 帖佐ニ御逗留御広間ニ而御参会、御一家老中衆御座へ被参候、御供衆一人も不残飯被下、いづれも被召出、御座にて御酒給候、御道具衆御馬執までも御台所ニ而飯酒飽満仕候、般若寺之使僧八幡の座主被出、白麻進上、伊勢平左衛門尉宿所へ御立寄、御三献ニ而御酒進上、戌之刻ニ帖佐を御打立、洲本近き松原迄御立越、船にて御帰還あるへきを浪風あらし故、厥夜者伊勢平左衛門尉宿所ニ被成御留候矣、

十五日甲寅天雨降

一 卯之刻ニ帖佐を御立出、午之刻ニ鹿兒嶋へ御着候、諸侍屋形まで御供被申、主君も奥へ御入候へばミなく退出候、

一 抑 少将様高麗国へ数年御在陣、から嶋・加とく嶋与云所にいくそばくの星霜を被送、漸御帰朝と云ながら、直ニ御在京ニ而旅亭之春を過し被成、今茲初而御本国ニ而被成越年候へば、諸人成案堵之思、萬民開喜悦之眉、日向・大隅・薩摩之諸侍悉被遂出仕、剩 少将様朝鮮国全羅道泗川ニ而中華国・朝鮮国之軍兵数十万騎、当家之御陣へ切懸 義引・忠恒儀勢をはけまし、士卒与心を一にして即時切崩、敵八万余騎被捕執、其外打捨の殘党数を不知、其粉骨ニより日域国々之諸勢運を開帰朝候、為此忠賞天下より御褒美之書被成下、御太刀刀御拝領なされ、旧邦不残被成御還補、被揚其名於天下遠領、其譽於諸国威を振ひ、剩 忠恒様被任少将、御昇殿之事者当家希代之重職、何事敷加焉哉、依之御旧例之模様少共雖相替、寺社之礼儀、侍之出仕、優々敷美麗なる消息可為後代之龜鏡候へば是を書しるし留者也、

十六日乙卯青天

一 御旧例之千句之連歌御興行、此日御隙被入候へばまつ百

韻修行候、川上慰政・阿蘇玄与其外連衆十五人、酉之刻
ニ成就、御前も名残の折之時分御指出、老中一人被出、
御肴ニ而御酒連衆へ被給候矣、

十七日丙辰白日

一阿多の大年寺被参味柑一折進上、御茶被給候、一乘院之
代僧卷数御茶白麻進上、根占殿出仕、樽肴進上、削物ニ而
御酒被給候、猿渡与三出仕、白麻進上、坊之津飯屋同町
人山河の飯屋、日州八ツ代之かり屋罷出、いづれも白麻
進上、定舞台ニ而御目見え仕候、伊作之初狩宍六まる進
上、山野之初狩ニ猪一まる進上、

一御前上之山へ御出、諸侍屋敷盛被御覽せ、其より遠矢な
と被遊候、一亥之刻ニ御祈祷之御護摩初り候、大乘院・
安養院いづれも諸能化被参候、一七日の御勤行結跏趺坐
にての行法也、

十八日丁巳天霽

一東霧島の座主被参候、樽目簞進上、御酒被給候、伊勢平
左衛門尉出仕、鳥目百疋進上、御酒被給候、山田民部少
輔出仕、樽肴進上、御酒被給候、念仏寺被参候、白麻進
上、高城七右衛門尉出仕、鳥目百疋進上、松岡勝兵衛尉
・同子千熊出仕、鳥目百疋勝兵衛尉進上、五十疋千熊

進上、伊作金藏院被参候、樽肴進上、御酒被給候、川崎
兵衛門尉出仕、鳥目百疋進上、巻絵屋彦右衛門尉うつほ
一ツ進上、但なし地、猪六まる、鹿一まる田布施初狩進
上、一午之刻ニ平田太郎左衛門尉館へ御光儀、亥之刻ニ
御帰、被催詩歌之興、題者梅薰夜風と云とをり題也、此
日上之山之御普請初り候、

十九日戊午天陰

一御煩ニ依而無御指出候、小板屋にて老中衆御談合ある也、

廿日己未天曇

一又五郎殿出仕、鳥目百疋進上、三肴ニ而御酒被給候、新
納武藏入道殿出仕、太刀折紙進上、三肴ニ而御酒被給候、
続而菱苜之境飯進上儀式如當、例年者十三日ニ相定り候
へ共、此年者御弓箭二付、堺目たるにより延引候而此日
ニ被参候、紹佐など御座ニ罷出、謡など被申御酒宴候、
真幸長禪寺被参候、白麻進上、御茶被給候、宗航院柴高
被参候、白麻進上、馬越黑板寺被参候、御茶被給候、白
麻進上、清雲罷出、ねり樽一ツ進上、小板屋ニ而光明院
御寄合、

廿一日庚申天雨降

一志布志大慈寺被参候、菓子ニ而御茶参候、鳥目百疋進上、

龍伯様より御文箱一ツ参り候、小板屋ニ而又五郎殿御酒御寄合、

廿二日辛酉天晴

一 図書頭殿館へ御光儀、式正之御振舞也、午之刻ニ御出、亥之刻ニ御帰、

廿三日壬戌天晴

一 北郷作左衛門尉出仕、太刀折紙進上、古躰三献参候、平賀弥右衛門尉・西郷休右衛門尉出仕、太刀折紙進上、御酒被給候、本田六右衛門尉出仕、鳥目百足進上、御酒被給候、法華嶽寺被参候、修正之御札鳥目百足進上、菓子ニ而御茶被給候、隼一ツ進上、法華寺領内之者とらへ候之間進上被仕候、石火矢二挺、平賀弥右衛門尉進上、

廿四日癸亥天陰

一 御祈祷御護摩成就、談儀所法印・諏訪之座主御寄合、老中図書頭殿・鎌田出雲守御賞伴ニ被出候、小西作右衛門尉出仕、御酌など被申、御道服被拝領候、唐おり物也、太刀折紙進上、御酒被給、勸盃之興共催され候、晚二者御旧例之ごとく老中御振舞、日限者不相定候、御乱舞なと候而御酒もり候、加世田五郎次郎ニ御小袖被下候、大鼓を仕候故如此敷、森喜右衛門尉御祈祷仕候、一七日之

修法也、御簾中よりの御祈祷也、

廿五日甲子天陰

一 御談合あり未之刻に 御前普請場へ御出駕、大雨ふり候へ共 御前も蓋をも不被召故御供奉之衆も皆々ぬれ候、是則三略ニ曰、雨不張蓋是を那の礼と云と候へば誠ニ神妙なる御おこなひに覚え候、此故大に御普請はか行候、

廿六日乙丑天陰

一 霧嶋之座主御参、樽式進上、白鳥之座司被参、白麻三束進上、普門院霧嶋之后座司職案堵被申、御祝被申上、鳥目五百足進上、いづれも御酒被給候、岳之米良使者を被上候、鹿肢三ツ進上、富之隈より御両使本田与左衛門尉・田代甚介被参候、穎娃御城取検者として鹿嶋右衛門尉・弟子丸右京亮被参候、伊勢弥次郎 龍伯様へ御使ニ被参候、申之刻ニ御普請場に御出駕候、

廿七日丙寅大雨降

一 宮内社家衆年頭之出仕、留主・桑幡・田口、白麻三束ツツ進上、古躰三献にて御酒被給候、井上孫次郎鷲一ツ鳥目進上、八代之行司百足進上、伊集院肥前入道出仕、太刀折紙進上、押肴ニ而御酒被給候、

廿八日丁卯天霽

一 円乗坊中国へ御使二上り候、田辺屋又左衛門尉船二乗り候、御腰物拝領させられ候、帖佐より新納作右衛門尉御使二被參候、巳之刻ニ普請場ニ御出候、辰之刻ニ孟子被成御読書、読師志布志大慈寺、又酉之刻に普請場へ御出候、上之山ニ而遠矢被遊候、

廿九日戊辰天晴

一 川上三河入道年頭之出仕鳥目百足進上、於小板屋ニ孟子被成読書候、午之刻ニ普請場ニ御出駕候、皆龍伯様御越、船本まで 少将様御迎ニ被成御參候、日なと悪候へバ屋形にハ無御出候、

晦日己巳天晴

一 坊之津一乘院被參候、菓子ニ而御茶參候、鳥目百足進上佐多殿被參候、猪一丸・樽一荷進上、

一 龍伯様御光儀御対面所ニ而御三献參候、式三献也、御太刀被成進献候、桂太郎兵衛尉披露被申候、少将様より龍伯様江被成進上候、龍伯様より御太刀被成進献候、伊勢兵部少輔披露被申、其より三献過候而輿ニ而御參会、森喜右衛門尉御祈禱成就申候、御花かう進上矣、

寛永拾三年子 上

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

九月廿日

田尻嘉兵衛

岩元清左衛門

後迫

下屋敷五畝拾五歩

浮所 円心坊下屋敷

新竿 下屋敷五畝六歩

御中間 添田与二郎殿

右同

下屋敷四畝六歩

慶箴

下屋敷四畝廿七歩

浮所

中屋敷五畝拾五歩

守梅

下屋敷八畝廿歩

黒葛原与兵衛殿

下屋敷五畝六歩

鎌田出雲守 宇宿治部左工門殿跡

下屋敷五畝十八歩

下屋敷 桐野益右工門殿

下屋敷四畝

洪谷如兵衛殿

下屋敷八畝二歩

税所奎之丞殿

中屋敷六畝十六步 関九郎左工門殿

新竿 下屋敷老反六畝十一步 有川助兵衛殿

右同 下屋敷五畝二步 長崎勘兵衛殿

右同 下屋敷六畝十八步 木原七郎三郎殿

大山豊前兵衛殿 下屋敷八畝二步 官原囚獄佑殿

新竿 中屋敷八畝 渡辺五郎左工門殿

新竿 中屋敷四畝十五步 肥後志广丞殿

右同 上屋敷五畝六步 肥後大左工門殿

新竿 屋敷四畝廿四步 浮所

新竿 中屋敷六畝七步 不笠彦左工門殿

右同 下屋敷三畝十八步 浮所

下々屋敷貳畝 山田弥兵衛殿

新竿 上屋敷四畝廿四步 大迫権兵衛殿

下々屋敷二畝十二步 山田弥兵衛殿

座主屋敷二成ル

下々屋敷十八步 右同人

下々屋敷廿步 右同人

下々屋敷二畝十二步 山田弥兵衛殿

下々屋敷三畝六步 右同人

下々屋敷貳畝廿步 枝次喜左工門殿

下々屋敷三畝六步 右同人

下々屋敷二畝 右同人

下々屋敷廿四步 右同人

下々屋敷老畝六步 右同人

下々屋敷二反三畝廿六步 枝次彦左工門殿

下々屋敷老畝廿七步 春成勘解由左工門殿

下々屋敷二畝廿步 右同人

下々屋敷四畝八步 右同人

下々屋敷三畝廿二步 右同人

中屋敷九畝拾八步 井尻和泉守殿

下々屋敷五畝三歩 伊東新介殿

石切 中屋敷五畝十歩 与右工門

新竿 下々屋敷五畝拾歩 海江田次左工門殿

中屋敷六畝拾八歩 根占少吉殿

新竿 上屋敷七畝十一歩 中馬五郎兵衛殿

右同 中屋敷七畝六歩 肥後因幡守殿

右同 下々屋敷三畝六歩 石塚目出左工門殿

中屋敷六畝十二歩 黒木主税介殿

中屋敷八畝 塚田表右工門殿

揚有略ス

清水

上屋敷一反壹畝 宅万与左工門殿

上屋敷一反十九步 新竿 松田監介殿

中屋敷七畝廿八步 中嶋孫左工門殿

中屋敷四畝十六步 右同 森乘左工門殿

下屋敷六畝四步 折田権五左工門殿

中屋敷六畝十二步 松田七左工門殿

中屋敷二段六畝 彦四郎殿 河田助四郎殿

上屋敷九畝十五步 伊地知吉右工門殿

上屋敷一反三畝廿八步 有川喜左工門殿

上屋敷七畝六畝 鮫嶋与一兵衛殿

上屋敷七畝廿八步 藤井九郎右工門殿

上屋敷九畝十步 平田二兵衛殿

中屋敷七畝十四步 井尻覺兵衛殿

中屋敷一反三畝九步 大嶋久左工門殿 長次郎殿

中屋敷一反四畝十七步 町田勘解由次官殿 長左工門殿

中屋敷五畝十二步 肥後長二郎殿

下々屋敷三畝十步 同人

下屋敷九畝二步 松本孫右工門殿

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

下屋敷六畝廿七步

中屋敷七畝六步

上屋敷七畝十四步

上屋敷七畝六步 新竿

上屋敷八畝 新竿

上屋敷四畝 新竿

上屋敷六畝十二步 新竿

上屋敷七畝十一步 右同

上屋敷四畝十步 右同

中屋敷七畝

上屋敷五畝十二步 新竿

中屋敷五畝 順仙

中屋敷四畝廿步 右同

中屋敷七畝

中屋敷六畝十步

上屋敷七畝十步

上屋敷六步

中屋敷八畝

下屋敷六畝十二步

下屋敷四畝十五步

江田市右工門殿
中村志广丞殿

右京亮殿
本田源四郎殿

左京亮殿
春山 権之介殿跡

川上彦四郎殿

河村半左工門殿

折田兵左工門殿

坂本孫左工門殿 宅右工門殿

新納四郎三郎殿

中村七右工門殿

迫九郎兵衛殿

井尻左近兵衛殿

平野休兵衛殿

市後崎長右工門殿

湯田淡路守殿

川の治部左工門殿

岩切縫助殿

与左工門殿
別府金右工門殿

嘉兵衛殿
東郷和泉守殿

茂左工門殿
田中四郎兵衛殿

高野勘左工門殿

下屋敷五畝十歩 市來惣兵衛殿

下屋敷三畝九歩 木佐貫四郎右工門殿

上屋敷八畝 村田藤左工門殿

新竿 中屋敷七畝十四歩 江田源介殿

右同 中屋敷八畝十二歩 川上彦十郎殿

上屋敷五畝十八歩 藤内左工門殿 調所内記殿

上屋敷四畝 別府主水佑殿

中屋敷三畝十歩 井尻藤七左工門殿

中屋敷三畝十歩 伊東伊兵衛殿

上屋敷四畝八歩 肥後弥右工門殿

下屋敷四畝廿四歩 阿多源左工門殿

中屋敷五畝四歩 宮之内蔵助殿

中屋敷六畝十六歩 横山仲兵衛殿

新竿 上屋敷六畝廿四歩 丸尾隼人佑殿

新竿 中屋敷四畝廿三歩 萩原九郎右工門殿

上屋敷四畝十六歩 田上利兵衛殿

下屋敷五畝 有田大炊左工門殿

下屋敷一反五畝廿六歩 川上彦左工門殿

下屋敷五畝十五歩 西之原利左工門殿 窪主膳正殿

下屋敷四畝廿歩 立石基介殿

新竿 下屋敷三畝六歩 伊十院加左工門殿

下屋敷一反三畝廿六歩 黒葛原吉左工門殿 治部左工門殿

新竿 下屋敷五畝四歩 西之原強工門殿 本ノママ

下々屋敷九畝二歩 宮原宇兵衛殿

下屋敷三畝九歩 別府権左工門殿

揚有略ス

新堀より上

中屋敷七畝十四歩 川嶋新左工門殿

中屋敷九畝十歩 川上後藤兵衛殿

中屋敷一反一畝六歩 伊集院長右工門殿 土橋六右工門殿

下屋敷六畝 休斎

中屋敷七畝十歩 竹迫大蔵丞殿

中屋敷四畝廿歩 日高喜兵衛殿

中屋敷一反一畝六歩 本田治部左工門殿

下屋敷四畝 伊十院清右工門殿

下屋敷四畝八歩 貴嶋源兵衛殿

下屋敷五畝十歩 東之坊 堯右工門殿

下々屋敷三畝六歩 川辺次郎介殿

下屋敷九畝十九歩 川崎主計助殿

中屋敷五畝十歩 川野又右工門殿 長右工門殿

中屋敷五畝十歩 山口甚九郎殿 五郎兵衛殿

中屋敷六畝廿歩 奥山藤太夫殿

中屋敷一反五畝十二歩森 新竿 喜右工門殿 主馬允殿

下屋敷七畝十一歩 向井弥右工門殿

下屋敷四畝六歩 貴嶋内記殿

中屋敷五畝十九歩 新竿 竹崎二郎左工門殿

中屋敷三畝廿歩 南光院

下屋敷五畝十歩 大山善工門殿

下屋敷五畝 新竿 川野治十郎殿

下屋敷九畝 辺見流右工門殿

下屋敷五畝十五歩 右同 荻野伴右工門殿

下屋敷二反二畝十六歩 右同 阿蘇主殿助殿

中屋敷五畝十歩 皿郎善介殿

中屋敷四畝廿四歩 竹内伊左工門殿

下屋敷四畝廿歩 宮内喜右工門殿跡

上屋敷一反 重久佑左工門殿

下屋敷四畝六歩 岩切仲左工門殿 允

上屋敷六畝 西主馬介殿

上屋敷五畝四歩 田代助左工門殿

中屋敷四畝廿四歩 紹泉 相良堅介殿

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

下屋敷三畝六歩 宅万楽右工門殿跡

下屋敷六畝 川越三右工門殿

下屋敷七畝廿歩 川野伊右工門殿

下屋敷六畝廿八歩 坂本与左工門殿 坂本喜右工門殿

下屋敷二畝十二歩 同兵左工門殿

下屋敷三畝 山田慶兵衛殿

下屋敷二畝廿歩 別府助右工門殿

上屋敷九畝 中江主水佑殿

上屋敷一段五畝廿五歩 大田四郎三郎殿

上屋敷一段十二歩 相良舍人佑殿 作左工門殿

上屋敷二段五畝六歩 本田又次郎殿

上屋敷一段五畝廿六歩 伊東九左工門殿 中務少輔殿

上屋敷二段九畝十四歩 北村越前守殿

上屋敷一段七畝十五歩 山口内蔵助殿

上屋敷一段廿歩 鎌田権右工門殿跡 張紙ニテ

上屋敷五畦十八歩 川上主膳正殿

上屋敷五畦十八歩 福田権工門殿跡 少兵衛殿

上屋敷一段五畝廿六歩 税所弥工門殿

上屋敷八畝 伊集院五郎左工門殿

上屋敷二段四畝八歩 東郷若狭守殿

張紙ニテ一反六畝廿三歩 東郷若狭守殿

内

七畝十五歩

関権左工門殿但買地

七畝

川上織部佑殿

寛永^十 七四月朔日

上屋敷一段二畝四歩

町田休右工門殿

上屋敷八畝廿歩

伊地知大炊左工門殿

上屋敷一段三畝六歩

田原主殿助殿

中屋敷一段六歩

弁官新兵衛殿

屋敷八畝十二歩

米良縫助殿

下屋敷一段四畝

市来惣左工門殿

中屋敷一段二畝四歩

深野主膳正殿

中屋敷一段一畝廿歩

伊集孫左工門殿
井尻利左工門殿

中屋敷一段五畝

新納四郎左工門殿

中屋敷四畝六歩

福嶋備前守殿下屋敷
川上五次右工門殿
半兵衛殿

下屋敷六畝廿四歩

川上平右工門殿

中屋敷五畝十八歩

日高大左工門殿

中屋敷四畝八歩

長田作右門殿

中屋敷四畝

池元金兵衛殿

下屋敷一段廿四歩

伊地知壹岐守殿跡

中屋敷一段三畝

鈴木権兵衛殿

中屋敷一段四畝廿八歩

遠矢金兵衛殿

下屋敷三畝廿歩

市来与次郎殿

下屋敷三畝十八歩

山本十郎右工門殿

中屋敷一段二畝

児玉筑後守殿

中屋敷四畝

児玉主水佑殿

下屋敷三畝廿二歩

座頭当代

中屋敷四畝六歩

飯牟礼弥四郎殿

中屋敷二畝十歩

竹内慶右工門殿

下屋敷一畝六歩

座頭屋しき

中屋敷七畝六歩

山口平兵衛殿

下屋敷三畝廿二歩

石塚権兵衛殿

中屋敷三畝廿二歩

高崎正左工門殿

中屋敷四畝八歩

鎌田弥右工門殿

中屋敷五畝二歩

木之上和泉守殿

中屋敷一段二畝十歩

肝付甚右工門殿

中屋敷五畝六歩

船木惣左工門殿

下屋敷四畝

田口勝吉殿

下屋敷三畝六歩

市存坊

中屋敷一反五畝十歩

連光坊跡

下屋敷四畝廿歩

有田与左工門殿

下屋敷六畝

里村乘左工門殿

下屋敷五畝十歩 道敬 本田新右工門殿

下屋敷六畝十二歩 谷山覺左工門殿

下屋敷七畝六歩 藤崎喜右工門殿

下屋敷一反二畝十二歩 沖長門守殿

下屋敷五畝十八歩 藺牟田主殿助殿

上屋敷七畝十六歩 長井休右工門殿

上屋敷六畝 津曲内膳正殿 寛右工門殿

上屋敷六畝廿歩 伊地知清左工門殿 千工門殿

上屋敷三畝廿歩 伊東利左工門殿 次左工門殿

下屋敷三畝十歩 税所三兵衛殿

下屋敷五畝十八歩 山下神藏殿

上屋敷六畝廿八歩 落合八郎工門殿

上屋敷七畝十四歩 宮里耆岐守殿

上屋敷一反三畝廿六歩 中神石見守殿

上屋敷六畝廿歩 山口早左工門殿

上屋敷六畝十八歩 津曲長右工門殿

上屋敷七畝六歩 鎌田宇兵衛殿

上屋敷七畝十歩 鈴木宇左工門殿跡 酒匂物兵衛殿

上屋敷四畝十二歩 猪俣小左工門殿

上屋敷五畝十歩 中村久兵衛殿

上屋敷五畝十歩 本田空之介殿 新右工門殿

中屋敷二畝廿八歩 新徳藤吉殿 新竿 平左工門殿

中屋敷四畝 宮里与兵衛殿 右同

上屋敷二段八歩 大休坊 平兵衛殿

上屋敷七畝十歩 市来長左工門殿

上屋敷二反四畝八歩 新納千代菊殿 四郎殿

上屋敷一反 徳水源兵衛殿

中屋敷九畝十歩 丸田伊豆守殿

中屋敷四畝廿七歩 岩城七兵衛殿

中屋敷六畝 松田与右工門殿 相模守殿

中屋敷一反三畝六歩 下屋敷

上屋敷一反一畝六歩 後醍院喜兵衛殿 安右工門殿

上屋敷一反二畝廿歩 右松加兵衛殿

上屋敷一反四畝廿歩 土持平左工門殿

上屋敷九畝十八歩 土持伴三郎殿

上屋敷九畝十歩 村岡鹿右工門殿

上屋敷一段十二歩 市来五兵衛殿

上屋敷一段四畝廿歩 西俣弥太郎殿

上屋敷一段四畝 龜山又兵衛殿

中屋敷四畝六歩 永田藤左工門殿

中屋敷七畝十八歩

白坂市郎兵衛殿
以益

中屋敷五畝四歩

新納三河守殿

上屋敷一反三畝六歩

二階堂城之介殿
阿波守殿

中屋敷七畝六歩

浦川金左工門殿
内藏丞殿

中屋敷二反四畝六歩

仮屋地
右馬頭殿

中屋敷一反一畝十二歩

瑞仙

下屋敷九畝十八歩

野村織部佑殿
吉五殿

中屋敷八畝

自休

中屋敷八畝

杉山右京亮殿
因分帯刀長殿

中屋敷一反五畝

伊十院備後守殿
筑右工門殿

中屋敷六畝

伊知知平三郎殿
右同

下屋敷三畝

長倉新九郎殿

下屋敷六畝十五歩

石原佐渡守殿

下屋敷五畝

鹿野三五郎殿
三雲權之介殿

中屋敷一反六歩

貴嶋仲兵衛殿

下屋敷四畝廿四歩

加藤金右工門殿

上屋敷二反

野村兵部少輔殿

中屋敷一反一畝一歩

谷山九兵衛殿

中屋敷六畝十八歩

有馬次左工門殿跡
惣右工門殿

上屋敷二反六畝

高崎伊豆守殿

下屋敷一段二畝四歩

寺山四郎左工門殿

中屋敷二反三畝十四歩

新納右工門佑殿
かさりや

中屋敷四畝六歩

休左工門殿
作右工門殿

中屋敷六畝

野田喜兵衛殿
六弥太殿

中屋敷七畝十一歩

鳥丸長右工門殿

中屋敷三畝十五歩

有川伊豆守殿

中屋敷三畝十五歩

石原長左工門殿

中屋敷四畝十二歩

三原舍人佑殿

中屋敷六畝

村田源介殿

中屋敷二畝廿四歩

蒲地四左工門殿

中屋敷四畝十二歩

榊主馬首殿

中屋敷三畝六歩

毛利与一兵衛殿

下屋敷四畝

田中志广丞殿

中屋敷六畝廿歩

田中八兵衛殿
長嶋次右工門殿

中屋敷四畝

別木伴兵衛殿

上屋敷五畝三歩

鳥丸主膳正殿
新卒

中屋敷一段四畝十歩

平田九郎右工門殿

内 八畝十四歩

老岐源左工門殿

五畝廿八歩

山之城新介殿
十郎兵衛殿

下屋敷四畝六歩

次田仲左工門殿

下屋敷五畝

善後
山内勘兵衛殿

下屋敷六畝廿九步

永田四郎右工門殿

丁屋敷七畝十步

池上源六左工門殿

下々屋敷一段八步

中村作左工門殿

下屋敷三畝六步

岩崎主殿助殿

上屋敷二畝廿步

大門口
上野吉左工門殿

上屋敷一段九畝四步

山田主殿助殿

中屋敷一反二畝

猪俣伊右工門殿

中屋敷一反六畝

老岐主水佑殿

中屋敷四反廿步

伊十院松千代殿
源介殿

中屋敷二反三畝廿五步

田原主膳正殿

中屋敷一反七畝廿二步

伊地知四郎兵衛殿

中屋敷九畝廿九步

柳元喜左工門殿

上屋敷三反八畝廿二步

鎌田出雲守殿

中屋敷一反四畝

上井采女正殿

下々屋敷二畝十六步

鳥丸六左工門殿

下々屋敷四畝

喜庵

中屋敷六畝十步

菱川縫殿介殿

中屋敷七畝十四步

神戸平右工門殿

中屋敷五畝十八步

染河左左工門殿

中屋敷一反八步

同名伊与守殿

下屋敷二畝廿四步

淵村源吉殿
甚兵衛殿

中屋敷一反六畝十五步

市来新左工門殿

内七畝

和田平右工門殿

下屋敷三畝六步

岩切与一兵衛殿

下屋敷九畝十步

長崎助左工門殿

下屋敷四畝七步

川崎竜之介殿
大乘坊

下屋敷三畝廿七步

坂本吉左工門殿

下屋敷四畝十五步

長崎佐渡守殿

下屋敷四畝十六步

溝口太兵衛殿

下屋敷五畝六步

塩津市右工門殿

下屋敷四畝廿七步

寿室
上村孫三郎殿

下屋敷四畝八步

谷山嘉兵衛殿

下屋敷八畝十五步

肥後永右工門殿

下屋敷四畝八步

二渡与右工門殿

下屋敷六畝十二步

小佐七左工門殿

下屋敷五畝十八步

彰右工門
ママ 本ノママ 名や

下屋敷四畝廿步

武松権右工門殿

下屋敷八畝十五步

星山仲次郎殿

下屋敷一反四畝

同人

澁川女子

下屋敷三畝十四步
六左工門尉

下屋敷三畝九步
寺師孫右工門殿

下屋敷四畝
村岡城之介殿

下屋敷四畝廿四步
相良对馬守殿

下屋敷一反六畝四步
伊地知少次郎殿

中屋敷一反六畝四步
伊地知三河守殿

中屋敷五畝十八步
木村源右工門殿

中屋敷一反八步
伊地知三河守殿

中屋敷一反二畝八步
野添对島守殿

中屋敷六畝十六步
大山真藏殿

中屋敷四畝
川北猪之介殿

中屋敷五畝廿步
藤右工門尉

下屋敷五畝
橋口次右工門殿

下屋敷五畝
五代平右工門殿

下屋敷五畝
御小者主計助殿

下屋敷三畝廿七步
大山宇右衛門殿

中屋敷四畝十步
園田善兵衛殿

中屋敷四畝十五步
園田佐渡守殿

下屋敷五畝廿六步
重信弥右工門殿

下屋敷三畝六步
市來助左工門殿

下屋敷四畝廿步
肥後十兵衛殿

下屋敷四畝廿步
奈良原大右工門殿

下屋敷三畝十八步
二見大炊兵衛殿

下屋敷五畝十五步

下屋敷三畝十步

下屋敷一段十步

下屋敷八畝廿四步

下屋敷四畝十五步

中屋敷四畝

中屋敷六畝廿步

中屋敷四畝

中屋敷五畝四步

中屋敷一反二畝

中屋敷七畝六步

中屋敷五畝十步

中屋敷三畝廿二步

下屋敷五畝十步

下屋敷一反二畝八步

下屋敷五畝十步

下々屋敷二畝十步

下屋敷六畝廿八步

下屋敷八畝

下屋敷五畝廿六步

丸田惣左工門殿

田中市左工門殿

弁官

夫屋

岩本新六殿

瀬戸山佐吉殿

火多宮内左工門殿

徳田大兵衛殿

吉井郷右工門殿

碓介

善兵衛尉

清右工門尉

大迫万左工門殿

岩切監右工門殿

肥後格右工門殿

有馬孫右工門殿

自慶

安藤伸左工門殿

愛甲次兵衛殿

岡村治右工門殿

下屋敷八畝廿步

慶阿弥

下屋敷九畝十五步

安藤左近将殿
次郎右工門殿

下屋敷一反

宮原主計助殿
五兵衛殿

下屋敷八畝十六步

為善

下屋敷六畝十二步

永安

下屋敷八畝

加治屋真左工門殿
六兵衛殿

下屋敷四畝十步

土橋弥兵衛殿

下屋敷四畝十步

田中善丞殿

下屋敷一反四步

肥後主膳正殿

下屋敷六畝十二步

宇都長兵衛殿

下屋敷六畝十二步

久留伴五左衛門殿
川上与左工門殿

下屋敷一反一畝六步

下屋敷
二兩

中屋敷一反

大野舍人佑殿

下屋敷六畝

有馬六左工門殿
本ノママ

中屋敷五畝四步

木反斎

下々屋敷六畝廿八步

有川新右工門殿
御小者

下屋敷三畝廿七步

有馬芳左工門殿
本ノママ

中屋敷四畝十六步

吉井為右工門殿
市左工門殿

下屋敷四畝十二步

染川九右工門殿
御小者

下屋敷六畝

池田甚右工門殿

下屋敷五畝

留防

下々屋敷四畝

浮所

下々屋敷壹段

浮所

中屋敷一段七畝十步

五代舍人佑殿
正介殿

中屋敷一反四畝十步

平田盛右工門殿

中屋敷一段三畝

有我

下々屋敷二畝十步

鮫嶋慶右工門殿
左左工門殿

中屋敷四畝六步

山口采女正殿

中屋敷三畝六步

崎本休右工門殿
七郎殿

中屋敷五畝十五步

永吉嘉左工門殿

下屋敷九畝十八步

新納左京亮殿
弥吉殿

上屋敷一段三畝五步

税所長右工門殿

上屋敷九畝十六步

折田勘解由次官殿
善慶坊

上屋敷一段三畝六步

川上右工門佑殿

上屋敷一段三畝

岩切彦兵衛殿

上屋敷五畝廿六步

中村主計助殿

上屋敷五畝廿六步

上村九郎兵衛殿

中屋敷六畝

玉田弥八郎殿
内記殿

上屋敷二反十六步

大野藤次殿
新納刑部太輔殿

上屋敷二段十六步

大寺内膳正殿

上屋敷五畝

北郷佐渡守殿

上屋敷八段二畝四步

三原左工門殿

中屋敷二反九畝廿九步

市来八左工門殿

下屋敷二反三畝十四步

伊勢内記殿

上屋敷七反八畝十步

種子左近將殿

下屋敷一段九畝廿八步

国分十右工門殿

下屋敷一段九畝六步

別府長次郎殿

下屋敷一段七畝三步

桂山城守殿

下屋敷二反二畝十五步

伊勢右京亮殿

下々屋敷二反九畝五步

新納加賀守殿

下屋敷五畝十二步

有川右近將殿

下屋敷五畝廿六步

相良主計助殿

下屋敷一段二畝

白坂仲兵衛殿

下々屋敷一段二畝

本田内膳正殿

下屋敷一段二畝

華田作兵衛殿

下屋敷一段十二步

新納勘解由次官殿

中屋敷一段九畝六步

大寺主計助殿

下屋敷一段四步

中西長門守殿

中屋敷三反六畝廿步

鎌田出雲守殿

右屋敷返地ニ出候故如前々御蔵入ニ相籠ル故ニけシ申候

右屋敷惣挙有略ス

寛永十三年九月廿日

田尻嘉兵衛

岩元清左工門尉

寛永十三年子

御城内

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

九月廿日

田尻嘉兵衛

岩元清左工門

東福

下々屋敷四畝十二步

日高吉右工門殿

荒屋敷五畝十步

川上治部右工門殿先

荒屋敷一反四畝廿步

豊後守殿先

荒屋敷二畝

同入下屋敷

荒屋敷五畝

同入下屋敷

下々屋敷四畝十二步

肝付孫三郎殿

下々屋敷五畝十八步

家村采女正殿

下々屋敷六畝十八步

同入下屋敷

下々屋敷一畝五步

同入下屋敷

中屋敷四反四畝廿步

鎌田出雲守殿

下々屋敷一畝五步

同入下屋敷

中屋敷三反六畝廿步

中西長門守殿

下々屋敷六畝十八步

同入下屋敷

下屋敷一段四步

中西長門守殿

下々屋敷四畝十二步

肝付孫三郎殿

中屋敷一段九畝六步

大寺主計助殿

下々屋敷五畝十八步

家村采女正殿

上屋敷七反八畝十步

種子左近將殿

下々屋敷四畝十二步

肝付孫三郎殿

下屋敷一段九畝廿八步

国分十右工門殿

下々屋敷六畝十八步

同入下屋敷

下屋敷一段七畝三步

桂山城守殿

下々屋敷五畝十步

川上治部右工門殿先

下々屋敷二反二畝十五步

伊勢右京亮殿

荒屋敷一反四畝廿步

豊後守殿先

下々屋敷二反九畝五步

新納加賀守殿

荒屋敷二畝

同入下屋敷

下屋敷五畝十二步

有川右近將殿

荒屋敷五畝十步

川上治部右工門殿先

下屋敷五畝廿六步

相良主計助殿

荒屋敷一反四畝廿步

豊後守殿先

下屋敷一段二畝

白坂仲兵衛殿

荒屋敷二畝

同入下屋敷

下々屋敷一段二畝

本田内膳正殿

荒屋敷五畝

同入下屋敷

下屋敷一段十二步

新納勘解由次官殿

下々屋敷四畝十二步

肝付孫三郎殿

中屋敷一段九畝六步

大寺主計助殿

下々屋敷五畝十八步

家村采女正殿

下屋敷一段四步

中西長門守殿

下々屋敷六畝十八步

同入下屋敷

中屋敷三反六畝廿步

鎌田出雲守殿

下々屋敷一畝五步

同入下屋敷

中屋敷四反四畝廿步

鎌田出雲守殿

下々屋敷一畝五步

同入下屋敷

下々屋敷二畝十二歩 不動院

下々屋敷二畝廿四歩 同人下屋敷

下々屋敷四畝十八歩 同人下屋敷

荒屋敷七畝十四歩 本田与三兵衛殿先

荒屋敷一畝十八歩 同人先

荒屋敷壹畝 同人先

下々屋敷二畝十二歩 伊東八兵衛殿先

下々屋敷二畝十二歩 同人先
蒲地新介殿

下々屋敷五畝 折田六左工門殿先

右者先年大田丹波守殿高奉行之時為足地被給候へ共、其時分取込候て屋敷帳不相直候処、此中浮所ニて候間、納方可被成御申候ニ付、如右丹波殿より証文被出候間、未

七月十九日如此書付候也、

下々屋敷九畝六歩 同人先

下々屋敷三畝 豊後守殿
下屋敷 次兵衛殿

下々屋敷五畝廿歩 肝付孫三郎殿

荒屋敷一反十二歩 川上治部右工門殿
吉村甚兵衛殿

下々屋敷三畝廿二歩 本田与三兵衛殿先

荒屋敷四畝廿歩 日高吉右工門殿
下屋しき

荒屋敷五畝四歩 伊東八兵衛殿先

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

下々屋敷四畝十歩 豊後守殿
座土屋敷返地ニ出ル

下々屋敷五畝十二歩 蒲地新介殿
六畦 同人下屋敷

荒屋敷壹畝十五歩 豊後守殿
御來屋番所

屋敷五畝 友野久兵衛入道殿

右揚有略ス

御城内并新勝院

下屋敷六畝七歩 川上与左工門殿

下屋敷二畝廿四歩 同人菌屋敷
マヱ 神立郎殿

下屋敷八畝 日高与一左工門殿

下屋敷八畝 同人下屋敷
市来次十郎殿

下屋敷七畝十四歩 喜入吉兵衛殿
市来次十郎殿 弥兵衛殿

下屋敷六畝 新納民部左工門殿

下屋敷七畝六歩 高目仲右工門殿

下屋敷五畝十二歩 同人下屋敷
市来次十郎殿

下屋敷五畝十六歩 喜入吉兵衛殿
主祭介殿 下屋敷

下屋敷九畝 関渡左工門殿跡
新竿 弥兵衛殿

中屋敷六畝十二歩 新納民部左工門殿
新竿 伊東肥前守殿 下屋敷

中屋敷一反一畝六歩 伊東肥前守殿
浮所 下屋敷

荒屋敷三畝廿二歩 谷山奎左工門殿先
浮所

荒屋敷二畝十二歩 丹生助右工門殿先
浮所

荒屋敷五畝十步

奈良原狩野介殿
浮所

荒屋敷六畝十六步

伊十院九郎殿先
浮所

下々屋敷四畝十五步

遠矢金兵衛殿先
浮所

下屋敷七畝十四步

伊東肥前守殿
下屋敷

下屋敷五畝廿六步

同入下屋敷
下屋敷

下々屋敷七畝十步

新納弥兵衛殿
伊東肥前守殿
浮所

荒屋敷三畝六步

川上彦左工門殿先
下屋敷
浮所

下屋敷六畝廿步

田代刑部少輔殿
浮所

下々屋敷八畝廿步

伊地知与兵衛殿先
浮所

下屋敷一反一畝廿二步

川上上野守殿
浮所

荒屋敷一反四畝

鎌田源左工門殿先
浮所

荒屋敷二反二畝廿四步

中務殿先
浮所

荒屋敷三畝六步

川上志广丞殿先
少左工門殿
浮所

下屋敷一反一畝十二步

徳永神兵衛殿
少左工門殿

下屋敷一反廿四步

同入下屋敷

下屋敷六畝

川上志广殿
川上治部右工門殿

下屋敷一畝十步

宮原六兵衛殿

下屋敷五畝廿步

比志嶋大監物殿

下屋敷七畝

同人

下屋敷七畝廿八步

同人

新竿
下屋敷五畝四步

柴田仲右工門殿

右同
中屋敷八畝廿四步

宮之原六兵衛殿
伊藤弥六殿
下屋敷

新竿
中屋敷五畝四步

伊東肥前守殿
右同人
下屋敷

右同
中屋敷四畝廿三步

浮所

右同
下屋敷六畝七步

高崎甚左工門殿

右同
下屋敷六畝十二步

柴田喜藏殿

上屋敷八畝十五步

久木田権右工門殿
代心院

上屋敷三畝八步

同人

上屋敷八畝

永田与八左工門殿
新兵衛殿

新竿
下屋敷一反六畝六步

益满外記殿
友野七郎殿

右同
下屋敷三畝三步

伊東盛右工門殿

右同
下屋敷三畝六步

橋口万右工門殿

右同
下屋敷九畝九步

勝部志广介殿

新竿
下々屋敷四畝七步

永田清兵衛殿

下屋敷四畝廿七步

石神善右工門殿
山内喜兵衛殿

中屋敷五畝

比志嶋監物殿
下屋敷

新竿
中屋敷一畝

浮所

中屋敷一反四畝

伊集院久兵衛殿
張紙 北郷久二郎殿
川上野守殿先

下屋敷四畝十三步

浮所

下屋敷八畝十二步

平山五郎工門殿

下屋敷九畝廿四步

新納弥兵衛殿下屋敷
大迫権工門殿先

下屋敷一反三畝十步

浮所
柴田次右工門殿先

下屋敷一反二畝廿四步

浮所
永金先

下々屋敷二反二畝

浮所
釘田権右工門殿先

荒屋敷七畝十步

浮所
田代刑部少輔殿

荒屋敷六畝十二步

浮所
伊地知与兵衛殿
下屋敷

新竿
御前帳二者四石與二入由之押札有之

右同
中屋敷三畝式十二步

浮所
仙田勘左工門殿

右同
中屋敷四畝 張紙

浮所
御小者

新竿
中屋敷三畝廿七步

浮所
長田主馬允殿

右同
中屋敷四畝十步

浮所
重久平兵衛殿

右同
中屋敷四畝十步

浮所
岩元清左工門

寛永十三年九月廿日

田尻嘉兵衛

寛永拾三年子 四札之内下

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

九月廿日

田尻嘉兵衛

岩元清左工門

新堀より下

下屋敷二反二畝廿四步

甚兵衛殿
小嶋老岐守殿

下屋敷一反五畝六步

燕庵
喜阿弥

中屋敷壹反八畝

但馬市兵衛殿

新竿
中七畝十四步

二階堂拾左工門殿
淡路守殿

右同
中一反三畝廿六步

財部伝右工門殿

中老反五畝六步

留連

中老反六畝廿六步

福島清右工門殿

中老反式畝

翁春
自円

中老反壹畝六步

伊集院左近将殿

新竿
上屋敷六畝

相良彦八郎殿

上屋敷八畝十二步

橋口渡兵衛殿跡

張紙二而
岩崎番口新御殿

一ヶ所四畝廿一步

木脇休兵衛殿

一ヶ所五畝十一歩

金田清兵衛殿

一ヶ所六畝十歩

川上甚左工門殿
主膳正殿

一段六畝十歩

新納狩野介殿
道慶先

右二段二畝廿三歩

新竿
卯十一月十五日

上屋敷六畝十六歩

安心

上屋敷壹反四畝廿

門司安右工門殿

上屋敷九畝廿四歩

安藤織部佑殿跡

新竿
上屋敷五反二畝

川上上野守殿
主計助殿

上屋敷三反二畝

仁礼右近将殿
御殿

上屋敷二段八畝

大膳亮殿

中屋敷七反一畝十二歩

玄蕃様

中屋敷九反一畝廿八歩

下野守殿

下屋敷六畝廿四歩

町田出羽守殿
伊十院右衛門佑殿

下々屋敷三反

喜入休右工門殿

下々屋敷五畝四歩

家村奎介殿

下々屋敷六畝

喜入丹後守殿

下々屋敷五畝六歩

篠崎孫右工門殿
新右工門殿

下屋敷四反一畝廿八歩

渋谷石見守殿

下屋敷三反七畝六歩

大和守殿
伴兵衛殿

新竿
下屋敷四反一畝十二歩

肝付三郎四郎殿
伴兵衛殿

右同
下屋敷一反五畝

御普請夫屋
兵庫守殿

下々屋敷二反

上原太郎五郎殿
兵庫守殿

下々屋敷六畝五歩

北郷神左工門殿
山田民部少輔下屋しき

下々屋敷一反

大窪備前守殿
同入

下々屋敷四畝一歩

妻屋善兵衛殿跡
い十院新兵衛殿

下々屋敷一反五畝十四歩

中嶋新左工門殿
大工

下々屋敷七畝廿二歩

柴山土佐守殿
桂外記殿

下々屋敷一反二畝十四歩

今井市兵衛殿

下屋敷二反一畝十六歩

鬼塚少右工門殿

下屋敷二反五畝

東郷肥前守殿
東市正殿

下屋敷三反廿八歩

理心

下屋敷三反二畝廿六歩

山田民部少輔殿

下屋敷二反十二歩

本田作左工門尉殿

中屋敷一反七畝十二歩

鎌田左京亮殿

下屋敷一反九畝十九歩

阿多掃部佑殿

下屋敷一反八歩

宮之原長介殿

下屋敷一反二畝廿四歩

矢野大右工門殿

下屋敷一反廿四步 高城臺右工門殿

下々屋敷三畝廿二步 鎌田治部少輔殿
中心 下屋敷

下々屋敷三畝廿二步 同入 菌田覚右工門殿

下々屋敷三畝廿二步 同入 山口助之允

下屋敷八畝七步 長谷場兵右工門殿

下々屋敷五畝二步 鎌田治部少輔殿 岩下与右工門殿

新竿 下屋敷三段五畝 豊前守殿

下屋敷四畝 上野正右工門殿

下々屋敷六畝十五步 江嶋五郎右工門殿

下屋敷五畝廿 敬屋 次郎兵衛

下屋敷三畝廿二步 敷根越中守殿

下屋敷五畝十步 菓丸伴左工門殿

割候而相良殿被給候 中屋敷九反六反一畝六步式部様

寛人廿六月廿日被給候 中屋敷二反八畝廿四步 相良内蔵丞殿

上屋敷七段七畝 安芸守殿

中屋敷九段三畝 弾正大弼殿

新竿 中屋敷五反四畝 張紙三而 安千代様

右同 上屋敷九反九畝十七步 川上左近将監殿

上屋敷二反四畝五步 本田伊与守殿

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

上屋敷二反四畝五步 穎娃長左工門殿

上屋敷三反八畝十二步 渋谷四郎左工門殿

上屋敷三反廿四步 敷根筑前守殿

中屋敷一反六畝 伊十院休左工門殿

中屋敷一反九畝八步 有馬次右工門殿

上屋敷一反三畝廿六步 御袋

上屋敷一反 大田新左工門殿

中屋敷四畝廿八步 中野甚左工門殿

中屋敷四畝廿八步 有馬主殿助殿

上屋敷一反二畝三步 長井十郎左工門殿

中屋敷一反六畝 有川仲右工門殿

中屋敷一反三畝十八步 相良日向守殿

中屋敷一反二畝十四步 菌田縫殿介殿

中屋敷七畝六步 伊地知覚右工門殿

中屋敷七畝廿八步 満坂巳介殿

中屋敷五畝廿六步 中村源之允殿

中屋敷六畝二步 浮所

新竿 下屋敷三畝六步 中村為右工門殿

張紙 下屋敷一反二畝十四步 穎娃治右工門殿

大手之辺

下屋敷七畝十八步 伊東肥後守殿

中屋敷一反九畝六步 伊十院左京亮殿

中屋敷一反三畝六步 三原七左工門殿

中屋敷八畝二步 種子嶋六兵衛殿跡
舍人祐殿
右京亮殿

中屋敷一反九畝廿四步 町田縫殿助殿

中屋敷九畝十六步 上原喜左工門殿
次左工門殿

中屋敷一反一畝六步 村瀬長右工門殿

中屋敷一反二畝四步 川上十郎左工門殿

中屋敷九畝廿一步 長仙坊

中屋敷一反一畝 家村長右工門殿
民部左工門殿

中屋敷八畝九步 重田彦右工門殿
右同

下屋敷五畝十一步 牧之瀬清左工門殿
右同
御小者

下屋敷四畝八步 水間茂兵衛殿

中屋敷七畝 重信長兵衛殿

下屋敷八畝十二步 堀切平右工門殿
新竿
御小者

中屋敷六畝十六步 児玉助之允殿
右同
小兵衛殿

中屋敷三畝廿七步 立山助兵衛殿
采女祐殿

中屋敷四畝 安樂六右工門殿
見主次介殿

中屋敷四畝廿四步 休斎

中屋敷二畝廿八步 木柴相右工門殿

下屋敷五畝十步 山内主税介殿
御小者
おんみづ川

中屋敷六畝 田中拾右工門殿
本田清右工門殿

下屋敷六畝二步 周栗
御小者
長田清左工門殿

下々屋敷五畝十二步 益山蘇兵衛殿
清三郎殿

中屋敷二畝十四步 菌田主税介殿

中屋敷二畝廿四步 田中主税介殿

下屋敷一反五畝廿五步 川村伊豆守殿
新竿
新次郎殿

下屋敷七畝十七步 佐々木勘右工門殿
右同

下屋敷三畝八步 林松

中屋敷四畝十二步 淵辺両右工門殿
新竿
右同

中屋敷四畝十步 関弥吉殿
右同
八兵衛殿

中屋敷四畝八步 中馬三吉殿

中屋敷四畝十二步 加治木監物允殿

中屋敷三畝廿步 雲房
次郎兵衛殿

中屋敷四畝 坂元主計介殿
新竿

中屋敷六畝十五步 佐谷田九右工門殿
御小者
柚右工門殿

上屋敷四畝十六步 肥田休五郎殿

上屋敷三畝廿二步 竹山反兵衛殿

上屋敷六畝十六步 川口覚兵衛殿
新竿

上屋敷六畝十八步 色紙六右工門殿

上屋敷七畝十步

新竿上屋敷五畝二步

新竿上屋敷三畝十八步

右同上屋敷四畝十二步

上屋敷六畝

上屋敷四畝六步

新竿中屋敷三畝廿七步

右同中屋敷三畝廿九步

下屋敷四畝廿二步

中屋敷三畝

上屋敷三畝十八步

上屋敷四畝

中屋敷三畝十八步

下屋敷四畝

中屋敷一反四步

下屋敷四畝

中屋敷八畝十二步

中屋敷三畝六步

中屋敷三畝九步

田尻嘉兵衛殿

物惣左工門殿

武井伝右工門殿

寛右工門殿

海老原神兵衛殿跡

益満内藏允殿

有馬為兵衛殿

勝部才右工門殿

益山五兵衛殿

菌田与七左工門殿

宿祭坊善覚坊

菌田主計助殿

野瀬彦左工門殿

内山新兵衛殿

御小者上床七兵衛殿

五工門殿山路城右工門殿

蒲生宮内少輔殿

村田佐左工門殿

砂官山口戸右工門殿

弥三左工門殿田尻隼人佑殿

山内拾右工門殿

又工門殿肥田源右工門殿

中屋敷四畝廿

下屋敷三畝十八步

下々屋敷二畝廿四步

下々屋敷三畝十八步

下屋敷四畝

下屋敷八畝廿四步

上屋敷九畝廿四步

上屋敷八畝廿步

上屋敷七畝廿四步

上屋敷六畝廿步

上屋敷六畝

中屋敷四畝六步

中屋敷三畝十八步

中屋敷三畝六步

中屋敷三畝十八步

篠原大炊左工門殿

豊(き)し

茂吉

張紙二而具足屋

稻留之源平次兵衛

右工門家有馬善右工門殿

五兵衛殿

延寿院久寿坊

為阿弥

有馬掃部左工門殿

三弥殿益山茂左工門殿

田中西市丞殿山田内藏助殿

内記殿稻津因幡守毅

椎原与右工門殿

佐八間勘右工門殿跡岸良内藏助殿

さや師 木場猪工門殿田中全介殿

御小者二宮勘解由左工門殿

御中間山口仲兵衛殿

御中間山口彦十良殿

御中間前田七郎左工門殿

牧野对馬允殿

野崎十兵衛殿

半次殿熊岡弥兵衛殿

中屋敷四畝廿三步 佐土原八右工門殿

中屋敷四畝 横山大藏丞殿
川南康心 新介殿

中屋敷四畝十步 宮原長次郎殿

中屋敷四畝十步 俊作

中屋敷三畝廿七步 山下長右工門殿

中屋敷四畝 四本藤七兵衛殿

中屋敷三畝十八步 不筭与左工門殿跡
九右工門殿

中屋敷四畝 弓削惣助殿
弥立工門殿

中屋敷一反一畝六步 丹生助右工門殿
織右工門殿

中屋敷四畝廿三步 吉井孝右工門殿

中屋敷五畝十八步 竹之内弥右工門殿
本々マ

中屋敷六畝十一步 い本隼人佑殿
權左工門殿

中屋敷一反 折田善兵衛殿

上屋敷一反二畝十步 大野外記殿

新卒上屋敷六畝十八步 郡山茂右工門殿

右同上屋敷五畝廿四步 竹之内七右工門殿

上屋敷八畝 川上九郎右工門殿

上屋敷四畝廿步 根占市右工門殿

上屋敷五畝 山路太郎右工門殿

上屋敷六畝廿八步 田尻才之丞殿

中屋敷八畝廿步 伊十院六左工門殿

上屋敷八畝十二步 良存坊

上屋敷七畝十步 川内織部佑殿

上屋敷六畝廿步 大井二右工門殿
弥兵衛殿

下屋敷四畝十二步 岩本弥右工門殿

中屋敷四畝十二步 同清兵衛殿跡

上屋敷七畝廿四步 野村与兵衛殿

中屋敷一反六畝十四步 平山藏人殿

上屋敷七畝廿四步 押川西市允殿

中屋敷四畝 色紙彦左工門殿

中屋敷四畝廿步 牧野二郎兵衛殿

上屋敷一反三畝十步 肥後内藏介殿
休右工門殿

上屋敷四畝廿一步 福崎小左工門殿

中屋敷八畝廿步 伊地知志广介殿

新卒中屋敷三畝十一步 木村平右工門殿
半兵衛殿

中屋敷一反六畝十八步 本田隼人佑殿

上屋敷九畝十步 桑畑藤右工門殿

新卒上屋敷八畝十二步 白浜分右工門殿

上屋敷四畝十步 米良主税助殿
次郎左工門殿

上屋敷一反一畝四步 鮫島大藏丞殿

新竿
上屋敷二反廿三步
鮫島孝右工門殿五郎左工門殿跡

中屋敷四畝六步
八木助右工門殿

上屋敷二反二畝十五步
市来和泉守殿

中屋敷三反九畝六步
伊東二右工門殿周防介殿

上屋敷一反三畝四步
伊地知治十郎殿

上屋敷一反二畝四步
平田吉左工門殿刑部左工門殿

上屋敷一反二畝四步
同名与九郎殿

上屋敷一反一畝八步
阿多源右工門殿

上屋敷一反二畝四步
上井五郎右工門殿

上屋敷二反二畝十五步
岩切六右工門殿孫三郎殿

上屋敷二反一畝八步
菱刈伴右工門殿

下屋敷二段六畝四步
御客屋

中屋敷二段五畝四步
本田孫五郎殿

中屋敷八段九畝十八步
喜入撰津守殿監物殿

中屋敷二段二畝十二步
平田孫六殿助六殿

中屋敷三段
川上千徳殿右工門佑殿

中屋敷二段八畝七步
本田甲斐守殿

上屋敷二段四畝九步
鹿嶋伝左工門殿

上屋敷二段四畝九步
鎌田源左工門殿權左工門殿

上屋敷二段四畝十九步
桃山采女正殿

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

上屋敷一段一畝八步
有馬治右工門殿

上屋敷二段三畝廿五步
佐多長次殿又四郎殿

上屋敷二段五畝六步
吉利下総守殿神左工門殿

上屋敷二段六畝廿八步
諏訪神六殿

上屋敷二段五畝六步
毛利肥前守殿中將殿

上屋敷二段四畝五步
柱太郎兵衛殿

上屋敷二反一畝八步
吉田貞左工門殿

新竿
上屋敷七畝廿步
始良三郎兵衛殿平田豊前守殿

右同
上屋敷二段四畝五步
弟子丸藤左工門殿

上屋敷一段九畝十九步
伊勢美濃守殿

上屋敷一段八畝廿步
平田藤右工門殿

上屋敷一段五畝廿五步
相良權兵衛殿

上屋敷一段八畝十二步
野村吉次殿但馬守殿

中屋敷一段六畝廿步
堀甚左工門殿

中屋敷一段八畝十一步
稅所左工門兵衛殿

中屋敷一段六畝六步
川上又左工門殿

上屋敷一段三畝六步
猿渡新助殿五右工門殿跡

上屋敷一反六畝一步
相良長三郎殿尊之助殿

上屋敷一段二畝十四步
猿渡嘉左工門殿市右工門跡

上屋敷一段六畝四步
野村監物殿

上屋敷二段六畝四步

椀山又九郎殿

上屋敷七畝廿八步

川上彦三郎殿

上屋敷二反二畝十六步

吉田次郎兵衛殿

上屋敷一段八畝

重存坊

上屋敷一反三畝廿步

有馬調兵衛殿

上屋敷六畝九步

門松与三兵衛殿跡

上屋敷一反六畝廿步

岸長内藏助殿
佐久間勘右工門殿

上屋敷一段四畝

山田格右工門殿

上屋敷一段四畝廿步

甲斐掃部佑殿

上屋敷一段七畝二步

北条甚四郎殿

上屋敷一段一畝廿五步

野間孫兵衛殿

上屋敷一段六畝

阿多勘解由次官殿

上屋敷一段六畝廿四步

平田狩野介殿

上屋敷九畝六步

藤崎六郎右工門殿

上屋敷三畝廿五步

田中五右工門殿
珍阿弥

上屋敷四畝一步

孫右工門

上屋敷四畝廿四步

荻谷喜左工門殿

上屋敷八畝廿一步

伊十院宮内左工門殿

上屋敷八畝十二步

上井仲右工門殿

上屋敷六畝廿六步

林六左工門殿

上屋敷六畝十六步

指宿助左工門殿

上屋敷四畝廿五步

山本帶刀長殿

上屋敷四畝十五步

長山藤大兵衛殿跡

下屋敷二畝八步

中村為右工門殿

中屋敷二畝十八步

長田空右工門殿

中屋敷二畝十七步

森益助殿

上屋敷八畝十二步

和田孫左工門殿

中屋敷三畝

小浜 右工門殿

上屋敷七畝十四步

山本新右工門殿

中屋敷三畝十四步

露丸七右工門殿

中屋敷一畝十四步

新齋

中屋敷八畝廿二步

數根万左工門殿

中屋敷三畝十五步

東郷仲左工門殿

中屋敷四畝十六步

加藤与兵衛殿

中屋敷三畝十八步

山口少兵衛殿

中屋敷三畝十八步

日高豊前兵衛殿

中屋敷四畝六步

囚獄左工門

中屋敷五畝三歩

木藤 不明

中屋敷三畝廿七歩

津由龍兵衛殿

中屋敷三畝廿四歩

築瀬内藏助殿

右同

新竿

御小者 陽左工門殿

御小者 勘介殿

新竿

新竿

新竿

新竿

新竿

新竿

新竿

新竿

御小者

中屋敷三畝六步 折田幡左工門殿

中屋敷三畝廿二步 蘭牟田彦左工門殿

御中間 小木仲右工門殿 五兵衛殿

中屋敷三畝廿七步 大田彦左工門殿

新竿 下屋敷四畝十一歩

築瀬二左工門殿

張紙面高

上屋敷一段四畝廿二歩 真連坊

丹後守殿

上屋敷八畝十二歩 国分民部少輔殿

上屋敷七畝四歩 不笠治左工門殿

中屋敷九畝二歩 酒生利左工門殿

市右工門殿

中屋敷七畝廿八歩 渡辺安房介殿

中屋敷六畝七歩 岩本清左工門殿

本マツマツ 佐早次殿

下屋敷八畝廿歩 加藤民部左工門殿

中屋敷九畝十歩 野村内藏助殿

久保田諏訪之後辺

中屋敷一段五畝十八歩 谷山孫右工門殿

中屋敷五畝廿六歩 東郷寛右工門殿

下屋敷八畝廿歩 永山覚兵衛殿

伝左工門殿

下屋敷一段五畝十八歩 三原清右工門殿

下屋敷五畝廿九歩 鎌田吉兵衛殿

大迫喜三右工門殿

下屋敷五畝十九歩 永山新左工門殿

中屋敷一反一畝八歩 野村盛右工門殿

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

下屋敷四畝廿四歩 会所屋敷

下屋敷一段廿五歩 徳尾藤兵衛殿

三光坊

下屋敷六畝十二歩 大泉坊

本ノママ

中屋敷一反三畝二歩 午田新兵衛殿

大山伊与守殿

中屋敷九畝廿九歩 平田盛兵衛殿

下屋敷八畝七歩 宮之原伝左工門殿跡

四郎左工門殿

下屋敷九畝十八歩 入佐仲左工門殿

讃岐守殿

上屋敷八畝廿六歩 和田乘介殿

藤右工門殿

中屋敷一段十二歩 勝目与左工門殿

上屋敷一段三畝十五歩 東郷左工門殿跡

上屋敷二段一畝廿歩 八木長次郎殿

村尾源左工門殿

中屋敷一段八歩 肥後宗兵衛殿

中屋敷二段四畝八歩 鎌田盛次郎殿

与五郎殿

中屋敷七畝廿八歩 肥後内膳正殿

中屋敷一段一畝六歩 町田孫兵衛殿

太郎左工門殿

中屋敷二段二畝七歩 野村源四郎殿

中屋敷二段五畝六歩 最上善次郎殿

美作守殿

新竿 上屋敷一段三畝十二歩 又五郎殿

根白七郎殿

中屋敷二段九畝廿七歩 蒲地新介殿

下屋敷一反四畝八歩 三原次郎左工門殿

為左工門殿

下屋敷七畝四步

藤井助右工門殿

下屋敷二段一畝廿四步

東郷喜右工門殿

下屋敷一段九畝六步

琉球飯屋

下屋敷四畝廿步

檢崎喜兵衛殿

下屋敷三畝十步

野元主右工門殿

下屋敷五畝六步

肥後平右工門殿

下屋敷二畝十步

仁礼百介殿
四位五郎左工門殿

下屋敷三畝四步

縫殿

下屋敷二畝十八步

紹為

下屋敷三畝一步

本ノママ
權右工門殿
葉丸惣兵衛殿

下屋敷二畝廿四步

皮や
弥右工門殿

下屋敷二畝廿步

本ノママ
栖木市右工門殿

下屋敷二畝十二步

一庵

下屋敷二畝十一步

脇岡隼人佑殿

下屋敷五畝十一步

長野主水佑殿跡

下屋敷四畝十四步

左工門力
川上甚右工門殿

下屋敷三畝

為足

下屋敷二畝廿一步

内藏助殿
四本弥太左工門殿

下屋敷二畝廿一步

鬼塚喜右工門殿

下屋敷二畝廿一步

井尻龍右工門殿

下屋敷二畝十二步

小倉孫左工門殿

下屋敷六畝

久保七兵衛殿

下屋敷三畝十八步

塩官長介殿
泰官

下屋敷六畝十步

相良新兵衛殿

下屋敷四畝十四步

長倉藤五兵衛殿

下屋敷四畝十五步

有川采女正殿

下屋敷三畝廿七步

瀬介殿
桑原新右工門殿

下屋敷三畝十步

勝右工門殿
相良弾兵衛殿

下屋敷一畝十五步

伊東清左工門殿

下屋敷一畝十七步

田中内膳正殿

下屋敷六畝十步

奈須五左工門殿

下屋敷四畝廿步

池上市兵衛殿

下屋敷三畝廿步

源五右工門殿
三坂次郎左工門殿

下屋敷三畝廿步

依介殿
折田伝右工門殿

下屋敷二畝廿八步

長秀
月山

下屋敷四畝八步

皮や
源兵衛

下屋敷二畝廿步

新竿
児玉七右工門殿

下屋敷四畝

右同
中村權右工門殿

下屋敷九畝二步

常徳院

下屋敷六畝七步

川野盛介殿

下屋敷五畝廿一步

家村六左工門殿

下々屋敷一段八畝四步

左近允老岐守殿

下屋敷二畝十八步

古後七郎右工門殿

下々屋敷三畝廿二步

大山九郎兵衛殿

下々屋敷二畝十八步

橋口萬右工門殿

下々屋敷三畝廿二步

寺師次郎左工門殿

下々屋敷四畝廿四步

佐伯為仙

下々屋敷二畝六步

田中助次郎殿

下々屋敷八畝廿六步

竹下長吉殿

下々屋敷一段五畝

津曲新左工門殿

下々屋敷七畝十步

藤井助四郎殿

下々屋敷七畝一步

藤井内藏助殿

下々屋敷五畝十八步

荒田幾助殿

下々屋敷五畝

左近允八左工門殿跡

下々屋敷四畝廿步

家村与兵衛殿

下々屋敷一反廿步

上原仲左工門殿

下々屋敷五畝四步

池田覚左工門殿

下々屋敷一反六畝十四步

飯熊別当

下々屋敷一段八畝廿七步

熊飯屋

新竿
下屋敷一段五畝六步

相良杵之助殿

新竿
下屋敷一段七畝十八步

村田藤兵衛殿

新竿
下屋敷一段五畝

野村大学助殿

下屋敷一段一畝廿七步

鎌田嘉左工門殿

下屋敷五畝十二步

八木戸左工門殿

下屋敷一段六畝十三步

福崎新兵衛殿

下屋敷一段二畝壹步

八木民部左工門殿

下屋敷一段一畝廿七步

諏訪甚七殿

中屋敷一反二畝一步

黒田三左工門殿

中屋敷一反一畝十二步

相良満右工門殿

新竿
中屋敷一町八畝九步

伊勢兵部少輔殿

右同
中屋敷一反四畝廿八步

村田九郎左工門殿

張紙
此外四畝中村吉右工門殿屋敷へ相加

合一一反八畝廿八步

中屋敷五畝六步

松田民部左工門殿

中屋敷一段廿五步

福屋五郎兵衛殿

中屋敷一段六步

久永六左工門殿

下屋敷六畝

鎌田治部左工門殿

中屋敷八畝廿四步

吉田六右工門殿

中屋敷九畝廿四步

肥後勘兵衛殿
広瀬善次郎殿

下屋敷四畝廿步

倉野主水佑殿

新竿下屋敷三畝廿四步

大迫大学介殿

右同下屋敷五畝六步

大田丹後守殿

下屋敷三畝十步

戸敷喜之介殿

中屋敷五畝十二步

勝目新三郎殿

中屋敷七畝六步

長浜弥右工門殿

中屋敷四畝十步

平田次左工門殿

中屋敷六畝十五步

大迫藤左工門殿

下屋敷四畝廿三步

大迫清右工門殿

新竿下屋敷一段一畝廿步

田中後藤兵衛殿

下屋敷一反一畝八步

長浜鑿右工門殿

下屋敷四畝

深川与兵衛殿

下屋敷四畝

中馬彦兵衛殿

下屋敷五畝十八步

長野助左工門殿

下屋敷六畝

相良伝右工門殿

下屋敷四畝

松崎采女正殿

下々屋敷四畝廿三步

松崎小十郎殿

下々屋敷四畝十步

吉田五郎兵衛殿

下屋敷五畝十八步

神宮司藤七殿

下屋敷六畝十八步

川崎大右工門殿

大玄坊

長田内蔵丞殿

上屋敷八畝廿步

田畑李兵衛殿跡

上屋敷一反三畝廿四步

肥後与左工門殿

新竿下々屋敷四畝廿四步

長谷場少右工門殿

中屋敷六畝十二步

児玉次郎兵衛殿跡

上屋敷六畝十二步

湯地主膳正殿跡

上屋敷一段一畝六步

湯地嘉兵衛殿

中屋敷三畝十步

藤崎尺右工門殿

中屋敷三畝

門松助右工門殿

中屋敷四畝十步

四本五右工門殿

中屋敷四畝十二步

宮田源藏殿

中屋敷二畝廿四步

川野宮内左工門殿跡

中屋敷二畝廿四步

田代五郎介殿

中屋敷一畝十四步

境 源右工門殿

中屋敷四畝六步

尾上龍右工門殿

中屋敷六畝二步

谷山喜左工門殿

中屋敷二畝廿四步

貴嶋藤兵衛殿跡

中屋敷三畝十八步

永田李右工門殿

中屋敷三畝廿六步

小倉主殿助殿

中屋敷三畝十四步

小倉内右工門殿

中屋敷三畝廿七步

岩下伝右工門殿

中屋敷四畝廿步
岩下伝左工門殿七兵衛殿

上屋敷七畝
石神善吉殿彦左工門殿

上屋敷二畝十步
石神彦兵衛殿

上屋敷四畝六步
大山筑後守殿

上屋敷四畝六步
木場源左工門殿四郎兵衛殿

上屋敷三畝十八步
野村利右工門殿

上屋敷五畝十八步
鎌田半右工門殿

上屋敷三畝十四步
小春女目、春
伊地知甚左工門殿万兵衛殿

上屋敷四畝六步
上村万五郎殿

上屋敷四畝廿步
木場清左工門殿

上屋敷六畝
黒田主水佑殿

上屋敷八畝十二步
津曲久右工門殿

上屋敷四畝六步
宗慶

上屋敷三畝廿七步
竹内伊与守殿

上屋敷八畝十二步
岩切八兵衛殿

上屋敷三畝十八步
梅北与左工門殿休右工門殿

下屋敷四畝
長田長兵衛殿平左工門殿

下屋敷六畝廿四步
中保平兵衛殿

下屋敷三畝一步
浜田内藏丞殿

下屋敷三畝廿七步
松元茂右工門殿

下屋敷七畝十五步
森与三右工門殿

中屋敷三畝十八步
森与五郎殿与右工門殿

中屋敷八畝十二步
築瀬六右工門殿

中屋敷四畝
竹之内清左工門殿清兵衛殿

中屋敷三畝廿七步
高山備後守殿大工、李右工門殿

中屋敷七畝十四步
山崎久右工門殿跡

下屋敷六畝廿四步
新原道益

下屋しき一段廿二步
大馬場吉右工門殿

中屋敷四畝十二步
木森森人佑殿本ノマ、長三郎殿

中屋敷四畝十二步
洞井孫兵衛殿四位五郎左工門殿

中屋敷三畝廿五步
仁礼六左工門殿

中屋敷四畝
吉井藤兵衛殿大工、主水左工門殿

下屋敷三畝十八步
野村主水佑殿佐左工門殿

中屋敷四畝
川野次郎九郎殿彦殿、左工門殿

中屋敷四畝
岩本道右工門殿

下屋敷三畝十八步
大窪主税助殿

中屋敷四畝十二步
東郷宗兵衛殿

中屋敷六畝廿四步
川野監物丞殿

中屋敷四畝
染川源之丞殿

中屋敷三畝
染川大学左工門殿

下屋敷四畝六步

小川喜兵衛殿

下屋敷六畝廿四步

妹尾勘右工門殿

下屋敷三畝十八步

松方和泉守殿

下屋敷五畝十八步

敷根左近將監殿

下屋敷七畝廿四步

日置吉兵衛殿

中屋敷四畝十步

染郷新兵衛殿

中屋敷五畝六步

長田軍右工門殿

中屋敷四畝六步

長野善右工門殿

中屋敷五畝十八步

野村奎之助殿

中屋敷六畝十步

黒田新右工門殿

中屋敷五畝二步

仁礼盛右工門殿

中屋敷四畝一步

有馬高右工門殿

中屋敷五畝六步

木佐貫万兵衛殿

中屋敷五畝

加藤郷兵衛殿

中屋敷五畝十步

麩丸織部佑殿

中屋敷四畝

中村善右工門殿

中屋敷八畝十二步

郷田源七左工門殿

中屋敷八畝十二步

荒武寛右工門殿

中屋敷五畝三步

萩原孫八殿

宗久之九郎殿

黒田百左工門殿

中屋敷四畝三步

鐘学坊跡

中屋敷四畝六步

高嶋吉兵衛殿

中屋敷七畝十四步

海老原主計助殿

中屋敷六畝十步

四本彦兵衛殿

下屋敷七畝六步

四本覚左工門殿

下屋敷四畝七步

常嘉

下屋敷二畝三步

光紹

下屋敷五畝十步

松崎久左工門殿

下屋敷五畝八步

勝部足右工門殿

下屋敷七畝十一步

渋谷次郎兵衛殿

下屋敷四畝

山本半兵衛殿

下二畝十二步

安田作右工門殿

下屋敷三畝十二步

竹之下与左工門殿

下屋敷七畝十一步

和田郷左工門殿

下屋敷五畝六步

辻為左工門殿

中屋敷四畝

根占舍人佑殿

中屋敷三畝廿步

野崎甚右工門殿

下屋敷四畝廿九步

白石仲兵衛殿

下屋敷四畝三步

野村治兵衛殿

中屋敷三畝十步

赤崎吉右工門殿

中屋敷五畝三步

稻留久右工門殿

中屋敷三畝十步

伊地知久兵衛殿

中屋敷八畝十八步

重信監介殿

中屋敷三畝十八步

上原鞍介殿

中屋敷六畝廿步

武元兵衛門尉殿

中屋敷三畝二步

谷山宮内左工門殿

下屋敷三畝二步

吉井長左工門殿

中屋敷三畝十八步

吉井次郎兵衛殿

中屋敷三畝十步

武元藤兵衛殿

下屋敷七畝十步

佐土原兵衛門殿

下屋敷四畝

大坊

下屋敷七畝十一步

橋口少兵衛殿

下屋敷三畝六步

順慶

下屋敷三畝六步

橋元助右工門殿

中屋敷四畝十步

川畑隼人佑殿

下屋敷三畝六步

河原与兵衛殿

下屋敷三畝六步

小倉三左工門殿

下屋敷三畝六步

竹之内六右工門殿

下屋敷三畝六步

白石利左工門殿

下屋敷三畝十八步

郎兵衛

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

下屋敷三畝十八步

小倉源右工門殿

下屋敷四畝廿三步

三原善右工門殿

下屋敷四畝

松元右近將殿

下屋敷三畝一步

浅井八左工門殿

中屋敷三畝十八步

長瀬八右工門殿

中屋敷三畝十八步

大浦善左工門殿

中屋敷四畝

三坂大郎兵衛殿

中屋敷三畝十八步

牧太兵衛殿

中屋敷四畝六步

谷本佑介殿

中屋敷四畝十步

上村平右工門殿

上屋敷四畝

種子田八兵衛殿

上屋敷六畝十五步

上野掃部助殿

中屋敷五畝十九步

川野弥六殿

上屋敷五畝十二步

西郷八郎右工門殿

中屋敷三畝一步

山口市左工門殿

中屋敷三畝一步

長田内蔵助殿

中屋敷八畝七步

西田継介殿

中屋敷四畝廿四步

高城正左工門殿

中屋敷五畝六步

青山監介殿

中屋敷三畝十八步

黒木喜右工門殿

中屋敷三畝十四步 新卒 種子田水右工門殿

上屋敷二畝廿四步 休庵

上屋敷二畝廿四步 石友明

上屋敷三畝廿二步 御中間 野崎平介殿

上屋敷四畝十步 御中間 色紙喜兵衛殿

中屋敷三畝八步 御中間 山下六右工門殿

上屋敷四畝 御小者 慶房

上屋敷四畝八步 杉山藤右工門殿

上屋敷五畝六步 添田伝右工門殿

中屋敷四畝六步 松山甚兵衛殿

中屋敷四畝六步 三坂善右工門殿

中屋敷四畝廿三步 山下源助殿

二本松地藏通辺 御中間 松山太郎兵衛殿

中屋敷四畝十步 右同 西田五郎兵衛殿

中屋敷五畝四步 朱書 地藏屋敷六畝余有之由下二名前有之候得共不相知

中屋敷四畝廿步 大工 山本八兵衛殿

中屋敷四畝廿步 大工 大野盛右工門殿

中屋敷四畝廿步 吉井早左工門殿

二松地藏馬場 本ノマ

中屋敷六畝二步 六兵衛殿 三代五兵衛殿

中屋敷四畝六步 大工 川崎弥兵衛殿

上屋敷四畝十步 張紙 跡 与倉源兵衛殿 伊与倉源平殿

上屋敷三畝廿七步 本ノマ 臨岐右工門殿 助左工門殿野元

上屋敷四畝 御台所付 働左工門殿 萩原仲右工門殿

上屋敷三畝十八步 御小者 金右工門殿 横山弥右工門殿

上屋敷四畝十步 御小者 水間市兵衛殿

中屋敷八畝 三原平兵衛殿

中屋敷三畝廿二步 川畑志广之丞殿跡

中屋敷四畝廿步 竹之下彦 為左工門殿

中屋敷一段十二步 新納大内蔵丞殿

中屋敷一段四畝廿二步 中村主水佑殿

上屋敷四畝十步 不審 原口吉兵衛殿

上屋敷五畝 大工 木藤善右工門殿

上屋敷四畝十五步 郡山六七左工門殿 大迫小右工門殿

下屋敷七畝六步 中村与左工門殿

中屋敷七畝 本村左近兵衛殿

中屋敷四畝廿步 梅北助右工門殿跡

中屋敷四畝廿步 梶原善左工門殿

下屋敷七畝廿四步 吉利織部助殿 三郎兵衛殿

上屋敷三畝十八歩

大山豊前兵衛殿

上屋敷三畝一歩

上山少兵衛殿

上屋敷四畝十歩

松方兵衛門殿

中屋敷九畝十歩

有川主膳正殿

中屋敷五畝十歩

奈良原帯力長殿

上屋敷八畝廿六歩

江川孫左工門殿

下屋敷八畝

野元源左工門殿

下屋敷七畝六歩

加治木松右工門殿

下屋敷四畝廿歩

長田納右工門殿

下屋敷四畝廿歩

有馬主殿助殿

下屋敷九畝十歩

市来備後守殿

下屋敷三畝十八歩

上原与一右工門殿

下屋敷四畝廿歩

鬼塚孫左工門殿

下屋敷三畝廿七歩

弥介

下屋敷三畝廿七歩

い十院弥左工門殿

下屋敷四畝廿三歩

染川勘左工門殿

下屋敷八畝

美代主殿助殿

下屋しき三畝廿七歩

辺麦平右工門殿

下屋敷三畝十八歩

児玉彦左工門殿

下屋敷四畝八歩

赤松宮内左工門殿

下屋敷六畝十二歩

留田内匠丞殿

下屋敷七畝十五歩

有川治部左工門殿

下屋敷五畝十一歩

肝付彦兵衛殿

下屋敷一段九畝六歩

平山对馬守殿

下屋敷六畝

市来孫左工門殿

下屋敷三畝廿二歩

鮫島弥左工門殿

下屋敷四畝十五歩

淵辺与左工門殿

下屋敷四畝六歩

間瀬田七左工門殿

下屋敷七畝

四本六左工門殿

下屋敷一段三畝十歩

福永久兵衛殿

下屋敷二畝十歩

伝右工門殿

下屋敷四畝六歩

坂元主税助殿

下屋敷五畝十八歩

有馬民部左工門殿

下屋敷二畝廿歩

有馬休阿ミ

下屋敷三畝六歩

有川休右工門殿

下屋敷六畝六歩

奈良原源介殿

下屋敷四畝六歩

前田早右工門殿

下屋敷六畝十六歩

坂元十郎右工門殿

下屋敷四畝廿歩

長田大右工門殿

新竿
下屋敷九畝廿四步

平田清兵衛殿
大山市兵衛殿

下屋敷七畝十八步

伊瀬池久兵衛殿
竹之内与七殿

新竿
下屋敷五畝十五步

有馬左近将殿

下屋敷一反廿四步

丸田弥左工門殿
次右工門殿

下屋敷七畝六步

肥後新左工門殿
与左工門殿

中屋敷九畝廿四步

村田郷左工門殿

中屋敷七畝廿四步

宇多小左工門殿
作介殿

下屋敷六畝

向井吉左工門殿

新竿
下々屋敷三畝廿五步

芦谷源吉殿

同
中屋敷一反二畝五步

尾上二左工門殿
本ノママ

同
下屋敷五畝

隈元与七殿

下々屋敷七畝廿四步

伊地知右工門兵衛殿

下々屋敷四畝廿步

伊東伝左工門殿

下屋敷四畝六步

大重伝左工門殿
御小者名字不知
四郎兵衛殿

下屋敷四畝

伝藏殿

中屋敷四畝

野崎六兵衛殿
五左工門殿

中屋敷五畝

覚兵衛

張紙本ノママ
緑川か事

曾木源四郎殿

中屋敷五畝十步

一宅

下々屋敷四畝廿步

新竿
中屋敷五畝六步

鎌田勘兵衛殿

右同
中屋敷五畝廿五步

押川善左工門殿

中屋敷六畝十五步

いちゝ長兵衛殿
御小者
神宮司安工門殿

下屋敷四畝十步

桑野新左工門殿
善右工門殿

新竿
中屋敷一反一畝

鎌田権兵衛殿

中屋敷五畝十二步

山下昌左工門殿

下屋敷四畝

川畑次左工門殿

中屋敷七畝十五步

油や金兵衛
福嶋伴介殿
本左工門殿

新竿
中屋敷七畝十四步

松山六兵衛殿
本左工門殿

右同
中屋敷九畝二步

坂元監物丞殿
宮内蔵右工門殿

新竿
中屋敷五畝十步

石川主水左工門殿
御中間
美代善兵衛殿

同
中屋敷五畝十步

大川孫右工門殿
觸衆
篠崎喜右工門殿

同
中屋敷七畝廿八步

松山長左工門殿

下屋敷四畝廿三步

竹下郷左工門殿
田尻正介殿

新竿
下屋敷四畝六步

正作
田中全右工門殿

同
中屋敷八畝七步

稻津長右工門殿
大工

同
中屋敷五畝廿步

高山采女正殿

同
下屋敷五畝

伊地知源三郎殿
朱書

中屋敷四畝廿四步

田尻小右工門殿跡
明屋しき

山口ノ辺

中屋敷五畝十二步

龜沢内記殿

新竿中屋敷八畝十二步

梶原主水佑殿

中屋敷五畝十二步

吉原五郎右工門殿

中屋敷四畝八步

時任長右工門殿

中屋敷六畝二步

小倉監物殿

新竿下屋敷一反一畝廿二步

猿渡喜右工門殿

同下屋敷七畝廿八步

有馬順左工門殿

同下屋敷五畝廿四步

湛齋

同下屋敷五畝七步

西郷九兵衛殿

新竿下屋敷五畝十八步

伊地知喜左工門殿

同下屋敷九畝十九步

永吉伴兵衛殿

同下屋敷四畝十五步

池上藤左工門殿

同下屋敷四畝廿四步

木原弥左工門殿

中屋敷四畝十二步

木藤助太郎殿

中屋敷六畝

三五郎

中屋敷六畝廿步

財部伝右工門殿

中屋敷四畝廿四步

伊地知久左工門殿

中屋敷五畝十二步

川野二郎兵衛殿

中屋敷六畝

野崎七左工門殿

中屋敷六畝廿步

水間本左工門殿

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

新竿中屋敷九畝廿四步

仁礼主税介殿

中屋敷七畝十八步

有川源藏殿

同上屋敷一反五畝廿五步

佐藤伸兵衛殿

下屋敷四畝廿步

築瀬源右工門殿

下屋敷四畝廿步

二本種左工門殿

下屋敷六畝十八步

肝付大右工門殿

中屋敷五畝四步

長瀬為右工門殿

中屋敷六畝廿九步

神宮司銀右工門殿

下屋敷三畝廿七步

加世田次兵衛殿

御小者下屋敷三畝十八步

川野源太左工門殿

新竿下屋敷三畝十八步

川畑勝兵衛殿

同下屋敷一反四畝廿二步

上村弥左工門殿

下屋敷三畝廿二步

川口七右工門殿

下屋敷六畝廿八步

井上織部佑殿

下屋敷一反九畝五步

海江田仲左工門殿

下屋敷八畝二步

外山弥右工門殿

下屋敷一反廿步

平野六郎左工門殿

下屋敷五畝十步

入部勘介殿

下屋敷一反八畝十二步

渋谷与左工門殿

下屋敷六畝

坂元勝右工門殿

新
中屋敷九畝十八步 伊知地利兵衛殿

中屋敷五畝 岡元主計助殿

同
下一反 小野甚右工門殿

中屋敷一反二畝十步 北原善左工門殿

中屋敷一反五畝十步 有馬主馬首殿

中屋敷一反四畝 大山新左工門殿

中屋敷一反二畝廿步 三嶋主計助殿

新竿
下屋敷九畝十八步 清水監物殿

中屋敷五畝十二步 隈本膳兵衛殿

下屋敷一反一畝廿七步 中原伝心

下屋敷一反六畝廿一步 野津安工門殿

下屋敷五畝十步 山元五郎右工門殿

新竿
下屋敷一反廿步 阿多对馬守殿

同
下屋敷一反廿二步 伊東九兵衛殿

下屋敷五畝十二步 井上掃部助殿

下屋敷六畝十八步 井手箆藤兵衛殿

下屋敷四畝廿步 中山織部佑殿

下屋敷四畝 宇都宮藤左工門殿

下屋敷五畝二步 早稻田源右工門殿

下屋敷四畝八步 東郷二左工門殿

下屋敷五畝十五步 竹下市右工門殿

下屋敷六畝一步 小川内彦左工門殿

下屋敷八畝廿四步 田向李兵衛殿

下屋敷六畝廿八步 松永勝作殿

下屋敷五畝十二步 窪田弥左工門殿

新竿
上屋敷一段二畝廿五步 三官

下屋敷六畝十二步 阿多内膳正殿

新竿
下々屋敷五畝十步 石原助兵衛殿

下屋敷一反一畝六步 餅原平右工門殿

下屋敷六畝一步 加世田内記殿

下屋敷六畝九步 若松助左工門殿

新竿
中屋敷一反二畝廿四步 長谷友右工門殿

新竿
中屋敷九畝廿二步 伊地知奎右工門殿

新竿
中屋敷二反四畝廿五步 伊東志广丞殿

中屋敷一反九畝十五步 是枝諸左工門殿

下屋敷一反二畝十八步 城井三郎兵衛殿

中屋敷六畝十八步 曾木源七殿

七口
下屋敷一反一畝六步 竹内備前守殿

新竿
中屋敷六畝十六步 湯地道意

中屋敷九畝十步 浮所

中九畝十六步

押川彦左工門殿

中屋敷九畝十步

新納右工門兵衛殿

中屋敷四畝六步

葛西茂右工門殿

中屋敷九畝廿四步

川上主殿助殿

中屋敷三畝廿九步

柳田勘右工門殿

中屋敷四畝十二步

伊地知喜右工門殿

中屋敷四畝廿七步

福崎勝右工門殿

中屋敷五畝十步

黒木惣兵衛殿

中屋敷五畝十二步

橋口治右工門殿

中屋敷四畝廿步

長田与右工門殿

中屋敷五畝十八步

郡山助左工門殿

下屋敷五畝六步

野崎喜之助殿

中屋敷五畝三步

有村二右工門殿

中屋敷五畝八步

田代五郎左工門殿

下々屋敷五畝十步

右衛門殿

屋敷三畝廿步

山口孫左工門殿

中屋敷五畝

川畑平左工門殿

下屋敷五畝十八步

徳田少右工門殿

下屋敷六畝十八步

畑次兵衛殿

下屋敷六畝十八步

武三右工門殿跡

上屋敷一反二畝廿五步

川上掃部助殿跡

下屋敷一反二畝

弟子丸治左工門殿

下屋敷五畝

敷根市左工門殿

下屋敷六畝九步

本田左近将曹殿

下屋敷五畝四步

堀之内仲右工門殿

下屋敷五畝十二步

町田五右工門殿

下屋敷六畝七步

本田兵介殿

下屋敷二反二畝八步

鎌田与七左工門殿

下屋敷一反七畝十八步

伊十院宮内少輔殿

下屋敷一反六步

同九郎兵衛殿

下屋敷一反八畝廿四步

村尾隼人佑殿

津曲助之丞殿

菌田助兵衛殿

法元宇左工門殿

浮所

下屋敷七畝十四步

浮所

下屋敷一反六畝廿步

町田掃部佑殿

下屋敷一反五畝九步

平山内匠丞殿

下屋敷一反八步

岩下伝左工門殿

下屋敷五畝廿步

橋口市兵衛殿

下屋敷一反七畝

有川吉左工門殿

下屋敷一反一畝十二步

川上五兵衛殿

下屋敷五畝廿一步

川村与三兵衛殿

下屋敷六畝七步

川野治兵衛殿

下屋敷六畝七步

黒江吉兵衛殿

下屋敷五畝十八步

寺師与右工門殿

下屋敷六畝九步

津曲藤工門殿

下屋敷一畝廿二步

谷山官兵衛殿

上屋敷三段一畝

川上休右工門殿

下屋敷八畝

御藏地

下屋敷三畝十五步

向井九郎右工門殿

下屋敷三畝十五步

湯浅但馬守殿

下屋敷四畝

林仲右工門殿

下屋敷三畝六步

小倉六右工門殿

下屋敷三畝六步

松下彦兵衛殿

下屋敷四畝六步

浅田兵衛門殿

下屋敷一反七畝十八步

諏訪仲右工門殿

下屋敷四畝廿四步

森岡弥兵衛殿

下屋敷四畝十步

米良兵部卿殿

下屋敷二畝十二步

坂本源之允殿

下屋敷三畝十二步

勝部新兵衛殿

下屋敷四畝廿四步

森甚兵衛殿

下屋敷四畝

浜田金右工門殿

下屋敷三畝十步

土石市右工門殿

下屋敷三畝十步

窪田利兵衛殿

下屋敷六畝七步

肝付伴左工門殿

下屋敷五畝六步

木尾助次郎殿

下屋敷五畝四步

山口善右工門殿

下屋敷三畝十八步

重永

下屋敷七畝十一步

真木の山寺

下屋敷五畝十八步

田中休三郎殿

下屋敷四畝廿六步

浮所

下屋敷六畝二步

塩山平内殿

下屋敷八畝

伊十院長右工門殿

下屋敷二畝十步

浮所

下屋敷四畝十步

月野内藏之丞殿

下屋敷四畝廿步

守慶

下屋敷四畝廿四步

小川助右工門殿

下屋敷三畝

武五郎右入道殿

同
下屋敷七畝廿四步
武宮内左工門殿

新竿
下々屋敷一反四畝十二步
精松主膳正

張紙上なし
畦廿三步
堀新三郎殿

右屋敷惣拵有略ス

久木田権右工門尉

梶原善左工門尉

長野助左工門尉

津留休右工門尉

寛永十三年九月廿日

楠元五郎右工門尉

長瀬新兵衛

山口仲兵衛

伊十院長右工門尉

加藤郷兵衛

平田喜左工門尉

田中茂左工門尉

竿頭
岩元清左工門尉

判有
田尻嘉兵衛

判有
川上内膳正

寛永拾三年子

西田

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

九月廿日

田尻嘉兵衛

岩元清左工門

西田新屋舖

下屋敷五畝十五步

浮所

三代善兵衛殿

下々屋敷五畝廿六步

浮所

下屋敷五畝

重久曾兵衛殿

下屋敷六畝廿步

野間勘之丞殿

下屋敷五畝

西川権左工門殿

下屋敷六畝拾步

野間治兵衛殿

下屋敷五畝

浮所

下屋敷三畝廿二步

浮所

有馬老岐守殿

下屋敷五畝

浮所

下屋敷五畝

浮所

下屋敷五畝十五步

相良寛右工門殿

下屋敷四畝

浮所

中屋敷四畝十五步

脇田織部佑殿

下屋敷考畝

浮所

中屋敷五畝

井上六郎右工門殿

下屋敷四畝廿步

土持左馬權頭殿
指宿帶刀長殿

中屋敷五畝

黒木藤左工門殿

下屋敷三畝十步

浮所

中屋敷五畝五步

浮所

下屋敷四畝廿五步

土持左馬權頭殿
浮所

中屋敷四畝十五步

牧少左工門殿

下屋敷四畝十五步

小左部殿跡

上屋敷五畝十五步

津曲久五郎殿

下屋敷五畝廿步

川崎仲右工門殿

上屋敷五畝十五步

黒木孫兵衛殿

下屋敷五畝五步

瀬戸口 右工門殿

上屋敷四畝廿七步

坂口掃部佑殿

下屋敷四畝廿步

寺尾新左工門殿

下屋敷三畝六步

野間口万兵衛殿

上屋敷四畝廿步

はしもり
南右工門殿

御道具衆

西高右工門殿

上屋敷五畝

八木源八殿

上屋敷五畝九步

篠崎与一左工門殿

中屋敷五畝

芦谷六右工門殿
長田九介殿

上屋敷五畝九步

黒江勘解由殿

中屋敷四畝廿步

上別府甚六殿

上屋敷五畝二步

宅万昌左工門殿

下屋敷五畝十步

おはる
日高新藏殿

中屋敷五畝

山口覚左工門殿

下屋敷二畝

浮所

中屋敷四畝十步

国府覚左工門殿

下屋敷五畝

川村貞右工門殿

中屋敷四畝廿五步

久木村喜兵衛殿

中屋敷五畝

御中間
末原郷右工門殿

中屋敷四畝廿五步

永山孫右工門殿

中屋敷四畝廿八步

御小者
有馬久右工門殿

中屋敷四畝廿五步

津曲八兵衛殿

中屋敷五畝

御小者
押川伝内左工門殿

中屋敷四畝廿五步

長井市左工門殿

中屋敷四畝廿五步

坂口善介殿

中屋敷五畝

長尾權之助殿

中屋敷五畝

野添權左工門殿

中屋敷五畝五步

坂本權右工門殿

下屋敷四畝十步

新穂休二郎殿

上屋敷五畝

滝間少右工門殿

下屋敷二畝十七步

小田帶刀長殿

上屋敷五畝

児玉左近將殿

下屋敷四畝廿步

竹之下十右工門殿

上屋敷五畝五步

西吉兵衛殿

中屋敷四畝廿步

新穂大炊左工門殿

中屋敷五畝四步

山口六郎左工門殿

中屋敷四畝廿步

川畑四郎左工門殿

中屋敷五畝九步

吉留孫兵衛殿

中屋敷四畝廿步

川畑四郎左工門殿

中屋敷五畝十五步

国分佐左工門殿

中屋敷四畝廿步

後田平六兵衛殿

下屋敷四畝廿步

北川佐五右工門殿

中屋敷四殿廿步

中嶋喜右工門殿

下屋敷五畝

和田伴兵衛殿

中屋敷三畝廿步

北川七郎右工門殿

下屋敷五畝五步

坂口二郎左工門殿

中屋敷四畝十五步

有馬八右工門殿

下屋敷五畝五步

菌田小藤兵衛殿

下屋敷四畝十五步

小野彦左工門殿

下屋敷五畝

立山小兵衛殿

下屋敷四畝廿五步

中村五左工門殿

下屋敷四畝廿步

国分六右工門殿

下屋敷五畝

鮫島采女正殿

上屋敷老段

竹迫伝右工門殿

下屋敷五畝

滝間右工門兵衛殿

下屋敷五畝

長瀬監物殿

下屋敷五畝四步

飛岡郷右工門殿

下屋敷四畝廿四步

池上与三兵衛殿

下屋敷四畝廿步

瀬戸口源右工門殿

下屋敷五畝五步

弥七左工門殿

下屋敷四畝廿七步

世渡口善介殿

中屋敷五畝五步

篠崎甚蔵殿

下屋敷四畝廿七步

角地慶左工門殿

中屋敷五畝

林右工門殿

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

中屋敷四畝廿八步

安楽孫介殿
藤兵衛殿

中屋敷五畝

松下茂介殿
内蔵右工門殿

中屋敷五畝

須田九郎兵衛殿
堅右工門殿

中屋敷四畝廿步

平川長左工門殿

中屋敷五畝九步

同名仲右工門殿

中屋敷四畝十五步

桐野新兵衛殿
仲左工門殿

中屋敷五畝廿六步

坂口縫殿助殿

中屋敷三畝廿一步

篠原湛介殿
仲左工門殿

中屋敷五畝

坂口金右工門殿

中屋敷五畝

竹下友右工門殿

中屋敷五畝

西孫右工門殿
淵村宇右工門殿

中屋敷五畝

篠原長右工門殿

中屋敷五畝

内藤治右工門殿

下屋敷三畝六步

宇都彦兵衛殿

中屋敷五畝

淵辺織部助殿

下屋敷壹畝

右同人

下々屋敷五畝

山口慶右工門殿

中屋敷五畝

久保新介殿
左工門殿

下々屋敷五畝

大重主水助殿
弥右工門殿

中屋敷五畝四步

黒江源四郎殿
彦左工門殿

下々屋敷四畝廿步

大重七左工門殿

中屋敷五畝九步

田尻吉兵衛殿

下屋敷五畝

餌井新三郎殿
与左工門殿

中屋敷五畝

竹迫仲兵衛殿
池田源之丞殿

下屋敷四畝廿步

前田内蔵介殿

中屋敷五畝

淵村二郎右工門殿

中屋敷四畝廿步

内藤作右工門殿
内藤曾左工門殿

中屋敷五畝

前田大学介殿

中屋敷四畝廿步

池田源之允殿

中屋敷五畝

立山吉左工門殿

中屋敷四畝廿五步

竹之下覚右工門殿
条右工門殿

下屋敷五畝

手塚権左工門殿

中屋敷五畝七步

長野五兵衛殿

下屋敷五畝

川野八郎右工門殿

中屋敷五畝

前田彦右工門殿
松右工門殿

下屋敷四畝廿五步

窪田重左工門殿
治左工門殿

中屋敷四畝廿七步

三角角右工門殿
曾兵衛殿

下屋敷西畝廿五步

西郷吉左工門殿
治左工門殿

中屋敷四畝廿七步

大山善介殿
甚左工門殿

下屋敷五畝

森山宇兵衛殿

下屋敷五畝

種子田孫兵衛殿

下屋敷五畝

石川長右工門殿

下屋敷五畝

横山織部佐殿

下屋敷五畝

堀 長介殿

下屋敷五畝

長井源藏殿

下屋敷五畝

長野助三郎殿

下屋敷五畝

郡山宇兵衛殿

下屋敷五畝

桐野滝右工門殿

下屋敷五畝

森 源三郎殿

下屋敷四畝廿二步

桐野右近介殿

中屋敷五畝

川辺藤左工門殿

中屋敷四畝廿二步

四本源左工門殿

中屋敷五畝

坂本覚兵衛殿

中屋敷四畝廿二步

坂本覚兵衛殿

寛永拾三年九月廿日

岩本清左工門尉

雑録中載七置進上ス

伊地知季通

藏書

古 記(上)

古記

自寛永元年
至延宝八年
上

寛永元年甲子元和十年二月晦日改元

一家久公御事、権現様御殊恩被為蒙候付、御妻子御引越御奉
 公被遊御厚恩之萬一御報可被遊段伊勢兵部少輔貞昌を以
 土井大炊頭利勝迄御内談之上 台徳公御聴ニ相達候処、
 御大悦ニて天下太平之基と上意有之、道中御伝馬御給候
 て今年御子様并御夫人様方御同道ニ而翌年四月十二日御
 参府也、諸大名妻子引越、江戸江被召置候儀者是初也 此以
 人 被召置候迄也、右之利勝と貞昌念比也、貞昌も妻子召列 前ハ
 家久公江供奉仕、江戸江罷在候、貞昌事右通御奉公仕候
 二付、將軍家より御米五百俵ツ、毎年被成下死去之年迄

三四七

三年拝領候、

寛永二年乙丑

一 二月上旬、家久公難波津二御入船大坂江三日被成御座、

伏見江御滞留、清水御參詣等有之、於下醍醐御旅中為御

願大現明王法数百座修行、暮春十八日木幡相飯、（ま） 朔月十

二日江戸江御着、

寛永三年丙寅

一 五月、黄門公御上洛、八月十九日依秀忠公台命、黄門公

任權中納言叙從三位、今日勅給寮御馬、

一 九月六日

帝二条城江行幸西刻大將軍家光公為御迎御參内、黄門公騎

馬二而御供奉、家久公薩摩中納言冠黒御装束、御乘馬御供御

馬副兩人布衣衆六人、御蓋持老人、御馬前刀者御長刀一

振、

一 九月、黄門公京より御帰国、

一 正月、加治木不誓寺之住持、運譽遷化、

寛永四年丁卯

一 比志嶋宮内少輔国隆事、科之条々被仰出、御家老役御免

二 川辺保福寺江寺領所領家財没収同六年種子嶋江被謫

但没収已後、没収之銀子三百五十貫目之内にて高三拾

石買地二而親国貞之忠貞故、国貞之寺江御付被成後室

之地行如本被下置候、

一 三月普請奉行中村吉右衛門、岩岐主計正、老岐寛左衛門、

此三人に被仰付、加治木岩屋寺御再興、

一 八月嶋津玄蕃、伊勢兵部、依所望於南林寺松原射場、東

郷長左衛門重而三寸四方之的を被射候処、一手共に中り

候事、

寛永五年戊辰

一 当年出水之内野田外城二立、地頭蒲池備中、

一家久公御帰国、

一 四月龜山殿二男三男二御知行被遣候、舍兄江五拾石、舍

弟江三拾石於高山辺被成御支配、則高山衆中可被相付事

藤野殿も於庄内知行、五拾石被遣、財部江可被相付事、

一 十二月、新納加賀守忠清江大口地頭被仰付候、

一 二月、伊作野村妙見宝殿一字を新に造建す、

当屋形藤原家久、当地頭市来掃部助、大工折田淡路、鍛

冶梶原石見守、当噺篠原源太夫、丸山七兵衛、田部三河

守、肝煎柳田次郎兵衛、

一 南林寺境内之源舜庵老比志嶋紀伊守国貞忠勤之訳を以為

菩提所、寛永五年家久公御建立被仰付、国貞法号堯庵源

舜庵主と申候故、右通寺号被仰付、寺高三拾石被付置候、

但元來郡山之内東俣村ニ為有之寺之由、御引直ニ而右
通寺号被仰付候由、

寛永六年己巳

一当年江戸御城石垣御普請二付、角石百御献上、

一比志嶋国隆、種子嶋江配流、其後切腹被仰付候、

一御屋形内江不思儀成者忍入被擲捕候処、彼者申分二者、秀

頼様御国江被成御座、真田命なからへ紀伊国江被召置候

なとと申候、依之土井大炊頭殿江被成御渡候、

一十月上旬、泗川御勝利為三十三年忌人八萬三千千僧供養、

法花一萬部日夜十四余、

寛永七年庚午

一十月五日、国府様御死去於国府御年六拾才、法名持明彭窓

庵主、興国寺殿、家久公御簾中也、

寛永八年辛未

一二月五日、北郷讚岐守忠能卒去、忠能事、從幼少兩親無

之、氣儘成長故不敬 公儀、不睦家臣、心之儘之挙動ニテ

忠臣無罪を誅戮し、不道之仕置ニ而北郷家も既ニ危成立

候処、被相果候付、同三月廿八日家久公御袖判を以川上式

部久国・仁礼藏人景親を御使者嗣子出雲守忠亮江御教訓

有之、

古 記(上)

一八月六日、北郷忠亮家老、北郷源左衛門忠俊江切腹被仰

付候、忠俊事忠能以來一家之權威を執、我意をふるまい

上を蔑如候、下を苦しめ候付、衆人見こらしの為、御殺

被成候、忠俊於鹿兒嶋切腹、父小兵衛忠泰弟平左衛門忠

仍、翌七日於都城切腹也、

一此年二月、福昌寺を薩隅日之総録所被相定、

寛永九年壬申

一此年加治木士拾六人御道具衆三拾人合而四拾六人、從黃

門様、又八郎様江從江戸時々被召附候、

殉死之事ハ堅御禁止ニ而候処、御法度ニ背キ惟新公江殉

死仕候付、家久公御立腹被遊所帶没収被仰付候、其後拾

四年を過て、此年七月六日家財を本のことく被返下、殉

死の人々の為め地藏塔を伊集院妙円寺ニ建立被仰付候、

寛永十年癸酉

一御分国田地不相并候付、其年以來引并竿被仰付候、寛永

竿と申候、

一都之城牛峠論山以両使伊東修理太夫殿江被進、

寛永十一年甲戌

一御分国目録御使者市來八左衛門を以江戸江被差遣、

一諸士持高名寄帳被返下候、

三四九

一家光將軍御代替二付、中山王尚豊御祝儀使者佐敷王子金武王子玉城薩州江上着、

家光公 御參内二付、中納言様御事、光久公御同道にて江戸被遊 御発駕候、依之中山王使者差上候趣被相伺候処、此節於京都 御目見可被仰付旨被仰出、閏七月佐敷王子・金

武王子・玉城右三人於京都御目見相濟候、於何方御目見不相知、二条御城敷

一 七月廿二日、嶋津豊後守久賀二黒木を賜ふ、

一 八月四日、家光公以薩摩大隅日向諸県郡并琉球国之御判物家久公御頂戴、

一 御國中引ならし竿有之、御竿奉行加治木より被仰渡候、

曾木新左衛門、長谷場伝左衛門、大脇主馬諸外城ニ差越

檢地仕候、

一 十二月晦日、慈眼公忠義の老臣五人を撰給ふ、所謂其五人者、伊集院下野守久治入道抱節、

一 此年御領國中御支配替有之、諸士知行四部一并雖被仰付、寺院知行之儀返地無之候、

寛永十二年乙亥

一 御分国改之手札生子迄百姓者年付候て老人ニ札沓ツツ、相渡候、

一 正月十三日、御上洛、乗馬衆五拾騎、步行衆千人御道具

衆百人、細嶋より御舟大坂江御着船、

一 六月十九日、霧嶋火三日焼、

一 七月十二日、江戸御屋敷出火、伊達陸奥守嫡子越前守、

長井信濃守其外有類火、

一 同廿五日、当国隣国大風已刻より酉刻迄、田野米粟枯不登、

一 八月廿八日、天下御太禁二付、幾利支丹宗改被仰出、從霜月朔日至十二月中旬數日穿鑿改之、被擲取之、改宗候者者被赦、不改者者御成敗也、

一 松平大隅守召列候人数、

一 乘馬廿騎、外替之乘馬拾騎

一 小姓拾人、一陸之者百三拾人

一 小者中間道具三者式百式拾人

一 又小者七百九拾人

都合千百人拾人

寛永十二年四月三日

一 七月五日、龍門司街道在加治木相直し候事、

一 同廿二日、大河平治部少輔隆商五拾三才ニ而病死、

寛永十三年丙子

一 十一月三日、中納言様御病氣二付為御立願鑄流馬有之、拾

式騎也、

寛永十四年丁丑

一 七月八日夜星月に入、

一 此年肥前嶋原城主松倉長門守勝家領分之百姓一揆兵を起し、後原城に楯籠る、是鬼利支丹之門徒なり、太樹尊君、群国之諸將を遣しこれを治罰せしむ、時に 慈眼公病床に在す、故に加勢の軍を遣し諸侯を相ケテ是を伐ツ、翌年二月廿八日、城陥る、

一 十一月三日、豊後御目付衆江御飛脚を以御届有之、出水之内獅子嶋江御老中山田民部少輔殿人数召列被遣置、到来次第御加勢之筈候、大口地頭新納加賀人数召列、十一月十五日より獅子嶋江渡海、十二月八日大口に帰宅 大口書留 二有之

曳付写

一 高六拾六石者

愛甲次右衛門殿

右者黄門様御当病二付、霧嶋之御鉢二一夜一期為御生替参籠仕候、為御褒美本高三拾四石に合而百石之都合可有支配者也、

寛永十四年閏三月十七日 民部少輔印

下野守印

弾正大弼印

吉利下総守殿忠能

仁礼右近将監殿頼安

寛永十五年戊寅

一 黄門様御病氣、光久様御在江戸二付、肥前嶋原江為御加勢人数老萬千式百六拾八人程被遣候、

右之内三千七百七人 大将 嶋津下野守久元

三千六百九拾式人 大将 北郷佐渡守久加

三千六百九人 大将 嶋津豊後守久賀

式百式拾五人 鹿兒嶋衆夫丸兵糧渡衆十五人

入来院石見守重国 新納加賀守忠清

山田民部少輔有榮 三原左衛門尉重庸

市来佐渡守

右四人ハ同前談合役ニテ嶋原江被参候、

一 正月十一日大口衆嶋原江渡海、地頭新納加賀守、

一同十三日阿久根衆嶋原江渡海、同三月帰陣、

一 庄内山之口地頭伊集院備後為名代二男伊集院休右衛門、

山之口人数召列、出水米津迄出陣候得とも嶋原落城故直

二帰陣、

一 黄門様御病氣二付、於江戸正月十三日阿部豊後守忠秋を以、光久様江御看病御暇、且又肥前有馬之一揆可撃之旨被仰渡、即日江戸御発足、大坂より御船二月十四日肥前

嶋原江御着、攻口御請取可被成旨被仰達候得共、松平伊豆守殿より被仰候、中納言様御病氣大切之由候間、早々御帰国可被成由ニ而攻口御渡無之候ニ付、有馬御立ニて同十六日夜鹿兒嶋江御着、同廿三日 黃門様御薨去 依之再不能軍ニ有馬、

一 黃門様御他界ニ付、御葬礼役者ニ而候、長野殿、酒匂殿 早々帰宅之様ニ二月廿五日重庸・久国・久元より嶋原江被申遣候書状、北郷佐渡守殿、渋谷石見守殿と有之、其時酒匂新左衛門与為申由候、

一 三月十日黃門様御葬礼、福昌寺ニて有之、慈眼院殿花山琴月大居士、

一 家光公使能勢小十郎弔之、給御香奠白銀五百枚、

一 家久公御遺言ニて三幅対御掛物 後鳥羽院宸筆及左近衛中將 通真左兵衛尉藤原秀能筆

及宝刀二柄 正宗 貞宗

瀬戸肩衝三品獻將軍、

一 正月十日曙重高等諸軍士鹿兒府出立、十四日天草久田間ニ到着構陣屋居之、人数三千余人を以山々狩左候而上津浦番手肥後衆在番之番所ニ相替為番手仲春廿七日訃音到上津浦、重高等皆悲涙、

一 松平主税助、伊東大和守家老衆、於富岡城下天草・上津

浦・志岐・大矢野・巢元五嶋之老若男女宗旨改有之、重高等兩人会之、

三月三日早天より終日改之、翌日濟、兩人帰上津浦、

一 二月廿八日辰之刻、諸將原城を責落す、新納忠清從兵大口郷士久留木・狩野・寺師内記・高城七郎左衛門・谷口三左衛門戰死、小者小金不離側、致力戰死、其外手負多し、

一 同日日高十兵衛正盛、先陣ニ進ミ働之処、於塀際致合戰、敵之石打に当り三間程之石垣より下に打落す、有馬久右衛門純澄書家に有り、

一 正月六日国分衆中八拾五人嶋原江發す、披官之儀者分限を以列越候様被仰渡候、

一 同十五日九時分国分衆中八拾五人出水迄到着、

一 同廿日嶋原落城之飛脚夜半に出水に着、

一 三月十三日松平伊豆守・戸田左門、上津浦番手陣所為御巡見御渡海、上使以下知重高等狩山求殘党隱居者 狩沖小嶋兩嶋とあり

一 同十五日重高等發三角瀬戸、京泊江着船、十六日終夜越八重山路、十七日辰刻鹿江着、当日、公御上洛として御立ニ付、即刻登城、披露開陣之事、

一六月廿日曉、霧鳴神大火烟靡西天十里程、灰降草木如霜
寸苗美無枇水底虫皆死、

一五月十三日午刻御登城、御目見、土井大炊頭、酒井讚岐
守御前江伺候、御太刀披露、松平出雲守御太刀国行馬代
銀千枚、巻物五十端献上、上意云大隅守不慮相果、未至年
老、惜被思食由也、且又中納言事、頼母敷被思召候処、
不幸にし短命不及是非、薩摩守若年二者候得共、如前代
三ヶ国并琉球国守護職無相違被宛行候旨於御前御直之上
意あり、

一三月十七日巳刻、光久公鹿兒府御發駕、四月廿四日江戸
江御着、廿七日御老中阿部豊後守忠秋為上使御屋敷江御
出二而被旁之、

一五月八日依台命、公御老中土井大炊頭利勝第二御出、御
老中阿部豊後守忠秋、酒井讚岐守忠勝、列座、利勝伝台
命、父家久公之遺領全賜之、宜承知之、公謝御恩之辱、
一同十三日午刻、公御登城、御礼御太刀一腰国行御馬代銀千
枚、巻物五拾端賜フ、御懇之上意有之、家臣等九人を被
召出、

御前御見舞、
大隅守弟
家老嶋津又八郎忠平
一御太刀馬代ツ、

同 嶋津彈正大弼久慶
同 嶋津下野守久元

同 鎌田出雲守政統

同 伊勢兵部少輔貞昌

一御太刀銀馬代
用人頼娃長左衛門久政

一御惟子五ツ内単物二ツツ、
新納右衛門佐久詮

喜入休右衛門久守

相良李助長信

一正月廿七日、大河平休兵衛鉄炮二而鈴羊一丸射候而兎玉
筑後殿進上仕候処、為御褒美青銅式百疋被下候事、

一是枝喜右衛門嶋原之城二而塀を越賊徒式人打捕候、

寛永十六年己卯

一今年將軍家より伊勢貞昌江年俸俵五百俵ツ、毎年頂戴、

一初商諸外城 御巡見南方より肝付表初郡答院・菱刈・大口

・真幸此両境目江御滞留有之、霧嶋山御越、花林寺江御

參籠一夜二て御帰城、

一琉球八重山二異国之大船參候而色々狼藉仕之聞得有之、

一渋谷四郎左衛門、喜入吉兵衛兩人被差越候、附衆鹿兒嶋よ

り五人、外城国分より拾人、頼娃より拾五人、谷山より

式人、指宿より式人、阿久根拾五人、都合四拾九人下嶋、

一 当年札改相濟、去ル亥年より五ヶ年也、是札改之初也、

一 六月廿七日高山之内内之浦外城ニ立衆中三拾六人、地頭

原田豊後 寛永廿年迄、

一 天下以御下知諸所没、新闢改、曳利支丹宗木札面々押焼印

遣、賤男女出家ニ至皆着腰為往来証拠、不審成者者搦取及

宗躰沙汰、改宗之者赦、不改者者誅之、

一 八月十日江戸御城御焼失ニ付大引物御献上被成候、御作

事奉行松平伊豆守殿御付衆伊丹播磨守殿、曾根源左衛門

殿也、

一 此年南林寺僧南の山を開き能学寺を建つ、在于荒田邑、

一 十月、光久様御国廻被遊候、祁答院菱刈より真幸院吉田

江被遊御越山、吉田之地頭第子丸播磨殿所江被遊御滞留

候、御家老山田民部少輔殿被成御供候、然時御使衆原田

狩野殿御取次を以大河平久兵衛嫡子亀千代初而 御目見

仕名越主膳と賜ふ、

寛永十七年庚辰

一 三月廿二日於薩州祁答院永野砂金三五兩を堀出候、内山

與右衛門与申者也、宮城之地水中砂金相流れ候故、宮城

領主嶋津凶書久通人を遣し見せられ候処、五里程遡候而

長野山中穴焼口ニ而石菖蒲之根ニ金余多有之候、光久公

より御言上金山奉行北郷佐渡守下向、

一 七月廿五日、御老中阿部對馬守重次より御家老伊勢貞昌

を被召伝 台命、右之地面堀候而金之有無可試旨被仰

渡、依之長野金山堀方相初、

一 正月廿九日、公御発駕、二月朔日串木野鮎川相狩あり、

六日曉、京泊口御出舟、御舟五十艘於輶上使江御行逢御

仮屋を被構、御参会、御入国之為御祝御鷹之羈御拝領之

上使也、

一 文月十一日未刻、田町御買屋敷出火、焼失、隣家半町焼、

一 夷則十八日相良喜平次兄弟、芝之御屋敷江御預ニ成、求

磨之相良老岐守殿家中二ツニ成、家老相良清兵衛忝国政

とて其子内蔵可逢毒害、清兵衛事、奥州江遠流、兄弟為

牢人、遂出家、隱遁、

一 八月十八日 十五日トモ 琉球八重山嶋江異国船漂着、大明人十

四人、南蛮人六拾八人乗之、帆柱梶等相損候、呂宋 或云切支

丹 タカサゴ 東寧 國都を台 灣と云、に差越、依逆風漂来すといふ、嶋人偽

而陸卸候而小屋之内ニ押籠置候処、悉致餓死、蛮人三人、

明人式人存命ニ而罷居候を相捕候、而那覇江相送候付、薩

州江差送候、琉球在番は肥後長左衛門也、光久公より長

崎江御差送候長崎御奉行馬場三郎右衛門利重より江戸江

言上、將軍家より八重山人御褒美として右船中積荷悉被下之、

一十月十九日、先是南蛮船来琉球、依之八重山嶋為番手喜入吉兵衛、渋谷四郎左衛門江大將被仰付、多人數揃兵船、今日出船、為天下横目大浜久太郎九州江被差下、

寛永十八年辛巳

一四月三日御家老伊勢兵部少輔貞昌、江戸ニ而卒去、上使阿部豊後守忠秋を以御香奠御給、嫡家伊勢兵部貞衡御旗本拝謝之、

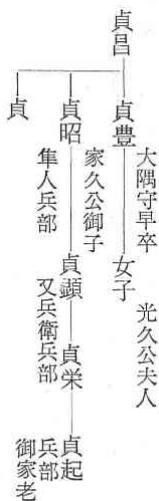
一御鷹之鷹、又者御時服白銀等拝領仕候儀、諸大名同前、一西丸御能見物被仰付候節、御老中奉書を以被召諸大名と

同前也、且御膳頂戴、

一馱宿紫幕御免、

一貞昌拜台顔、其嗣子貞昭家督仕候而御目見、夫より代々先例にて致家督候得者、御目見、

一八月廿八日、長野金山ニ而堀得候砂金九百八十九両余御献上、



古 記(上)

一二月廿二日若年寄太田備中守資宗より貞昌を被召、伝

台命、御当家御系図可有献上旨、被仰渡、諸大名同前也依之嶋津久慶、嶋津図書久通・川上因幡守久国・喜入撰津守忠政・野村大学助元綱江、被仰付、御系図編集方有之、

一日州伊東榎の川内板屋之川内と云所ニ山口事起る、

一八月初より田地虫入、

一十一月、光久公吉利下総守忠張江御成之節、重物入唐雪舟五百羅漢之屏風為御引手物献上有之、

一諏訪神主佐藤権太夫信年、神主職を宇宿若狭守久広に次渡す、

宇宿对馬

佐藤将監信定

元和四迄相勤、其内
逼塞

元和四より寛永十八年迄
父子神主

佐藤権太夫信年

宇宿若狭守久広

郡元一条宮神主祖

寛永十八権太夫より次渡す

佐藤権太夫信年

佐藤大和

延宝二再任神主

権太夫賀ニ而本名本
田氏也、
権太夫より神主職次渡改佐藤氏

本田空頭 寛陽公御代本
田
名字ニ罷成候

佐藤将監信定

諏訪神主職を嫡子権太夫信年ニ相譲り其身者郡元
江罷移、親類源四郎ニ職式仕付佐藤信種と改候、

三五五

養子
將監信種 源四郎 養子
右衛門

信種子者無器量故、社人宮崎
内前猶子ニ罷成、号右衛門、

一 正月廿二日申刻 於江戸 光久公入来院重高旅館江御光
駕、御茶会也 四帖半之
小座と有之

一同廿九日、江戸長崎町桶町より出火、日本橋南より小田
川町迄九十七町、町屋數千九百卅四、燒死者貳百五拾六
人、盜賊六十人被擄取、諸大名屋しき百二拾、同心屋數
六拾軒燒失、光久公増上寺惣門御番二付、直ニ被遊御駈
付、被堅御寺、御家老物頭寺中走廻り、消方有之、御寺
無恙、依之御褒美之御内書御給有、

一 五月中旬上使御下向、切支丹宗御糺也、於山門太守公、
両上使江御参会有之、

一 八月十五日新城様於新城御卒去、七拾九才、法名湖月淨
珊庵主、義久公御妾二而 永祿六、六月十六日生母
種子島左近太夫時堯女也、 嶋津守
右衛門尉彰久御室也、

一 八月十五夜、光久公嶋津霜台江為御月見御光入、賦詩詠
歌、甌酒悉舞樂、

一 八月十二日朝、家光將軍御男子様御出生、十三日目に鹿
兒府江為御知之御書從肥後到来、

一 十二月中旬、太守公種子嶋江御渡海拾日御滞在、諸所御
遊山、山野江御狩有之、根占大燒山佐多御崎御狩、二日
三日猪鹿數百を獲給ふ、

一 二月二日、本藩中の勸進を許され、奉加の力をもて、昌
山九品院般若寺を再興す、在桑原
郡吉松、
寛永十九年壬午

一 当春御用之御系図編輯成就、三月五日川上久国江戸持參、
太田備中守資宗属献上、

大樹親命林道春編輯諸侯系譜而令大成之名曰寛永系図
今藏在于宦庫、

一 七月廿日御老中松平信綱より御家老新納右衛門佐久詮を
被召、伝 台命、肥前天草嶋原依一乱、土地致荒蕪候故、
隣国之民被召移候間、薩州より六拾家部両所江可移旨被
仰渡、三拾家部、男女百五拾五人、馬四拾九疋を天草ニ
被移、三拾家部男女百四拾四人、馬百疋を島原ニ被移、
一 三月七日焼向嶋神火、
一 同月九日上町焼 諏訪系図ニ寛永十九年三月
上井采女類火ニ逢とあり、
一 正月十四日永野金山御拝領、
一 七月十一日甌嶋之漁人、異国人磯に相隠居候を見当、人
數を相催候而相捕候処、六人ハ南蛮人、三人者日本人之由

申候、金耄貫七拾目、銀六百三拾六匁致所持居候得共、
訳不相知候二付、鹿兒嶋江申上、光久公より長崎奉行馬
場利重二被仰越、九人共二長崎江被差送、八月十三日上
使池田帶刀御出、甌嶋之者共御褒美二而所持之品々都而
被下之、

一 九月廿三日夜、上町行屋二火起、至泉屋町焼失、

一 今年江戸御城二三之丸御普請二付、材木御進上可被成旨
被仰渡、翌年五月廿三日桧材木御献上、

但此節被仰渡候御書付之内、先年者松角式千本御進上
被成候付、此度者其半分当二御進上可被成旨相見得候、

一 正月廿九日、公御発駕、三月七日御出京二而江戸江御着、

翌日上使松平伊豆守御出、四月朔日御登城、御目見、

一 三月十八日、堀内之折田勘解由所より出火、北郷佐渡守

・三原左衛門・市来八左衛門・中西長門守・新納勘解由

・税所佐渡守・大寺喜左衛門・鎌田掃部助等士やしき式拾

ヶ所、上井采女毛類火、町屋敷四町、^{イ三}至琉球蔵留、

一 初冬上使水野藤右衛門下向、御鷹齋御拝領、

一 十二月^{十三日} 鹿兒嶋諸士与分十組定之、一番組頭者嶋津

安芸久雄、新納四郎久辰、二番組頭嶋津市正忠弘、佐多

又四郎久孝、三番組頭桂又十郎忠心、吉利下総忠張、四

番組頭嶋津左近久守、栴山又九郎久尚、五番組頭町田出
羽忠尚、種子嶋左近忠時、六番組頭伊集院源助久立、嶋
津美作久基、七番組頭伊集院右衛門久国、川上上野運久、
八番組頭補寝七郎重永、川上将監久将、九番組頭鎌田又
七郎政由、入来院伯耆重高、十番組頭伊勢兵部貞昭、嶋
津中務久茂なり、

寛永二十年未

一 春有 台命、御大老より長野金山堀方御停止被仰渡候、

一 四月、鹿兒嶋堀之上的場にて東郷長左衛門重尚二寸四方
的二中、

一 五月、公江戸御立大坂より御船六月十六日京泊江御着船

十八日晚御着城、

一 九月十五日、十六日、十七日、三日打続御犬追物、

一 同十八日為御遊山、郡山浦鹿倉一日御狩、廿一日清敷江

御光儀、入来院重高仮や江十日御滞在、八重山御狩御仕

合宜敷御機嫌能、

一 九月廿五日、鹿兒嶋近隣如雞卵霰降、

一 十月朔日、厚地御狩、翌日酉刻御帰城、

一 十一月、上使水野藤右衛門下向、御鷹初齋御拝領、御一

門并諸士御太刀目錄進上奉賀御下向、其夜上使御出船、

福山江御着也、

一寛永年中鹿屋外城ニ立地頭鮫嶋五郎左衛門宗能 寛永十八年二月廿一日

死、但此以前者嶋津相模守私領也、

一此年大飢饉ニ而殍死滿路、米価壹石銀七八十兩いたす也

正保元年甲申寛永廿一年十二月十六日改元、

一江戸西之丸御作事ニ付御材木色々式千五拾本御献上可被成旨、阿部豊後守様迄被仰上候、

正保二年乙酉

一嶋津大和久章、依罪科河辺山之寺江 号保 寺領被仰付、

数年蟄居候処、遠嶋可被仰付段被仰出、十二月十日新納

二右衛門久親山之寺江被差越、右之趣被仰渡、久章山之

寺より谷山迄被差越、明日鹿兒嶋江被差越筈候処、於堂

尾久章家人三次と申者脇差を以久親江切付候故、久親可

相捕と存候得共、疵痛候而難成候付、直ニ差殺候、依之

久章、谷山清泉寺江被引入候、 久親者同月廿四日 二死年四十才也、 依之物

頭三原伝内左衛門を清泉寺江被差越、久章誅伐被仰付

候、三原氏は築山江相隠居人を以久章を呼出、客殿に被

出候処を弓ニ而射被申候処、股ニ中候而庭に被飛出候処

を二の矢ニて被射留候、久章年三拾一才也、

一今年国画図御献上被仰渡、画図調方惣主取嶋津弾正久慶

江被仰付、其下を肥後長左衛門、高崎惣右衛門等江被仰

付、画図下書出来候而、当五月廿四日、長左衛門江戸江

持参仕、七月四日御奉行井上筑後守様江画図持参仕候

処、御覽被成御意ニ相叶候間、清書可仕旨仰ニて島津大

馬頭様・伊東出雲守様・秋月長門守様・有馬左衛門佐様

御領之儀者其家々之家老衆江可申談之由、長左衛門江被

仰聞候付、芝御屋敷ニ而日州画図清書之趣御申達、其以

後清書相濟候而、四家領之画図も此方より御取揃被成御

献上候、

正保三年丙戌

一四月七日於江戸芝邸御老中并諸大名及旗本之大小名等御

招ニ而犬追物張行、左候而將軍家被備御上覽度、御願被

仰上、 射手拾 式騎

一士拾番組被召立置候得共、此節六番迄ニ被仰付候、

正保四年丁亥

一正月廿八日江戸江御参府、二月九日細島御出船上井采女

兼延等御供、犬追物射手三拾六騎、其外都合五拾騎、

関船八拾艘 但去年犬追物御張行ニ 付毎日稽古有之候事 二月廿六日大坂江御着

船、伏見江九日御休息、三月五日伏見御立、御道中十三

日にて、同十七日江戸江御着、

十一月十三日江戸王子原犬追物

將軍家御上覽、御棧敷江御父子共被召御脇指貞御拝領
宝刀一腰綱御献上、久原様より綱久公御事宗御酒樽三
荷、杉重二組、鯉魚五尾御献上、

一 六月廿四日、南蛮暮婁止鵜○渡来、肥前長崎其徒鬼利支
丹宗之類也、故有司使衆追々其徒歸去矣、大將軍慮其再来
威民命西州諸侯、衛其津泊、於是光久公奉 台命、嶋津豊
前久守・佐多又四郎久孝衛加世田片浦、久守・久孝率帖佐
・加世田・阿多・田布施兵數百、自七月至八月鎮焉、至
西南風無○帰矣、其外三州之津泊各如此、

一 七月上旬、長崎江南蛮船式艘漂着二付、九州大名長崎江
御出船、薩州より為大将、入来院重国七月十四日鹿兒嶋
御立、同十六日京泊津出船之筈候処、船頭云七月十六日
老船念仏と申て致踊、沖之船頭神江致参詣、依之昔より
出船不致日也、若致出船候得者、此湊ニ再不入由申伝云
々、重国云出陣に趣候上者、先にて打死と究る上者不被
苦、早船を出せとて出船也、左候両長崎江御着候、南蛮
船の長さ四拾八尋あり、日本の大船を其側に寄せ、矢倉
の上に立候得者、漸く賊船之台に相届候由也、鉄の綱を
二重に蓋ひ大石火矢を一方二六拾挺ツ、両方江百二拾挺

古 記(上)

構江居候由也、陸には不登昼夜、石火矢の玉を作居候由

也、其後天下の御下知にて右船中見分有之候処、船中に
島も有之、井も有之、また船中の諸物悉く見せ候、其内
に口の封候蓋數多あり、塩燔壺と所沙汰也、何とて日本
江参候哉之由御尋也、返事に日本江通用させ可被下と
也、日本江通用者禁制なれば再ひ参間敷由被仰付候、南
蛮人云先年彼国之船式艘参候、悉く焼沈候、此節之船者
彼国之軍船に作候船ニ而有間陀と云ふ船也、自由二者成
ましくと云々、七月下旬に帰蛮す、重国は首尾好相濟、八
月帰国、於阿久ね蔵津病氣起り、同十八日於蔵津卒去す、
一 正保四六月十四日、南蛮コハノ国主より日本に交易のこ
とハリの為、使者大船二艘、長崎の湊に來、此時黒田筑
前守忠元当番也、九州諸將者共に長崎港、両山間に橋船
を掛、邪蘇徒成故可討果謀計して可乗取也、可帰之、依
台命彼船八月六日出帆、長崎無事帰船、
慶安二年己丑

一 敷根筑前殿江嶋津号并久之字拝領ニ而島津筑前久頼と
云、
一 六月廿一日、光久公高岡之惣廟八船大明神御再興、
承応二年癸巳

三五九

一 庄内山之口麓桜の馬場今前田 田地竿入、東郷肥前・汾陽次郎右衛門、

一家綱將軍御代替二付、中山王尚質使者北谷按司、去年薩

州江上着之処、病氣ニ有之、罷上儀難計二付、替之使者

琉球国江被仰付候、光久公ハ四月十七日鹿府発駕にて被

遊御參勤候、然処北谷按司為替国頭按司薩州江上着ニ

付、鹿兒嶋被召上、伊集院源助久朝江琉球方差引被仰

付、九月廿日江戸江參着、同廿八日 公被召列、御登城

御目見済、

一 承応二巳年当所諸士不限貴賤以奉加松隱軒建立、安置于

善吉和尚牌殿及東郷肥前守重位牌号能学寺 重位法諱能学
俊芸庵主と

一 右能学寺江為仏餉料肥前守重方私領之内高廿石之納米毎

年寄附有之、

一 承応三年甲午

一 二月十七日大口地頭新納加賀守忠清大口ニ而死去、六拾

才、家来牧山清兵衛・金丸宇右衛門・并大口郷士丸田元

心・山下慶右衛門殉死、

一 十二月、加賀守忠清嫡孫新納次郎右衛門忠暁・大口地頭

被下候、

一 今年 綱久公御鷹之雲雀御拝領二付、光久公より御礼使

被差上御奉書御給被成候、

一 五月八日大口地頭新納忠清嫡子刑部太輔忠秀於琉球国死

去、三拾四才、大口郷士田代清右衛門并下人源兵衛殉死

家奴とあり、且又家来西田龜右衛門事忠秀渡海之節勘当申付置

候処病死之左右承候而是又致殉死候、

明曆二年丙申

一 六月廿六日御願之上御領内長野金山御給、国中之人夫二

而堀方御免有、依之大金出候付、本親之金不之様相成候

云々、八月十五日嶋津又六久峯御下様御遺領薩州佐志三

千石従光久公拝領、

明曆三年丁酉

一 二月二日、中将様鹿兒嶋御立於日州江戸御屋しき御焼失

二付、御參勤被召延候、御奉書御到来二付夫より御帰館

一 六月廿日夜毛降下、同廿一日大雨洪水、

一 庄内山之口田地御支配竿入、山之口三ヶ村惣高三千六石

三斗式升七合三勺九才、

一 日州高原御支配田地御竿入噯郡見廻ニ被仰付相勤候、

一 七月諏訪御祭礼、当年より別火所頭立に立、此以前ハ頭

取屋しきニ造る、

一 九月十六日、薩州出水之内長嶋外城ニ被召建、移地頭仁

礼左近景頼、同日串良之内高隈外城二建つ、地頭仁礼民部左衛門、

一綱久公江御鷹雲雀御拝領二付、

光久公より御礼使被差上御奉書御給候、

一正月十九日桜田御屋敷御類焼、

萬治元年戊戌明曆四年七月廿八日改元

一二月山之口桜馬場地頭屋敷衆中屋敷田地に相成竿入候、

竿入奉行新納茂左衛門、日州御竿例奉行汾陽次郎左衛門、

一四月二日於江戸虎寿丸様御元服、又三郎延久と奉称、光

久公御加冠、又八郎久薰理髮、

一六月十一日、光久公御前様於江戸芝邸御逝去、於鹿児島

福昌寺江御葬送、曹源院恵山永泉大姉

御位牌月香院江御安置後恵燈院江被

召移候、伊勢貞豊息女也、御年四拾三才

一今年以御免御領内諸所金堀方御試有之、串木野芹ヶ野山

に金有之、堀方有之候処、其後年々之く相成候付、天和

三年堀方人数鹿籠江被召移候、

一今年光久公入来院重頼私領入来院江御光越重頼家臣東郷

内膳重増府下土に被召出候、且又山口五郎右衛門広重

事、師内藤善左衛門学画有器量、此者茂同しく擢て、為

府下士、

寛文二年壬寅四月

一当春大口地頭新納弥兵衛新田大川に井手をせき大田里村

畠方十三原下り深溝を堀水をせき入候也、

寛文五年乙巳

一隅州大根占城本村御新田成就、惣奉行菱刈孫兵衛溝奉

行、伊東う右衛門、古後七郎右衛門、

一寛陽公御高四萬石御差分二而 綱久公江被進候、被召仕

候者御扶持方等都而此内二而御宛飼也、二之丸御附之御

用人堀四郎左衛門興延江御勝手方受込被仰付候、今年三

月廿八日、光久公御教訓状十三ヶ条を綱久公江被進、

一二月九日稲葉正則を以 綱久公江御暇御給、廿五日江戸

御立、嶋津久茂御供、八月十日御着、

一此年本庄と高岡田尻村境論有之、別而六ヶ敷入組相成候

処、田尻村功才伊賀之介と申者此所境無相違候、不及異

論候逆於境致切腹御当領二相成候、其地面老町程も可有

之候、子共二永作に被仰付、其子孫過分二相成、致配当

作職仕候、

寛文五年己巳四月十九日境寛寿仙上座伊賀介

一十月十七日高岡惣廟八社大明神御再興二而御銀四百八拾

六両御寄附被仰付候、

寛文八年戊申

一 正月野村助左衛門寺社座中取被仰付、此職之初也、

寛文九年己酉

一 八月十一日大風、福昌寺山之太松五本惣倒、木三百本余

西嶺崩落、埋開山塔、

寛文十年庚戌

一 三月十六日御兵具方足輕鳥居七郎兵衛事、御小姓与被召

成、寛陽院様定御供被仰付、溝辺之内弓馬地被下置、弓

法指南可仕旨被仰付候、右七郎兵衛事、江戸居住、横井

助七郎門弟罷成、稽古方致出精、弓法不殘致伝授候、御

取訳を以右通被仰付候事、

寛文十二年壬子

一 九月十六日於鹿兒嶋塩屋屋籠を捕候節、物頭長谷場七郎

右衛門足輕山内七右衛門、関田次郎右衛門戦死、

延宝二年甲寅

一 四月十六日夜福昌寺回祿持峯退去于門前間也、

一 十二月廿一日日州伊東出雲守様御領内肥小川内境つきの

川内板屋之川内論山江戸江御訴訟申上候旨届有之、

延宝三年乙卯

一 三月九日島津帶刀久元江御高五百石拝領、是御官位御昇

進之時勤仕之功有之、且又少身二而每年御奉公相勤候付
而也、

一 八月庄内山之口衆中古川次郎兵衛、鬼山越筋白水ヶ野辺

二 二差越候処、未明に通道に出候得者馬盗人相見得、

馬三疋式人二而牽越候付、追掛候得者馬を捨、高城飛地

狩倉谷下りに逃行、不追付右馬山之口二牽越、御披露申

上候得者、馬ハ入札弘二被仰付候、右盗人ハ隅州末吉衆

中笹原弥右衛門、高城町之治兵衛、抽木崎市兵衛、清武

之陰之原治右衛門と申者二候て弥右衛門今年高岡二而擲

取、此四人之内治右衛門ハ清武二而誅伐、殘三人御成敗

以後馬盜無之、

一 九月十七日菊三郎様於二之丸御誕生、

御母ハ江田五兵衛国重女

証院葬寿国寺、其後御前様
御離別以後御前様二御立、

一 十一月廿一日、日向那河郡北川内之諸県郡梶山論山小川

内埋逆二被仰渡、壹萬七千百九拾貳間里ニシテ七里卅四町

卅貳間之山論也、

一 延宝三年 光久公御代福昌寺齋堂御造営、萬治之例二準

候、此時者為御名代嶋津壹岐殿才為被持由候付、日帳之内

福昌寺大庫裡葺茅下候ハ、為御名代今日權之丞殿

彼壹岐守也、

寛文四年於田布施生○宝曆六年正月晦日於本府武村別業逝去 号信

吉野之内帯迫に御登被成候、大重仲之丞供いたし候、備
三本道具対挾箱茶弁当沓籠、左候而茅一把帯迫より福昌
寺門迄被負候、彼方より東堂并福昌寺惣大工老人御門迄
出合、茅請取候、権兵衛殿内被為入御料理參候供衆不殘
客殿ニ而つくね食被下候、右同時福昌寺江重一組引茶ナ
ツめゞ老ツ権兵衛殿より被遣候、此年者光久公江戸御參
勤御留主ニ而候、

延宝四年丙辰

一外城土鹿兒嶋ニて筆者役人申付間數旨被仰渡候、
一此年伊勢国松平和泉守様より六拾六ヶ国大田寺法花妙典
老部ツ、被成御寄進候節、右老部鹿兒嶋江到来候付、日
向之大田寺者高岡之大田寺ニ而候間、御奉納有之候、
一都城安永村之内荒河内ニ馬次所を被建宿場初る、
一六月十日知覽佐多内記殿一所ニ被召成候、

延宝六年午

一四月四日夜九ツ半時分より下納屋町より火起り下町中不
殘焼失、同五日期五ツ前に鎮火、焼屋敷四百廿ヶ所、相
殘屋敷十五ヶ所、焼家敷二千式百三十一、土屋敷十五ヶ
所焼候、職家敷老ヶ所、下町中江為御心附真米千俵被下
候事、

一荒田能学寺破壊ニ付、此手御当地諸士不論貴賤并諸外城
人数示現流に志之人以奉加出銀四貫二百三拾目余有之、
此内式貫七百四拾目余者寺家再興并萬入目に払、殘銀老
貫四百八拾目余有之、

延宝七年己未

一十一月廿一日南林寺弓場ニ薩州様朝五ツ過御光儀、諸士
弓御上覽、

延宝八年庚申

一四月十八日御使役之事、御用人御役と改名被仰付候、
六月六日

一今度如例年春山初御狩近方外城并当所衆中東郷不殘加例
御関狩ニ昨日より今朝に至り皆々罷登候、殿様ハ今年ハ
御登無之、為御名代佐多内記殿被成御登候、

一申之下刻に田尻八兵衛殿江火事出来、此間より相続清
天、殊更今日ハ西風大ニ吹候時起候故、火本之家半分程
焼候砌、早風下之椀山殿・有馬殿・武井殿・益満殿江火
相付と見得候に、其風下方之火飛越、家々に火之子を吹
付、一町方之火本と成、未広焼立候付、諸人取物茂取あ
へず、四壁を破り漸逃延候、焼死候人も有之、或ハ身を
やき候人幾人と云事を不知、申之下刻より戌の上刻迄一
時に焼候、前代未聞之火事也、西ハ田尻氏火元、北ハ大

手之口堀をかきり、東ハ客屋、六日町、新築出海をかきり、南ハ天神之宮より樋之口、南林寺門前脇寺、屋久嶋藏海を限り、

一 焼失屋敷八百四拾九ヶ所

内 老ヶ所御客屋、老ヶ所天神宮地、老ヶ所屋久嶋藏、三

百四十五ヶ所土屋敷、拾老ヶ所南林寺脇寺地、九十老

ヶ所南林寺門前地、御中間并細工人屋敷

一 右同家数三千三百八軒

内 式拾三客屋、拾式天神宮并門前拾二、屋久嶋藏式千五

十九、土方三十六、南林寺脇寺百七拾二、南林寺門前

式拾七、御中間并細工人方九百二拾三丁町

一 焼死人五拾四人

内 男三人 女五人 下人廿二人 土方 下女七人 土方

町人拾人 内 男五人 女五人

七人 但焼損ニテ男女不相分死躰迄有之、外ニ町人九人行 衛不相知、内七人ハ比死躰ニ而候半与為申事也

外ニ町江焼残候家五ツ屋敷ハ四ヶ所土蔵ハ四拾残候由、

一 横山慶左衛門殿祖母当年九拾二才ニ而候処、此火事に相

果被申候、依之今晚送り可申与仕候得共寺江者可申とて

脇寺江葬送、道具有之候を取替にて今夜九ツ時南林寺江

送り為被申由候、

一 今夜江戸江飛脚を以火事之御左右有之、

一 十三日朝 公儀より粥を御調候而町人上下江被下候、

一 十五日江戸江火事之御左右ニ野村藤左衛門為御使被差

登、

一 火事ニ付屋久嶋江早船を以被仰遣候処、平木式百七拾万

丁、同十六日ニ積登候、

一 真米六拾石佐多内記殿江御給、

一 同五百石火事ニ逢候諸土家内 老人ニ付老斗ツ、酉十二月

限に拝借被仰付候、

一 同三百石下町人江被下、

一 同三拾三石南林寺門前江被下、

一 同式石九斗四升社人江被下、一同七拾石御酒屋式人江

借、

一 同三拾石下町年行司拝借、一同六石上問屋式人拝借、

一 同六斗余宗躰手伝江被下、

米千八石余 内 六百拾老石七斗 拝借 三百九拾六石余 被下切

外ニ米千石下町江拝借、百五拾石南林寺

門前江拝借

一 火事ニ付仕登米ハ被召留候、

一 火事ニ付諸人江材木繩竹はしこ迄、公儀より御買せ被成

候、竹木本木代被成御免、伐下し夫飯米迄二て直成相付
下直にし候て諸人江申受二被下候、

一二月十一日火事之儀二付湘良源五左衛門江戸江御使二被
罷登候、

延宝八

一四月八日丁卯晴天 綱貴公御上洛御首途同十四日 御発

駕御供 御番之頭只
今当番頭也、御老中町田勘解由、桂太郎兵衛、

御使衆

吟味衆

鎌田後藤兵衛

野村才右衛門

高崎四郎兵衛

原田主膳

御納戸役

上同

四元神七

伊勢縫殿

御兵具奉行

種子嶋主水

折田八右衛門

騎馬御供十六人 物奉行 東郷喜兵衛 御厩別当 二階堂源太

夫 小荷駄衆五人 御小姓衆十五人 同老
外城衆中 御医師五

人 御右筆三人 同老
大殿様御方 御評定所 筆者三人 同老
詰越

御步行衆四拾四人 内九人外城
衆中 御鷹師式人 餌さし老

衆 国分 奥御小姓衆五人 護摩所国分金剛寺 日記衆式人

古 記(上)

内老人 御書院役人老 御茶道七人 御旅物奉行付衆五

外城衆 表御小姓式人 内老人 御包丁人三人 御料理

小番衆五人 御行器衆四人 御馬責三人 本ノマ 馬医老

人 表茶道六人 御書院筆者老 御納戸筆者三人 御

鉄炮方老 但大阪 御振廻方筆者式人 内老人 御厩筆者

老 御兵具所筆者老 絵師老 磨師老 金細工

老 小細工老 表具師式人 御鞘師老 勘解由殿

与力衆四人 後藤兵衛殿与力衆四人 但外城 御兵具所肝

煎衆式人 御厩肝煎衆老 御納戸肝煎衆式人 御兵具

衆百三拾式人 御小者衆式拾六人 内廿人御納戸方二人御
酒屋方四人御書院方

小者下知衆四人 使足輕衆六人 御駕籠者十七人 御挾

箱持十五人 御笠物式人人足

一 同十六日朝 公京泊御出船

一 四月八日 光久公江戸御立

一 同十三日 穎娃開聞神前二而怪事有之、大乘院にて一七

日神前二て御祈祷有之、

一 將軍家綱公御病氣御大切二被遊御座、御世繼無御座候

故、御舍弟館林宰相右馬頭様御養子二五月六日二被仰

出、同七日御城江被為居候由大坂江相開得、光久公大坂
江御滞在二付、当月四日江戸より中急之御使二而罷下

三六五

候、中原四郎兵衛、同十二日に大坂江看いたし候処、大將軍家御病氣御大切御養子等之御使ニ四郎兵衛、大坂より早御使ニ而罷下、同廿一日下着、綱貴公江ハ五月八日、道中宮ニ而參上仕候由、家綱公五月八日に薨去之風聞有之、

一 御老中嶋津甲斐殿御奏者番野村左衛門此兩人今度御供ニて罷下候処、江戸物音ニ付、大坂江被召留置候、

一 綱貴公御供之内小荷駄衆稅所甚右衛門道中赤坂より御使被仰付、五月廿二日ニ下着、

一 公方様御養子ニ御舍弟館林様ニ被仰渡候、今月七日御城江被為入候、御使として田尻角之丞早御使ニ而今月八日江戸出立、同十一日白須賀ニ而 綱貴公江參上、同廿一日御船中もつれニて 光久公江參上、同廿六日下着、

一 公方様御他界之儀江戸より御国江者不申采候得共、近国方々肥後杯ハ五日以前より殺生禁断ニ而棚を閉候由相聞得候付、御国之儀茂近国同前、五月廿八日より殺生禁断被仰渡候、普請惣山其外海獵商売も見せ棚を閉、細戸明置、内ニ而商売密々ニ仕候而可然中被仰渡候、尤市立并海上獵船明日より不出様在々浦々江被仰渡候、

一同廿四日、光久公御船中ニ而今日肥前唐津之桶嶋江御乘

船、同廿九日平戸江御着船、六月四日七里釜江御着船、五日出水脇本江御着船、六月廿七日、中将様御着城、

覺

一 御子様方を始、諸士之衣類常々日野袖之外着用堅可為停止、或他国之御使者、或使者見廻等之砌者絹布着用無之候而不叶儀候間、内々可有其覺悟、急々於爰元不相調不叶節者御藏より申請ニ可被仰付候条可被得其意、但小身之衆茂可為同断事、

一 女性方之衣類右同断、但御姫様并御子様方之奥方ハ羽二重迄ハ着用可然候、帷子之儀越後布晒地之外令禁止之、尤夏冬共ニ縫金糸入かのご物堅可為停止事、

一 家中之女衣類内外共ニ下着迄木綿之外堅令禁止候、但御姫様并御子様方之奥方乙名職ハ下着計日野袖令免許候事、

一 諸士供之人数定別紙ニ有之候間、可被得其意候、縦大身たりとも中間草り取太小指儀令禁止事、

一 諸奥方供之女房衆乙名職之外式人未衆壹人士四人今度相定候事、

一 右同立笠対挑灯令禁止候事、

一 元服婚禮嫡子誕生之外振廻令禁止候、但振廻者ニ汁五菜

相定之、尤酒宴之間敷儀堅可為停止、付役者召寄候儀今程可有遠慮事、

一 右祝儀之外互ニ酒肴之進物堅令禁止候事、

一 御姫様并御子様之奥方を始御城方之女房衆江進物右同斷之事、

一 諸奥方江客人之節振廻堅令禁止候、且又引手物同斷之事、

一 不依大身小身、正月之祝物親子兄弟之外從前々禁止二候、弥以可相守其旨、就中女性方之礼儀者十五日より内

二 仕廻候様二可有覺悟事、

一 諸士家中之衆當時御奉公可相拘程可被拘置候、下女之儀猶以可成程可有減少、内々奉公をも不勤、徒成者共ハ養置自分御奉公之障ニ罷成衆も有之由不可然候、向後右躰之者或自堪忍、或親類付ニ可被差遣候事、

一 江戸京大坂琉球、其外旅江差越候衆江餞別并帰国之節土産物從前々令禁止候処、此比猥ニ有之由不届二候、自今以後堅可為停止、尤斷之子細ニ而土産并錢遣候人有之候共曾而致受用間敷事、

右条々連々雖被 仰渡儀候、今度御当地大火事ニ付而諸士令困窮候儀笑止候、畢竟御領国之衰微ニ罷成儀、向後別而御氣遣ニ被思召上、猶以簡略可申付旨御向殿様被仰

出候付、太抵相定置候間、堅固ニ可被相守、就中小身之面々右之趣を以可成程令少略身上相続候儀可為專要候、大形之族於有之者、横自密々致見分申出候趣申付置候間、聊緩疎有間敷者也、

延宝八年申五月廿一日

諸士供之人數定

一 高老万石以上供士十五人以下

一 同五千石より老万石迄之間供士拾人以下

一 同千石より五千石迄之間供士八人以下

一 同五百石より千石迄之間供士五人以下

一 同五百石以下供士三人以下

一 家老衆供士拾人以下

一 用人衆供士六人以下

一 奏者番衆供士四人以下

延宝八年申五月廿一日

覺

一 当所若き衆此比無作法ニ有之旨風聞有之候、此儀每度稠敷被届置候処に、右之仕合畢畢竟親兄弟共緩故ニ候、急度及御穿儀候ハ、親兄弟迄茂其科可難逃候、此比之無作法与頭衆不被為聞儀者有之間敷候処ニ、其儘ニ而被差置儀不可然候、近日被遊御帰国儀ニ候処ニ右之通若き衆之無作

法被及聞召、御糺於有之ハ与頭衆緩之様ニ可被 思召上儀候間、御心得可入事ニ候、此段我々共より与頭衆江御知せ可申入旨御家老衆御内意被仰渡候間、如此御座候、以上

申五月廿一日

一 諸士之衣類弥鹿相可仕旨被仰渡候、専木綿着物可致着用、若御奉公方ニ付はれたちたる時分、日野紬之類、有合候而着用仕儀者令免許候事、

一 女性方之衣類右同断、尤染等之儀成程鹿相可相調、勿論縫金糸入か之こ物堅可為停止事、

一 元服嫁取取置取之祝儀、振廻此中仕来候様子よりも弥輕可相調、勿論右之外常之振廻可為停止事、

一 右祝儀之刻、親類中より酒肴遣候儀成程輕く可相調、此外常之進物互ニ取替候儀令停止候、附從鹿兒嶋御奉公ニ付差越候衆江振廻并不依何色令禁止候事、

一 女性方正月之祝儀進物親子兄弟之外、前々より御法度被仰付置候、弥以可相守其旨、尤年頭早速仕廻、弁々无之様可致覚悟事、

一 衆中之家来并下人当時高相応し御奉公相調候程之人數可拘置候、下女之儀者猶以可有減少徒成者を養置、自分奉公障ニ成候儀不可然候、向後右躰之者或自堪忍、或親類

付ニ可遣事、

江戸京大坂其外旅江被行候衆江錢別、帰国之節土産物弥以可為停止、縱如何様之所ニ而土産物并錢遣候人有之候共、曾而致受用間敷事、

一 放祭行之儀、連々御禁止之旨弥可相守之候付、山之神講其外講之類ニ費無之様可仕事右条々連々被仰渡候御条目ニ候得共、当春鹿兒嶋大火事ニ付、諸士令困窮候、畢竟御領国中之衰微罷成儀別而笑止被思召上、弥以令省略旨、御兩殿様被仰出候ニ付、鹿兒嶋中御子様方御奥表并御一門方之御衆を始急度被仰渡候、就中少身之面々并外城衆中之儀猶以令省略、さき 御奉公相続候様可致覚悟旨、上意候、誠以難有御讓候間、心之及致省略候儀可為肝要、若緩之族於有之ハ横目密々見届申出候様申付置候間、得其意聊緩疎有間敷者也、

延宝八年申五月廿一日

一 公方様五月八日御他界候、御左右御使として鳥井七郎兵衛久留千左衛門同九日江戸を立下之関にて承候得ハ彼所御通船之由承、千左衛門ハ御跡を奉慕船にて参候、七郎兵衛者小倉より御当地江罷下候得共 光久公御着城無之候故則御舟江参上可仕とて陸地如西目参上仕候、六月廿八日比、

一 伊東出雲守様御領内戸之浦ニ異国人八反帆程之船二人數

拾七人乘漂着候ニ付彼国より長崎江御引合有之、右者共陸地如長崎可被遣田御承候て船者長崎之様乘廻し可有之由右ニ付伊東殿より陸地如長崎被遣候付御当国之端通道候付人馬無滞様被仰付度以飛脚御引合有之候、右ニ付通道之儀先年島原高力左近殿御改易之時伊東出雲守殿在番ニ被指越候節御通之道筋可被遣由ニて御步行衆高田茂太夫、伊地知與右衛門、老岐弥四郎、萩原半三郎、松沢八右衛門、白石藤在衛門六人江御道具衆六人被召付、右之手当として泊之在所ニ一ヶ所二人ツ、都城之内寺柱・加久藤・大口江被遣候、

一六月二日異国人伊東殿より志布志八郎ヶ野江入来候異国人才領七拾人程有之由也、同日御道具衆四人志布志・都城・加久藤・大口江被遣候味増式斗程茂被遣候由也、同五日異国人之儀ニ付長崎江福山与左衛門御使ニ被差越候、今日異国人高原之内高崎江一宿、先日御当地より被差越候衆、殿役奉行国分次郎右衛門代官松山久太夫・横目衆高田茂太夫・伊地知与右衛門・御道具衆式人、此衆高原ニて出合、伊東殿より之宰領之衆江引合被下候、彼方より申通馳走為被申由候、

一大口筋不通ニ而如求磨通為被申由候、

一異国人四人皆駕籠に乗、高原ニ而之宿四ツ一宿二十八人、

古 記(上)

一宿ニ廿四人、一宿ニ廿三人、一宿ニ廿一人之由也、

一右異国人十七人之内十三人ハ死、四人長崎江被遣候、何国之者とも不相知、言葉茂文早茂不通食事、船に有之候ハ粟ひへなり、椰子多く船ニ有之、右之者共陸ニ上候より長崎江參候、通すから右椰子式ツツ、腰ニ下ケ食物ハつくねめしニツツ、右椰子ニ入居候而竹之へらニて突割被下候而水を吞申之由候、右者共ハ頭ハ山伏のこたく何れもやせ男耳のさかりをはかし候て為居由候、犬を煮食候事悦甚賤しき者共ニて道有之由候、長崎ニて通事横山与三兵衛世界之絵図を見せ候而国をしらしむ、依之ハタンと云所之者としれ候、ハタンハ日本より海上千余り有之、唐大兎之南ニ有之、嶋ニて如何ニ茂暖国之由也、阿蘭陀船より帰国為被仰付由也、

一関狩之事当年ハ、殿様御登無之、為御名代佐多内記殿御登被成候、

一二月九日 中将様上使土井能登守様にて御国元御暇御給、

一六月廿七日七ツ時 御着城、

一閏八月六日朝五ツ時より風雨甚敷益強成立、四ツ時より

七ツ時迄大風別而盛、寺社及大破三拾年来寛無之由古老の衆被申候云々、

三六九

古記

自天和元年
至宝永四年
中

延宝九年歟

一同廿九日御用人喜入次郎兵衛御取次ニ而日州高原江被仰渡候者、高原之内高崎割候而外城ニ被仰付筋被仰渡候、一薩州東郷ハ島津弾正殿私領ニ而候処、今年島津丹波忠興被差上候而外城ニ相成候、居付之家来共直ニ東郷衆中ニ被仰付候、十二月十三日新納武左衛門江東郷地頭被仰付候、
元和元年辛酉十月朔日改元、九月廿九日とも、
一当春高原割外城ニ而高崎被召建候ニ付、外城支配被仰付候所ニ紙屋之儀外城御引取ニ而野尻ニ被召付、此時地頭

山田民部殿、高崎ハ村尾源左衛門ニ地頭被仰付候、小林ハ黒葛原吉左衛門殿ニ而候事、

一三月廿六日 中将様庄内江御光越、小谷城山之口之内下り谷場貫と云処ニ而御狩、御供御老中島津市正、山奉行有馬嘉右衛門、田尻江御越、御狩惣人数朝より晚迄鉄炮打候数不相知、猪鹿二百余丸取得候、鹿兒島より串目下知、松元覚右衛門、鬼塚孫右衛門被遣候旨、桂奎之介別府式部左衛門を以噯方江被仰渡候、

一高原割外城者、五月十七日惣檢者菱刈孫兵衛・野村太左衛門・付衆鎌田市兵衛、蒲牟田後川内村林下ニ相付、小林之内広村ニ用夫二十人相添高原ニ附、野尻より衆中七人同所之内水流村ニ用夫九十三人相添高原ニ附、高原之内前田村、大牟田村、繩瀬村三ヶ村ニ而高崎一外城に相立候、高原、高崎境引、山奉行林休兵衛、高原、高崎曖小林より行司横目立会、高原衆中屋敷百三拾九ヶ所、高崎九十三ヶ所ニ而候、此時高崎地頭村尾源左衛門吟味役天和二年壬戌

一八月四日被仰渡候者、田地方差引之儀被仰渡候、依之郡座代官座被相付候間、左様可被相心得候、尤座之儀ハ右之通被仰付候間、諸事郡座ニ而調申、其上祿占八郎右衛門被

承儀者郡奉行直ニ可被申達候、為其郡座之儀者惣郡座之
ならび被仰付候間、郡奉行より時々取次に被申出儀
者惣郡座帳ニ可被相留置候由被仰渡候、以上取次鎌田太
郎右衛門、大山権左衛門、

天和三年癸亥

一今年鹿箆郷得金、受台命、移芹ヶ野之衆穿之、鹿箆士有
川平右衛門入道夢宅と云者初而金を見出したるといふ、
一九月廿三日御與所より御触

米壺升式合殿役米

右者例年百姓より別各ニ上納仕候得共、当年之儀ハ本米
同前に上納申候付候、依之給地之儀ハ当代成之外右員數
致取納、出米同前ニ出物蔵江上納仕、蔵敷綱所江可被差
出之、尤皆濟之儀ハ出米一紙目錄ニ可出之間、可被得貴
意候、此旨各小與中江可被申渡候、以上、

一十一月三日御稻荷御祭流鏑馬射手衆町田殿、平田殿也、
御稻荷江御代參例年大乘院ニ而候ニ当年ハ大乘院病氣
故、安養院江御代參被仰渡、例之通ニ組より供之衆被仰
渡、一組より六人ツ、廿六人若キ衆被出、例之通ニ大乘
院江集り被居候に、安養院者宝持院より被出候ニ付、供
壺人も不被仕、依之無念之由にて三拾六人方々近所之寺

領被仰付、今月廿六日ニ被召直候事、

一十一月十二日去三日御稻荷御祭、御代參之供に加へ候衆
今日横山大蔵・但馬仲左衛門・西角太夫・木場七右衛門
此四人伊集院梅岳寺江寺領被仰付、今日差越候也、

一十一月廿一日ニ御丸立直ル、島津中務殿・島津伊賀殿
屋敷、島津帶刀殿本屋敷迄ニ御丸に成候ニ付地引有之
候事、

一十一月廿六日去ル十二日之寺領衆いづれも今日被召直候
事、

一同廿八日乙未曇天睽氣西風、今日之天いかなる事ニ而有
之候哉、蝕の時のことく日天いかにも赤く候てまハゆく
もなし、珍敷の色と諸人沙汰申なり、

一十二月十七日ニ御丸御作事今日より有之、

延宝八年なるへし

一同廿五日先年火事逢時諸人并家内人數ニ掛壺人に米壺斗
ツ、公儀より拝借ニ被仰付、酉之十二月返上ニ拝借ニ
被仰付候処、御断、いづれも并て被申上、当亥十二月返
上被指延候、又此節被下切ニ御訴被申上候ニ付、人數に
加り候得者相中より之使可仕と申され、今朝御当番之御
老中宅に出、又御城江出候事、被下儀ハ御成不被成、子
之十二月限に返上可仕との御返事有之候事、

貞享元年子 二月廿二日改元御当地ニ而ハ四月朔日改元之

由被仰渡候、

一諸外城高帳之儀家督計ニ而候得共、当年より嫡子二男三男末子迄諸衆中老人茂不殘書載候様被仰渡候、

二月五日七ツ過荒田八幡辺より薩州様御乗船、加治木江御通船ニて御參勤、

一正月二日ニ之御丸立直ル、大工凡四百余人、

一同四日辰之刻、霰降、大サもクロウのことく杵ニ而量候得共老奴五分有之、

一十四日春山初御狩有之、御名代島津美作殿・御老中島津帶刀殿、御狩奉行ハ島津又五郎殿・島津老岐殿、與力之士余多有之、

一右初狩に御城本諸與之諸士惣躰前々ハ登り申候、然に四年前之申正月十二日ニ御初狩有之、其日鹿兒嶋下方大火事有之候、夫より以來惣様登り不申、與分ケにて六與有之候を二ツに分ケ三組ツ、御登せ被成候、当年ハ老番組二番組五番組此三組之人數登り候事、

一正月廿四日ニ之御丸御宮造終ル、

一二月五日 殿様東目被遊御上洛候、御供之御家老島津中務殿・島津甲斐殿・御用人相良主税殿・鎌田後藤兵衛也

一三月七日仰渡有之候者当正月之砌若キ衆列立当所中方々

致徘徊候、其内襄を致着候人有之、及僉議襄着候人ハ先比申出候、右之外ニ茂見苦敷致支度人有之由其聞得候

間、與中之支度ニ為相替人有之候者急度相改、某与可被申出候、若其身より不申出、脇より相知候者親迄茂曲事可申付候、

但小與頭宅岩元弥右衛門也、

三月廿八日御触有之候ハ、当二月廿一日より年号貞享改元有之候得共、爰元儀ハ四月朔日より被改之条其旨可承旨被仰渡候、

四月十九日乙卯大雨天東風寅刻地震有之、夜前今日に至り大雨故甲突川申刻に出大洪水有之、柿本寺門前家之内水上ル、柿本寺馬場野間殿屋敷より水出、加治屋町高麗橋ニ落行、水所々小路洗入丈ケ不立所多々有、西田橋江參、樺山殿・五代殿辻帯に掛候、鷹師馬場ハ首丈ケ有、式本松馬場にかゝる床ひきゝ家ハ水上り多く有之、近年珍敷洪水ニ而候事、

一同日南林寺門前質屋に夜前盗人入候を一人捕へ候、余にも盗人余多右質屋之内ニ居候由ニて蔵之口ニ番相付、翌日蔵之内見候得共人老人茂不居候事、

一四月廿五日此節之新御作事向後御下屋敷と可申上旨被仰出候条、右通唱可申由御触有之、

一五月六日南林寺大門口御本門前大松木今日風も不吹に地より四五尺上より落木有之、

一同十五日吉野御馬追有之、取駒四十九疋也、

一同廿三日江戸より御使有之、殿様今月十二日二江戸被遊御発駕、道中八拾四日之御賦之由也、

一六月五日雷天柿本寺馬場藤崎殿、野間殿境榎木有るに落候、怪我なし、

一六月廿二日 殿様御下国、御船中去ル十九日二松島江御乗船為被遊由御左右有之、

一同十四日 殿様昨日平島江御着之由御左右有之、

一六月廿七日 殿様昨日向田江御着、今日向田御立、市来湊江御泊之由御左右有之、

一同日御与所より御触有之候八年之比五拾計成者を薙につつミ江月川に流候、何方之者共又ハ何かし為仕共不相知

候、為存者又ハ為仕者可有之候条、急度可申出候、若脇より相知候ハ、可及沙汰候条可致其心得候由也、

一六月廿八日 殿様今日市来湊御立、苗代川御泊、

一同廿九日 殿様今日巳上刻苗代川御発駕被遊候由申来、

右二付町奉行平田清右衛門殿西田町迄御迎に参上有之二付、町座より横山慶左衛門差越候也、

一未之刻に 御着城、御供之御老中島津図書殿、島津主殿殿、御用人衆大山三郎右衛門殿、比志島彦左衛門殿、御奏者番村尾源左衛門殿ニ而候事、

一七月朔日当年頭殿川上殿、鎌田殿之由也、

一同十日 御着城御礼今日諸士登城御太刀上ル、御出座無之何茂御日記ニ而上ル也、

一七月晦日今月十二日之夜矢野清右衛門下人喜之助を新橋辺ニ而切付、当人不相知、又去年九月長命七郎右衛門下

人吉左衛門を大龍寺門外にて切殺候、当五月上原八郎左衛門下人清右衛門を於冷水打果候、相手且又先比江月川

江流置候死人之儀於于今相知す、法外之働言語同断ニ候、右躰之儀経年月候ニ而も密々御礼明被遊候間、於露

頭ハ親子兄弟迄曲事ニ可被仰付候条、早々可申出候、為仕者於無之ハ差出可仕由御触有之、

一八月八日二之御丸辻番所佐多殿御屋敷内ニ有之候、いか様の事ニ而有之候哉解ケ申候事、

一同十二日荒田村先庄屋木場為右衛門、此節谷山衆中ニ被召成候、家内拾六人荒田村百姓札相除、谷山江弘付候

事、

一同十八日長門国より上下六拾人程之使者今日当着之由にて夜前夜中より廿四ヶ名之用夫追立ニ罷出、脇元之上白かね之坂より吉野道路作り被仰付候、右御使者之儀ハ長門国迄初入部被成候ニ付而今度御下向御中途より御祝儀之為御使者、中将尊公よりハ高橋左門殿、薩州尊公よりハ福屋助左衛門殿長門江御使者ニ被為越候、其御返礼之御使者之由也、長門御使者之名ハ志次太郎左衛門と云也、

一同十九日長門より之御使者今日登城ニ而西目筋帰国也、

一同廿日中村先庄屋松元六右衛門谷山衆中被召成候通御証文被遣候ニ付、中村帳面相除候事、

一 九月六日江戸御姫様御下向、今日伊集院より御当地江被遊御着候事、御供之御用人衆ハ五代少左衛門殿ニ而候事、

一同廿九日下伊敷村庄屋佐竹平内、先祖ハ伊集院衆中ニ而有之候、此節改ニ先祖之儀申立御赦免被仰付、伊集院衆中ニ被召成候故、下伊敷村除申候、加治木平内と名乗ル、此家内拾人除候事、

一 十一月三日稻荷御祭礼首尾能相濟、流鏑馬射手黒葛原殿

と野村殿之由也、

一 十二月十九日 公儀より之仰出ニ而ハ無之候、与頭より之仰渡ニて有之由候而小与頭所江触方之人躰呼寄被仰渡候ハ此中より若キ衆、或四五人、或六七人、拾人其上も一所ツ、に集居、嫁取執婚之所へ状手紙之類を遣し餅酒を乞被申儀有之由、

大若衆額角入之時分、二歳之衆多人數相催右角入之大若衆分限之人躰ニ而候得共、其大若衆壹人を相手に又小身之大若衆ニ而候得者忒三人四五人ツツ相手に仕、二才衆余多より輕キ料理を振廻被申、其後大若衆方江振廻之返報を乞、大若衆方より二汁三菜之料理を調初振廻被申候、二才衆を招受候処に其人數計ニ而も無之、脇より寄本客拾人有之候へハ寄手拾忒三人又ハ廿人卅人程にて押寄振舞に逢被申ニ付、大若衆方親親類より其心得を以客人拾人と申候得者卅四十人程之調を仕候由、

一 振舞に逢被申二才衆律儀ニも無之、汁食を喰散、或碗・打敷・皿・茶碗を損し、或脇々之食をはい取、つかミ合、相撲胴打なと被仕候由、

右躰之儀無作法之支度共被仕候ニ付、後日ニ御僉儀被仰付、養着之四人之衆ハ其身より被申出、此中父子共に逼

塞之躰ニテ被罷居候、右藁着之衆と列立被申候四拾余人

之若キ衆茂何某と可被申出之由三月七日、四月八日二組

々御僉議有之候得共、不相知候故ニテ七八月之比迄茂禰

敷御僉議被仰付、九十月之比藁着之列四拾余人之衆いつ

れ茂為被申出之由候、右四拾余人多人数之儀ニ候得者い

か様成曲事を被仰付儀ニテ候半与待居候処、霜月中旬

比ニ被仰出候ハ近名之内、田上村川直し右之人数ニ被仰

付候条、藁着之衆四人ハ藁を着仕候而親々召列被罷出、

自身堀調可被申由也、間数賦之儀者藁着之四人衆江ハ横

九尺程、長卅二三間程ツ、之由候、列之人躰四拾余人ハ

十四五間所に依十六七間之賦に川筋いかにもすぐ候繩張

有之、十二月朔日より取付同月末に成就也、

一五月廿七日天晴、

一巳之中刻表并御庭江被遊御出篠崎覺左衛門

一御上下四具 一御帷子 野村勘兵衛

一右同 一右同 藤井休阿弥

一御帷子壹ツ 一御帯一筋 帖佐自徳

一右同 一右同 伊勢全智

一右同 一右同 中野大喜

一御帷子壹ツ

右之通拝領仕也

六月四日 天陰

勘兵衛

一巳之中刻表江 御出竹内伝兵衛參上、御物説被遊候、

一今年御改曆有り、曆号貞字曆と云、日本ニ而始之事也、

貞享二年乙丑

一二月廿七日伊集院遠江久照事、田地方御用被仰付候ニ付

今日御高三百石拝領、

一正月廿一日 中将様御首途二月十三日 御発駕、

一三月廿三日伊東領佐野と言所に居候者共八家内八重と云

所に居候者共拾四家内合男女七拾七人御家を奉頼庄内山

之口逢路飛松江參候馬十三疋鉄炮廿五挺、弓式張持參

候、則鹿府江言上、地頭最上右近即御当番御老中種子嶋

藏人殿江被申出候、新納右衛門殿御相談候て欠落者共及

飢仕合ニ而者如何不似様ニ御米被仰付、同廿七日地頭右

近夜通二山之口江差越相談人大寺弥兵衛、梶山在番肝付

志摩丞鉄肥之使者阿万武兵衛、安井安右衛門兩人より証

文出欠落者共罷帰候、

之人、異国往来自由之節大明江渡海、拾ヶ年余逗留、唐人大通事役、元泰師匠ハ黄檗獨立拾年薩摩ニ居候、元泰兄ハ深見休泰、

一十一月三日鎔流馬川上伊織、諏訪次郎左衛門兼秩

射様之次第、

あけ馬川上殿

兼秩―川上殿 矢始 兼秩―川上殿 川上殿 兼秩

兼秩―川上殿

但前々ハあけ馬之人より馬場習并矢始迄も有之候得共此節新納又左衛門殿以御下知如此候、

貞享三年丙寅

一日州佐土原城主島津飛驒守久英卒去、嫡子万吉幼少故久英從弟式部少輔久鏡番代相勤 延宝四年より元禄三年迄 候処、佐土原家老松木左門異心之念有之候儀を久鏡伺知之

光久公江被申上候、依之左門并二男三四郎三男長三郎父子三人被召捕、加世田江押籠被召置候、嫡子次郎兵衛三男長次郎と云士式人相従、佐土原家老樺山主馬久孝・宇宿伝左衛門・酒匂源左衛門高島ニ申付被差遣、

但毎年衣食被下近郷士交代番被仰付候、三人共々天年を以終ル、

一七月廿六日左門一揆松木三郎五郎・村上三太夫、三太夫子僧祖要・森清兵衛四人、男女三拾五人、三郎五郎宅江相集候而不臣相謀候ニ付、久鏡より田原長左衛門・宇宿六郎兵衛・森伊左衛門・富田六郎兵衛ニ討手被仰付候、四人人數召列、松木宅江差向候処、弓鉄炮ニ而相防候、田原長左衛門先登ニ相進候処、其組子和田早左衛門走進ミ田原か前に立候を、三郎五郎築山之上より鉄炮にて和田か胸を打抜き、長左衛門腹に中候、和田ハ忽相果候、長左衛門儀ハ五六歩走准候得共相倒れ候、宇宿茂矢に当候得共相忍致下知候、宇宿か部下中野九郎右衛門竹藪之内に走入、屏之楮柱之櫛を抜候故、外より屏を破候而乱入候、中野進て村上三太夫と相戦、三郎五郎、馳来候而中野か肩に斬付候、中野村上を捨候而三郎五郎を打果候、宇宿か部下立山弥兵衛長刀にて三太夫を切殺候、又其従士を切殺、中野ハ右疵にて翌日相果候、

一富田六郎兵衛ハ裏門江差向候、組下之森覚左衛門進而屏ニ近付候処、内より鑓にて森か股を屏越に突貫候故、いづれも進ミ兼候故、但馬守久雄之季弟島津半兵衛久遐屋敷ハ松木か裏門之馬場越ゆへ、島子勘右衛門・向井吉兵衛鉄炮を取候而久遐屋敷之屏に登り松木か屋敷を見下候

而三人を射倒候二付、いづれも進ミ寄り門脇之屏を破候而入候、賊相支候儀不相成大坪七右衛門致先登致戦死候、

以上男女四拾二人

但以後被誅候者迄都合五拾人

森清兵衛致奮戦、手疵を受候而家来五人召列、後之山江

一討手人数死人九人

引入候二付、宮田甚五左衛門追掛候而打果候、家来共ハ

和田早右衛門

田原長左衛門

中野九郎右衛門

氏神社江逃入候を皆々追掛候而都而打果候、祖要儀も手

厚地十郎右衛門

厚地茂右衛門

能勢源介

痛く相働手疵十一ヶ所受候而打果候、依之宅江火を掛清

大坪七右衛門

大坪正兵衛

池田弥兵衛

兵衛母并三太夫妻書院江入候而相果居候、兩人共に首無

以上

之切候而為相隠敷、左門妻有之、下女三人召列春成九郎

但厚地十郎右衛門儀ハ當時天正寺無住故寺番ニ而候

右衛門屋敷江迎入候而命を乞候二付、春成相捕ヘ島津久

処、今日致登城居変事相起候故走帰リ諸帳面ヲ妻

遇と致相談打果候、三太夫一男狂人二女長ハ十五才次ハ三才三

ヘ相渡其外之儀ハ口達ニ而相伝立出候二付、茶ヲ

人并下女五人高寺院江逃行候を追掛相捕、八人共に打果

一 同手負八人

進候得共立ながら吞終に打死、

候、

一 三郎五郎母儀は四年以前離縁ニて兄吉鹿半介家に右之候

宇宿六郎兵衛

前田甚平

山田勘之介

処、同廿八日致自殺相果候、

上井茂左衛門

松木佐一郎

恒吉源藏

一 賊死人三十五人

森 学左衛門

泊 弥右衛門

松木三郎五郎 村上三太夫 森清兵衛

一 松木か家来共矢崎に五家内有之、一家内ハ欠落、四家内

僧 祖要 清兵衛 三太夫妻 以上武人ハ書院ニ死ス

之男は主人と相共に死、女共ハ欠落、

三太夫一男 三太夫娘式人 下女五人

一同加勢ニ一家内男ハ主人と死、妻子八人相捕誅戮、

三郎五郎母 七十二人 書院之庭上死ス 七人 隠居候庭上死ス

一 三才ニ二家内都而欠落、老女一人相捕牢舎、

士老一人 百姓一人 以上兩人馬屋 二人 裏門脇に死ス

右之通ニ而平治也、

一 今日高岡士志賀四郎右衛門・入田安右衛門・入田閑右衛門・鮫島善助等此乱を聞て人数召列走続候得共相治候跡にて候、

志賀四郎右衛門子武兵衛親賢

一 好学習書兼道鎗術詣肥前長崎從陽氏習書又負笈至京

師受学松岡恕庵先生十一年矣、奉官命越東武学室鳩

巢三年矣、後召住府下賜祿為講官教授志賀登龍是

也、

一 閏三月晦日松木左門并二男三四郎三男長次郎に僕従式人相付高岡に送り、倉岡在番木上龍右衛門・丸尾太兵衛・

綾在番并高岡衆中三拾人相付加世田へ禁錮、

一 左門加世田江被遣候跡二而左門余党相殘叔父村松三太夫

企奸謀之由相聞得候二付、御用人相良主稅長清・村田為

左衛門経景・中神内藏之丞頼安七月廿二日鹿府出足、同

廿五日佐土原江參着、式部少輔殿家老樺山主馬久孝・宇

宿伝左衛門久連・浅山治右衛門高重出辺、三太夫を捕可

申と山口權太夫宅江參候様申遣候処、松木三郎五郎宅江

引籠申候、三郎五郎叔父森清兵衛同意二而引籠故、同廿

八日多人数差遣討取、彼者共宅に火掛候得共脇にハ掛不

申候、

一 右之首尾吉田六郎右衛門清兼を以江戸江御言上、七月廿八日鹿府打立、八月廿三日江戸江參着、御老中大久保加賀守様・阿部氏・戸田氏・牧野氏江被參事濟候由也、

一 正月九日綱貴公御首途同晦日御發駕、尾畔迄被遊御座候、

一 二月十二日尾畔御發駕、

一 六月廿九日 光久公御着城、

貞享四年丁卯

一 正月廿八日光久公御首途二月十日御發駕御供、島津中務

同伊賀、

一 今年 大玄公御老中方御見廻之節、神田橋之内松平美濃

守様江御見廻之時諸大名之駕籠迫り合御乗物難通候得共

漸ク御門迄昇寄候処、大名之供馬人積に恐れはね廻り御

乗物も今一足にて、破申程之込合二而無詮方相見得候時

御納戸奉行川上善太夫久寛馬の尾にひたとせり寄、尾筒

に打はまり候故、蹴飛茂不自由にて夫より口引茂引留候

故其間に御乗物首尾好昇通り候、善太夫働き諸家之者共

も致感心候由也、

久寛ハ当川上直之進親章先祖也、貞享四年八月二日

御納戸奉行被仰付、同年十一月十一日於江戸三十七

才二而病死、按此御供ハ 綱貴公今年八月七日御家

督之御礼之節之御見廻の時なるべし、

一 七月廿七日奉台命、嫡孫綱貴公江御家督被遊御讓候、光

久公七拾二才ニテ御隠居兼而之御訴也、

一 八月七日 綱貴公御登城御礼御刀青江恒次御帷子五拾四

銀千枚御献上、家臣九人先格之通御目見、

一 同廿五日 光久公御登城、御太刀馬代御刀貞宗、御脇指

来国 御献上、和歌朗詠集一部 世尊寺 伊房卿筆 綿百把御台所

へ御献上ニテ御礼、

一 十二月十四日光久公東武御発足御帰国、是より綱貴公と

御交代御参府、

一 同廿五日綱貴公從四位上左近衛少将ニ御叙任、

一 水戸黄門光国公依命為受書、写佐々助三郎薩州下着、時

之左史河野通古・伊地知重英於大乘院是に会す、

一 田布施砂垣見舞之面々可致格悟条々、

一 潟中節々行廻、或ころひ垣、或砂吹満之垣於有之者早速

暖方へ申出、ころひ垣ハ其最前外城江引合可致修補、吹

満垣并風当之場江垣不足候而砂満来候処ハ郡座江申出候

て重垣可申付候事、

一 松并雜竹木之類及心時節以可植付候、且又前々より之植

松入念可被見舞事、

一 潟中江狸に馬を繋間敷候、尤各作用之馬ハ格別ニ候条、

砂垣植松其外諸障ニ不成様ニ可致格護事、

一 春秋砂垣普請并植松申付候刻ハ各檢者江始終相付、或年

々風之強ク当候処、或植松能可盛長地面等兼而見合置無

遠慮可致相談事、

一 田畠江砂如何程宛吹入候哉、積いたし置、年々書付を以

郡座江可申出候事、

貞享五年辰三月五日御物座
田地方印 税字

元禄二年己巳

一 正月十六日日本高麗町上村正右衛門より火起向高麗町焼失

火飛候而新屋敷船手近所迄焼失、

一 二月花尾山丹後局御茶毗所六地藏御建立、御家老平田新

左衛門宗正大乘院現住覚慧承 公命、

一 五月十七日先月十六日吉野御馬追之節当所若キ衆数十人

面に墨をぬり異様之致支度罷登候人有之候、若キ衆行跡

不作法ニ無之様ニ与連々被仰出儀ニ候、且又角入前髮所

之願申出候節者親之親類より証拠人を相立書物を以申出

趣茂有之候処に其旨をも令違背、右之仕合言語之外ニ候

右躰之人与中相改何某と書記可被差出候、万一人より不申出被露及延引、脇より相知候ハ、当人ハ不及申、親共迄急度可為曲事候旨被仰渡候、

五月十九日伊勢衆中黒川伝左衛門殿と申人当八拾余歳之由也、若キ時分より額に角老ツはへ出候ニ付、常に頭巾をかつき為被居之由也、

一 右角何と被仕候哉、当二月之末に為落之由也、

一同日琉球国より今度水牛二疋進上被成山川より昨日御当地へ参、御厩に飼置被成候事、

一 水牛ハ水に入不罷居候へハ不成ものゝ由也、御厩之池に入被召置候、今日御厩へ参候而見申候事、

元禄三年庚午

一 桜田流与申鎗術当年より取はやし候事、

一 伊東半五兵衛事、河野弥太夫養母之方江忍入候を折々留被申候得共無承引、四月廿九日夜又忍入候ニ付、下人三おこし合打果候、外ニ逃候様ニ仕置候由、左候而右死躰を乗物に入弥太夫相付半五兵衛子息新助へ半五兵衛殿と存不申如此之仕合無是非由ニて盃取かわし為申由取沙汰也、

八月十四日壬申朝小雨巳刻より曇申之刻より巳之方之風

強く吹、

御城御門御普請去冬より御取付、当夏中相調候得共御門御通初無之、今日御門并橋御通初有之候事、橋通初者上町瀬戸山休右衛門江被仰付候、休右衛門一門多人数相渡候由也、○御門御通初御名代ニ頼母殿被成候由右通初二付兵道方御祈祷并御門之上^四大乘院一七日程之御祈祷為有之由今朝五ツ前渡初為有之由なり、

元禄四年辛未

一 御当地ニハ佐多豊前殿所江のほり立被成、其外者時々立候事、

一 七月十五日夜於福昌寺伊東新助敵討あり、

一 十一月五日伊東新助事依科切腹被仰付、親半五兵衛高屋敷被召揚候、伊東才藏事依科遠嶋被仰付、高屋敷被召揚候旨被仰渡候、御取次高橋左門・平山次郎右衛門、

但兩人ともに家財ハ御構無之、

元禄五年壬申

一 当年高野山之僧六百余人依科諸国江被配流、薩隅両国江百五拾人被召置候、

一 新照院塩硝藏之儀煮拔塩硝藏与唱候様被仰付候、申二月五日、

一十月十一日吉松内小野寺相摸坊より申出候ハ先祖相摸坊於志布志飛滝権現天狗より授候三略之書 惟新様江進上仕置候ニ付官庫に蔵め有之候者右家に被下度地頭野村才右衛門跡名代比志島左京殿江相付申出候処、癩之通返し被下候事、

元禄六年癸酉

一藪田新右衛門実昌事五代之祖清左衛門実明貴久公江御奉公仕候一筋を以当年より御銀廿枚ツ、為御心附拝領被仰付候、是所帯不続有之候儀を内々被聞召上候故也、翌年迄被成下戌十一月より御切米八石ツ、至子孫被成下候、

一正月元日御社参御供先陣後陣川上本田被仰付候処、伊地知家本田家より可相勤候旨被仰渡候、然処に本田家より申出候者、氏久公より本田に被下候文書に分国之諸侍不可本田上と有之候得者伊地知与被仰付候者左を可相勤由申出候、秩父十郎兵衛より申上候ハ本田ハ秩父家郎従之筋目にて数百年来其筋を以被召仕候処に本田よりケ様之儀不申出、万事下手にて相勤候、誠に兼卒成事ニ而候得者先左右無分圖取にて可相勤旨被仰渡候ニ付如御差図秩父十郎兵衛勤之、

元禄七年甲戌

古 記(中)

一光久公御在国ニ而御病氣故閏五月廿五日、綱貴公より御老中大久保加賀守忠清江御越御参勤御断被仰上候、忠朝より御医師御申請御療治可被成且御病牀見届候為与被仰候故、御老中戸田山城守忠昌江御越右之御願被仰上候、翌日忠昌より達 台聴、即日橋隆庵法印奉台命江戸出立綱貴公より深栖政春、高田頼賢被召付、夜日急キニ而撰州難波より舟ニ而小倉江相渡、六月十九日鹿児島江到着、

一四月十八日 綱貴公御暇御給、六月朔日江戸御発駕、昼夜御急、六月十六日夜肥後八代川ニ而橋隆庵江御追付被遊、御先ニ御成、同十八日尾畔御仮屋江御着、

一橋隆庵御茶進上被申候処、御平癒被遊候故九月五日法眼鹿府出立ニて帰府、

一冬 光久公御病氣御再発ニて十一月廿九日御逝去、歳七十九、十二月十九日福昌寺江御葬送

| | | |
|----|-----|------|
| 導師 | 福昌寺 | 寿山和尚 |
| 奠茶 | 惠燈院 | 不改和尚 |
| 鎖龕 | 妙円寺 | 天隣和尚 |
| 起龕 | 興国寺 | 白英和尚 |
| 奠湯 | 皇徳寺 | 慈門和尚 |
| 奠茶 | 南林寺 | 愚海和尚 |

三八一

一 八月晦日立花隆庵老御振廻ニ而有之、
一 九月五日隆庵老出足為御礼白銀千枚脇々より銀子又ハ反
物色々被遣、

一 十一月三日鏑流馬上馬町田越右衛門・松崎休右衛門也、

一 中將様御立願方上馬黒葛原善助、比志島善八・伊東次郎
右衛門、めのと芦谷茂右衛門御名代、亀徳様御老中肝付
主殿御用人野村太左衛門、

一 十一月十八日遊行上人尊通浄光明寺江被入候事、

一 同廿八日雪降、二尺余積、

一 十二月十九日焼 寛陽公御葬礼

御棺守 先佐多豊前 御太刀 本田熊之助
跡島津権十郎 御香合 長野筑右衛門

御天蓋 猿渡新右衛門 (御茶碗御湯入同所衆中
御茶器 指宿衆中 御サジ 長野六右衛門
財部衆中 出水衆中

御華瓶 長野三郎兵衛 御燭台 長野仲右衛門

下炬松明 長野与右衛門 御茶湯提子 長野庄兵衛

御燈爐 木藤平右衛門 御幢 中村堅助

木藤長右衛門 中村勘右衛門
木藤庄右衛門 中村孫兵衛
木藤四郎兵衛 中村新助

御葬馬 右梶原主水 右梶原清兵衛
左梶原平右衛門 左梶原善右衛門

一 五月五日当年より武士方町茂皆のほりニ成候大車ハ稀々
にて候、

一 紀州高野山僧口事ニ付百五拾人程当春御国元江流罪ニて
皆中村二屋敷構ニて被召置、其後佐多之内辺塚江被召置
候、然処に坊主耆人薪取ニ参り行衛下相知故、鹿兒島よ
り役々被差越狩共有之候得共不相知、程経候而谷に落死
有之候を見出候事、

一 十月廿七日 太守様加世田田布施ニ御越候て加世田ニ親
孝行之百姓兄弟 御前に被召出御酒被下、其上錢三拾貫
文拝領被仰付候事、

一 二月十五日昼上方平野仁右衛門所出火、

一 七月七日瑞光院様御卒去ニ付今日より九日迄三日殺生禁
断普請鳴物遊山ケ間敷儀御停止有之、

一 五月十四日吉野其外諸牧御馬追有之候事、
一 閏五月十七日雨天辰巳風強吹、
一 六月十八日曇天時々小雨、光久公御病氣ニ付 綱貴公今
日朔日御手廻人数少々被召列御急ニ而御通路今日八ツ時
御着城御四配屋敷江御入、

光久公御樣躰為被聞召由候、

一同十九日雨天 光久公御病氣ニ付從天下御醫師橘隆庵と申人御下り之由なり、今日着之由なり、上下廿五人程ニ而下り之由也、

一 七月七日癸酉明今日虎之間御代々御旗并御鎧虫干御座候付、虎德樣即刻御差出被遊御覽候事、

一同八日喜入又兵衛殿寺領赦免被仰付候、

一同十二日 太守樣九ツ過御対面所江御出座、福昌寺・南林寺・淨光明寺初出家衆其外御礼有之、相濟即刻被遊御入候、

一同日太守樣今日島津虎安樣江被遊候、御成筈ニ候、依之八ツ過納殿口より御差出、御厩江一時御立寄、夫より虎安樣江被遊御入候、虎德樣御同道、

一 七月十五日辛巳晴 太守樣今朝福昌寺へ被遊御仏詣候事、

一同十八日甲申晴、於頭屋能有之、御名代島津權十郎殿、

四ツ過頭屋之広間へ御越也、御家老種子嶋藏人殿并川上上野殿・御用人野村左衛門・奏者番伊東刑部左衛門・黒葛原吉左衛門・物頭伊地知奎右衛門殿・高崎四郎右衛門殿・御納戸奉行相良市郎左衛門殿被相詰候、

一 能奉行新納主稅殿・神事奉行川上清三郎殿・頭奉行岸良内藏丞殿ニ而候、

一 御能四ツ過ニ始、八ツ前ニ御中入、七ツ過ニ御能相濟申候而御名代御帰也、

一 御能高砂頼改夕顔、舟弁慶、熊坂、鐘馗、狂言よろひ二千石、入間川、庭鳥聲、

一 右於広間最前ハ御茶泡盛并頭奉行より進上之、提重披露有之、御勝手ニ而銘々御菓子盆に入、上野殿迄出申候、左候而御中入以後別火所江何茂御越、右三人御同座候而二汁七菜之御料理出申候、

一 七月十九日今昼過小笠原遠江守樣御使者御城へ被罷上御対面所へ被通候、左候而三汁七菜之御料理被下候、相伴野村太左衛門殿・大久保見仲、後之御菓子出、廳而被罷帰候、

一同廿一日丁亥雨時々晴 太守樣今朝御四佗屋敷へ被遊御入候事、

一同廿八日甲午曇天、今日ハ諏訪御神事ニ付而朝四ツ前安養院江差越候、御宮配膳者伊集院寛左衛門・三原十郎兵衛・御名代方御給仕者平田吉兵衛、有川勘左衛門・本田伊左衛門・相良平四郎、

但御宮配膳者長上下其外ハ半上下也、

一 虎德様為御見物、四ツ過被遊御入候、御棧敷ハ御名代御座候、上之方江かこひ出来申候、御供ハ鎌田後藤兵衛殿・中西十郎左衛門殿・税所甚右衛門殿并御守衆奥御小姓衆ハ喜入善左衛門ニ赤塚清兵衛殿、少間有之、島津頼母殿御越二而候、御名代島津權十郎殿九ツ前ニ御越候、其節ハ虎德様御宮江被成御座候ニ付、暫安養院へ御扣候而虎德様御下参以後權十郎殿社参被成候、其時御盛塩上ル、覺左衛門相勤候、御刀ハ十郎兵衛持之候、追付御棧敷へ御出御菓子一度泡盛上り申候、

一 右過而御神事初り申候、其内又權十郎殿一度御社参也、

御宮配膳ハ不被參候、終而安養院座敷へ御出候、種子島藏人殿・川上上野殿最前より御越直ニ御同座ニて御料理被召上候、三篇目ニ三方之御盃安養院其外出家衆并佐藤大和守被召、其後御通被下候、人数野村吉左衛門殿・黒葛原吉左衛門殿・土岐藤左衛門殿并頭奉行川上清三郎殿被罷通候、

一 虎德様ハ御神事相濟、早速御帰御供人数如最前、但柏原宗節茂被相詰候、

一 虎德様御事御弁当參候而安養院ニ而者御料理不被召上

候、

一 今日御納戸奉行若松平八殿被參候、

一 八月朔日丙申晴天、太守様無御出座如何年兵庫殿より御進上之御馬御対面所御庭ニ而請取渡有之候、則右御馬兵庫殿へ御拝領ニ而候、

一同七日壬寅晴天 太守様今朝福昌寺へ被遊御仏詣候事、九ツ過御帰館、

一同十九日庚亥晴天 太守様福昌寺御參詣有之、

一同廿六日丙辰晴天 太守様、虎德様御同道ニ而喜入又兵衛殿へ今朝五ツ過御成、御能興行之由、是ハ虎德様御縁与之御祝儀之由也、

一 九月朔日天下之御医師橋隆庵来ル、五日如江戸帰国、

元禄八年乙亥

一 正月元日出仕之諸士皆長髪ニ而有之候事、

但寛公卒し玉ふか故也、

一同廿二日此中御忌中にていつれ茂長髪ニ而有之候処御忌明今日よりいつれ茂月代有之、

一同廿九日 綱貴公福昌寺へ御參詣、

一 正月十二日甲戌雨天諏訪・穎娃開闢・加久藤ニ之宮、右之柱又ハ神前之木唐猫より水出候由にて御祈念有之候、

一二月朔日正月八御忌にて今日を正月元日ニ御取持、

一二月朔日 綱貴公 御対面所へ御出座、御家老衆御太刀進上如例、

一同二日 綱貴公 御対面所江御出座、一所衆諸地頭御太刀進上、御座配御三献、御寄合諸士御目見、

一同三日夜御謡初有之、

一同四日大乘院門中并山伏如例登城但御出座なし、

一同五日福昌寺門中登城、御出座なし、

一同六日浄光明寺・不断光院・正建寺登城、

一同十一日御吉書初有之、

一同日御鑑之餅煮有之、

一同十六日西田町人大迫次郎右衛門所より出火、家十九軒焼失、

一同十七日 蘭室公御法会、今日より廿一日迄於福昌寺御執行有之、殺生禁断、

一三月三日未上刻御首途如例諏訪へ御参詣、直ニ安養院江御入、夫より御船にて築出、御茶屋江御入、夜に及島津凶書宅江御光駕御帰館、夜八時也、

一同六日 太守様御発駕戌上刻御供之御家老喜入又兵衛御用人野村太左衛門・猿渡喜右衛門苗代川御泊、

一同九日新納又左衛門久了御家老役御改濟、

一三月十三日夜上山城権現辺にて木上新右衛門・飯牟礼八右衛門喧嘩にて双方共に死去有之、

一同廿七日春山にて御関狩有之候事、

一匠作様吉貴公初而御国元江御暇五月廿七日阿部豊後守様

上使にて御給、六月十日江戸御立、七月十五日初而御入

国御供、御老中島津中務・御与頭入来院志摩・御用人市

来次郎左衛門・上井五郎左衛門・奏者番村尾源左衛門・

堀四郎左衛門・兵具奉行伊地知蔵之丞、同仮役中神七右

衛門也、御着城御礼使新納主税久品東目筋罷登候、

一八月十五日諸役人江御入部ニ付御祝御料理被下御能有、

一同廿五日 吉貴公加治木江御越、同廿五日福山御馬追に

御登候、霧島御参詣、九月朔日御帰り御供、御家老中島

津中務父子・島津助之丞父子・御用人市来次郎左衛門・

鎌田後藤兵衛、御馬追御供いづれも江戸賦、霧島御供、

御国賦騎馬九人、御先供六人之由也、

一十二月十八日 綱貴公従四位上左近衛中将に御叙任、

一寛陽院様御遺骨高野へ御登山、六月五日八ツ過福昌寺御

立、御老中島津縫殿・島津大蔵、御用人村田伊左衛門・

向井市之丞自分御供、若松宗休於高野御石塔奉行清水弥

兵衛三月七日護摩所時鐘損シ帖佐之願成就寺之鐘被成御借時鐘に用、然に不鳴由也、願成就寺にてハ能鳴、

一同九日島津図書殿江戸江御登り御姫御同道也、御姫ハ島津左京殿へ御縁与之筈ニ而登候也、

一同十四日先比若キ衆拾人程籠屋近ク立寄、見物申候儀如何様之儀ニて披露有之候哉、右曲事二付去ル五日より当所之寺領被仰付、今日いづれも被召直候事、

一同十六日夜前伊藤孫兵衛門内にて伊地知清左衛門殿弟次郎右衛門殿与申由候、兄清左衛門殿を切付、即浜江出自害為被仕由也、清左衛門殿茂疵深手故死去也、兄弟右躰之仕合珍敷事と伊藤孫兵衛殿内儀ハ清左衛門殿姉ニ而候由久々々病氣有之、夜起に被參候を次郎右衛門殿呼出右之仕合也、

一同廿三日護摩所長日花林寺より振廻御右筆衆・評定所筆者衆我々參候て夜入前帰ル、

一同四月三日雨天、新納又左衛門殿此中御病氣に被成御座候処、病氣重ク相成、今朝被成死去候事、

一同十日晴天、新納又左衛門殿葬礼、今夜九ツ時之由也、

一同九月十二日 吉貴尊公嶋津筑後殿江 御成、金山よりかむき之者被召寄候由也、同夜ハ火花有之候事、

一同十四日 吉貴尊公今日二階堂源太夫殿江御光儀也、

一同十八日 芝御前様御事御前様を御披露有之、御前様に御成被成候付、御一門方一所衆へ与頭衆より御祝儀之御使に渋谷次郎右衛門殿江戸江被罷登候事、

一同廿二日此中錢直成拾式匁ニ而候処に御国に錢不足仕候、殊余方拾三匁直成ニ而有之候二付、御国茂同前二十三匁ニ被仰付候事、

一同九月廿四日 吉貴公興国寺江被遊御仏詣、直二種子嶋蔵人殿江御光儀有之、

一同廿五日 吉貴公福ヶ迫諏訪江御參詣、直豊前殿江御成、

一同廿七日助之丞殿江御成、

一同廿九日 吉貴公浄光明寺江御參詣有之、

一同十月七日 吉貴公南林寺江御佛詣有之、

一同九日於御下屋敷御能有之、

一同十四日 吉貴公新納四郎左衛門宅江御成、上方之乗馬御覽有之、

一同十五日御本丸江御出座彦山改所坊之使僧御目見御料理被下候事、

一同日熊野之別当鈴木又左衛門御目見、

- 一同 日志和屋鏡學院江被遊 御光儀候事、
- 一同 十七日 吉貴公妙谷寺江御佛詣、
- 一同 十月十八日 上方之弓場被遊 上覽候、射手百余人有之、小的貫矢伊地知三左衛門殿子息被仕候而青銅百足賜之、
- 一同 廿日 花尾權現江御參詣、
- 一同 廿一日 吉貴公南方外城江御光越、六ツ時御立、
- 一同 廿六日 吉貴公南方外城被遊御覽、今晚御帰館、直二向之嶋江被遊 御光越候事、
- 一同 十一月十二日 吉貴公下弓場被遊 上覽候事、
- 一同 十八日 国分上小川村之内久満崎大明神と奉申候御神昨日神事御祭有之候、然処ニ夜前右社江出火有之、御殿拜殿御供所惣様致焼失候由今日披露有之候事、
- 一同 廿四日 寛陽院様御一周忌御法事今日来晦日迄一七日御執行有之、殺生禁断被仰渡候事、
- 一同 廿九日 吉貴公福昌寺江御參詣有之、
- 一同 十二月朔日 岩城長吉殿と申人黒葛原吉左衛門殿家来を打果ス、
- 一同 二日 御上洛御船立今朝如細嶋相廻候事、
- 一同 五日 安藤喜右衛門殿と申人山下次介江喧嘩仕掛、次介殿より喜右衛門殿切殺為被申由也、

古 記(中)

- 一同 十六日 芝御前様之御父田布施江御座候江田道用と由之由此中御病氣ニ御座候処、夜前死去之由御家老御相談之上敷、今日より五日普請鳴物遊山等之儀御禁断之旨被仰渡、
- 一同 廿日晚藤田幸右衛門殿所出火有之、家悉焼失、
- 一同 廿五日 知覽浮辺村諏訪大明神宮此中宮作有之、去ル十六日迄宮作仕廻候而大工木屋解キ多人数集居候而掃除等仕廻申候而宮より遠ク起火共仕召置候、然処ニ拝殿之外棟より出火有之候付集居候者共以之外働消申候得共、棟より出火ニ而難叶、今日迄ニ成就仕候宮作り過半致焼失候由也、起火より火之子棟ニ上り出火候由候と申事之由也、
- 一同 十二月廿七日 於御下屋敷あやつり有之、
- 元禄九年丙子
- 一同 正月十五日 御使川上平馬着、太守公御任官相知候、
- 一同 廿一日 御任官ニ付御一門衆・与頭衆・一所衆・諸地頭其外諸士へ朝御料理被下、晚ハ御膳進上候、御能有之、
- 一同 廿五日 吉貴公鹿府御立、東目筋御上洛、
- 一同 四月廿三日 夜子刻上浜町より火起、折節東風強吹、
- 一同 廿四日 曉七過御城御類焼、六ツ時分鎮火、御厩迄焼

三三七

ル、金銀蔵屋敷相残候、

一 火匹上和泉屋町助右衛門借屋伊地知休右衛門下人清右衛門所也、

一 御城内角之御蔵其外御蔵数七ツ焼失、御城下ハ肝付主殿屋敷迄にて止、

一 士屋敷五拾四ヶ所、一士家数八百五拾四、
一 町屋敷式百十三ヶ所 一町家数五百五拾軒、

一 松沢奎之丞事、島津虎安殿家より落半死、
一 新納次郎四郎家来烧死、

一 御城御門橋外口ニ仮番被仰付候、仮兵具奉行四人、大嶋盛太夫・猿渡十郎右衛門・中村七右衛門・伊東半右衛門、

諸外城百姓は不及申、諸衆中迄竹木繩自分ニ持参進上仕候、

一 火元清右衛門籠舎被仰付候処、付火候聞得有之、御詮儀候処、崎山八兵衛下人万七と申者仕候由相知候、

但同十一年九月三日万七外式人御仕置被仰付候、
一 正月廿六日匠作様東目筋御発駕、御屋しき五ツ半御差出御茶屋より御船ニて加治木江御着、御供御家老島浮中務

・佐多豊前父子・島津助之丞父子・御用人市来次郎左衛門・堀四郎右衛門・奏者番五代舍人、

一 四月十三日太守様御国元御暇御給、上使大久保加賀守様

六月二日江戸御立、八月四日朝五ツ時御下屋敷に御着、御供御家老喜入安房・御用人野村太左衛門・渋谷四郎左

衛門・御目付伊集院為右衛門・兵具奉行野村才右衛門、
一 六月祇園御祭礼踊、七月名踊茂御頭屋并御寺迄ニて御城

ニハ踊不申候事、
四月廿三日夜火事に御逢候人々

肝付主殿殿 嶋津図書殿 入来院志摩殿
喜入七郎右衛門殿 嶋津虎安殿 伊集院将監殿
町田助太夫殿 嶋津筑後殿 琉球仮や

吉田正左衛門殿 別府式部左衛門殿 川野三太夫殿
国分次郎右衛門殿 新納次郎四郎殿 田島正兵衛殿
中西市左衛門殿 北郷右衛門八殿 野呂玄龜老

塩田与兵衛殿 新納小右衛門殿 種子島藏人殿
比志島伊角殿 法元太郎左衛門殿 諏訪次郎右衛門殿
桂三十郎殿 高橋左門殿 羽田孫介殿

村田五郎左衛門殿 伊勢八右衛門殿 高崎孫四郎殿
土師七左衛門殿 谷山平左衛門殿 脇元八右衛門殿
加藤少右衛門殿家内 新納五郎右衛門殿 伊集院遠江殿

伊集院刑部殿 新納主税殿 池田養拙老

崎元曾右衛門殿 阿多淡路殿 上村七兵衛殿

北郷惣次郎殿 伊地知助右衛門殿 新納喜右衛門殿

平田治左衛門殿 嶋津大藏殿 嶋津頼母殿

五代万千代殿 長崎為右衛門殿 和田平右衛門殿

向井市之丞殿 木尾慶安老 得能造酒丞殿

伊地知左右衛門殿家内 吐師孫右衛門殿家内

北郷七郎左衛門殿家内 米良恕兵衛殿家内

永山次郎左衛門殿家内 入来院殿御懷

谷山六左衛門殿 以上伊地知權左衛門増屋日記之内書抜也

一此火事 松齡公 秀吉公より御拝領之小泉之御甲并加藤

清正之鑓茂焼申候由也、今御兵具所へ有之候由也、

一此年 吉貴公東目筋御上洛之節、二月二日高岡香積寺之

名梅御覽有之、

一四月廿三日戊申晴天東風

夜八ツ時に上町行屋より出火有之、東風吹候而御城風下

二而候間、親慶右エ門殿・堀新助殿出合打続候、御城橋

之辺ニ御用人上井五郎左衛門殿其外居被成御厩屋走続可

申由ニ付、御城へ入不被成候間、大形御厩屋ニ参り候、

我々三人御断申屋形へ罷出候、親事ニ候異国座へ御入、

堀新助殿、私は進物蔵へ上り候、左候処ニ町田助太夫殿

所、嶋津虎安殿火飛付大留より大火飛来り御番所上箱む

ねに火入、御兵具所之角ニ火付、物奉行所入口之上ニ火

付、小人数水ハ無之、精を出しても無其詮、一度焼立申

候間、何れもあきれ果泪をなかし、二之丸打続平長や老

ッ解こぼし、嶋津内記殿、同又七殿下知ニ而漸取留申

候、下之火に肝付主殿まで焼、金蔵ニ而取消候、島津主

計殿手にて候、以上横山日記文政十一年出之置、

一 四月廿四日晴天東風

今朝五ツ時に焼静り候、御城内御蔵御南戸蔵・御納蔵、

進物蔵三ツ残り申候、焼失蔵御書院蔵・御文書蔵・評定

所蔵・異国座蔵、右之残之外にて候、御兵具蔵・焼物蔵

・角槽焼申候、

一 御兵具所より 忠久公御具足御旅よしのりの長刀計出申

候、頼朝公より御代々御具足并騎馬具足、足輕具足、弓

鉄炮諸武具焼失候、御兵具所之儀、土蔵ニ而無之故働う

すく候と申沙汰にて候、

一 御書院之宝物名高物を出申候、

一 御文書者少々出候、大事成御書付者御番所ニ有之候間、

皆共ニ出し申候、御領国中家改ニ付系図文書出置候人

々此節皆共ニ焼失申候、横山之系図も右通出置焼失申候、

一今井八右衛門、穆佐移地頭之節重科之者召捕候、御褒美元禄十丑閏二月朔日 御前ニ而備前三郎国宗之刀拝領、

元禄十年丁丑閏二月

一正月元日 綱貴公五社御参詣、

一二月 大河平休兵衛事鹿兒嶋衆中被仰付、直ニ大河平在番被仰付候、

一二月 地頭杯御納戸奉行・兵具奉行・吟味役若党袴着在之儀御法度被仰渡、御用人迄ハ御免 御城焼失に付而也、

一四月六日於江戸御任官之御祝有之、

一閏二月廿七日 太守様御発駕ニ而 御参勤西目筋、

一六月六日修理太夫様御下向、木曾路、八月四日御下着、御下屋敷へ御入、

一六月廿五日九ツ過向高麗町根占正右衛門屋敷より火起數ヶ所焼失、

一十月廿七日より分老貫文代銀拾六匁直成ニ被仰渡候事、

一十一月三日鑄流馬町田勘左エ門・志岐数馬、

一今日日州諸外城他領境之繩引有之、

一七月朔日 公奉 台命、助役寛永寺堂修造、先是寛永元年

大將軍 秀忠公建一寺於東武向ヶ岡今云上野号東叡山円頓院、寛永寺比 帝都比叡山經七十余年星霜殿堂破壊、於是 綱吉公命柳沢出羽守・秋元但馬守、為奉行改建本

堂、綱貴公以国老禰寝丹波清雄為惣監察使、嶋津大藏久明、無職北郷惣次郎忠昭先是貞享五年迄国老 市来次郎左衛門

家質、村田善太夫経智共に御用人 伊集院伊右衛門等与焉七百數 大起土木之功、

一諸系図古目錄文書等御用ニ付御記録奉行諸外城ニ差廻候事、

一十二月廿五日夜上町三ヶ所焼失、

一上野御手伝御当りニ付上野本所へ被相置候衆左之通、

惣頭 嶋津大藏 御家老 祢寝丹波

御用人 村田善太夫 御番頭 北郷惣次郎
市来次郎左エ門

御用人代 御目付相良清兵衛 吟味役 三雲新兵衛
御用人代 伊集院猪右衛門 御留守居 赤松甚右衛門

兵具奉行 白尾戸後右衛門 御前目付 北郷右衛門八
村田五郎右衛門 宮之原甚太夫

元禄十一年

一二月廿二日 肥後仁右衛門大為求古書、府發巡行三州

矣、同八月十四日帰、

一大河平休兵衛鹿兒嶋衆中二被召成、境目在番之儀者不相替相勤申度願出達 貴聞候処、願之通被仰付候旨鎌田蔵人殿御差図、取次上井次郎左衛門也、丑閏二月十五日右之段被仰渡候、

一今年有可試金銀銅山之台命、依之再穿串木野芹ヶ野及河辺神殿山得許多、然神殿山水出不止故止穿、

一九月三日御仕置有之、去年 御城焼失火付万七同類十左エ門・千左エ門上下引廻り下郡元浜にて右三人竹鋸引兩日有之、同五日八時に被行候、其節万七子三才ニ罷成しを万七目之前にてせみらい差殺し見せ候由、

一六月十七日夜山下六右エ門所へ、忍入二男九郎兵衛を差殺候者有之御詮議有之候得共、相手不相知候、

二月十三日より同十九日迄一七日於大乘院 頼朝公五百年忌御執行有之、

一諸士持高并凡下より買候高并諸外城へ外城越ニ買置候高御借入高被召成、高老石ニ付代銀百卅目ツ、九部之利銀被下候、

一七月十日 吉貴公鹿府御立御參勤、西目筋、御家老島津勘解由・御用人堀四郎左エ門・仁礼寛右エ門其外御供、

一三月朔日錢老貴文代銀拾五匁直成被仰渡候事、

一綱貴公東目 御下向、十一月十五日向島有村飯屋御着、左候而御着城、

一八月より於祢寝丹波守殿宅札改有之、札奉行嶋津織部殿・町田源左衛門殿・種子嶋彈正殿焼印所客屋近辺にて御分國中諸外城迄諸所ニ而相改候事、

一十一月三日鐮流馬岩山半兵衛・大嶋孫次郎也、

一十二月十日夜五ツ時分家村平八ニ自火にて一ヶ所焼失、平八殿在江戸ニ而候事、

一正月元日 吉貴公已刻被遊 御社參候、鹿兒島諸士皆同御供未下刻御入館、

一同二日吉貴公福昌寺へ被遊 御仏詣候事、
一同十一日御旧例御閑狩有之、三番組・四番与・六番組人数 御名代嶋津内匠殿・狩奉行嶋津権十郎殿・嶋津主計殿・町田助太郎殿、

一同十三日御能有之、御城内へ詰居候人々見物被仰付候事、

一頼朝公五百年御法事二月十三日より十九日迄一七日於大乘院御執行有之、

一二月十五日夜四ツ時分新照院池之平佐谷田角右衛門殿所

出火、家余多焼失、

一二月廿三日志布志町之弥三右衛門と申者珍敷魚を見出し候、

鼻ノアキ四寸程目ヨリ頭六尺ヨリ尾ノ方一丈目ノ長サ

四寸程鱗ナシ、

一四月四日 吉貴公向之嶋江御光儀有之、

元禄十二年己卯

一十二月五日之夜東之方ニ火之柱立候て七八度見へ隠仕候事、

一三月十九日上之原庄屋敷より火起三ヶ所焼、

一九月上町出火、

一十一月四日夜八ツ時上町二三ヶ所焼失、

一十月十五日城州賀茂神官林田采女より加茂山之葵草進上仕度御家之御祈祷被仰付度奉願御免候て従是初而 御家

へ葵草進上仕候事、

一五月三日川上源右衛門・相良分右衛門・有馬源右衛門・

藤田用右衛門・松元茂左衛門・龜山嘉兵衛・伊東才藏・

川上長左衛門、

右人数遠島被仰付置候処、此節御赦免被仰付、今日御下やし敷へ罷出、図書殿被駅御逢、御用人高橋左門・村田

善太夫御目付い十院猪右エ門相詰候事、

一五月廿三日上方若輩之衆大鼓踊いたし辻々他人数相集、

出入等茂可有之事ニ候間、最寄ニ申合、左様ニ無之様ニ被仰渡旨申談、横目頭衆へ申達候事、

一六月朔日七八年以前被仰渡、女共かつき仕候儀綿ぼうし御禁止之儀此比大形ニ罷成、かつき仕候者相見得申候事、

一六月七日昨夜四位権左衛門屋敷ニ打入候事、

一同月十三日此内差上置候書付等被御覽置候、四位権左衛門屋敷へ鉄炮打込候儀者竹鉄炮ニ而も無之、本之鉄砲之様子ニ相聞得候、権左エ門留守之由候得共如何様子共へ意趣有之、右之通仕候半、然共土之いたしかたニハ不相志ニ被思召上候、意趣共有之候ハ、士之仕様ニ可仕事ニハ此段別而比興之仕方ニ候、火付なとも又此比ニハ三原次郎右衛門屋敷ニ為有之様ニ被聞召上候、如何様鹿兒嶋中ニ悪心之者可有之候間、同役中申合程氣を付可申候、一昨日源左エ門ニも被仰聞候、

一七月五月夜前長田治右衛門屋敷へ竹鉄炮打込申候由表方へ横目衆被申出候付、右之旨源左エ門より達貴聞候、治右エ門所へ委細之儀為聞合、吉田六郎兵衛・築瀬源右エ門遣申候事、以上相良長莫日記、

元禄十三年庚辰

一 正月三日 太守公西目筋御參勤御発駕、御供御家老中嶋津図書・新納美作・御番頭種子島彈正・御本身分嶋津伊豆・御用人野村太左衛門・相良吉右衛門其外御供なり、八月高野坊主去戌春流罪ニ而佐多辺塚へ被召置候へとも此節被召直候、

一 三月加治木に出火有之、出物藏迄焼失、

一 十一月四日御家譜略序文書入候草案老通、菊地藤助より林大学頭殿へ致持參候事、

七月廿一日 吉貴公西目筋御下向にて御着城、

覚

一 正保年中之御絵図を薩摩国之儀ハ古来より申伝候通知監郡を合拾四郡に書類差出置候処、寛文四年御目錄頂戴仕候節より同国給黎郡に知覧郡を被為附属、十三郡ニ被成下候、此節之御絵図には何様ニ相記可申候哉、御自分迄

御尋申上候、以上、

元禄十三
十一月

右之通候処、此度之御絵図十三郡ニ書類御献上候、元禄十三年
一比日不宜人參を塩漬りなとにいたし見分能やうに道を付

古 記(中)

致売負候者有之由候、人參之儀者肝要候、菓種ニ而候処に右躰之人參を商売いたし候事不届候間向後右之通致手苦勞人參商売いたし候者於有之者不依誰人無遠慮可申出候、似せ菓種之儀者御大禁之事ニ候間各紛敷人參致商売候者於有之老御詮儀之上至売手曲事可被仰付候間右之趣得其意惣而無心元菓種不致売買候様支配中江可申渡候、

辰五月九日

評定所

一 当所中火番所三月限ニ為引取候段江戸江申上候処、火事之儀者不依四季有之事候条、火用心尚以入念候様ニ申渡 胡乱成者有之候ハ、相捕可申、右之趣可申渡旨被仰出候、六月廿六日 評定所

一 当年酒造之儀委細追而可被仰渡候間、夫迄ハ新酒造不申候様ニ可申候旨此節 公儀より被仰渡候条右之旨堅固相守候様可申渡、

八月六日 評定所

一 捨子之儀御制禁に候、依之寝前も養育成かたきにおひて奉公人ハ其主人、御料は御代官、私領ハ其村々名主、五人組、町方ハ其所之名主、五人組江其品申出し、於其所養育可仕旨相触候処、今以粗捨子いたし候段不届候、各捨

三九三

月廿六日被仰渡候、

一磯御飯屋辺之海上陸近ク諸船乗通之儀令停止候、樽之う
け浮置候間、夫より沖の方を可致通船候、うけに鳴子付
置候間、夜中込も可相知候、昼夜共に番船被付置候間、
風波荒及難船うけ之外通船難叶砌ハ番船ニ断候而うけ内
を可乗通候、惣而御飯屋前致通船候節無作法之様子ニ不
見得様可相慎候、匠作様御在國中計右之通申付候、午九
月十三日 評定所

一二月十四日諏訪市右衛門兼秩御使役被仰付候、平田清右
衛門純旨も同日被仰付候事、

一殿様辰上刻御社参出仕之諸士皆同御供、

一月香御家老主殿殿、御用人猿渡喜石衛門殿・村田平右衛
門殿ニ而候事、

一正月十四日如例年吉野御関狩有之候、当年者三番組・四
番組・六番組上り前ニ而今暁より何れも罷登候、当年老
式人有之役人も其座明不申候ハ、老人者上り可申候由
也、老若共々次男迄も可罷登由候事、

一正月廿日殿様桜島御湯治可被遊 御越候事、

一同廿七日 殿様桜島より御帰館、

一二月三日乙卯今晚夜入本より亥刻迄南西の方ほうき星出

ル、本申の方未辰方になひき未広長サ三尋程ニ見ゆる、

一二月四日ほうき星不出、然者去ル三日之夜計かと云ハ此
中より有と申人も有、一夜計出申事も有間敷事二も有な
んを若年より三ほと出るを見、十日あたり夜毎に見得
候、此度ハ二夜見得申候、

一同十二日鹿兒嶋諸士組分ニ而出仕被遊 御覽候事、

一同十五日高橋武右衛門殿・折田武右衛門殿此式人御目付
役被仰付候事、

一五月廿四日大風吹古家塀垣大に損ス、

一四月十四日乙丑南林寺松原江今日大豆・小豆・大麦降り
申候由ニ而人々拾ひ取申候、右大豆、小豆・大麦此色取
合百四五拾粒計御城へ出候を見申候、大豆と申者櫛の実
ニ而可有之と見申候、小豆者何そ草の実ニ而候半、色赤
クいかにも小有之、大麦ハ常之麦よりも大きく有之、是も
草の実ニ而可有之候、からすの糞ニ仕候半と人々申候、
一四月廿八日宝嶋へ漂着之唐人拾九人此方御手舟ニ被召乗
長崎江被差送候ニ付警固奥山勘右衛門殿・加世田十兵衛
殿・医師本田栄安・松元円貞・通事中山三左衛門今日如
山川被差越候事、

一五月十日匠作様去月十三日江戸被遊御発駕、道中者日数

十六日之御道中ニ而廿八日ニ伏見江御着之由ニ而伏見より飛脚昨日着有之、

一 七月朔日如例年頭殿頭屋へ御直り被成候事、

一同二日 御出座出家衆御目見、

一同三日 今日も御出座、出家衆御目見、

一 八月廿九日申之刻より辰巳方大風吹出昼時分より大風ハ吹間敷かと存、雲行ニ而次第二風強罷成、夜入候而より以之外之大風ニ罷成候、丑之刻吹止辰巳之風追付吹出、夜明に止申候、古家屏牆大破損、

一 九月廿五日 殿様安樂御湯治江被遊 御越候事御供御家

老助之丞殿、

一同廿七日福昌寺東堂今日上洛、

一 当年八月廿九日大風、田島為痛之由、依之譜物高直に有之候哉、左ニ記之、

一 真米石ニ付八九十匁、一 疏米石ニ付八十五六匁、

一 小豆石ニ付八九十匁、一 赤米石ニ付八十三四匁、

一 大豆石ニ付八十匁、一 粟石ニ付六十匁、

一 塩耆升 錢十八九廿文、

右之通ニ当年九月之始より米等高直ニ有之候付而右ニ応諸物段々ニ高直ニ有之候事、

一 十一月九日龜姫様御縁与之御祝儀ニ付諸士より御隣進上有之筈候得共被差留候、

一同廿一日被召延置候御膳進上有之御能被仰付候、

一本田与一左衛門親貞本府之曆官ニ而候处、貞享曆伝授方として三月十日鹿兒嶋を發足、直ニ江戸江ゆき渋川助左

衛門源春海江致入門、貞享曆法ヲ春海より致伝授罷下り、此新法を以御国曆を調候事、於日本改曆之始者貞享曆ニ而候、其以前忠久公御封国之比ハ日本國中宣明曆法ニ而此法ハ唐之(後欠)

元禄十六年癸未

一 二月六日夜九ツ半時加治屋町勝目兵右衛門屋敷より火起

西風ニ而大火、

一 土屋敷式百四拾八ヶ所 一 土家数千六軒

一 六ヶ所職人屋敷 一 三ヶ所御小者屋敷

一 町屋敷三百八拾五ヶ所 一 町家数七百九十軒

一 南林寺并脇寺拾貳家数五拾壹

一 南杯寺門前九拾三ヶ所家数百七拾

内三ヶ所残

合屋敷七百三拾九ヶ所合家数貳千貳式

一 燒失船四拾六艘

一四本八太郎下女老焼死、

一右六日之火事聞得候様有之、御詮儀之処に山下八右衛門久保、同社人士佐と申者之子新三郎今老三人三人二而仕候段相知候、去ル寅六月山下九郎兵衛泊茂八右衛門差殺候段当六月相知候、

一三月十一日雨天朝六ツ時 吉貴公御首途御諏訪御參詣、直に安養院江御入、祇園江御參、風強候故御舟江不被為召、陸二而筑地御茶屋江御入、嶋津玄蕃殿より御膳進上追而御帰館、九ツ過御下屋敷より御駕籠御供、御供御家老島津助之丞、御用人赤松次郎右衛門・堀四郎左衛門・御兵具奉行村田喜右衛門・同二日三日中神七右衛門也、一御城御普請有之、御普請方中原為兵衛・主取濃元与一右衛門・惣大工永田次郎左衛門・河野次郎左衛門、老躰故駕籠御免二而往来かこかき被下候、

一八月十六日鍋三郎様御事、高輪御前様御子分々被為成、満姫様御儀茂御同前、高輪御前様 御直子御出生候ハ、鍋三郎様御事ハ御二男二可被成候、右二付江戸御老中様方江右之段被仰上置候、此段可承置旨大藏殿御口達二而御子様諸番頭一所衆吟味役御用人御目付迄被仰渡候地頭所喫老入ツ、召寄申置候様被仰渡候、

古 記(中)

一五月晦日 太守様御国許江御暇御給上使秋元但馬守様也、

一六月十八日江戸御立御泊より御急かた廿七日伏見江御着、惣御供立之人数ハ晦日伏見江着、七月二日御立、同日夜入大坂江御着、七月六日御乗船、同日御出船、十九日門司二而大風、御供立小早二三艘少々相損、廿日陸二御上り、廿五日出水に御着、小倉筋又八郎様・島津又之進殿・御家老御用人野村太左衛門殿御供、小倉より陸、御跡立、主取平田九郎右衛門殿・上村権兵衛殿、七月廿七日出水御着、八月四日明天九ツ過御着城、

十一月廿二日江戸より小田原迄希代之大地震、怪我人死人不知数与御屋敷中騒動、此時米良八之進非番二而在部屋着麻上下

吉貴公御機嫌伺二被出候、燈火もゆり消し御前に人もなし、八之進被出候得ハたれかと御意あり、八之進御機嫌伺二罷出候といふ、先火をとぼし候へと被仰付候、從是無滞致出身、後に比志島家相統被仰付、御家老迄被仰付候、比志嶋隼人と云隠居候ハ、村上彦一といふ、

一五月十六日匠作様白鳥山江御參詣有之、直二木崎原江御光儀、此時黒木平左衛門・馬場吉兵衛被召寄、木崎原御合戦、御聞被遊候、御鐘被遊候所より始終不殘申上候、

三九七

御供之衆島津中務殿・御与力フカサ正右衛門殿・御用人衆堀四郎左衛門殿・御横目四位権左衛門殿・御茶道衆永瀬万悦其外御近習衆余多御供二而候、平左衛門より申上候儀、皆々被聞召候事、
以上黒木平左衛門
実法覚書抜書

四月廿五日被仰渡候年号宝永と被相改候由三月晦日江戸おひて被仰渡候間、右之段可申渡田 御意候旨申来候条被得其意支配中江可申渡百相良主左エ門殿御取次二而被仰渡候、

一 三月十一日赤塚利右衛門・甲斐勝助納殿役被仰付候事、

一同廿七日祢寝正右衛門御里役被仰付候、
(マヤ)

一 今年春御国曆永代可被行旨江戸曆館渋川助左衛門源春海より之証書式通并貞享曆法伝授本田与市右衛門親貞江遣申候事、

宝永元年甲申元禄十七年三月十三日改元

一 正月十三日晴天 綱貴公又八郎様忠英朝六ツ時花尾権現

江御参詣、御供三と共に中途羽織袴、御家老島津大蔵殿

・御用人相良平左衛門・御日付赤塚源太左衛門彼方にて

上様御支度熨斗目長上下、御駕籠廻り熨斗目半上下、御

先御供不洗物并上下彼方にて大乘院より御膳進上、配膳

御小姓熨斗目半上下、御右之通夫より川田下平坂之上二

地頭上村権兵衛より御茶屋調、御精進上、御膳進上御中途川所々船参、船渡に御台所より御出、八ツ半過二御台所へ御入、御先番伊地知左右エ門二御納戸奉行相良市郎左衛門なり、

一 二月十五日御本丸御対面所小番大番所之大家出来候間今日六ツ前に御出座御移徒之御規式伊地知八郎兵衛其外本田家より相勤、能太夫三人如例御用人御取次にて時服一重ツ、御対面所下之敷居上二而拜領、御相伴 又八郎様

玄蕃殿王屈之方二兵庫殿、又之允殿四ツ前に相濟、支度(ハリ紙) 島津又之進殿にて候殿

水色半上下熨斗目花色赤筋などにては不罷成候、諸役人より進上物有、諸士より三種二荷、御祝儀者今度御広間

二而御帳に付退出、

一 三月十日夜入四ツ過綱貴公、又八郎様被遊御同心小倉筋御通道、

一 四月十八日 中将様江戸江御着、二月御立也、

一同月廿五日当三月晦日改元宝永と被相改旨諸座へ被仰渡候、諸士与中江者小与頭宅召寄申渡候、

一 六月十六日南林寺に追出之鐘出来、今日未刻供養鐘始有、

一 七月朔日匠作様御着城、此御下向二市来城之町出口之楠

大枝落、貴嶋助之進乗物に落かゝる、

一 八月廿一日匠作様御参府 綱貴公御病氣ニ付而也、西目小倉筋御急き九月十九日御参府にて御対顔相濟候由、

一同月十五日之晚御城山に以之外狐鳴候、

綱貴公御病氣ニ而被遊御座候由江戸より飛脚到来、

一 九月十九日 綱貴公御逝去、八ツ半時御使永山源五右衛門、同日江戸立十月七日鹿府に着、同日殉死、御法度之旨日帳ニ而被仰渡候、

一 十月十三日御法名上原菅介守下候、同十四日評定所にて御弘メ有之、大玄院殿昌道元新大居士、

一 十月七日より五十日諸士月代仕間敷候、又者百姓町人御構無之、普請鳴物三十日山野之殺生五拾日、商売漁獵一

七日被差留候、

一 九月廿七日 大玄公御遺體江戸大円寺より御出棺、美濃路中国小倉筋御通、十一月廿日四ツ時分福昌寺へ御入、

諏訪次郎左衛門御用人野村鉄心御供、

一 十一月廿四日暁 御葬礼、同晦日迄一七日御中陰之御法事御執行、御法事中殺生普請鳴物遊山ケ間敷儀停止、当所漁獵止、

一 三月十日中将様御参勤、出水米之津より御舟、肥前佐賀領寺井川に御着、夫より長崎道筋御通り筑前山鹿へ御出、小

倉筋御通り大里より御乗船、四月十八日江戸江御着也、

一 秋 綱貴公於江戸御病氣、上使田村右京大夫建頭を以病御尋、其後本多弾正少弼忠時上使にてまた御尋也、又久永内記為御使御着御給、

一 御親類様依御願 吉貴公御参府御免之御奉書御給、依之萩原長右衛門昼夜急ニ而被差下、八月廿一日陣児嶋江到着、吉貴公即日夫下刻御発駕、小倉筋御通行、九月十九

日御参府、御家老嶋津大蔵久明、嶋津帯刀忠雄御供也、吉貴公御着、当日 綱貴公御逝去、同廿三日御家老川上

式部久重奉枢入大円寺 泉谷山大円寺
在東武三田台、廿七日出寺帰国、

十一月廿日入福昌寺、廿四日送葬、

一 貞宗御刀 文殊御茶入 將軍家二
一 屏風一双 狩野永徳筆 桂昌院一位卿二 將軍
母公

一 同一双同筆 將軍夫人二

一 青江貞次御刀御掛物僧雪舟筆、甲府中納言 綱貴公江

一 御硯文台 継豊公夫人

一 成家御刀 近衛家瀬卿二

右御遺言にて御献上

上使松平弾正忠正久を以御香奠銀五拾枚御給、
一 十月廿九日御老中土屋相模守政直宅江以台命 吉貴公を

被召御老中列座、改直伝台命 御家督無相違被仰出、同日又八郎殿周防と御改名、島津帯刀忠雄御家老被仰付候、

一十一月十三日御登城 御家督之御礼一文字御太刀、御時服五拾、御馬代銀千枚御献上、

於白書院御家臣九人御目見

嶋津周防忠英 嶋津内匠久近 以上御一族

島津大蔵久明 嶋津勘解由久当

嶋津帯刀忠雄 以上御家老 入来院主馬久重 御番頭

相良権太夫長規 平田清右衛門純旨

家村平八任賢 御用人 御太刀馬代時服三重献上

一十一月廿七日薩摩守と御名被相改、

一十二月十一日 公左近衛少将二被任、

一同月九日信澄院様高輪江御移、同十三日吉貴公高輪より

芝御屋敷へ御移、

一吉貴公御家督之節諸御役人中より御役之御断之時、綱貴

公御代出頭仕候、御側御用人鎌田後藤兵衛・野村太左衛

門兩人直に御役御免被仰付候由也、

一六月十一日 綱貴公此間少々御不例氣に被遊御座候処、

今日より御熱氣被遊御座御手医師河野隆真此内より御棗

被召上、隆真申候者今日之御熱氣余程之御事二候、御熱病又者御癩病にても可有御座哉と申上候、

一九月十八日今晚夜入四ツ時分被遊御逝去候、左様候而吉貴公いまた御看座不被遊候付御存生之筋二而候、

一同十九日今日八ツ時分 吉貴公被遊 御着、直二芝御屋

敷へ被遊 御入、又八郎様御部屋へ御入、御支度替御羽

織袴二而御奥床江被為入、御対顔、

宝永二年乙酉

一正月三日江戸より御使榊原三右衛門到着、信証院様高輪

江御移 吉貴公御任官、芝へ御移之儀御到来、

一二月三日朝七ツ半時 大玄公御遺髮福昌寺より御出駕、

高野へ御登山、諸士下高札之元より西田橋迄之間罷出

候、同廿五日大坂へ御着、同三日高野山蓮金院へ御着、

御用人諏訪次郎左衛門御供、同六日次郎左衛門等高野出

立、五月三日鹿府に着候事、

一六月七日江戸にて御国元へ御暇御給、上使小笠原佐渡

守、

一七月九日、江戸御発駕、御家督初而御入部、九月朔日

御本丸へ御着城、西目筋今日朝雨天昼より晴、御礼使佐

多李殿、

一肥後天草民五百余人來薩州願為我國之民、使人問天草吏

二日比年凶民將死亡故如此願賜食仁厚之至也、時

公在東武、天草之幸竹村太郎左衛門來芝邸請曰、天草地
狭少民不飽食、願給田為薩州之民則五百余人再造之思
也、公許容焉給、田民就業、

一鹿兒嶋士外城衆中不屈二付或磔、或斬罪二被柳付候者之
子共向後士に被仰付間敷旨被仰渡候、

一九月四日吟味役を御目付と御改、

宝永二年乙酉

一六月吉貴公御妹龜姫嫁 近衛家久公 任從一位
左大臣 先是元祿

十三年 綱貴公与近衛約婚 近衛家吉 幕府時 家久公

於東武行結納之礼、今年五月十日龜姫出高輪邸赴京師、

国老嶋津大藏久明・御用人猿渡喜右衛門信安・川上長左

衛門久恭從之、御用人家村平八經賢先二行京、同廿七日

入京、六月行婚礼、姫經駿州宇都山、此山者葛之名所

也、因取葛植器至于京、左大臣家瀬公 後任關白大政
大臣家久公 賞

之賦和歌、

植て来し情ならずは宇都山都にかゝる葛葉や見ぬ

九月姫活微恙逐日漸医療無驗、十月五日終薨、年十六

矣、同七日夜半送遺躰於大德寺、同十日酉刻行葬礼、法
諡英光院殿覺樹円妙大姉 立神主於
本府深固院

家久公追悼

今日更に思ふもはかな遅く疾り終に行へき道ならずや

ハ

又所愛之葛見紅葉

色つきぬ涙のミさへ此秋ハかゝる葛葉も葛忍へと

一六月九日 上使來邸 賜吉公給白銀千枚、時服百、明日

登營謁謝之給馬、七月九日江戸御立、御家老島津帶刀忠

雄・御番頭入來院主馬重矩・御用人相良權太夫長規・平

田清右衛門純旨從焉、九月朔日入国、

一八月廿日統正統譜成、先是元祿九年府城回祿、文庫罹災、譜

牒載籍灰燼不少、綱貴公大憂之、命国史肥後仁右衛門 後藤
之丞

市來源右衛門・ 後称早左エ門 大求古書、二人分路巡行三州

元祿十年正月廿二日肥後氏出府巡薩州八月 十四日帰 市來氏巡遇旦一州九月廿七日還、士民間神社仏寺

所箚藏文書片紙隻字不選悉納帛摸写之大成、為數千百卷

於是封内土太夫乃至山野庶民祖先惣功事業姓氏嫡庶之分

脈初明也、 二夫官通行納藏書与印於
其人頭為驗模写成原本

因是復修国史起慶長七年至今時号云島津家統正統譜、

一九月 公入国大興政令国中、

一 此月召東郷藤兵衛重治於本府、賜家第及祿三千石教授劍術、是憂士風衰也、

一 四月廿七日 鍋三郎様御上下御召初有之、支度方阿多六太夫夫婦勤之、

宝永三年丙戌

一 正月 幕府賀 公襲封之後初帰国、齋書賜鮭魚十尺尺馱、二月十日至本府、公馳使謝之、

一 四月五日公發本府六月朔日入東武、

一 同日坂元養伯重賢本府人 獻禁中画図、初重賢善画師狩野

常信、得其妙、常信許可令号養伯、於是叙法橋

一 九月 公建神明社於府下筑地移三本寺在安養院中 於社傍改

号抱真院為別当寺、

一 此年 近衛家久公約娶公第一女満姫君告幕府、十一月廿九日 台命許焉、

一 今度 太守様御繼目初而就御入国奉祝士踊備 御覽度之旨被申出候、御旧例之儀故士例被仰付候、先例之通与頭中万端差引可有之旨被仰出候、

一 三月十三日上五番六番与士踊、

一 同十六日一番組より四番組士踊、

一 士踊入目銀割付下高拾六万式千九百式拾六石余

一 四月五日四ツ時公 為御參府鹿兒島御在目御本丸西目筋御供御家老嶋津中務・嶋津帯刀・御大身分島津筑後・御用人市來次郎左工門・相良権太夫、同六月朔日江戸へ御着、上使秋元但馬守様、

一 十一月三日鏑流馬中島六右工門・黒葛原少吉也、

一 今度御記録編集二付老年御触状を以被仰渡置候通諸士其外下々ニ至迄致所持候者三月中ニ可差出旨組分御書付有、

一 札改有之札奉行嶋津主水・町田甲斐・鎌田采女、

一 二月小番入願付被極置候竟左之通、

一 祖父親迄引続小番相勤候者ハ小身ニ而も不相替小番可被仰付候事、

一 地頭職被仰付候者、又ハ御留守居之格程之御改被仰付候者ハ小番不仕来候共右通之格式ニ為被仰付者二候間嫡子計ハ代々小番可被仰付候事、

一 御馬廻并於江戸馬相立相勤候者ハ其身計ハ先小番可被仰付候、左候而無中絶、三代も右通相勤候ハ、代々小番相勤候様可被仰付候事、

一 小番之儀ハ依持高ハ格式を不被相定、時々御見合次第可被仰付候、且又不限此儀中絶之儀依願ハ御取上ケ有間敷

候間、小番被仰付格之者御役相勤、又ハ呼事之御奉公ニ而御番入不仕者ハ申出次第小番帳ニ可載置候、不申出御番入不仕者ハ中絶ニ可罷成候事、

一家筋之儀を申立小番入之儀新規ニ願申出候而も御取上ケ有間敷候、御奉公之働次第品能可被仰付候事、

宝永四年丁亥

一 正月廿日上野仏 之節於明王院原口権兵衛致乱心候、

一 四月十八日御本丸新御作事相濟、御座移被仰渡 御下屋敷より御本丸へ御座相直候、

太守様御留主ニ付御家老衆へ御吸物にて御酒上ル、并御菓子湯茶御用人御目付儀者取肴にて御酒被下、同席并諸奉行諸御座頭取迄御酒被下取肴出候、星合所之座也、登御門より出入有之、

於須磨様御事、辰方屹与仕たる書付ニ殿之字を書可申旨被仰渡候、

一 六月十二日御国元御暇被下上使稲葉丹後守、

一 七月朔日江戸御立美濃路御通、大坂より室迄、室より御舟、小倉筋出水より御入国、九月朔日御着城跡立候而於須磨様同所より被為入候、雨天也、

右御札使嶋津備中殿御供御家老島津中務、御用人市来次

郎左衛門、仮御用人米良藤右工門、御納戸奉行相良奎之助、右備西目筋被潰候故御先き物頭衆迄も此内へ被参候、今日ハ御手廻計ニ而候、

一 嶋津淡路守様御当地為御見廻御越、十一月九日福山より御舟ニ而客屋へ御入、使者宿ニ被成御座、同廿二日御帰、石燈爐より御船ニ而候事、

一 正月十日横目頭を大目附と唱、横目座取次を大目附取次と唱可申と被仰渡候、

一 北御門脇之新長屋御門を長屋御門と唱、御家老衆杯御出入口を中之口と唱、惣出入玄關を内玄關と唱、御近習番所入口之長屋御門を御近習番所口と唱、額相掛候、御座ハ其絵様之通に何之間と可唱候、御近習番所へ表より罷通候、長廊下浪之大額相掛候、浪廊下と唱可申候、八月晦日被仰渡候、

一 諸士何角ニ付而多人數御城江罷出詰居申儀有之節ハ御敷台二階之下溜之間へ差扣可罷居候、御用ニ付而差扣罷在面々ハ御目付座左右之溜之間に可罷在候、四月十四日被仰渡候、

一 十月四日未之上刻より同下刻迄之間大地震三度初之地震に虎之間之上南之方天水壺迄、御対面上之上西之方天

水壺壺ツ四ツ割候事、

一十二月十八日嶋津主水殿・伊集院十右衛門殿忠覚へ御勘定奉

行新規ニ重立而被仰付候、御勘定奉行相勤被居候衆長崎

長助殿・町田越右衛門殿・猿渡藤右衛門殿三人、今日御

役引取無役に被罷成候、

一此年川上香芳山清水寺宝光院炎上、寺具書悉為灰燼、

古記

自宝永五年

至延享四年

下

宝永五年戊子

公建平等王院於郡山厚地村初 忠久公就封日立 頼朝公

廟於厚地村号花尾大権現又立別当寺号花尾山平等王院建

三十六坊、頼朝公所賜立愛染明王為本尊 以 丹後局帰依

僧栄金阿闍梨為開山也世降至 勝久公時国家争乱神廟破

仏寺廢壞而局之神主且亡 貴久公治国修覆神廟移伊集院

莊嚴寺於麿府改号大乘院弘治二年寄附厚地村司神廟使莫懈祭

礼 綱貴公之時元禄十七年欲平等王院及古寺三十六坊中

再興本地院・円融院・多聞院・普賢院未果 吉貴公繼其志

建平等王院、先佐多久達所献之以愛染明王弘法大師作本尊又

立本地院経年再曼荼羅寺円融院・普賢院以上享保六年・多聞院享保三年
八各寄附水田又修飾神廟正徳三年二月

一 八月二十八日隅州屋久島野間邑之冲拳数帆船向東行衆見以異之、有阿波国之漁人来屋久島為漁者、此日出冲中亦見異船、有掉小舟向漁船来者、非日本人言語不通、徒為举手求水之形、漁人亦举手呼云、国法也、不可上陸、退去、明日湯泊邑之冲見似昨日之船為北風所吹去者暫不見、此日慈泊邑民藤兵衛入山燒炭見山中異躰者、藤兵衛竊婦聚数人相共至于山護異人婦訴有司、有司雖糾問言語文字不通、形本朝人而衣服帶刀亦我朝之物也、去動作眼色非日本人、拳島糾問不得其状、聞本府 公以告長崎奉行、召異人及土民漁人於是護異人送長崎、藤兵卫及捕之民六人、阿州之漁人至長崎告状婦国、公賞藤兵衛賜米二十石、

一 閏正月十八日当年より出物米十月限相納可申、総之儀翌年可為四月限、

一 四月十日四ツ時 公御発駕、西目筋御供御家老嶋津帶刀、若年寄種子嶋彈正、御大身分嶋津玄蕃、同六月四日御参府、同五日上使土屋相摸守様 御出、同十二日之御参符之御札相濟、

古 記(下)

一 富士山燃二付高役銀持高二相掛百石二付忒兩ツ、上納、
一 七月廿九日於江戸増上寺火之御番御当有之、
一 当七月一日より如旧例桜嶋踊被仰付候、依中絶也、
宝永六年己丑
一 四月二日 世子 鍋三郎公於芝邸加元服、公加冠国老嶋津帶刀仲休髮奉命献巳之休字於是世子改称又三郎忠休、仲休初称忠休、忠休之名宜世子故先改称仲休、
一 三月 福昌寺御位牌所御建立、
一 今年諸士出物蔵請取六日切にして次紙用間敷旨被仰渡候、
一 九月 大乘院仁王門之儀此程仁王堂と唱違候由、向後仁王門と唱可申候、宗躰方以後者宗門方と相唱可申出旨被渡候、
一 宗躰座宗門改所と此節被相改候間、向後右之通相唱書付等二茂其通可仕、
一 十月十二日晚五ツ過南林寺松原にて喧嘩、此次第八家村角兵衛江町人咄申候者各御傍輩二伊東六郎左衛門殿と申人每晚町江被成御出、御あれ候由申候二付六郎左衛門江角兵衛しらせ被申候、依之六郎左衛門見届二被参候処二兩人二取逢及喧嘩候由伊藤六郎左衛門殿と偽申候者佐多

四〇五

豊前殿家来片野坂半右衛門と申者候也六郎左衛門を被打
果候、

一十月十五日吉野御閑狩惣奉行嶋津備中・嶋津主計・町田
宇右衛門、沓番・二番・五番組立、

一六月十一日先比屋久嶋江異人參候節首尾好相勤候衆今日
於 御書院嶋津將監殿より御褒美御口上にて被仰渡候、

肝付三右衛門江白銀五拾目新納孫右衛門・東郷三右衛門
江銀五枚寸、屋久嶋之藤兵衛と申百姓江琉米百俵被下
候、

一十一月三日鎚流馬喜入右衛門殿御口藤井源右衛門殿也、

一大分通用之儀差支事有之、下々迄迷惑仕候由被聞召、二
月被相止候事、

一五月屋久嶋之内粟生村と有之候を芋生村と唱候間以來粟
生村と可唱候、尤其所々芋生川有之候間、是ハ芋生川と
可唱候、

一同月屋久嶋恋明村を小湯明村と相唱候間、是又上絵図恋
明村と有之候間其通可相唱候、

一八月廿五日高輪御奈百様・於剛様右両御姫様江戸御立二
て御元江御下向、東海道美濃路大坂より御船中国半よ
り陸路御通、小倉筋十二月九日鹿兒嶋江御着、御用人二

者諏訪次郎左衛門御供、

一八月十三日 公御着城、

一六月廿三日 公江戸御発駕、

宝永七年庚寅

一二月十日新納市正殿頓死被成候、実者自害被成候、此中

河野喜平次殿出火之節、鎌田藤四郎殿と入与為有之由候、

一同十六日東照宮、御遷宮、同廿日御遷座有之筈、南泉院御
遷座二付諸士四月十八日登城、御祝儀御出座、御家老嶋津
中務殿・島津帶刀殿・種子嶋藏人殿・御月番嶋津將監殿也、

一四月廿五日東照宮御遷座首尾能相濟候、為御祝於御本丸

御能興行被仰付候、依之火用心入念候様被仰渡候、

一五月九日於築地御茶屋東郷藤兵衛父子三人兵法被遊 御
覽候、藤兵衛打出江田源助也、

一七月朔日より分沓貫文代銀拾式匁五分被仰渡候、

一七月十八日夜南泉院権僧正於前浜船遊ひ佐多豊前殿より
花火御させ候、五六拾本程花火有之、見物人多し、

一御触七月十四日御寺參之節養仙院辺 御目通に前髪有
之、余り若輩にも無之者共五六人不行跡之様子二而罷居
候、右之者共江名御尋にて候、人々心得に茂可罷成候
間、向方二而も事広聞得候様二大勢江嘶可被申候、大御

目附御側表御用人七月十五日切紙ニ而木脇嘉左衛門嫡子
木脇龜之助・崎元為右衛門嫡子崎元休太郎、大寺五納右
衛門嫡子大寺善助・山元十左衛門二男山元奎之允・村岡
次助、

右之通六与江触衆ニて被仰渡候、

一先比西田川原江御細工所付之者打果し有之、又関喜右衛
門門外にて百姓之頭を打割、其外わやく有之、八月九日
御不審之若き衆被召出、客屋ニて御家老嶋津帯刀殿、肝
付主殿御下りにて被召籠候得共、同十九日如本被召直
候、東郷吉右衛門嫡子東郷半右衛門・小倉与右衛門嫡子
小倉八兵衛・大迫甚七二男大迫藤右衛門此三人也、
一八月十六日今度巡見上使脇元より御当地江御着 太守様
五ツ時分客屋江御下り上使九ツ時分御着ニ而御対顔有
之、同十八日谷山平川江御泊之筈にて鹿府御立候、小田
切鞆負様・土屋数馬様・長井堅物様三人也、何れも四拾
人計之御手廻二候、

一同廿六日未刻 太守様御参勤として御発駕、琉使被召列
候、御家老嶋津將監殿・御用人市來次郎左衛門より琉球
方御家老嶋津帶刀殿・御用人相良權太夫殿
家宣公御代替御祝儀之儀者正使美里王子主従廿人副使富

盛親方主従九人国司継目二付御礼之使者正使豊見城王子
主従廿人副司与座親方主従九人、

一九月十六日より同廿二日迄福昌寺ニ而 大玄公七回忌御
法事御執行有之、

一十一月三日鐮流馬比志嶋兵次郎・五代仁右衛門、

一十二月十日御触有、去月十六日 太守様中将ニ御任官ニ
付、来ル十一日より十五日迄御祝儀可申上候、常式ハ
中将様と不申上 太守様と可申上候、

一十月廿三日夜五ツ時分上浮廻不笠正右衛門殿より火起一
ケ所焼失、

一去年琉球国王城焼失、且其国饑饉死去、凡弍千人、吉貴

公給銀弍百貫目国王救之、

一二月廿二日夜 九ツ時分より下石燈爐半町計下より火
起、網干場迄焼失、町屋數百人、

一正月元日御慎ニ付五社參無之、同十五日ニ五社參有之候
事、

一五月廿日より同廿二日迄於妙谷寺

龍伯様百年忌御弔与方江御禁断触ハ無之候事、

一四月再興 東照宮及南泉院先是光久公時感 東照宮之余
沢普四海万民、結太平之化立府城北移龜田大願寺於其傍

為 台德廟以來世々之神主殿大願寺昔時天台宗也、中比為禪宗寺、中有藥師堂、鹿苑院義滿將軍親書醫王寶殿之額掛堂、有故大願寺廢壞有年矣、水引太平寺之藥師仏八元明帝所製而與比叡山本堂之藥師、京都因幡堂藥師并本朝之為三藥師、故移此額掛太平寺、及 光久公移大願寺於府下返額於本、今猶在南泉院 光久公復寺天台宗無住職之增、至祭祀之時則福昌寺之僧住于此、高原神德院主僧亦來會、

神德院 性空上人開基、初無本寺、寬文五年將軍家綱公磯台嶺門首究台德諸山之本末、於是東武東叡山寬永寺主守宮一品親王尊敬命為東叡山末寺、

此地狹而宮殿亦不广大、至 吉貴公以為未足表神德謝恩

德、終移城西大起土木之功、尽善美再興之、告東叡山五也大明院一品公弁親王准三后、請号大願寺号、於是親王令号大雄山仏日寺、南泉院為東叡山末寺使和州吉野山学頭願王院權僧正智周 或為江州声浦觀音寺 兼任職南泉院四月神社神主殿共成、同十六日遷宮、同十九日遷座寄附四百石之封長使不怠祭祀、

一八月 公卒琉使朝東武、先是去年正月十日 綱吉公薨 六四葬東叡山 實甲府宰相 綱重子也 儲君家宣公 綱重子也 即位、同四月兼任征夷大將軍內大臣琉球国王尚貞卒、其孫尚益即位、故從例琉

球王慶賀使美里王子謝恩使豐見城王子朝東、十一月十一日到東武、十二日以上使勞之、十五日 公登營行述職之礼、此日賜米三千俵、明日召、公營、叙任從四位上左近衛中將、十八日卒琉使登 營、謁將軍晦日琉使至東叡山、十二月二日琉使至老中邸、十八日琉使發東武、国老島津大藏久明、御用人猿渡喜右エ門信安、向井市之丞友貞護之、先島津筑後忠智以一族從 吉貴公至東武、此時共帰国、翌年三月十六日至本府、

一先是 幕府命橋口三郎兵衛安国作兵器幕府襲封也、朝鮮国馳使賀之恒例也、本朝之給兵器亦例也、明年信使將來聘、故使安国刀及眉尖刀二刀成獻將軍、

一二月朔日御普請方被建置候築地以前より築出と唱候得共向後築地と唱可申候、祇園前築地を新築地と唱可申候、一三月口事奉行糺明奉行与唱可申候、口事場を評定所と唱可申候、

正徳元年辛卯五月朔日改

一真幸・吉田衆中先年人を打果し盜仕候様ニ取成事濟候由近き比相頭候、先年遠流被仰付候、于今被召籠候者も有之候、今度人人切腹被仰付候筈ニ而物頭吉田次郎四郎殿・山口左衛門殿、肝煎・足輕兩人・平足輕共十余人召

列、十二月廿二日朝鹿府を打立被表越、同廿六日御仕置有之、吉留弥左衛門磔、同甚兵衛梟首、右二申合候者三人磔、此人數ハ兵具所蔵役二て着込を過分盜取質屋二召置候罪、川内休太郎是者不断光院に參謀書仕候、磔に被行候、

一七月十五日 一長屋門、一北御門、一御退習通御番所、

一山之手御番所、一御台所御番所、一御下屋敷御中間、

一二之口御本門、一二之口御門、一東裏御門、一御下屋

敷御本門、一西之御門、一花園御門、右之通唱可申旨被

仰渡候、

正徳二年壬辰

一七月十七日南蛮舸舶漂串木野之洋中、国老肝付主殿兼柄

卒衆往串木野將進之至則蛮人既去、

時に日高十左衛門を被召列候、是評定所筆者、

一十月朔日府下分諸太夫之列為四等、

一正月十一日表御目付御用無之、重而何そ御見合を以可被

仰付候、被下置候地頭所ハ被預置候由被仰渡候、当地御

当地に被居候御目付本城源四郎殿・相良仁右衛門殿・讚

良權左衛門殿・比志嶋善八殿・別府式部左衛門殿・猿渡

藤右衛門・諏訪仲右衛門殿江戸詰、伊集院嘉左衛門殿、

琉球在番伊地知八郎兵衛殿、此内之御目付ハ重役ニ而此節親規ニ御目付御役初ニ而被仰付候衆ハ町田孫右衛門殿・岩山半兵衛殿・有川幸右衛門殿・大河平源助殿・桂八左衛門殿也、

一七月御使番御船奉行御納殿役人御直触に被仰付候、鐘持

せ候様被仰渡候、

一十二月朔日被損銀之儀唱様小普銀与被相改候、

一六月十四日荒田郡元中取蔵百姓共依願一切被相畳、荒田

郡元中村御当地御蔵江直取納被仰付候、

一五月十四日足輕御中間御小者并家中者其以下之者共於途

中御直士ニ行逢候節雨天二者木履踏なから致礼罷通者も

間々有之由無礼之至候、御直士ニ行逢候節鐘為持候人鉢

二者必木履を拔、慙慙ニ致礼可罷通、其外近付之士二者

木履可拔、近付ニて無之候而も土之見受候ハ、相慎可罷

通、若違背之者者可及沙汰候云々、

一六月十五日 御判物御到来御礼使島津左衛門出立、

一九月三日御格左之通、

一組頭格三男迄者小番、

一直触婚二男迄者小番、一小番之二番ハ大番、

一八月十五日霧嶋山大に火あり、硫黄地より折り大石空に

跳り、火氣炎々として昼夜絶す、其響風雷之ことし、土灰近国ニ飛ひ、近郷田を埋む事数拾里、衆恐怖して或ハ以て山神の世に所謂不思儀妖怪一切にニ而是を悪む、霧嶋山の火のとき怪異といふに異らず、神火と称する事切に是を禁すべし、落木の類のときはを不思儀と云ふへからず、僧徒是等の時乘し変して福とすと称し、供物を求て祈禱を訴ふ、其謂なし、若国家の為にせんとおもは、訴すして自是を祈るべし、国中大に服す、是より後怪異の跡止む、

正徳三年癸巳

一 正月廿日下町大火但木屋町より火出る、同廿三日御米七百俵為御救被下、

一 土屋敷三拾五

一 町屋敷四百拾

一 寺門前九拾貳

一 職人屋敷貳

一 二月二日 日光神社傍有老松、梢分為二、其日生煙明日巳午 又生煙数所大怪之莫知其由、

一 四月廿六日夜四ツ過時分下今町より出火、客屋并天神社諏訪社焼失、東風別而強、大火被成、町惣様焼失、曆々

衆余多御春屋外廻り長屋千石馬場筋下手不残、西田橋より川原迄、天神馬場同断、加治屋町迄火飛、川向ニ二ヶ所焼失、

一 二月三日御步行、目付向役御徒目付と書記唱ニ相唱候様被仰渡候、

一 三月十五日奏者番御番頭之内より御披露之節ニ被仰付候、此己前ハ御用人御奏者此節被仰付候、御番頭嶋津左内、新納左兵衛・嶋津主計・鎌田藤四郎・平田新左衛門也、

一 閏五月服を受候者六月・七月其慎仕来候得共、向後服之者門戸を鎖引入不及相慎、御城内并役所勤無構相勤可申と被仰渡候、

一 宗門手札改有之、四月より

札奉行 入来院主馬・嶋津主計

嶋津左中 中取

平瀬治右衛門

中山一郎右衛門

隈元太一左衛門

但当札改より諸士以下之者妻此以前ハ女房と書記候得共 一統に妻と可書記候、代々小番之家来片書名字ニて何

某家来と書可申候、此以前ハ小番之家来茂依家下人札有之、大番家来書下名字片書名字下人札有之不相并、此節より大番者一統に下人札小番者一統に片書名字に被仰付候、

一今年北郷之称号三男龍岡、実名資之字、川上者安山、実名ハ親之字可相用旨仮仰渡候、

一七月廿五日足輕并諸座付又者諸士之家来、又者寺門前町浜、東郷之内御家御支族之端と申伝候由にて御直別等之家号、又者御家之字名乗来候者も有之由候、向後左に相記候家号又者御家之字名乗申間敷候、川上・佐多・新納・栳山・北郷・桂・喜入・町田・伊集院・龜山・山田・碓山・大島・義岡・迫水・阿蘇谷・相馬・石坂・御直別、又者伊集院町田などの家中慥成者者其家筋之嫡家之嫡子江者被遊御免候、他家江参候得者無御免
一七月十八日左之役々向後外城衆中不仮仰付筈候、右之外為勤来役々ハ已前之通、

道之嶋代官附役人・琉球在番役之内筆者并与力、諸所出物藏役人 諸所下代役人 久見崎御船藏役人 屋久嶋下代役人 京都御裏方御台所役人 京大阪御買物役人 江戸御買物役人 江戸御台屋所役人 江戸御進物

古 記(下)

藏役人 江戸八丁堀御買物役人 御家老旅与力 御旅方役人 江戸御普請方検者 御支配方筆者以上、

一新番と申家格被召立大番家之人、於江戸新御番相勤候人、又者御当地にて諸奉行など相勤、六人賦之御役にて御役御断、又者御免にて当分無役にて罷居候人、九月十一日より上下にて初而御番被相勤候、今日相勤候衆吉田正左衛門・川田曾右衛門、三代程相勤候得者代々新御番と申家格 被仰付由候、

一九月十一日花園御門花鳥御門と被相改、南泉院下馬、乗場脇堀に掛候橋と唱可申候、

一四月十三日御能二付諸士嫡子二男・三男隠居迄見物御免被仰付候、

一閏五月六日之御使内田仲左衛門・海江田次郎兵衛にて候処、於筑前木屋之瀬逢悪党、仲左衛門悪党兩人打果、忝人者手負せ、残者共逃去候由相聞得候、

一十一月三日鐮流馬上村平右衛門・本田新右衛門、

一御役座屋敷 広小路被仰付、御城下より諸座加治木屋敷後に相立候、

一御城下并南泉院下明地二被召成、広小路被仰付、曆々衆何れも引移被仰付被移候、荒田八隣辺田地屋敷割被仰付

四一一

候、御春屋下茂広小路被仰付候、已九月十四日堀甚左衛門御取次ニて被仰渡候、

一十二月廿日実相院下堀に輕橋を掛新仮橋と唱候様被仰渡候、

一六月朔日外城町之儀岡町と唱来候所も有之、不相応之唱候条、岡町と唱候所者向後ハ野町と可相唱旨被仰渡候、

一殿役方并殿役米之事、人馬賦方并賦米と可唱、已八月廿六日、

一三月廿八日伊作与吉郎事、伊作名字名乘来候得共、伊作家之儀者從 貴久公御家為被遊 御兼帯家筋之儀候間、

伊作名字ハ無用可仕候、石見名字拝領被仰付候名乗之字者長之字可相用と云々、

一今年 吉貴公御領内御巡見 五月十一日入
来江御止宿、

写

一与頭・番頭以上之御役被仰付候者子孫迄茂寄合之格ニ罷成候、以前二者右通為定儀茂無之候得共、近年右之通

二候、向後者寄合以上之格式ニ而無之寄合并小番相勤候家筋之内与頭以上之御役被仰付候節其身之御役之格式ニ

仕、子孫者本之稻式ニ而親与頭以上之御役相勤候内茂本之通之筋格式ニ而可有之候、大目付以上之御役ニ被仰付

候節家筋迄茂寄合之格ニ可被仰付候、

正徳三年三月十五日

正徳四年甲午

一荒田八幡宮之脇田地惣様土屋敷ニ被仰付候、荒田江持高有之名寄帳御用候事、

一正月十八日御支族、光久公以前ハ藤原、以下者源姓相用候様被仰渡候、

一二月朔日被露正月廿二日福山佳例川村小藺門名字吉右衛門家作地引為加勢、敷根上之段村脇之脇門清太郎参り壺

壺ツ掘出す、内に古錢九貫八百五拾八錢入為有之由目錄相添申出候、

一十一月三日鎚流馬町田郷九郎・土持助右衛門、

欠落女三拾二三程 おとら

勢中より大ク色色ク中肉少赤めに有之、面少長く鼻筋高く向齒にしろはの様齒相見得候髮黒くけつりからし

右女先比依科一節籠込申付、其後次木之内木浦村衆中江被下候処、右女より鹿兒嶋江用事有之由申二付列越候中

途より致欠落候処ニ比日諸外城江相見得方々にて人をたまし下女又者人之妻ニ茂成暫罷居候内、夫之留主ニ衣類

を盜取行衛も不知迹去候由申出候間、所中江申渡若於罷

居ハ堅固ニ留置可申旨被仰渡候、

一 四月廿七日おとら相捕、下町江預置候処、困を破り行衛不相候間、夜前より罷出、于今不入来者於有之者、早々申出候様五月朔日御触有之、

一 八月十一日八ツ後嶋津内記殿宅江猿渡喜右衛門殿御用ニ而被召寄上り屋江被召入候、当分町奉行被相勤居、跡屋敷門ニ而親父猿渡要人殿御用人御役三番組頭被仰付、当分在江戸也、

一 十月十六日夜猿渡要人殿江戸より下着、主従拾人之手廻也、新御番高田伝兵衛殿・御步行堀切清左衛門殿・山元佐右衛門殿相付被参候、同廿六日要人殿江被仰渡候御口上嫡子重き亡出仕候ニ付、猿渡被召禿、徳之嶋江遠流被仰付候旨被仰出、二男鮫嶋次郎左衛門事養子ニ而候処違変被仰付、沖永良部嶋江遠流、藤右衛門妻者悪石嶋江遠流、藤右衛門事ハ於上り屋くびり自害、死取捨捨ニ被仰付、要人遠流ニ付物頭山口左衛門・中嶋七右衛門ニ而候、要人遠嶋之支度黒縮緬之羽織袴、藤右衛門妻者三拾計綿ほうしかむり船兀江為被参由候、右家来下人男女其に御春屋江揚り物に罷成、諸人鬪取ニ而代銀申受被仰付候事、

一 霧嶋山社頭寺院先年焼失ニ付為御再興、高老石ニ付真米

老合ツ、百姓より勤化、三ヶ年被仰付両年分者去亥年巳年両度上納済、今一年分ハ当年上納被仰付候事、

享保元年丙申七月朔日改元

一 三月三日瀬戸口馬場馬乗之時有川五兵衛息原口保庵二男と喧嘩、

一 三月より坊津一乘院宝物大乘院脇ニ而開帳追入物鹿屋より参候、一寸坊鹿野屋浄連寺門前市左衛門弟慶伝坊年廿七、山伏大指長く手足短し、其長二尺二寸有、四月に至て大女追入に出る、

一 三月廿六日御仕置者拾老人先比欠落致候おとら鹿児嶋中引廻り牛掛ニ而磔、

一 上方若き衆萩原善助嫡子と聊止十一人閉門、町田越右衛門弟赤塚源太左衛門嫡子川上長左衛門二男森清兵衛嫡子川上半兵衛嫡孫、

一 国分宮内原御新田汾陽四郎兵衛・土師孫右衛門江被仰付置候、当五月比成就、

享保二年丁酉

一 四月八日浄光明寺 不断光院等焼失、

七日上市来六郎右衛門より火起、浄光明寺炎上、

土屋しき廿七ヶ所立野・冷水迄焼、火飛立野宝球院・
般若院類焼、

一 正月七日雪今日より廿一日迄霧嶋時々大焼、七日昼八ツ
過時分に成候得者鹿府より火光見ゆる、同八日夜五ツ時
分神火夥敷其晩に成程晴、夜同十日昼四ツ時分より同十
一日九ツ時分より大焼、砂石はうすく一時二時計ツ、間
有之、壹時歟半時歟ツ、焼候、正月七日降砂、石山之口
にて例見、此中よりハうすく壹歩に壹斗三升計にて候
由、今度砂降候、外城高原・高崎・野尻之内、高城・山
之口、都城之内也、

一 今度高原・高崎表霧嶋度々大焼二付、為見分御目付横目
被遣置候処、正月十七日帰宅ニ而首尾被申出候、後表高
原・高崎衆中百姓皆共に岸有之所ハ元を拵、岸無之所者
庭を堀大竹を以塩屋之様に拵上者茅を葺、其上に野芝を
打掛置候、野山道江者大小之石落候而少々之焼者不絶有
之、砂降世間曇天ニ而道を行候時も半首をかむる、就中
高原之内ニ而も花堂之在所壹宇も不残焼払、大木立なか
ら枝を打落し怪我人余多牛馬之飼料も近外城より入付
候、絶言語候事之由被申候、依之右片付方として大御目付
義岡右京殿・御用人谷山角太夫殿・高原地頭左近允与太夫

殿其外地頭之衆御目付横目被差遣候、当正月十一日御改、
一 砂入外城拾式ヶ所

一 焼失家六百四軒 一 焼牛馬四百五疋
一 怪我人三拾三人

一 田島六千式百四拾町八反六畦拾六歩

高にして六万六千八百八拾式石余損地ニ相成、

一 六月十一日 太守様御暇御給、

一 八月十五日四ツ半時御着候、

一 七月廿六日九州表巡見上使三人御到着、

一 十月四日嶋津淡路守様為御見廻御当地江被差越、

一 同月廿三日於兔様御下着、去冬松平飛驒守様御方より

御不縁にて八月三日江戸御立ニ而御下着、信証院様御

一所ニ被成御座、

享保三年戊戌閏十月

一 三月御家老与力旅与力迄四人ニ而候処此節より三人ニ被
仰付候、御用人役茂兩人ニ而候処、壹人ニ被召成候、

一 六月十七日御家老杯之様一月ツ、相勤候者月番御近習役
并御納戸奉行杯拾四代相勤候者御用番御小姓類非番当番
有之者当番と唱可申旨被仰渡、

一 六月 太守様御齒御痛御立願御成就ニ付山之口地藏菩薩

江香炉 鑄師鳥井甚左衛門為紀 御寄附、

一今年 御前様御病氣有之、二本松地藏江御立願被為在候
処、御平愈被遊候二付 思召を以山之口江御建立被仰付
候、上様より茂御寄附有之、其外役々諸士之寄附を以
御建立、寺社方検者付修甫所二成候事、

一正月御側御目付之儀御近習役と唱被相改、

一義弘公百年忌之御弔、於伊集院妙円寺御執行有之候二付
殉死之子孫可相詰旨被仰渡戊七月十九日より相詰候衆、

木脇嘉左衛門名代 山路後藤兵衛名代

木脇伊左衛門 山路小左衛門

椎原休左衛門 池田団右衛門 相良弥五右衛門

新納宅右衛門 藤井休左衛門 藺牟田次左衛門

原 休右衛門 加治木 折田市左衛門 上同 入枝佐五右衛門

上同 色紙仲兵衛 坂元萬左衛門名代牛根 篠原筑右衛門

一七月廿九日御格左之通

一寄合以上之二男三男八代々小番四男八大番、

一寄合并者二男迄代々小番三男より大番、

一御切米之儀者むかしハ五人飯米と云、此年八月御切米と

唱被相改候、

享保四年亥

一二月上下弓場鉄炮場普請之儀向後普請方二被仰付、模合
方御取替を以出可被置旨被仰渡候、

一二月十八日御家中之面々比日別而難続之由候、於旅召置
候家来共向後者心次第勝手宜様二可相減候、其外段々被
仰渡候、

一六月十四日諸士拝借取込り候等或年延或年府内払捨り之
訴訟今日迄者其身書物二小与頭次書与頭奥書を以申出来
候得共不及其儀、自今以後其身訴書直二御勘定所江可差
出候、外城衆中茂同断、

一高壺石二付出米壺斗壺含、真赤半分内壺含、苦勞米、

右近年御物入之儀打続御勝手向御不自由、金銀引替御物
入増候二付被相掛候旨七月朔日御触、

一十一月三日鐺流馬新納右衛門・比志嶋兵次郎、

一十一月 鳥吹御法度、持合之者御取揚被仰付候、

一十一月十一日座付士之儀何方座御赦免士と唱事有之、右
御赦免と唱候事如何候間、向後何方座御赦免と唱不申、

何方座付士と唱可申旨被仰渡、

一吉貴公御滞府けんとの御煩有之、長々御不快被遊御座
為御養生御願之上江戸中御步行被遊、御供人数五六人被
召列、御草取り茂不召列、御袴御阿ミ笠被為召御供人数

支度茂同前二而四寸股立列立之様ニ言葉も成程軽く 殿

様と不見得様ニ片をならべ小道具こま物屋杯のミせ先に

御立かゝり并見せ物芝居の辺人込之所方々御步行被遊、

出火杯之節者御供之衆心遣千万と云々 富山義智日記

一 六月十六日 太守様江戸御立十月廿一日御着城、

享保五年庚子

一 正月出水加志久利大明神薩州惣廟と唱来候得共向後惣社

と唱候様被仰渡川内之文字川内又者千台と両様ニ出来候

得共御調進之御絵図川内川と銘書有之候条向後川内之文

字相用候様ニと被仰渡、

一 当年二月於江戸 吉貴公依御志願国分正八幡宮別当弥勒

院御再興之儀被仰出候、当寺者性空上人開基之寺ニ而候

得共中古致廢壞其通ニて有之候故也、伊集院来迎院憲英

江住職被仰付、東叡山室格ニて大僧都勅許之儀御願被

成、住持憲英当二月十四日東叡山御本坊江院室并住職之

御礼申上、院室大僧都之令旨頂戴仕候、憲英事猶父石井

宰相行康卿江御願被成候、東叡山六世崇保院准三后一品

公寬親王、

一 九月廿五日上使を以 繼豊公初而御帰国之御暇御給、御
時服五拾御拝領御登城ニ而御礼御馬御拝領、

一 十一月五日 繼豊公東武御立御家老北郷作左衛門久嘉・

御守役御番頭格相良新右衛門長賢・御用人高橋外記種長

・三雲新兵衛貞經御供、翌年正月五日鹿兒嶋江御着、

一 四月十三日甌正左衛門自宅ニ而客被仕喧嘩、正左衛門殿

客を被突殺候、切腹、持高式百石余半地被召上候事、

一 公儀御用ニ付鍛冶喜入之玉置小市安代・鹿兒嶋西田町之

宮原清右衛門正清、江戸江被差登候、公方様御腰物御用

之由候、

一 山之口衆中朝倉甚五兵衛石火矢細工仕候付鹿兒嶋士ニ被

召成候、

一 今年 吉貴公薩州出水加志久利大明神別当寺御取建ニ而

幸善寺と被申候、此寺者栗野に有之廢寺ニ而元来鹿兒嶋

大乘院末寺ニ候を此節御再興ニて真言京都智積院直末寺

ニ被仰付、寺高百四拾八石壹斗貳合五勺四才被召付候、

外ニ高六拾石ハ神領ニ候、寺格之儀着座無之門首ニ被仰

付候、

一 六月廿六日宇宿勘左衛門行道 勘兵衛行衛門 眞嫡子 伊集院甚右衛門 仁

嫡子喧嘩、行道行年拾六才 無天性月 居土 甚右衛門法名瑚月良

珊居士、

一 御兵具所座附土竹之下覺右衛門事、先年御城回録之節別

而出精 忠久公御鑑守出且又塩硝樋を茂持出、段々相働御奉公相勤候二付、此節表方江被召出候、子六月二日御取次中神与五左衛門、

一八月廿三日 太守様御発駕、

享保六年辛丑

一二月九日江戸高輪御別業焼失、

一今度宗門手札御改二付手札新札相用候而ハ諸人物入も有之箸候間、此節古札をしらけ用候様七月被仰渡候、

一十一月三日鐮流馬毛利善太夫・松崎十郎左衛門、

一十二月弥勒院寺格之儀着座門首大乘院上二被仰付候、

一七月八日家之絵図を御国元二而者差図と唱来候得共、向

後家之絵図と唱書付等二も相記候様被仰渡候、

一吉貴公御隠居早速御中奥御部屋二御移諸役人別而少人数

被召列候、

一六月三日 太守吉貴公御隠居之御願書戸田山城守様江被

差出 鳥居丹後守忠利

吉貴公御名代二御登域にて被差出云々、

一同九日 隅州様御事 太守様御名代 鳥井丹後守様御同

道二而御登城、御老中様御列座御用番山城守様より御願

之通御隠居、隅州様江御家督被仰渡候、

一右二付六月廿六日与友之諸士并諸寺院御祝儀申上候、

一六月十一日 吉貴公上総介様と御改名 総州様と可申
上旨被仰渡候、

一同廿八日 太守継豊公御登城御家督之御礼鳥井丹後守様

吉貴公御名代二御登城二て御隠居之御礼御太刀御時服二

拾、御馬代銀拾両、正宗之御太刀、利休茶器 吉貴公よ

り御献上、綿百把、養朴五福、神画家宣公夫人天英院様

江御献上、

一今年比志嶋隼人事 総州様御部屋栖之時分より首尾能御

奉公相勤候二付御高三百石拝領被仰付候、

一五月九日義岡右京事 義岡家相統被仰付、御高五拾石被

預置候得共、御取建之家二付拝領、嶋津六郎次郎事薩州

家三男嶋津備前忠清後嗣被仰付、御高五拾石、右同断候

得共御取立二付拝領、

一六月九日 継豊公御家督、

一同廿八日御登城 將軍吉宗公江御目見、御家督之御礼一

備前元重御太刀 一御時服五拾 一御馬代銀千枚御進上

嶋津玄蕃久幸 嶋津内膳久與以上

種子嶋津正伊時 名越右膳恒渡御家老

三雲新兵衛定恒 御番頭 二階堂新五右衛門行篤

宮之原甚太夫重行 伊地知權右衛門盛央

古 記(下)

四一七

福山平太夫安村九人御目見

十二月十八日左近衛少将二御任官 御位階
如元

一当年 公六諭衍義を 將軍家ニ献上被遊候処、室新助直

清江被仰付 仮名文ニ被相直候而板行被仰付候、

但此書者大清国康熙皇帝諭告之書ニテ琉球国江相伝候而

程順則國中江相諭候ニ付被召寄御献上候、

享保七年壬寅

一二月七日 幕府召 繼豊公於宮中賜吉貴公帰国之暇、且

給道服五領、同十六日吉貴公於東武帰国、四月廿一日入

鹿府修大磯別業居焉、自是有微恙不再朝、

一正月十三日 太守公御任官之御祝儀、

一八月廿八日今度御家督、初而御下向ニ付諸役人江御料理

被下候、

一九月三日於御対面所諸士江御料理被成下候、

一六月廿三日 太守繼豊公東目筋御下向ニテ御着、

一十月今度御家督初而御入部ニ付奉祝、士踊備上覽旨被申

出御免、此節より御犬垣ニ而踊仕候、

一御分国中大御支配被仰出、十一月郡奉行諸外城江被差廻

候、片付表ハ後醍院喜右衛門殿・川上源助殿・祢寝甚兵

衛殿、其外諸外城江差入也、

一十一月十五日 総州様聖之宮江御參詣、為御參錢百疋御

進納、菌田清左衛門実秀代也、直ニ相良大蔵野屋敷江被

遊 御入候、清左衛門より手作大根を進上す、

一月十五日 公御登城ニ而御礼御馬御拝領 於喜代様
御縁与ニ付而也

一初而御帰国仰出

今度 総州様依御願御隠居我等家督無相違被仰出候、

領国中之輩専重 公儀之御政道万端可相慎之、国家之

仕置、総州様御代之通申付候条不致忘刻、堅固可相守

之也、

一二月朔日 原良山王の社に若木の桜拾本余栽候事、美代

六郎兵衛・寺山左次右衛門其外多人数をのゝ歌を詠し

其志を誼ふ、

一此年磯御屋敷と被定御普請有之、御引移、

享保八癸卯

一五月九日御下屋敷御庭普請ニ付六組諸士嫡子より二男三

男当分勤無之者今日より朝五ツ時罷出、御門番江相断、

御門前に差扣御差図次第相勤候、一日に五拾人ツ、上へ 本ノママ

何れ茂中帯ニテ罷出相勤候事、

享保九年甲辰

一正月元日五社參、組之諸士御供、

一二月三日於吉野御関狩、惣奉行嶋津主計殿・嶋津市太夫

殿・種子島平馬殿、三番組・四番組・六番組罷登候、朝

雨天昼より晴天、

一右御関狩ニ若キ衆鉄炮多打候故、夫より野火起候、同四

日御関狩ニ罷登人数御用廻候、鉄炮御定之外打候事、野

火付候事、異様之支度仕候事、右三ヶ条御詮儀三番組者

島津藤次郎殿宅、四番組肝付典膳殿宅、六番組者町田宇

右衛門殿宅、同十日迄も御詮儀ニ而閉門被仰付候衆余多

其外出家杯不被仰付衆も有之候、

一九月鮫嶋仲兵衛殿江盗人入、元禄銀五貫目盗取候、引替

之節不差出咎ニ依持高貳百六拾石余半地被召揚候、

一八月磯御飯屋与唱書付ニ茂其通致事候得共、向後磯御屋

敷与唱候様被仰付候、

一村田平右衛門弟村田清右衛門事、去ル三日御関狩ニ罷登

候、組ニ而も無之候処、異様之躰ニ而罷登三番組串目之

場ニ罷在、玉目五拾目之鉄炮を

鉄炮外猥ニ下人ニ為打自分ニ茂鉄炮打其上右下人鉄炮

打候処より七八間風下ニ而野火起、右不屈ニ付切腹可被

仰付候得共、総州様思召之訳有之、再三被仰進趣有之、

切腹之儀被成御免、命を被助、土被召救、出家ニ被仰付

候、

一六月十五日継豊公賜嶋津周防久儔隅州肝付郡大始良郷木

谷村 周回三拾四町四拾間
高五百五拾三石 明年七月改花岡又有命曰花岡之

地狭少故大始良野間村八百石替久儔化所之領地賜之、

久儔

久尚

虎徳丸・三郎五郎・周防 大蔵・牛次郎・周防

久通・久陳・忠英 久品・久章

元禄十六年六月十八日從 綱貴公 享保十二十二月廿

一日

始入薩州享保十四年十月三日卒四拾三 尚吉貴公女

久敦

久次 又八郎 播磨 宝曆元年元服

二女円徳公夫人

一十二月湯和院様御位牌弥勒院江御安置ニ而御廻向可申上

旨被仰付候、

一当秋磯浜边江新道出来往来有之候事 享十三年
二も敷

一近衛家久依貴命 宮原清右衛門・王置小吉江被仰付御

太刀一腰ツ、為御作ニ而御献上候処御褒美不斜、兩人江

白銀并堂上方江寄合書六歌仙老通ツ、御給被成、御目錄

并諸太夫より到来候、

一十二月廿六日公御發駕、
享保十年乙巳

一六月四日・五日於吉野狐狩被仰付罷登候人数磯天神下浜
江朝六ツ時ニ可相集候、年拾八九才より四拾迄之間一小
与より耆人ツ、熊手棒持參可致候、上之与及兩度狐取得
差上候得共、下之与取得不申不手涯ニ相見得候段御意
討、同九日狐狩前髮取候者四拾以上迄朝六ツ時可相集
候、下人等召列候儀心次第病氣者証文、同十一日又々狐
狩一番組より四番組迄罷登候、同十四日五番組・六番組
罷登、狐式疋取差上候、同十五日一番組より四番組迄狐
狩五拾以上之者与中不殘罷登候、手棒持參、朝六ツ時狩
取者耳取、同十六日一番組より六番組迄惣樣罷登候、同
廿一日下方与 狐狩帖佐衆中谷山衆中迄被召立、磯鳥越
并御囲内犬なしの狩集者稻荷之辺磯茅おろし迄狩申候
事、
一七月卅日嶋津周防殿 拝領、大始良之内木谷村ニ又大始
良之内野里村之内ニ而八百石相添、二ヶ村ニ而一所之地
ニ成、依願花岡与被改、
一七月廿八日諏訪神事頭取左志波藤右衛門弟右岩山半左衛
門弟、

一十月十四日中務殿より被仰渡葵之御紋之儀 公儀より被
仰渡趣ニ付而男女共々衣類者勿論諸道具等ニ至迄附間敷
候、拾文字之儀者少ニ而も似寄候、御役所附申間敷候、
先年段々被仰渡趣有之候間、弥其旨を相守可申女童以下
かうがひすかし等ニ茂無用、

一十一月三日鑄流馬新納五郎右衛門・若松平八郎、

一九月諸人より何角ニ付組江相付申出候、書付ニ宛所又者
文書之内ニ茂御与所与書認候得共、向後御之字相除与所
と可書記旨御仰渡、

一龍洞院事、吉貴公御再興ニ付為寺領今年繼豊公より御高
百拾七石七斗四升五合八勺五才御寄附、総州様より御高
百七石七斗四升五合八勺三才御寄附有之、

一大般若經六百卷一部六箱 吉貴公御夫人様より御国家安泰
兆民快氣為加紫久利大明神神殿に御奉納、当年二月義岡
右京久守・比志嶋隼範房副状有之、

一今年磯御屋敷江御奥初而被召立富山伝内左衛門義智江納
戸役人被仰付候、

一十一月十一日公江戸御發駕、十二月廿六日御着城、

享保十三年戊申

一当四月初より笹実取候出精申候得共、耆人ニ而二駄程茂

取候而諸外城大かた如斯、庄内方二而者都城山田浦・安永浦江多ク有之、当秋大飢饉ニ付此実を食助命云々、

一 二月五日御関狩於谷山被仰付候、集者落し上物奉行種子嶋織部殿・嶋津仁十郎殿・北郷四郎殿当年より春山・谷山兩所ニ而替々御狩被仰付候、鹿兒嶋三組罷登来候得共、二組ツ、二被仰付、三ヶ年二一度ツ、外城も同断、

御狩賦

当申年登り前
一 三番 四番組 谷山 知覧 山川 川辺 加世田

田布施 伊作 久志 鹿屋 指宿

一 二番組六番組 伊集院 喜入 坊津 川辺郡 山田 日置

吉利 川内 山田 樋渡 隈之城

郡山 永吉

来々戌年登り前
一 一番組 五番組

帖佐 入来 吉田 山田 阿多 百次
薩州 隈州

串木野 桜島 加治木 穎娃 市来

一 隈之城 入来 百次 桜島 加治木之儀已前谷山春山江

不罷登候得共、当年より三年二一度ツ、狩立故新規ニ狩立申付候、

一 鹿兒嶋名狩立被差免置候得共、三年壹度ツ、以来狩立申付乍然、花野村・塩屋村・西田村・吉野村・下田村・小

野村之儀跡々より御康関狩ニ不罷登由候条向後共々被差免候、

一 以前者御名代を初御扶持米送人馬為被下事候得共人改ニ此節より被仰付候旨段々被仰渡、

一 五月十一日於芝御屋敷涉、谷喜三左衛門貫臣女於嘉久腹ニ

公御男子様御出生奉称

益之助様宗信公

但御懷孕之時侍医馬場長堅胎教之儀を申上候付、其通

被成候、其後長堅嘶ニ此御子様御形容御正敷御成人

之上者御賢君無疑与為申由候处、果宗信公与奉申上

候而御賢君ニ而被遊御座候、

一 当三月廿六日於嘉久部屋出来成就移初之節、羆老羽飛来

候ニ付、相捕へ置候处、殊之外人馴罷居、又羆五羽屋上

ニ舞候を人々見候而御出生様々嘉瑞ニ仕候、依之絵師押

川元春木村探元 門人早世被仰付候、右之羆を御画かせ被遊御記録

奉行町田仲右衛門俊雄江右之記を御かゝせ被遊候、

一 十月継豊公御志願ニ付御刀八幡北国治国造 拵書添

一 腰八幡新田宮江御寄附有之、

一 孟宗竹琉球江相渡、薩州江其後取寄、此比方々江植付、

竹老尺廻竹之子正月比出候事、

御城近辺出火之節心得之覺

一御本門固之儀兼而被仰付置候通可相心得候、

一昼夜共御本門橋口江物頭老人御目附老人肝煎老人足輕三人罷居駈付人数之内町奉行御役より以上者家来老人草履取老人召列、外之供者外供屋江残置候様申置、夫より以下之人者草履取老人列通候様可申聞候、夜挑灯燈候者者格別之事二候、

一右同断唐御門前二者 甲駈付候御用人老人物頭老人、肝煎老人、足輕式人罷居、御本丸二而改差通候上家名参先承届可差通候、前条定之人数外召連候者其者者外供屋江遣候様可申達候、

一夜中北御門通融之儀 御城内花相見得候程之急火之節者御番頭見計を以大番人四五人程ツ、御門固差遣御門番江致下知駈付之人数可差通候、平日昼者北門より通融有之事候条、出火之節者大番人兩人程固ニ遣通融可為致候、一昼夜者御城内江多人数入込事候間、横目式人足輕式人ツ、二手二而行廻胡乱成者可相改候、

一御目付之面々御本門北御門惣而多人数籠合之場所江無間断行廻、狼無之様下知いたすべく候、

一御供番被仰付置候面々宿元近辺之出火二而難迎者者格

別、其外之者者御城江駈付、御本門橋より西之方御堀端江扣居差図次第可相勤候、

一早鐘突候儀者兼而万端方限を為被定置儀ニ而為差当事候間 御城内之諸座兼而被仰付置候首尾人者早々駈付御座を明相詰居候様可仕候、

一諸士上方之火事二者下方之人数、御城江駈付下方之火事二者上方之人数、

御城江駈付候様兼而申渡置候、弥其通可相心得候、

一護摩所御厩江茂御用人老人ツ、罷越居可致下知候、人数入用之節者御本門迄申越候者駈付人数見合を以可差遣候、

一駈付人数之帳面自今以後者御本門丸橋涯東之方御堀端ニ而可仕候、

右之通相心得候様首尾相係候、御役々江可申聞置旨享保十三年申二月中務殿より被仰渡候事、

享保十四年己酉閏九月

一五月黄檗寺御再興、此寺と大玄院様御領内ニ黄檗宗門御取建御志を被為説

信証院様より吉貴公江被仰進取有之、雖為御隱居為御名代真言宗大乘院末寺西田了姓寺末院地藏院之廢号ニ而御

再興、山号寺号之儀住持玄黙より元持山寿国寺と願申出候事、

一当夏御取建之黄檗寺 願之通元持山寿国寺と寺号去八月被仰付候、左候而開山万福寺大光国師二代南源三代鉄梅四代者千指、是迄者勸請住持五代玄黙被相立候、
一十月 大玄院様御位牌寿国寺江住持より御安置仕候様被仰渡候、

一去秋諸外城飢饉、然共米直段不高、至当分高原・高崎辺之儀錢百貫文真米五升程之相場ニ而古老之衆ケ様之下直覺無之由、

一去辰年以来和田次兵衛・和田源右衛門・長谷場権兵衛・加藤堅助并和田次右衛門家来花北清右衛門銀子借付、又者右之人数より致借用、両替等委數大御目付座江可申出旨正月七日与中御触流を以被仰渡候、

一正月八日被仰度欠落者和田次右衛門家来花北清右衛門年三拾三、旧臘廿二日宿元を出、御当地立退候旨相聞得候、其以後自然立帰、隠居儀茂可有之候条入念相改候様被仰渡候、

一九月琉球人唐より火なしに塩を取候事、稽古仕参候由申出二付、鹿兒島塩屋ニ而稽古被仰付、郡奉行土師孫右衛

門・平田平六杯被参候、

一去申秋諸所笹に実成候処、今年ニ至り諸々唐竹枯捨り一円ニ唐竹無之事罷成候、

享保十五年庚戌

一欠落者御触有之候段直二年書ニ而欠落もの共無之事、年卅四和田次右衛門家来花北清右衛門被召込置候処、昨夜中牢を破り出行衛不相知、長々被召込置候二付、髮髭はへ可有之候得共、自然様躰を替居候事も可有之候間、随分入念相改候様、正月三日被仰渡、

一清右衛門牢を破り出候夜者雪天ニ而候処、本主人和田氏所江盜ニ入鏡餅其外段々盜取、稻荷座主宝持院に忍入刺刀箱衣を盜取、自身致月代家之姿ニ様を替、上方諸所ニ忍入盜仕候二付、鹿兒嶋中夜廻段々有之候、尤近所々山狩被仰付、所々狩申候処、西田山王山に忍入候を正月九日八ツ時ニ狩取候事、

一六月廿一日肥前結桶ニ而有馬刑部殿・赤塚利右衛門・阿蘇越右衛門殿喧嘩也、利右衛門・越右衛門兩人を刑部被差殺も翌朝刑部切腹候旨相聞得候、何れ茂江戸詰ニ而下之節也、利右衛門者御馬廻、越右衛門者新御番、依之刑部跡被召禿、半地被召上、刑部嫡子者祖父多門跡被仰付

候、兵道者二而候、

享保十六年

一御番ニ付夜兩度之御座廻り仕候節者御番人刀大小帶候様被仰渡候、

享保拾九年甲寅

一三月廿九日大馬場名字之儀向後大場ニ被相改候旨被仰渡候、

享保廿年乙卯壬三月

一十月二日夜八ツ時福昌寺本寺中より出火、翌日朝迄及燒失、寺同少々残、

元文元年丙辰五月七日改元

一正月鳴津備中殿宇宿道仙老野屋敷境論道仙松を伐候儀付道作養子宇宿十郎左衛門横目御免ニ而帖佐江寺入取納借し高千式石借置候銀子拾式貫目御取揚ニ而道仙事者屋久島江隱居被仰付候、

一山之口・梶山・穆佐・倉岡在番之儀被相止、表横目六ヶ

月詰ニ在番ニ而押之様当八月被仰付候、

一二月廿一日喧嘩有之、

一二月十一日信証院様市来江御入湯、

元文二年丁巳閏十一月

一正月廿九日信証院君市来江御湯治、

一九月加治木本誓寺御目見寺々被仰付候

一当寺開山運誉上人筑後善通寺住職ニ而罷在、天正十二年龍造寺隆信没落之後彼国之僧俗諸方江退散、其時分

新納旅庵出家ニ而肥後八代庄嚴寺ニ住持ニ而右運誉旅

庵江心易候故、庄嚴寺江參り、旅庵附状を以薩州江罷

下、泊之道場法光寺罷在、翌十三年如肥州罷帰候処、

最早属御家候ニ付、運誉事、甲斐宗運館ニ而初而

惟新様江御目見仕候、然処ニ肥後之内合志郡住吉光明

寺を被下、此寺智恩院末寺之由候、天正十五年秀吉公隈

元江御動座之内、運誉重而薩州江下向、不断光院江罷

居、翌十六年飯野江參上仕、新納旅庵以御取次、寺地

之願申上候処ニ御免被仰付、帖佐願成就寺開基仕、慶

長元年不断光院江入院、其翌年本誓寺開基仕候、右由

緒を以此節御免也、

元文三年戊午

一信証院様志布志表より佐多迄神社方々江御參詣、山川よ

り喜入筋御帰館、

元文五年庚申閏七月

一二月廿日新やしき猪賀倉伊右衛門火元ニ而昼七ツ過より

七ツ半時分迄武之橋を限り御船手御役所者残し出火也、

一屋敷七拾六ヶ所 一家数貳百三拾三

一米百五拾貳石壹斗貳升

一粟拾貳石壹斗 一大豆七石壹斗五升

一怪我人貳人 一死人三人 池水仲右衛門殿
帖佐七右衛門之親父、

一四月 江田仲卜娘おりく無調法之事有之、磯より御暇被下候、是嶋津周防殿懷也、

元文六年辛酉 寛保元年也、三月三日改元、

一正月四日西田町水上之方より火起り三ヶ所焼失、

寛保二年戊

一御領國中御廻文を以諸寺院等之由緒札有之、

延享元年甲子

一八月七日朝辰刻地震、同十日大風、鹿兒嶋諸所も降候、

延享二年乙閏壬十二月

一六月岩山金右衛門殿息頭殿被仰付置候得共、御免ニ而川

上助右衛門之息江被仰付候、同十五日金右衛門之屋久島

隠居被仰付、持高八百三拾石余之内半地被召上候、

一十一月十四日築地諸御役座御下屋敷御長屋江引直有之、

一御所帯方難被統候ニ付御分國中高壹石ニ付五升ツ、無

高之人数以下人別壹匁出銀牛馬船迄も出銀被仰付候、

延享四年丁卯

一四月鹿兒嶋南泉院南林寺諸所松ニ虫付廿四ヶ名百姓共虫
踊有之、

一於江戸細川越中守様八月十五日御登城雪隠ニ被成御座候
処、御旗本板倉修理太夫様御切付被成、翌十六日御卒去

ニ付九月七日より同九日迄鹿兒嶋鳴物遊興ヶ間敷儀御停
止、

一総州様御養生無御叶御逝去ニ付、山野殺生卅日相止、御
直士日数三拾日月代仕間敷旨被仰渡候、

一十月十四日 浄国院様磯ニ而御直り被遊候、同廿三日戊

亥刻磯御屋敷 御出館ニ而新道通御通路浄光明寺江被遊

御移、御寄合以下諸士町田源左衛門之屋敷辺より二王門

辺ニ罷在御通御跡より浄光明寺下迄御供仕候、夫より何

れも退去、同廿五日於浄光明寺御葬礼、寺内手狭ニ付諸

士於坂下御帳ニ相付退去仕候事、

一十二月磯御方御役人依願御役御免、来年頭供定染代定、

其外段々被仰渡、奉公障り小普請御赦免、籠舍出牢被仰

付、其外段々難有御意等為有之由、

一浄国院様御葬送ニ付役儀被相勤候人数左之通、

一御葬馬老疋 蒲生衆中 右 梶原清左衛門

浄国公御葬

左 梶原善助

札者寛延元年ニ書入ベシ

鹿兒島衆

一御燈爐四ツ 老人ツ、

木藤次右衛門

鹿兒島

木藤彦七

右同

木藤休五郎

右同

木藤七右衛門

但 一休五郎此節若年故ニ不及剃髮

介抱人木藤彦右衛門相付相勤也

一御播四ツ老人ツ、

同

中村与太夫

同 中村勘右衛門

串良衆中

同中村孫右衛門

鹿兒島衆

中村東之坊

指宿衆中

長野筑右衛門

一御香炉

御香合但白木足付八寸ニ受ケ持之 指宿衆中

一御茶洗御茶杓

但白木足付八寸ニ受ケ持之 長野市左衛門

一御湯御さし

但書同斷 長野六右衛門

一御花瓶

但書同 財部衆中 長野助七

一御燭台

白木八ツ受燭台 火を付燈持之 長野四郎右衛門

一下炬松明

白木前卓ニ受持之 長野次兵衛

一御茶湯提子湯を入而持之

かこしま

長野善右衛門

一御位牌

御名代

嶋津備中殿

一御鬢髮守

伊地知新太夫

池田仙右衛門

一御棺守

前

新納四郎

後

鹿兒島衆

北郷権八

一御太刀持

本田次郎右衛門

一御天蓋

猿渡勘左衛門

君家累世御城代御家老記 全

君家累世御城代御家老記

御城代ノ事上古二見エス、家久公ノ時俄ニ御出陣ノ事アラン、時ノ為トテ島津豊後久賀ヲ御留守居ト仰付ラル、其後ナシ、光久公ノ時北郷佐渡守久加ヲシテ御留居役トス、今ノ御城代ナリ、御家老ノ事諸家大概記ニ守護ト記ス、即今ノ御家老ナリ、

○豊州家六世久朝ノ子ナリ、後豊前守ト称ス、

島津豊後守久賀

君家累世御城代御家老記

○平佐家二世ニシテ三久ノ子也、寛永六年丙午八月十七日ヨリ同九年二月御免、余ハ御家老ノ場ニアリ、

北郷佐渡守久加^{マス}

○知覧家十五世丹波久利ノ後嗣、実ハ光久公第八ノ子也、延宝四年丙辰十月ヨリ御城代、八年庚申御家老兼、元禄十丁丑二月御城代一篇、正徳元年辛卯吉貴公久達ヲシテ島津氏ヲ冒スコトヲ免ス、是三朝ニ歴任シ私ナキヲ賞スル所ナリ、享保三戊七月御免、在職四十三年、年俸二百俵ヲ賜テ老ヲ家ニ養ハシム、

佐多豊前久達

○佐志家四世享保四己亥十一月ヨリ諸本不詳

○忠教按ルニ西藩野史曰、光久公治世ニ当テ從白^{名於下}

ノ遺領ヲ久近ニ給ヒ、更ニ家ヲ樹ントス、然レトモ久近又五郎ト称ス既ニ久元三男タリ、於下又女子タリ、共ニ始祖トスヘカラス、故ニ家久公ノ次弟久四郎忠清、文禄四年七月四日卒シテ嗣ナシ、故ニ久近ヲシテ其後ヲ嗣シム、久近亦子ナシ、光久公第七子又六久峯ヲ子トス、又子ナシ、公十九子久當ヲ子トス、後ニ將監ト称ス、貞享三年

老中ニ任ス、享保四年御城代ニ転任ス、光久公・綱貴公

・吉貴公・繼豊公ノ四世ニ歴任シ、在職四十四年下文略ス

島津將監久當

ニ委シ、○同十五年甲辰六月十二日致仕、

島津和泉久風

○垂水家九世初小源太、玄蕃、久典、実吉貴公第三ノ子ナ

リ、玄蕃、忠直ノ後嗣トナリ、元文元年丙辰正月二十一日任、二年七月十八日賜貴字改貴壽、寛延元年戊辰正月

十三日御免、後隱居号静山、

島津備中貴備

○豊前家十五世○弘化二年乙巳三月十七日島津内匠久徳

代、公任祿千五百石、職如故、余ハ御家老ノ場ニ委シ、

同年六月五日改豊後、安政四巳十二月、於江戶五百石御

加増、都合二千石、○同六未十月廿六日御城代一篇、扣

席水仙之間、下ノ部屋、同十一月晦日、依願御免、一世

二百石ノ物成ヲ賜フ、

島津豊後久宝

○川上家二十三世○文政十二己丑五月朔日御城代、御家老

職如故、天保三壬辰五月十五日御免、

川上久馬久芳

忠久公 文治二年丙午春賜封三州、八月二日御入国、嘉祿

三年丁亥六月十八日薨、

○天保四癸巳四月二十一日、島津貴典代、公命之、高五百

石拝領、七丙申五月九日迄、余ハ御家老ノ場ニ委シ、

市田美作義宣

○本田二郎親恒ノ子、頼朝公賜隅州守護、墓ハ野田感心寺

ニアリ、法諡静観

本田右衛門督貞親

○日置家十一世、初但馬、後和泉ト改ム、○天保八年丁酉

七月十九日任職、如故高二千石ヲ賜フ、余ハ御家老ノ場

四世高望王ノ五男

(頭註) 一忠教按ルニ西藩野史曰、本田氏其先桓武帝皇子葛原親王

平良文 — 村岡五郎 — 忠頼 — 陸奥守 — 上総介 — 恒親 — 信濃守
忠恒 — 恒益

恒文 — 信濃守 — 左エ門尉 — 二子 — 左エ門督 — 一郎左エ門督
親幹 — 恒雅 — 親恒 — 信濃守
初テ木田ヲ氏トス — 忠久公夫人ノ外祖父

貞親 — 左エ門尉 — 因幡守 — 左近將監 — 左京亮
兼親 — 兼久 — 忠恒
隅州守護代清水ニ居ス、
勲功ニ依テ小川邑ヲ賜フ

重親 — 信濃守 — 一郎五郎 — 半兵エ — 与次郎 — 信濃守
氏久公ノ老中 — 親光 — 親家 — 親成 — 重経 — 久豊公老中

因幡守 — 一郎左エ門尉 — 信濃守 — 紀伊守
兼親 — 忠昌公老中 — 親安 — 薰親
国親 — 忠国公老中 — 天文十七年反清水除セ
ラル、数世ヲ經テ延享
四年作左エ門由親大目
附ニ任シ密合ニ列ス、

教按ルニ此系凶疑ハシキコトアリ、識者ヲマツ、

○酒匂刑部丞朝景ノ子、公生レ給ヒシ時ヨリ御守役御入国
ニ從ヒ奉リ御家老トナル、当代ニ天之御母衣并觀音ノ像
ヲ預リ奉ル、

君家累世御城代御家老記

酒匂左衛門尉景貞

○執印家文書ニ建仁三年十二月九日当国水引守護所トアリ、執印家文書也、
長沢左衛門尉

○権執印文書ニアリ、建保三年八月十五日
守護所代沙弥

○小松家文書、貞応元年八月日大隅国守護須直刑部殿ト裏書アリ、
守護所刑部丞大江

○伝ナシ
守護所御代官右馬允藤原

忠時公 嘉祿三年立、文永九年四月十日薨

○小松家文書、寛喜十一年十一月十一日○台明寺、同貞永二年十一月前守護所代中務丞書札ト云々
守護所中務丞藤原

○台明寺文書、貞永二年二月日
守護所代左近將監

○嘉禎四年五月日

総地頭兼守護所僧

工門尉藤原重頼トアリ、

左衛門尉藤原重頼

○台明寺文書、仁治二年九月十一日

守護代左衛門大夫定重

○栗野士調所勘左工門文書、正嘉二年二月一日守護代左工

門尉藤原トアリ、又文永八年九月ノ文書アリ、

○小松家文書、寛元元年九月二日

守護所右衛門尉藤原

重頼同人カ台明云々ノ月日モ不審

守護代左衛門尉藤原

○上町鮫島民部左工門文書、寛治元年十月廿五日、権執印
文書ニモアリ、年号不詳、

薩摩国守護代左衛門尉清秀

○文応元年十月五日守護代

沙弥西念

○台明寺文書、建長二年五月二日

守護代壮門

○栗野調所氏文書、弘長三年十一月十二日総地頭代トアリ、
入来院家文書、文永三年八月三日沙弥善心トアリ、
按ニ彼家之始祖定心子明重法名善心力、

沙弥善心

○垂水伊集院吉左工門所持之文書、建長四年八月十三日守
護代刑部左工門殿散位世判トアリ、

守護代刑部左衛門

○文永九年十二月廿四日台明寺文書目錄ニアリ、

前守護代右近丞

○台明寺鐘銘、正嘉元年十一月十九日大檀那当国守護代左

イニ
二年二月朔日

○栗野調所氏文書、文永八年十二月重頼トハ別ナルヘシ、
花押同カラス、

左衛門尉

部三郎忠光トアリ、前後キレテ年号不知、

守護代式部三郎忠光

○同文書、文永九年二月十三日

守護代左衛門尉

(朱)
〔教按ルニ正応二年ハ弘安七年ヨリ五年ノ後也、疑ラクハ忠宗公ノ時ナランカ〕

久経公

文永九年立弘安七年閏四月二十一日薨

○守護代トアリ、時代不詳、姑ク旧本ニ従フ、

酒匂兵衛入道称阿

○台明寺文書、文永十年四月十日

守護代沙弥浄念

○同前酒匂氏ノ名カ

景広

○蒲生住人祝部山田八右エ門文書、文永十一年九月日

総地頭兼守護代

○公第五ノ弟也、公上洛ノ時久時ヲ守護代トシテ国ニ止ム、久時權威ヲ以地頭御家人ニ対シテ我意ヲ縦ニス、公怒テ罷ム、的流ノ流今ハ羽月士タリ、

○垂水調所氏文書、建治二年八月日

守護代左兵衛尉藤原

阿蘇谷大炊介久時

○守護代トアリ、建治三年五月九日台明寺文書

五郎兵衛尉経親

忠宗公 弘安七年立、正中二年十一月十一日薨

○隈之城有馬休右衛門文書、正応二年八月二日薩摩国宮里

郷地頭大隅式部三郎忠光トアリ、又執印文書、守護代式

○台明寺文書、弘安十年七月廿五日

守護代僧唯道

○喜入主肝付家文書、永仁三年二月二十八日

守護代左衛門尉実久

○旧記ニ守護代トアリ、台明寺文書ニモアリ

安藤四郎左衛門景綱

繼イ本
本名景光

○帖佐川崎覚右エ門文書、永仁四年三月四日、当国守護代

トアリ当国ハ日向国也、

江見民部六郎入道覚阿

○嘉元二年当国守護代トアリ、当国ハ大隅国也、

上野前司時直

○観応二年九月廿八日於金隈戦死、○冠嶽ノ文書ニ永仁五年十月廿八日沙弥道意トアリ、又六大江草遠連判アリ、

本田左衛門次郎親兼入道道意

○正和四年七月廿四日守護代トアリ、權執印文書也、又文

保二年卯月十一日文書、財部士延時氏所持ス、

酒匂兵衛入道阿忍

○嘉曆三年○応長元年閏六月廿四日、薩州守護代トアリ、

同平内兵衛入道

○伝不詳

入道慈願

○守護代左エ門景光トモアリ、道鑑公御代ニ至ル、財部延

時九郎兵衛文書、正安四年八月廿六日水引執印家文書ノ

内守護代本性文保二年云々

本性

貞久公 正中二年立、貞治二年七月三日薨、

○或ハ次郎左衛門トアリ、執印氏文書ニ守護代トアリ、奥

キレテ年号等難考、

酒匂左衛門久景入道得貴

○垂水遠矢十兵衛文書、正安二年六月廿一日在判

守護代藤原範政

葛原親王―高望王―忠道―景名―景道―景久―朝景―

景貞―忠景―盛景―宗景―貞資

刑部允
二郎左エ門入道貞阿

○次郎ヲ或ハ二郎トス、宮之城柿木原平石工門文書、建武ノ比ニ大隅国守護代森三郎次郎平行重トアリ、子孫不知、同人文書、建武三年六月日、当国守護代森三郎次郎トアリ、又建武四年四月十九日、大隅国守護代森三郎次郎行重トアリ、

森三郎次郎行重

○右同人文書、建武三年二月十三日判アリ、

守護代重賢

○樺山家文書、暦応五年二月六日

宗頼

○柿木原文書、建武四年二月廿二日、守護代

沙弥栄之

○酒匂氏カ

資光

○垂水調所勘左工門文書、元徳三年八月卅日

守護代盛光

○氏久公御代ニ至ル

頼兼

○前ニ同シ、○貞久公酒匂氏ヲ以テ師久公ニ賜フ、然後公家衰微ノ時酒匂モ同ク零落ス、

酒匂次郎左衛門

貞資入道貞阿

○旧記ニ守護代トアリ、時世不詳、総州家ノ家老カ、

左衛門尉清秀

氏久公 貞治二年立、嘉慶元年閏五月四日薨、

○平宗盛ノ三男宗正ノ子大炊助信宗ノ後裔也、是ヨリ親宗ニ至ル迄教世系図ニカゲタリ、旧記曰、公御上洛ノ時、御留守用心ノ相談トシテ残シ置給ヒシ耆老平田親宗外ニ五人ト云々、

平田新左衛門親宗入道玄親

(頭註)

「忠教按、西藩野史平田氏伝云、内大臣宗盛之三子宗政ノ裔、薩州ニ臣トシ仕へ、平田氏ヲ以テ氏トス、

親宗 新左エ門 右馬介 兼宗 美濃守
氏久公老中 元久公老中 忠国公老中 右馬介

昌宗 兼宗孫 美濃守 光宗 美濃守 左近將監 増宗 太郎左エ門
美濃守 歳宗

○元久公御代マテ也、山田氏文書、阿多時成ト連判アリ、
永徳二年六月七日 慶安

○前二同シ 幸阿

○応安六年三月三日庄内ニ戦死ス、此時杉一揆ノ大将タ
リ、



本田信濃守重親

○前二見ユ、 酒匂貞資

元久公 嘉慶元年立、応永十八年八月六日薨、

○前二見ユ、 平田親宗

○幸或作孝、大寺氏二世彦左エ門武幸子也、久豊公御代ニ
至ル、永享後年福昌寺奉加帳ニ見ユ、 大寺美作守惟宗元幸

○保安四年癸卯初テ本藩ニ来リ、下大隅ニ垂水ニ住ス、後
蒲生ニ住シ吉田ヲ并領ス、

○舜清—種清—清直—清成—清統—清茂—宗清—直清

清種—清冬—彦太郎—清寛—忠清
蒲生家ノコト諸家大概記等ニ見ユ、子孫十郎左エ門是ナ
リ、 蒲生美濃守藤原清寛

○重氏或作経道○酒匂安国寺ノ申状ニ云、我等若輩ニ候シ
カトモ上意ニテ候間、老各一分ニ参候テ判ヲ仕候、本田
・伊地知・阿田・平田・肥後・石井某七人トナリ、此一
章肥後氏ノ上ニ記ス一本アリ、肥後ハ後ニ見ユ、

村田右衛門尉重氏

○柏原勘解由左衛門行資二男

柏原豊前守橘好資

○或ハ季豊入道久安トス、初又九郎ト称ス、久豊公御代迄也、或ハ正季トス、又忠国公御代迄トス、年号不知、正月十九日、八十八歳ニテ卒ス、

○季清

刑部左エ門、鎌倉執權北条泰時カ祐筆ニシテ民部少入道因幡房尊西アリ、其嫡孫三郎兼秀カ三男

季随

良宗初秀弘

金限軍ニ氏久公

ニ代テ戦死

季重 ○秩父十郎左エ門

元祖重光ヨリ八代民部少季弘子也、重光ハ畠山次郎重忠ノ兄也ト旧記ニ見ユ、

伊地知縫殿介季重入道久阿

○異本鹿屋ヲ茄屋トシ、忠兼ヲ兼忠トシ、茄屋因幡守兼忠入道玄簾トシ、又一本ニ法名玄兼トス、諸家大概記曰、子孫志布志鹿屋権左エ門加治木ニモ庶流アリト○久豊公

君家累世御城代御家老記

御代迄、

肝付兼右二男

周防介

周防守

宗兼——兼永——兼雄——忠兼

宗兼ハ父兼右ノ讓ヲ以テ鹿屋院ヲ領シ弁濟使ヲ職トシ鹿屋ヲ以テ氏トスト云リ

鹿屋周防介伴忠兼入道玄兼

○新左エ門親宗——重宗——氏宗——兼宗

元久公御上洛御供五人ノ内也、初又九郎後美濃守系図ニ久豊公ノ執事トアリ、又三省ヲ法名トス、永享十年福昌寺奉加帳ニ見ユ、

平田右馬介重宗入道三省

○後忠親、初二郎五郎左エ門尉、或ハ安了ヲ以法名トス、

四世

氏親 信濃守

親治 因幡守

元親 信濃守

久豊公御代迄

本田信濃守元親入道安了

○資久 忠宗公五男

安芸守

音久 美濃守

教宗 美濃守、或ハ孝宗ニ作ル非也、或安芸守

教久 美濃守

満久 兵部少

長久 安芸守

信久 美濃守

或広久

四三五

酒匂

安芸守 善久 忠嗣 治部 忠助 兵部 親久 兵部 忠征 久高

久守 久辰 久尚 久広 久清

榊山美濃守教宗

久豊公 応永十八年立、同三十二年正月二十一日薨、

○前二見ユ 伊地知季重

○同 大寺元幸

○同 鹿屋忠兼

○同 本田元親

村田肥前守経房

○系図ニ久豊公ノ執事トアリ、伝前二見ユ、

阿多加賀守時成

平田重宗

○伝ナシ 上井入道善了

○十一世清寛嫡子也、初三郎太郎ト称ス、十二世之孫十郎
左エ門清詮

○下三人ノ伝村田重氏ノ伝ニ見ユ

肥後

蒲生美濃守忠清

石井

○吉田次郎兵衛則清十三世ノ祖也、○正八幡之神官権政所

○村田愨巖師初テ本藩ニ来ル、経房ハ四代ノ孫也、宝徳三

年正月廿六日卒、村田五郎左エ門家ノ祖也、村田氏ノ事

ハ庄八家ノ由緒書ニ詳ナリ、○祖父ハ道善ト云、或ハ通

善トス、

助清—長太夫清道—吉田御供所檢校—長太夫吉清—太郎
 守清—太郎清弘—又次郎清高—彦次郎清秋（頭註秋西藩
 野史作和）
 —次郎太夫清持—伊豆守氏清—伊豆守清元—清正—兼清
 惟清—宗清
 二郎四郎

〔頭註〕 若狹守 二郎四郎 尾張守 三河守
 西藩野史ニ清正 兼清 泰清 孝清
 能登守

若狹守 忠隆公ノ時反シテ横死ス、吉田除セラル
 位清 二郎四郎

吉田若狹守清正

○忠国公御代ニ至ル、恒一本経トス、初又二郎○元親第五
 弟也、元親男子ナキニ依テ養テ嗣子トシ七世ヲ嗣シム、
 後ニ甥ノ本田国親力為ニ家督及本領ヲ奪ハレ尋テ殺サ
 ル、又驕富ヲ以テ罪ヲ公ニ得テ没収セラルトモ云、○廻
 源兵エ文書、永享十年ノ秋福昌寺仏殿造営ノ勸進奉加帳
 ニモ見ユ、

本田信濃守重恒

忠国公

応永三十二年立、文明二年正月二十日薨、

君家累世御城代御家老記

○前二見ユ

本田重恒

○或忠幸ノ名アリ、入道幸朝、又衡幸、大寺彦左衛門武幸
 三男也、立久公御代ニ至ル、一本久豊公御代ニ録ス誤ナ
 リ、
 大寺彦左衛門貴幸

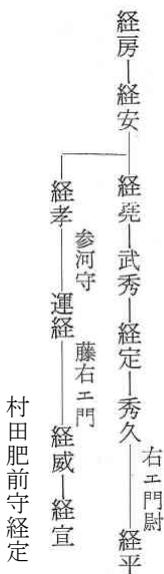
○重宗子也、初又七郎、右馬頭イ助 平田氏三世也、

平田美濃守氏宗

○町田家八世五郎忠良三男、初五郎左工門、周防守輝久、
 立久公御代ニ至ル、嫡孫今串良士町田伝八郎也、

町田周防介胤久

○村田五郎左工門系図



村田肥前守經定

今案、經定ハ經安ノ誤ナルヘシ、而末ノ經安ハ同人ナラ

ン、姑ク旧本ニ従フ、○忠昌公御代ニ至ル、○村田通善始テ公ニ仕ヘ、嫡孫肥前守経安、立久公ノ御家老ト旧記ニアリ、不審、

柏原永好
伊地知久安

○立久公御代ニ至ル、○或ハ又二郎、二郎太郎、信濃守、

○公命ヲ奉シテ守護代トナリ、国政ヲ与リ奉ルコト三年ト旧記ニアリ、

○享徳四年癸卯歳三月六日、台明寺文書ニ当国守護代本

島津薩摩守用久

田国親トアリ、○貞親ヨリ七世至隅州清水城ニ居ル、

本田因幡守国親

立久公 文明二年立、文明六年四月朔日薨、

○以下五人伝前ニ見ユ、

○立久公御代ニ至ル、○初平次郎、或ハ義清、

本田国親

石井丹波守義忠入道旅世

石井義忠

○忠昌公御代ニ至ル、○四世美濃守氏宗子、○又七郎右馬

平田兼宗

介○系図ニ立久公・忠昌公ノ御家老トアリ、○親宗ヨリ

村田経定
大寺貴幸

四世統テ国老ニ任ス、

平田美濃守兼宗入道洞印

○四世貞親他腹ノ長男二郎左エ門尉久兼五世ノ孫而四世周

防守親宗ノ子也、○初三郎五郎総譜ニ三郎トアリ、法名

○文安五年谷山伊佐知佐権現ノ目錄ニ以下三人ノ連名アリ、

全勝トモアリ、久兼―忠恒―兼久―親宗―宗親―親尚―親貞

村田経房

本田治部少輔宗親

○諸家大概記、安勝ハ立久公ヨリ勝久公迄御家老トアリ、
大寺治部少輔安勝入道宮音

○初又二郎○本田家十二世而十一世信濃守国親子○或兼宗
法名了観、
本田因幡守兼親

○忠昌公御代ニ至ル、○十四世肥前守経房嫡子也、○忠昌
公ノ命ニ背ク事アルヲ以テ、明応四年七月五日誅ヲ賜フ

○法名春沢、

村田肥前守経安

忠昌公 文明六年立、永正五年二月十五日薨、

忠治公 永正五年立、永正十二年八月廿五日薨、

忠隆公 永正十二年立、永正十六年四月四日薨、

勝久公 永正十六年立、大永六年十一月二十七日讓、守護

職于世子虎寿丸君、文明六年ヨリ永正十六年ニ至
ル、三十七年ナリ、

○伝前ニ見ユ

大寺安勝

君家累世御城代御家老記

○初又九郎、新左エ門尉、左エ門尉○本家十世太郎左エ門
尉重樹(頭註人 物志持)ニ男左馬介重次ノ養子、実ハ弟也、越右
エ門家ノ祖、○忠治公ノ時ヨリ御家老タリ、加治木地頭
ト成テ彼邑ニ居ル、当公ノ時不臣ノ氣アリ、故ニ大永七
年六年十一月五月六日、公忠良君ニ命シテ誅ヲ加治木ニ賜フ、
ヨリ大中公也不番

伊地知周防守重貞

○伊集院四郎入道迎清ノ三男也、○伊集院邑土中島弥太郎
文書ニアリ、

鳥取播磨守政茂

○南郷ノ城主ナリ、天文二年三月廿九日忠良公實落之云○安養院文書ニ永正十八年三月吉日景
元トアリ、

桑波田阿闍梨源智一 万揚房一 覚弁一 刑部丞宗景

掃部丞久宗一 六郎宗恒 此末ナリ、

桑波田讚岐守景元入道觀魚

○重光ヨリ十二世太郎左エ門重弘ノ子○大永二年壬午八月十七日、下大隅高城ヲ知行ス、○初又太郎○忠治公御代ヨリ御家老タリ、○大永三年癸未十二月二日於月野戰死、○代々下大隅ノ内本城ヲ領ス、

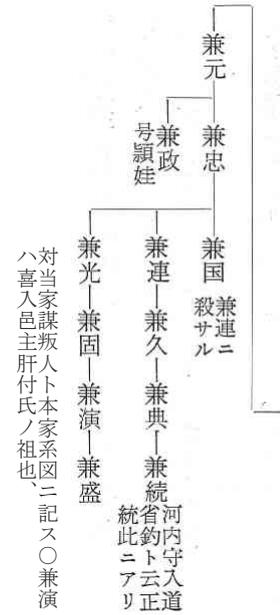
伊地知縫殿介重周

○初又九郎○系図ニ勝久公ノ補家老トアリ、○重周ノ子ナリ、天文十四年下大隅垂水ヲ賜フト系譜ニ見ユ、

伊地知周防守重武

○肝付本家兼忠ノ三男兼光、始テ御家ニ仕ヘ奉ル、兼演ハ三世也、貴久公ノ時隅州加治木ヲ賜テ居ル○初三郎五郎

系図 大伴皇子十二世兼俊―兼経―兼益―兼員―兼右



肝付越前守兼演入道以安

○伝ナシ○加世田邑主池袋氏アリ、子孫カ、

池袋越後守宗政

○佐左エ門家ノ祖上世不知故ニ政綱ヲ以元祖トス、○綱或作経

土持伊豆守政綱入道弓伴

○善左エ門景昌十二世ノ祖景時八世ノ孫、帯刀助純ノ弟新左エ門尉純信ノ二男新左エ門尉幸純ノ四男主計孝純ノ二男備前守忠純三世ノ孫也、○助純ハ平右エ門景根ヨリ十四世ノ祖ナリ、

梶原備前守景豊

平田左馬介清春

○後刑部少輔○種子島家文書ニアリ、

本田二郎左衛門尉千親

○後美濃守○系図ニ御家老トアリ、時代不知、疑クハ清春カ

平田右馬介貞宗

○大永七年安養院文書ニアリ、○公鹿兒島ヲ去ノ時出テ未

吉ニ奔リ、彼ニ居ルコト年アリ、後天文中、貴久公ノ時

出テ拝シ、義久公御代再御家老トナリ、政事ニ功アリ、

帖佐地頭トナル、○初右馬介、又景宗、昌景等ノ名アリ、

後昌宗、○天正七卯七月十四日卒、帖佐総禅寺ニ葬ル、

平田美濃守職宗

○聖栄自記、文明六年甲午八月十九日矢開ノ書ニアリ、○

○天文七年安養院文書ニアリ、武秀初ノ名カ、

村田越前守経董

政茂一族カ、○伊集院邑主鳥取孫右エ門祖カ、

鳥取孫左衛門尉

○経董後ノ名カ、系図ニ於加治木戦死トアリ、系図前ニ見ユ

村田越前守武秀

○初又二郎○忠昌公御代ヨリ也、○イ治部少輔久兼六世ノ孫ナリ三郎五郎宗親子也、○

法名昌永○後逆臣島津八郎左エ門実久ニ臣事ス、

本田次郎左衛門親尚

○兼宗ノ子ナリ、○玄佐自記ニ見ユ、○一本忠昌公ノ御家

老トアルハ非ナリ、

○勝手御家老タリ、○不忠ノ氣アルヲ以天文三年甲午十月

一本 十一月 廿五日、川上大和守昌久誅之于皇徳寺、梟首于郡元村、

未弘伯耆守綱秀

○同文書、天文四年乙未八月吉日坪付、定所已下二人連名アリ、

光久

○氏称不知、永正十八年三月十六日坪付、忠臺・景元・重

周・兼演・兼親連名アリ、

忠臺^{モト}

○同文書^{本田氏伝} 天文八年己亥十一月吉日坪付、定所同前、忠光・親信・忠朗連名アリ、○親信ハ本田氏力、

忠光

親信

○村田氏文書、兼親・景元連判アリ、石井氏力、

義治

○貴久公御代ニ至ル、○伊集院六世強正忠頼久四男倍久

○系図ニ御家老トアリ、後貴久公時、伊作地頭ヲ賜フト、

高崎播磨守能宗

— 忠公 — 忠朗 — 忠倉 — 忠棟 — 忠真

伊集院大和守忠朗入道孤舟

忠良公 伊作家十世

○村田武秀嫡子也、称越前守、貴久公・義久公御代ニ至

ル、高岡士比志島氏文書、天文十四年乙巳十二月吉日坪

付、定所比志島美濃守殿云々、以下二人ノ連名アリ、

経定

忠栄

○上原氏力、○桜島士上山氏文書、天文十一年壬寅十二月吉日坪付、忠朗ト連名、上山大炊助殿

尚守

○初宗淵新左エ門入道曰清甫、○永禄十三庚午年二月吉日、蒲生神守院坪付ニ鮫島双月・三原重秋ト連名アリ、

○安養院文書ニハ安房介トアリ、○平田家二世美濃守重宗ニ男民部少宗保ヨリ四世式部少宗秀ノ子ナリ、五世ナリ、平太左エ門家ノ祖川辺加世田等ノ地頭タリ、

平田安房守宗茂

○又増宗ノ名アリ、○田布施諏訪大明神棟札ニ永祿十一戊辰林鐘朔日当地頭鮫島土佐守入道藤原増宗トアリ、○安養院文書遁世双月トアリ、

双月—土佐入道感応—雅樂介—嘉左エ門—刑部左エ門

鮫島土佐守宗豊入道双月

○義久公御代ニ至ル、秋或ハ益トス、曾於郡地頭タリ、○初次郎四郎○元祖左エ門直重、初テ本藩ニ来ルト云、家何世タルコト不知○兵部少重平—重秋

次郎重次於岩劍戰死—兵部重家於高麗病死

備中重種—左エ門佐重庸
諸右エ門 或ハ重鏡

遠江重時

諸右エ門重尚

次郎四郎重房

君家累世御城代御家老記

三原遠江守重秋入道昌安

○五郎右エ門家ノ祖○四世修理亮忠治ノ二男、駿河守是久ノ嫡子、越前守及義ノ二男能登守忠澄ノ嫡子也、○忠澄ハ忠良公ノ後見也、

新納伊勢守康久入道一珪ケイ

○伊勢六郎左エ門家ノ祖



貞則伝
永祿十一年二月吉日坪付、前田源右エ門殿トアリ、忠智ト連名ナリ、加久藤土カ、

有川治部少輔貞則

綱歪曰、忠良君ハ伊作家十世ニシテ君家ノ正統ヲ継玉ヒシ人ニアラス、然トモ旧本ニ從テ是ヲ写ス、只ニ其名ノ忠字ヲ闕画シテ本文ニ謙スルノミ、

貴久公

大永六年十一月廿七日立、元龜二年六月二十三日
薨、綱蚕曰、貴久公為守護職ノ事、日本詳ニ記
ス、然トモ大永以來ノ事余ハ写サス、

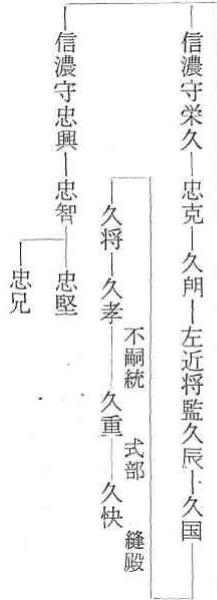
○以下三人前ニ見ユ、

伊集院忠朗

三原重秋

村田経定

○本家五世上野介兼久三男 左近將監忠寒



川上上野介忠克入道意鈞

○忠朗子也○初掃部介○永祿九年伊集院右エ門大夫忠倉卜
アリ、

伊集院大和守忠倉

○義久公御代ニ至ル、○兼演子也○初三郎五郎

肝付弾正忠兼盛

○貞則嫡子也、入道シテ如閑ト云、一本義久公下ニ録スル
アリ、谷山地頭タリ、

有川長門守貞清

義久公

元龜二年立、慶長十六年正月二十一日薨、

○以下三人伝前ニ見ユ

村田経定

三原重秋

肝付兼盛

○天文二十二年 丑

十八歳ニテ任ス、○永祿十一年 辰 二

月馬越合戦ニテ矢疵ヲ被リ薨府ニ帰ルノ後卒三十三歳、

○忠克ノ子也初源三郎、

川上左近將監久朗

○忠倉ノ子也○初源太掃部助忠金○永祿九年丙寅任ス、
或云天文二十年任ス、

○家久公御代ニ至ル、○慶長三年戊戌不臣ノ氣アリ、三

月九日誅ヲ城州伏見ニ賜フ、

伊集院右衛門大夫忠棟入道幸侃

平田美濃守光宗入道舜蘆

○初式部大夫○家久公御代ニ至ル、○喜入家四世忠俊ノ子也、○安養院文書ニ撰津齋トアリ、系図 忠弘―頼久

―忠譽―忠俊―季久―久通―忠政―忠商―久亮

―久致―久峯―久茂―久福

喜入撰津守季久

○伝勝久公ノ条ニアリ

平田美濃守昌宗

○家久公御代ニ至ル、○平田昌宗賀養子実ハ庶流平田備中守宗秀ノ二男ニシテ安房介宗茂ノ弟也、○初新七、又左馬助、○天正三年亥ヨリ任シ、郡山、西別府ヲ賜ヒ、肥後国八代地頭トナル、天正中、公六国ヲ□スルノ時、水俣、八代ノ間ニ在テ軍務ニ勞シ、其功群ヲ出ツ、○慶長十年十二月廿六日、七十七歳ニシテ郡山ニ卒ス、円秀寺ニ葬ル、

君家累世御城代御家老記

○蒲生土竹内氏文書、上原長門入道尚近トアリ、初名常尚
○天正三ノ比ヨリ任ス、○御家老職ノコト慥ナラス、御使役ヨリ兼タリト云説アリ、○尚近ヨリ九世七郎次代依科家タユ、庶流上原小助是ナリ、

上原長門守尚近

○初神左エ門為兼○武藏守薰兼ノ子ニシテ諏訪甚六貴兼ノ曾祖父ナリ、○天正四年任シ伊集院地頭タリ、○天正十七年丑六月十三日伊集院ニ卒、妙円寺ニ葬ル、

上井伊勢守覺兼入道休安

○省或ハ清ニ作ル、○初弥六右エ門 系図 下野守親尚

―親貞―親孝―親正―親武 六左エ門

本田下野守親貞入道三省

○初越前守○天正八年十年ノ比ヨリ任○於泉州境横死、
経定―越前守秀久―経平

村田右衛門尉経平

追悼ノ歌ヲ賜フ、委クハ略ス、

山田越前守有信入道理安

○家久公御代ニ至ル○初又五郎又紹璞、紹節、麟台等ノ号アリ、○忠良君ノ二男左兵エ尉尚久ノ子也、○天正十一年未十一月廿四日任シ、慶長十五年十一月九日卒、

島津図書頭忠長入道紹益

○種子島家十六世ニシテ左近將監時堯ノ子也、○初三郎次郎克時公久ノ字ヲ賜フ、因テ久時ト改ム、○慶長四年比任ス、義弘公御代ニ至ル、

種子島左近大夫久時入道一琢

○初新三郎、左近將監房宗、○光宗ノ子也、○家久公御代ニ至ル、○天正十八年任、或八年トモアリ、○慶長三年戊戌於朝鮮病死、

平田美濃守歳宗

○家久公御代ニ至ル、○初伊賀守一号一玄、○十六世兵部左エ門尉久徳イ徳ノ子ナリ、○文禄ノ初ヨリ慶長五年庚子マテ職ニアリ、

町田出羽守久倍入道存松

○藏人有徳ノ子也、初新助○天正十六年戊子任シ、義久公御隠居方ニ従フ、慶長十四年、公病ルノ時身ヲ以テ代リ奉ラント正八幡宮ニ祈リ六月十四日卒、公ノ病イユ、公

○後刑部少因幡守、參河守○家久公御代ニ至ル、一本義久公御隠居方ニ録スルアリ、余ハ是トス、出水地頭ナリ、○慶長十四年知行目録ニアリ、吉松土中村氏所持、系圖十二世因幡守兼親二男親貞、初親成、又五郎、刑部少、因幡守入道一如―親知或親和、有親トス、又五郎、刑部大輔―親治、因幡守―親正市郎左エ門親昌、祖父也、或ハ正親トス、

本田六右衛門尉親正

○初彦四郎、宮内少輔、○慶長ノ初ヨリ家久公御代ニ至ル、元和六年四月三日卒、○主膳国治ノ養祖父也、宮内少国真入道咲翁ノ子也、○高岡地頭タリ、○比志島善八家ノ祖也、

比志島紀伊守国貞

○畠山中務大輔頼国入道橋墓ハ一乗院ノ山中ニアリ、神主モ同院ニアリ隠軒ノ子而阿多淡路守義扶ノ養

高祖父ナリ、○天正十六年任ス、庚子ノ乱、義弘公二代リ尊名ヲ冒シ奉リテ戦死ス、其功觀心ノ伊地知季随ニ続クモノカ、

長寿院盛淳

○初又七郎、図書介○図書頭政勝ノ子而十八世也、○天正十九年春任、家久公御代ニ至ル、慶長十年九月朔日京師ニ卒ス、在職十五年、

鎌田出雲守政近

○初左馬介、後名英宗○平田家九世而歳宗ノ嫡子也、○家久公御代ニ至ル、慶長十五年不臣ノ氣アリ、誅ヲ賜フ、押川六兵エニ命シテ討シム、押川イ桐野モ同ク命ヲ奉スト云、是ナラ乃チ桐野九郎左エ門ト謀テ六月十九自入来土瀬戸ニ誅ス、桐野鉄炮ヲ以射ル、於爰嫡家断ユ、

平田太郎左衛門尉増宗

○初三郎兵エ○下野守久道ノ子、伴太夫久留七世ノ祖也、○天文三年生、○天正十九年春任家久公御代、慶長十年九月ニ至ル、在職十五年ナリ、

伊集院下野守久治入道抱節

○初又七郎、後美濃入道玄曆○十世兵部少忠助入道紹劔ノ二男ナリ、後十三世ノ統ヲツグ、○文祿元年イ三二月任、公中山ヲ伐ノ時、平田増宗ト同ク大将ヲ承テ功アリ、○家久公御代ニ至ル、寛永十一年戊卒、七十七歳、在職三十一年也、右人数ノ外左ニ録スル所、富隈御付ノ御家老ナリ、外ニ数多アリトイヘトモ、義弘公御支配トミエタリ、

樺山権左衛門尉久高

○初千代十郎次郎○本家四世忠俊、二男図書助忠通ノ養子実ハ川上九郎左エ門久光ノ長子ナリ、

喜入大炊介久正入道紹嘉

○前二見ユ

山田有信

○後越前守○歳宗二男而増宗ノ弟也、兄増宗誅ヲ賜フニ依テ家久公御代慶長十七年四月廿六日歳四十四ニシテ死ヲ賜フ、嫡子左馬介宗次、二男新八郎同日死ヲ賜フ、

平田久兵衛尉宗親

○前二見ユ

本田親正

○初大炊太夫○本田家十世大炊太夫親兼子ニシテ十一世ナリ、○曾於郡地頭タリ、○系図ニ龍伯公富隈ニ在ノ時御家老ニ任ストアリ、

本田与左衛門尉公親入道玄叱

義弘公

天正十三年四月二十四日、義久公ノ命ヲ奉シ立テ
イ六月廿日
三国ノ守護トナル而公ト共ニ国政ヲ為ス、

○以下十三人伝前二見ユ

伊集院忠棟

喜入季久

平田光宗

上井覚兼

島津忠長

町田久倍
比志島国貞

盛淳

鎌田政近

平田増宗

伊集院久治

樺山久高

種子島久時

○初名貞真、貞序、○元有川氏而治部少貞則ノ二男也、然共貞世二男兵部貞昌、伊勢氏ニ嗣クニ及テ貞世モ又願テ改ム、○公飯野ニ在ノ時任之、

伊勢雅楽介貞世入道任世

○初助七左京亮、○信濃守忠興ノ嫡子也、系図前二見ユ、

○公飯野ニ在ノ時任シ、栗野・馬越・蒲生等ノ地頭ニ転

補ス、

川上参河守忠智入道肱枕

○初久春、源助、初入道元巢○家久公御代ニ至リ元和二

年九月四日卒、七十三歳、○助八郎久次ノ嫡子也、日州蓬原・飯野等ノ地頭ニ補シ、移テ飯野ニアリ、今給黎家ノ祖長門守久俊ノ三男、長門守久綱六世ニ系ル、其時代少シ闕タリトアリ、藏人家ヨリ兼帯

伊集院肥前守久信入道一雄

○伊勢守康久入道一蛙二男而五郎右エ門久饒入道遊甫弟也、初出家シテ長住ト称シ、後公命ヲ奉テ還俗ス、高原・栗野・市来等ノ地頭タリ、慶長七年十月廿五日御役中ニ卒ス、家久公御代也、

新納休閑齋旅庵

○子孫加治木ノ臣タリ、○伊勢貞成ノ卒スルニ代テ任シ、加治木ニ在テ公ニ仕フ、吟味役新納一甫ト二人ノミナリト云也、

○十二世兼親ノ二男兵部少輔親賢

親豊―親次―親昌
或若狭
藏人―親商―親存

本田源右衛門尉親商

○系図ハ忠克ノ伝ニアリ、初メ吉松内小野寺相模坊養子後

君家累世御城代御家老記

公ノ命ヲ奉シテ本氏ニ復シ、遂ニ当職ニ任ス、○初久三
大炊助

川上四郎兵衛尉忠兄入道青糠

○初弥八、貞顯イ順、貞林、貞之、系図ニ有川貞則ノ伝ニアリ、○公ニ加治木ニ事フ、○慶長十二年十一月肥前唐津ニ使シテ死ヲ奉リテ忠アリ、時年三十九、

伊勢平左衛門尉貞成

○初彦三郎、内藏丞、河内守○庶流美濃守国親子○子孫加治木ニ在テ臣事ス、○水引薬師寺氏文書ニアリ、年号不知、

比志島掃部介国詮

○諏訪市右エ門家二世ノ祖ニシテ參河守親秋ノ養子也、実ハ本家武藏守薰兼二男也、一本三男トス、○天正十年十一月ヨリ、綾地頭於綾病死、飯野御方ノ御家老ナリ、

上井次郎左衛門尉秀秋入道伝齋

○後称次郎左エ門○秀秋ノ子也、一本九二十五歳ニシテ当職ニ任

四四九

シ、小林地頭タリ、寛永八年六月四日病卒、

上井神五郎里兼

新納旅庵
五代友慶

○初勝左エ門ト称ス○少左エ門家ノ祖ニシテ筑前守助友ノ嫡子ナリ、○壬申ノ役於木崎原伊東加賀守ヲ討テ功アリ、

五代右京亮友慶

○五人並ニ前ニ見ユ、

阿多盛淳
伊集院久信
上井秀秋
新納旅庵
五代友慶

義弘公在飯野之時、奉仕御家老如左、
公永祿六年去鹿兒島移飯野城

○四人並ニ前ニ見ユ、

有川貞世

川上忠智

五代友慶

上井秀秋

同在平松時、如左、

慶長十一年、公自帖佐平山城移同邑平松城々地、今在重富邑、

○二人並ニ前ニ見ユ、

伊勢貞成

上井秀秋

同在栗野時、如左、
天正十八年、公去飯野龜城、移栗野松尾城

○五人並ニ前ニ見ユ、

川上忠兄

有川貞世

上井秀秋

同在加治木時、如左、
慶長十三年、去平松城、移加治木城、於是所葬、

○二人並ニ前ニ見ユ

伊勢貞成

本田親商

家久公

文祿三年立、寛永十五年二月二十二日薨、

○以下十五人並二前二見ユ、

伊集院忠棟

喜入季久

平田光宗

島津忠長

平田歳宗

町田久倍

本田親正

比志島国貞

鎌田政近

平田増宗

伊集院久治

樺山久高

平田宗親

伊集院久信

新納旅庵

○有川貞世二男也、初弥九郎、慶長十二三年ヨリ任、谷山

君家累世御城代御家老記

地頭タリ、寛永十七年庚辰マテ也、十八年辛巳四月三日、於武州江戸卒、○寛永元年ヨリ江戸ニアリ、徳川家及其臣下等ニ阿諛スルコト有テ国人蓋是ヲ不忠ノ臣ト云、

伊勢兵部少輔貞昌

○初勝兵衛尉ト称ス、○慶長十六年任ス、寛永元年甲子正月十七日於江戸死、一本十八年四月迄トス、

忠経―忠光―光俊―経俊―道俊―寛氏―助久―清久

忠良―成久―俊久―高久―頼本―梅吉―梅久

忠榮―久徳―久倍―忠綱―久幸―忠尚―久孝

久東―久居―久儔

町田図書頭久幸

○初藤次右エ門、又称諸右エ門尉○慶長十七年壬子任ス、公在加治木ノ時、元和七年、命ヲ奉シテ彼地ニ移ル、養子次郎左エ門重行、嫡子知行高二千二百二十七石トアリ

重秋―兵部少重宗―重種―重庸

寛永元年六月六日卒、年五十七
三原備中守重種

源三郎、左近將監、式部大輔久首、久好、隱居号商山、寛永七庚午五月ヨリ慶安二年己丑ニ至ル、寛文三年卯四月十八日卒、

川上因幡守久国

○光久公御代ニ至ル、初新八郎、近江守忠岳○図書頭忠良二男也、兄河内守久倍早世後家督ヲ嗣ク、元和四年ヨリ寛永廿年未六月十二日職中ニ卒、

島津下野守久元

○光久公御代ニ至ル、○歳久―忠隣―下総守常久―久慶

○初忠政トモアリ、忠統トモアリ、是非未詳、撰津守季久ノ四男ニシテ兄式部少輔久通ノ名跡、元和四年ヨリ寛永十年癸酉ニ至ル、或寛永元ヨリ五年迄トモアリ、正保二年酉三月十八日卒、

喜入撰津守忠統

島津弾正大弼久慶

○紀伊守国貞子也、高岡地頭タリ、元和九年十月廿三日連判アリ、○不忠ノ志アルカ故ニ、寛永五年職ヲ罷テ種子島ニ流罪、然後於彼地賜死、

此志島宮内少輔国隆

○初又次郎、出雲守、政弘、政晴○光久公御代ニ至ル、○揖宿・蒲生ノ地頭ニ転補ス、寛永十二年乙亥ヨリ同十八日迄一本寛永四ヨリ十八迄、又十四年七月ヨリ十八年迄、○政近―藏人政富―政統十八世ナリ、

鎌田治部少輔政統

○久辰ノ子也、系図前ニ見ユ、○光久公御代ニ至ル、○初

○光久公御代ニ至ル、初次郎四郎重饒、備中守重種子也、
寛永十二乙亥年任ス、同十七庚辰御役御免、掛宿源忠寺
ニ流サル、

三原左衛門佐重庸

三原重庸
山田有榮

○光久公御代ニ至ル、越前守有信ノ子也、初宗千代太郎、

弥九郎、後昌巖又ハ晏齋、寛永十三年丙子三月ヨリ慶安
三年庚寅迄、然トモ寛永十二年三月十七日連判アリ、十
二年ハ非ナラン○寛文八年申九月二日卒、于出水葬龍光
寺、年九十一○一本九月二日ヲ九月八日トス、○職ヲ辞
シテヨリ八朔ノ進上物ヲ止ム、

山田民部少輔有榮

光久公 寛永十五年五月八日立、貞享四年七月廿七日隱居

○以下七人伝前ニ見ユ、

島津久元

伊勢貞昌

川上久国

島津久慶

鎌田政統

○初長左エ門尉、寛永十八年辛巳任、正保三年丙戌於城州
伏見病死、実ハ鎌田政近ノ二男也、穎娃弥市郎久秀ノ家
九世ナリ、或ハ左馬介ニ作ル、

穎娃左馬頭久政

○初又次郎北郷家十世左エ門尉時久ノ三男、加賀守三久ノ
嫡子ニシテ平佐家二世也○寛永二十年癸未ヨリ明暦二年
丙申迄、寛永十六年己卯十一月ヨリ旅御家老寛文六丙午
八月ヨリ御城代、同九年二月御免、延宝八年申八月晦日
卒、

北郷佐渡守久加

○久元ノ子也、初又七郎久慶、寛永十年十一月ヨリ旅御家
老、一本十六年トス、一本十九年十一月トス、正保二年
乙酉ヨリ御家老、寛文十二年ニ至ル、○寛永十九年壬午
正月廿六日、公府城ヲ發シテ武州ニ行ク、此時初テ供奉
ス、○旅御家老ノ内寛永十六年加判列タリ、○所謂髭図

書殿是也、

島津図書頭久通

○綱貴公御代ニ至ル、天和元年ヨリ貞享五年迄、

三久―久加―忠精

作左エ門

忠昭―作左エ門久嘉

宗次郎忠度

北郷総次郎忠昭

○五郎右エ門入道遊甫ノ養子実ハ新納尾張守ノ二男ナリ、

康久ノ養孫ニシテ系図前ニ見ユ、○正保二年乙酉ヨリ寛

文三年癸卯迄○隱居号遊山○初乙寿丸、豊三郎、○延宝

三年正月五日卒、

新納右衛門久詮

○初敷根藏人頼喜ト云、光久公ノ妹婿タルニ及テ島津氏ト

久字ヲ賜フ、市成主島津伊勢久明ノ祖也、○慶安二年乙

丑ヨリ寛文四年甲辰迄御役料高二千石ヲ賜フ、

○備前守頼次―備前守頼重―備中守頼愛―中務少輔頼賀―

備中守頼兼―藤左エ門頼光

中務立頼

初三十郎ト云、下野守久元ノ弟也、

久頼

島津筑前守久頼

○初源六、勘解由、隱居後石心、○宗支十六世兵部左エ門

尉久徳二男源左エ門久政ノ子也、慶安二乙丑ヨリ寛文二

壬寅迄自家系図ニハ寛文癸卯八月ト見エタリ、○主馬家

ノ祖也、久政ノ兄ハ久倍ナリ、延宝四年十一月十日卒、

町田伊賀守久則

○初伊勢鶴丸、隼人佐、又兵衛○家久公第十四男也、大隅

守貞豊力養子トナリ統ヲ嗣ク、慶安二乙丑年ヨリ、寛文

三癸卯迄同年八月四日病卒、

伊勢兵部少輔貞昭

○初源五郎政光○七世玄蕃允政朝養子此家元祖ハ本家越前

守政経ノ三男木工之助政常初テ系ヲ別ツ、慶安二ヨリ寛

文七迄以前ハ旅御家老、

鎌田源左衛門政有

○初又七郎、筑後守、政昭、政勝、政由、政成、政直○家久公ノ御子ニシテ二十一世政統ノ後ヲ嗣ク、明曆二年二月イ二十月月十六日任ス、寛文六年迄也、是年六月四日卒、又、二日トス

鎌田藏人政信

○下野守久元ノ二男ニシテ別立○万治元年ヨリ御家老、寛文八年マテ也、此前ハ旅御家老ニテ承応四年二月四日初テ御供ト見エタリ、○初新八郎、越中久茂―甲斐久武

―内記久文―新八久昌○初名忠智、北村氏

島津中務久茂

○初源六、源左エ門、勘解由、久昌、忠代○伊賀久則ノ子也、寛文二年ヨリ貞享二年二月迄、久政―久則―忠貞―源左エ門久英―源左エ門久孝

町田伊賀忠貞

○初弥五郎、久正、久仁○右エ門佐久詮子也、○綱貴公御

君家累世御城代御家老記

代ニ至ル、寛文三年癸卯ヨリ元禄八年迄、依願御免、同年三月十八日卒、イ五月迄

新納又左衛門久了

○初主計助、清太夫、久延、久共○豊後守久賀二男也、寛文六年丙午八月七日御物座方、元禄三庚午四月十九日、延宝二甲寅八月廿七日御物座奉行、一本元禄三年迄、同四年未八月三日卒トアリ、○綱貴公御代ニ至ル、

島津帯刀久元

○仲右エ門兼安ノ子也、○明曆二年ノ比ヨリ旅御家老ニテ寛文六年癸卯三月二日御発駕ノ御供ニ見ユ、寛文七年十一月ヨリ同三年依願御免、同七年十月十二日毎月御定之御用日ニ登城可仕旨命ヲ奉ス、七年丁未二月十六日初テ登城ス、十一年辛亥二月三日辞、禄二千石、綱貴公御幼稚ノ間ハ夫婦在江戸ニテ守奉ルコト九年、

諏訪木工右衛門兼利

○初市熊、宝寿、忠弘、隠居後萬山○家久公御子ニシテ島津久賀ノ母ニ養ハレ、久賀ノ弟トナリ、延宝五年三月十

四日島津氏ヲ辞去テ光久公弟ノ列トナリ、家ヲ建ツ、助之丞家ノ祖也、○寛文七丁未ヨリ延宝七年己未迄相勤、元禄十六年未八月三日卒、八十三歳、

島津市正忠広

○初新八郎、新八、久武、久政、久賢、寛文十庚戌ヨリ貞享二乙丑迄、以前ハ旅御家老也、系図前ニ見ユ、

島津甲斐久馮

○伴兵衛兼屋ノ男、弾正兼盛曾孫也、初半^{イ伴}三郎^{イ喜}兼吉、兼方、弾正、隠居後活堂、寛文十庚戌八月廿四日任、宝永四丁亥正月十三日辞ス、吉貴公御代ニ至ル、○宝永六己丑二月八日卒、

肝付主殿久兼

○初又五郎、出雲、久胤○久通ノ子也、○綱貴公御代ニ至ル、寛文十二壬子任、元禄六癸酉十月十六日御役中ニ卒、御家老ニテ御記録総監タリ、

島津図書久竹

○初又七郎久英、延宝二甲寅ヨリ宝永七庚寅正月迄、吉貴公御代ニ至ル、家久―豊久―中務大輔忠榮

安芸守久雄―久輝

島津中務久輝

○左近忠時子也、初左近榮時、延宝七己未ヨリ宝永七庚寅六月廿八日依願退役、於御前御腰物ヲ賜フ、吉貴公御代ナリ、同年七月九日山栖ト称ス、此代久字ヲ賜テ家嫡永々名ニ用ルコトヲ許サル、

種子島藏人久時

○忠広ノ子也、初大学、隠居後奚云、寛文二年ヨリ、御家老代御役料二千石、天和二壬戌八月十七日御家老、宝永二乙酉三月十日迄吉貴公御代ニ至ル、四年十二月廿日卒、

島津助之丞忠守

○十世撰津介忠長後嗣、初求馬、右エ門、又兵工忠辰、実ハ光久公第九男也、貞享三丙寅七月任、御役料二千石、宝永二乙酉九月迄、吉貴公御代ニ至ル、享保七年寅十一

月十五日卒、

喜入安房久亮

綱貴公

貞享四年七月廿七日立宝永元年九月十九日薨、

○以下九人伝前二見ユ、

北郷忠昭

新納久了

島津久元

肝付久兼

島津久竹

島津久輝

種子島久時

島津忠守

喜入久亮

○御城代ノ場ニ記ス○

忠教按ルニ西藩野史ニ貞享三年老中ニ任スト、然ルトキハ光久公御代ニ録スベシ

島津将監久當

○同○忠教按ルニ延宝四年御城代ニ任シ、同八年兼テ、国老ニ任ストアルトキハ光久公御代ニ録スベシ、

君家累世御城代御家老記

島津豊前久達

○四世狩野介宗応―狩野介宗弘―宗正 初兵十郎、次郎兵エ式部○貞享五年九月ヨリ元禄十二年迄也、志布志地頭タリ、御役料高二千石ヲ賜フ、以前ハ公御部屋栖ノ内ハ二ノ丸旅御家老ナリ、

平田新左衛門宗正

○初清賢、七郎、八郎左エ門、孫左エ門、元禄五年壬申十一月九日ヨリ、御物座奉行、今ノ御勝手方也、御役料二千石、十二年御役中ニ卒、

重盛―高清―沙弥行西―清重―清忠

此間十五世

重弘

重正―重長―清雄―清純

仙十郎

内記

清方

清香

式部

禰寝丹波清雄

○久竹子初久雅、久英、又五郎、下野、元禄十年丁丑閏二月十五日ヨリ同十四年七月十六日迄、^{前四日}○忠長ヨリ五世皆続テ国老ニ任ス

四五七

島津圖書久洪

○初四郎左エ門、美作、元禄十丁丑六月十日ヨリ宝永七二月十日御役中ニ卒、禄二千石、吉貴公御代ニ至ル、

時久—実久—忠臣 初久臣 忠治 忠統—忠明—忠武

是久—友義—忠祐—祐久—忠元 武藏守

忠勝—忠茂—武久—忠真—久元 近江守 忠影 又助

久辰 近江 久珍 市正 久邦 四郎
久基 孫四郎、六郎次郎、島津仲家ノ祖

新納市正久珍

○初虎松、虎之丞、式部、久始、久明○光久公十男也、兄八人別家ヲ続ク故、立テ二男トナリ家ヲ樹ツ、○元禄十四年巳十月十一日ヨリ享保二年丁酉御役中ニ卒、禄二千石、吉貴公御代ニ至ル、

島津大蔵久朗

○初源三郎、伊織、隱居祥山、元禄十四年己十一月十一日ヨリ一本二十月十一日ヨリ久朗副役トアリ、宝永二年乙酉、十二月廿八日迄、正徳元年卯十二月廿一日隱居、系図前ニ見ユ、

川上式部久重

吉貴公 宝永元年甲申十一月十三日立、享保六年辛丑六月十九日隱居、

○以下九人伝前ニ見ユ、

- 肝付久兼
- 島津久輝
- 島津忠守
- 種子島久時
- 島津久當
- 喜入久亮
- 新納久珍
- 島津久朗
- 川上久重

○帯刀久元子也、初主計久年、後仲休、隱居睡雲、宝永元

甲申十月廿九日ヨリ正徳五乙未九月十一日迄祿二千石、

○豊州家二男家也、

島津帶刀忠雄

○主殿久兼子也、初伴三郎左エ門典膳、帶刀、宝永六乙丑

十一月十三日ヨリ享保三戊戌三月廿七日御役中ニ卒、イ

三月十日、三月十七日トモアリ、

肝付主殿兼柄

○久輝ノ養子実ハ四世安芸守久雄ノ二男、島津八郎左エ門

久矩嫡子也、初久命、久重、又七、備前、宝永七四月十

三日中務、享保十九七月六日主税、宝曆八月十九日内

記、後主殿ト改ム、○速敵曰、此伝紛レ見難シ、然トモ

本ノ儘写ス、後考フヘシ、○宝永七庚寅四月十五日ヨリ

元文四未七月朔日御役中於撰州卒、

島津主殿久貫

○久時子也、初三郎次郎義時、伊時、隱居栖林、宝永七六

月廿八日ヨリ元文元丙辰十月九日迄、兼御側也、初父久

時御役御免ノ日、直ニ当職トナリ、出水地頭タリ、

種子島彈正久基

○隱居後齡翁○十世豊前久武養子、実ハ帶刀久元ノ二男

也、正徳五未十月十八日ヨリ享保十六年亥六月依願御

免、御脇指ヲ賜フ、

島津内膳久兵

○繼豊公御代ニ至ル、祿千五百石、御側方御旅方御隱居ヲ

兼又、○孫太郎義頼養子、元ハ米良藤右エ門也、隱居後

彦一ト称ス、○宝永五年子於江戸称ヲ隼人ト賜フ、○正

徳五乙未十二月十八日任ス、祿千三百石、享保六年、公

磯館ニ退隱ノ時、御隱居方御家老トナル、延享四年、公

薨ノ後、翌年正月十一日、繼豊公ノ台前ニ於テ願通御役

御免、一世御養料百石ヲ賜フ、樺山主計達之、

比志島隼人範房

○総次郎忠昭養子、実ハ相良源五左エ門頼安二男也、享保

二年丁酉十月朔日ヨリ同八年癸卯十一月廿七日御役中ニ

卒、繼豊公御代ニ至ル、

北郷作左衛門久嘉

○三郎左エ門忠光十六世備前久達子、始内記、久武、享保

義岡右京久守

三戊戌七月五日ヨリ延享二乙丑十月六日御役中ニ卒、繼
豊公御代ニ至ル、禄千五百石、

島津木工久豪

繼豊公

享保六年六月九日立、延享三年十一月廿一日隠居

○以下八人伝前ニ見ユ

島津久當

○初十左エ門、正徳二辰四月二日藏人ト更ム、隠居後自

島津久貴

閑、享保五子九月三日任、禄千石、繼豊公御代ヨリ御旅

種子島久基

方、同廿年八月九日願通御役御免、其後家格寄合ニ命セ

島津久兵

ラル、

北郷久嘉

○十右エ門久立―刑部久弘―久矩

島津久豪

伊集院藏人久矩

伊集院久矩

○初朝右エ門、元武州人、家系不詳、○享保五子十一月廿

○久朗ノ子也、初左仲久春、○享保八癸卯十二月十一日

一日於江戸任、禄千石、御側方、繼豊公御代御旅方、享

任、禄千三百石、延享三寅二月六日於江戸卒、宗信公御

保十巳九月十二日御役中、於江戸卒、

名越右膳恒渡

代ニ至ル、

島津大藏久純

○作助久伴後嗣、実ハ鎌田十左エ門政常長子也、○享保九

○島津織部久達二男也、始島津五郎右エ門、八郎大夫、終

年正月ヨリ公ノ御隠居方御家老、同十三申七月廿四日御

リニ市左エ門ト称ス、○宝永二酉十月廿八日平岡氏ヲ賜

役中卒、

終

テ家ヲ樹ツ、享保十一年五月十一日任、禄千三百石、十五日称ヲ内匠ト賜フ、六月十一日ヨリ御側方、二十年乙卯八月九日御役御免、家格小番トナル、元文元辰二月廿四日没、

平岡内匠久品

○二十世相馬忠郷子也、初助太郎、権左エ門久躬○享保十一年六月廿六日禄一千石、寛延三年九月廿一日御役中卒、重年公ニ至テ三世ニ事奉ル、

樺山主計久初

○堀甚左エ門興喜^{イ嘉}養子実ハ本田与兵エ親昌二男也、始七郎、四郎左エ門、甚左エ門、隠居了海○享保廿卯八月十一日任、御勝手方也、元文六酉二月十五日願通御役御免、名代堀弥八郎ヲ比志島範房召列、吉貴公ノ台前ニ出テ願ヒ奉ル、上意ニテ免サル、一世御養料百石ヲ賜フノ旨穎娃左京久周達ス、御部屋栖ノ時ヨリ事奉リ首尾能相勤、御機嫌思召ニ依テ御目錄下サレ御次ニ於テ御料理ヲ賜ヒ取込拝借等都テ被下切ノ旨比志島氏達ス、

堀四郎太夫興昌

○長左エ門久明^{イ時}養子実ハ島津中務久貫第三ノ弟也、初長左エ門左京○元文元辰十二月九日於江戸任、延享五辰正月十九日御役中於江戸卒、実ハ自殺ト云伝フ、宗信公御代ニ至ル、

穎娃内膳久周

○種子島藏人久時ノ二男、始種子島十左エ門時成ト云、隠居仲道○元文四未十二月廿三日任、於磯館尊命ヲ拝ス、○延享元子五月廿二日北条氏ヲ賜テ家ヲ建ツ○延享四卯七月廿七日、願通御免、御養料百石、宗信公御代ニ至ル、

北条織部時守

○太郎右衛門政高ノ子也、始六郎太夫政置隠居禪了○元文六酉二月十五日任、禄千石、延享四卯七月廿三日願通御免一世御養料百石、宗信公御代迄、

鎌田太郎右衛門政直

○始又次郎、民部、石見○寛保三亥閏四月廿三日於磯館任、寛延^{イニ}三二月廿四日御役中卒、宗信公御代ニ至ル、

○歳久—常久—久麿—忠隆—久道—久建—久儔

久甫—久定—久統—久風—久微

島津左衛門久甫

穎娃久周
北条時守
鎌田政直

島津久甫
島津久品

伊勢貞起

○凶書久竹二男左内久香^{イ香}ノ子也、初右平太久郷、寛延二年

二月廿五日右京卜更ム、後主鈴○寛保三亥六月七日於磯館任、禄千三百石、明和四亥二月十七日御役中卒、重豪公御代ニ至テ四世ニ事奉ル、

島津主鈴久品

○島津助之丞忠守二男也、初島津次郎右エ門、金太夫、隠居後豊翁、正徳元卯十一月廿日郷原氏ヲ賜フテ家ヲ建○

延享四卯七月廿二日任、御勝手方琉球方ヲ兼、禄千石、五年辰正月廿一日御免、

郷原転久雄

○兵部貞榮ノ子也○延享二丑十二月十二日任、無禄世子宗信公代公以伝台命、宝曆四戌十月五日於江戸御役中卒、重年公御代ニ至ル、

伊勢兵部貞起

宗信公 延享三年十一月廿一日立、寛延二年七月十日薨、

○要人政躬子也、初源左エ門、隠居後桃林、延享四卯七月廿二日任、禄千三百石、宝曆五亥九月九日ヨリ御勝手方、宝曆十一巳七月廿七日依願御免、一世御養料百石、重豪公御代迄、

鎌田典膳政昌^{スケ}

○以下七人伝、前ニ見ユ、

樺山久初

○新左エ門宗正—新左エ門正房—正輔○初次郎兵衛、新左

工門、掃部、延享五辰正月廿一日任、御勝手方琉球方兼、宝曆五亥五月廿五日、濃州ノ役中ニ卒、重年公御代ニ至ル、

平田鞆負正輔

○大蔵久純子也、初八郎左工門、主鈴○延享五辰二月十五日任、禄千石、同年七月十四日御役中ニ卒ス、

島津大蔵久丘

○薩州家六世義虎四男越前守忠栄五世織部久近ノ子也、初イハ弥市郎○寛延元年戊辰七月廿七日任、禄千石、同四年未閏六月七日依願御免、御養料百石ヲ賜フ、重年公御代ニ至ル、○隱居称遊山、

島津矢柄久富

○主殿久貫三男也、兄二人早世ニ依テ統ヲ嗣ク、○初平八久柄寛延二巳九月朔日任、時公病ルニ依テ島津木工代テ達之、宝曆八寅十二月廿日御役中殿中ニ在テ急病下城シ卒ス、重年公御代ニ至ル、

島津主殿久馮

○左京久守子也、初仲四郎、左平太、相馬、寛延二巳九月初日任、禄千石、島津木工代テ達之、一本御下屋敷隅州公御直ニ命セラルトモアリ○宝曆十年辰九月六日、公姫於榮君ニ從テ江戸ヨリ国ニ着、即日御免、

義岡彈正久中

重年公 寛延二年十一月十日立、宝曆五年五月十六日薨、

○以下八人伝前ニ見ユ、

樺山久初

島津久品

伊勢貞起

島津久馮

平田正輔

義岡久中

島津久富

鎌田政昌

○市来次郎左工門家賢子也、初次郎九郎、次郎左工門、寛延三年午十一月十二日於江戸任、禄千石、宝曆三酉三月二日、継豊公ノ御隱居方トナル、四年戌四月初日依願御

免、御養料百石ヲ賜フ、五年亥五月十日卒、

市来左中政方

義岡久中
伊集院久東

○四世修理亮忠治二男駿河守是久、十一世左京久敦子也、

初次郎四郎、次郎兵衛、宝曆三酉七月十一日任、禄千

石、四年甲戌九月廿五日御役中卒于江戸、

新納内蔵久品

島津図書久亮

○伊集院家十三世十右エ門久朝二男遠江守久瀨三世、十蔵

久達子也、初十左エ門、十蔵、宝曆五亥六月八日於江戸

任、禄千石、六年丙子十一月七日御役中卒、重豪公御代

ニ至ル、

伊集院織部久東

重豪公 宝曆五年七月二十七日立、天明七年正月二十九日

隠居、

樺山左京久智

○以下五人伝前ニ見ユ、

島津久品
島津久柄馮

鎌田政昌

高橋此面種寿

○吉貴公第五男ニシテ忠長七世図書久倫之養子也、初知之

助、○宝曆五亥九月九日公江戸在ス、故ニ継豊公御下屋

敷ニテ命セラル、十三年癸未九月廿六日御役中ニ卒ス、

○主計久初子也、初七郎久倫○宝曆六子十二月四日任、禄

千石、十一年巳七月廿七日病氣、依願御免、快氣ノ上出

テ仕ヨト命セラレ御時服ヲ賜フ、明和元申十月廿一日再

任、公江戸ニ在ス故、島津備中貴儔代テ命ヲ伝フ、七年

於江戸御側方トナル、安永二巳九月十五日再病氣、依願

御免、一世百石ヲ賜フ、

○七郎右エ門種房子也、初七郎右エ門縫殿種辰、種房、種

敏、宝曆五亥十一月七日任、此面ト改称、禄千石明和五

子七月廿五日御免、

○藤馬重之子也、初孫兵衛、○宝曆九卯六月廿一日任、禄千石御勝手方琉球方兼、十一年巳九月廿一日御役中江戸二卒、

菱刈藤馬實詮

○出雲守政近七世小藤次政武子也、イ正甫初小藤次隼人○宝曆十辰七月六日任、禄千石、十二年午二月藏人ト拝領、十四年申四月廿八日御役中卒、

鎌田藏人正芳

○左エ門久甫子也、初又六郎、出雲、若狭、山城○宝曆十一年巳八月四日任、十二年午二月山城ト拝領、明和二酉二月廿五日有故依願則日御免、後左エ門、天明五巳三月以前二御家老ヲモ勤故思召有之、家格之御礼等は迄之通ト命セラル、

嶋津左衛門久定

○佐志家六世將監久常養子、実ハ小平太久幸ノ二子也、初所次郎、小平太、左中、隠居後嘯山○久定ト同日若年寄ヲ転シテ任ス、禄千石、明和七年於江戸御側方ト命セラ

君家累世御城代御家老記

ル、天明三卯正月多年ノ勤功ニ依テ二百石ヲ加賜フ、四年辰九月伊賀ト拝領、寛政二戌正月十一日三百石ヲ加賜フ、合禄千五百石、五年丑五月十九日依願御免、一世百石取込拝借下サレ切御時服拝領、

島津伊賀久金

○駿河守義朗六世助右エ門国陣子也、初与エ門国富イ国詮隠居後清運○宝曆十三未十一月十一日任、御勝手方兼禄千石、安永四未七月廿九日内々為御知有之、依願御免、一世百石ヲ賜フ、天明元丑七月十日卒、年八十、

川田伊織国福

○仲久道子也、初権左エ門久智、隠居久山後幽翁○明和二乙酉七月廿一日大目付ヨリ転任ス、禄千石天明七未五月廿七日依願御免、一世百石ヲ賜フ、外先規之通、齊宣公御代ニ至ル、

○忠清——備前守久基——六郎次郎久道——久健——久行——久房

島津仲久健

久健伝、義天公二子薩摩守用久七也ノ孫、薩摩守義虎

喜入安房久福

ノ二男ヲ備前守忠清ト云、家ヲ不立、一子ヲ新納家十
一世近江守久元ノ嗣トシ、近江守忠彰ト云、其子近江
忠辰入道達心、其子市正久珍ナリ、久珍ノ二男孫次郎
ヲ以宝永六丑十月十六日忠清ノ後ヲ嗣シメ、薩州家三
男ノ格ト尊命アリ、島津六郎次郎久嗣ト云、早世シテ
家断絶、於是二階堂榮樂二男權左エ門ナル者、浄国公
ノ命ヲ奉シテ久嗣ノ後ト成リ久道ト名ク、公ニ磯館ニ
奉仕シテ若老中タリ、致仕ノ後久隣ト称ス、其子久健
也、

小松帶刀清香

○桂家十二世イ本七郎太郎兵衛久音子也、初藤九郎、太郎兵衛、隱
居後冬山○明和四丁亥四月三日大日付ヨリ転シテ任、祿
千石、島津貴儔公ノ江戸ニ在ルニ二代テ命ヲ伝フ、八年卯
九月廿九日依願御免、以下略、

桂織部久中

○島津左エ門久竹ノ二男角助、歳秀、後二齋宮ト更ム、寛
陽公養テ子トシ以テ山岡氏ヲ賜フテ家ヲ建、其子齋宮久
方、一本房宗ニ作ル、久澄ハ其子也、初角之助、權太左
エ門齋宮○明和八卯八月廿八日任、祿千石、安永三年正
月、於江戸市正ト拝領、九年子正月廿九日於江戸御役中
卒、

山岡市正久澄

○安房久亮ノ曾孫主膳久起子也、初安太郎、主馬○明和六
丑十二月朔日大目付ヨリ転任、天明八申年多年ノ勤功ニ
依テ祿千石ヲ賜フ、辞之返献、寛政元酉八月廿九日、御
役中ニ卒、齊宣公御代ニ至ル、

○赤松甚右エ門養子、実ハ町田孫七二男也、初甚右エ門、
隱居後隨風○安永四未七月廿八日任、祿千石、依願御免

御養料百石、同月廿五日隱居、九年子四月十二日卒、七十六歳、

赤松造酒則正

○二階堂林左エ門行通養子、実ハ相良彦右エ門長意二男

也、後二宗支二階堂出右エ門行道之家跡相続ノ尊命有テ

二男家ト兼嗣ク、初四郎次郎、左右エ門部、行雄、行中

行寧、○安永五申十月十一日任、禄千石、公在江戸ノ故

島津兵庫久徴、代テ命ヲ伝フ、御勝手方兼天明二寅正月

十五日表方寛政二戌九月十四日御役中ニ卒、

二階堂主計行且

○初十太右エ門大進後近江ト拝領、安永九子六月十一日、

若年寄ヨリ転シテ御側御家老二任、禄千石、公江戸ニ在

故島津若狭忠救代テ伝之、天明五巳年奥掛御免、同六年

五月十三日被聞召通旨有之、御役御免隱居、屹与慎居ベ

キ旨尊命アリ、

島津近江久起

○天明二寅正月十五日大目付ヨリ任、琉球方御勝手方兼、

君家累世御城代御家老記

禄千石、公在江戸ノ故、島津兵庫久徴代テ伝之、六年午五月十三日表方、七年未五月廿七日願通御免、一世百石ヲ賜フ、

本江田氏

○重陳―浦貫

通興―通直―通古―通温―通救

通誼―通哲

宮之原主膳通直

○初弥平太龍衛親方、天明六年五月十三日御側詰ヨリ任、

禄千石、御勝手方琉球方兼、島津久徴公二代テ伝之、天

明七未五月廿七日願通御免、多年奥向勤ノ功モ有之故、

一世百石ヲ賜フ、

川上頼母久品

○市田喜内貞行事、大坂邸足輕也、後命ヲ奉シテ府下土ト

成、其子教国也、初熊次郎、喜内貞央○天明六年十二月

十三日於江戸任奥掛、公二代テ齊宣公達之、禄千石、江

戸居付、妻子養料八百石、寛政元酉十一月十一日御免、

即日家格一所持ト成、○齊宣公ノ時寛政四子五月十九日

再任、島津若狭忠救伝公命、異国船掛タリ、文化五辰二

月江戸ニ在リ、御府ニ於テ御免ノ旨親類承知直ニ江戸ニ至テ達之、

市田勘解由教国

○菱刈藤馬実詮子也、初孫兵工、大炊実興、後隆邑○久邦同日任、御名代同人、禄千石、文化三子八月二日御役中二卒ス、

菱刈下総実祐

齊宣公

天明七年正月二十九日立、文化六年六月十七日隠居、

○初新左工門、軍兵工、金郷○天明七未四月十一日任、八年申四月十一日御役中二卒、○御勝手方、

イ三月十三日

○以下七人伝前ニ見ユ、

喜入久福

関山糺金暉

二階堂行旦

○登久置子也、初久亮○天明八申九月三日任、禄千石、寛

イ十月廿日

島津久金

政二戌六月廿二日御役中二卒、イ元酉十一月御役中二卒

島津久健

ス、

宮之原通直

ス、

川上久品

島津登久連

市田教国

○寛政元酉十一月朔日任、禄千石、八年四月廿八日依願御

免被下方例之通、○光久公十七男求馬久房孫也、初幸之

丞、

島津求馬久昶

○木工久峰ノ二男ニシテ其後ヲ嗣ク、初矢之助、木工、後和見、石見○天明七未三月九日任、島津越後貴澄公命ヲ伝フ、異国船掛タリ、四月廿三日請テ和泉卜更ム、寛政三亥三月十九日御役中ニ卒、歳三十九、

島津豊前久邦

○初左源太時央、経當、後恒中、盛晨、隠居鶴翁、○寛政

元酉十一月六日任、御勝手方兼、十一年末九月依願御免、被下方例之通、○右膳恒渡孫也、

一本八月廿五日

二階堂河内行智

名越右膳恒篤

○寛政五丑七月廿八日任、禄千石、享和元酉十月二日依願御免、イ九月廿九日御免トアリ○川上家十九世

川上久馬久致

○初亘、兵部、伊豆○寛政二戌十二月廿八日於江戸任、享和元酉七月十日、御役中ニ卒、異国船掛、○兵部貞起子

伊勢播磨貞矩

○山田新助家ノ庶流也、初司○寛政七卯八月廿八日任、享和二戌十二月廿六日御役中ニ卒、

山田伯耆有儀

○寛政三亥三月廿一日任、島津若狭忠救、代公而達之、禄千石、四年子閏二月十九日御役中於江戸卒、○隼人範房孫、

比志島要人範章

○寛政九巳三月朔日任、御勝手方兼○文化二丑八月廿五日被聞召通旨有之、御役御免○此面種寿子也、

高橋縫殿種央

○初權太左工門、右京、齋宮、雅楽○寛政三亥十二月廿八日任、禄千石、五年丑五月六日御役中於江戸卒○市正久澄子、

山岡市正久七口容

○伊織国福子也、初国通、義任○寛政十一未十一月十五日於江戸任、御勝手方兼、文化四卯率琉人自江戸還国、二月四日於大坂卒、

川田伊織佐賢

○主計行且子也、初蔀、主計行充○寛政五丑四月十五日於江戸任、九年巳三月十五日御役中ニ卒ス、

○造酒則正子也、初新之丞、造酒イ初則方○享和元酉十二

月六日任、文化三寅七月十一日依願御免、但シ前ニ為御知有之、

赤松市正則決ヒロ

○享和三亥二月朔日任、島津兵庫伝台命、○文化十酉九月

廿七日勤方宜差扣之命有之、十二月廿七日御免、齊興公御代ニ至ル、

穎娃信濃久喬エタ

○文化三寅四月廿八日任、四年卯十一月十九日御免、五年

辰九月廿九日大目付、九申正月十一日若年寄、大目附勤、文化十一戌三月廿七日再任、島津長門伝公命、文政

九戌十二月依願御免、被下方例之通、御免之節縮緬三卷賜之、隱居称葦舟、齊興公御代ニ至ル、○内藏久品孫、

新納内藏久命ナカ

○文化三寅八月六日任、十一年戌八月十二日依願御免、被

下方例之通、齊興公御代ニ至ル、○伊賀久金子、
島津将監久泰ヒロ

○典膳政昌孫也○文化四卯九月十三日御中途故、島津兵庫伝尊命、任之、御勝手方兼○文政二卯二月依願御免、被下方同、縮緬三卷賜之、齊興公御代ニ至ル、

鎌田典膳政興

○文化五辰六月三日於江戸任、文政七申七月朔日依願御免被下方同シ、齊興公御代ニ至ル、○初市太夫、隱居後久敷○新城家七世、

島津安房久備トモ

○文化五辰閏六月廿八日島津首令奉尊命伝之、任之、文化七年十二月十七日前二同シ、齊興公御代ニ至ル、

登久連子也、実島津備中貴備一男

島津登久兼

齊興公 文化六年六月十七日立、嘉永四年二月二日隱居、

○以下六人伝前二見ユ、

穎娃久喬

新納久命

島津久泰

鎌田正興

島津久備
島津久兼

○久馬、久致子也、初右近、美濃○文化七年八月廿七日任
島津若狭伝尊命○御勝手方兼○文政八酉年於江戸久馬卜
更ム、○文政十二丑五月朔日御城代勤方は迄之通、虎皮
鞍蓋賜之、天保三辰五月十五日御役御免、

川上久馬久芳

○出羽守久倍十世、初五郎太郎、隱居後三笑、○文化十一
戌十月廿九日任島津又八郎伝尊命○文化十一子八月十五
日御免○天保二卯年重豪公三位ニ叙セラルノ時、別段ノ
思召ヲ以大奥ヘモ罷上リ、御三殿様ヘモ御祝儀御機嫌伺
等可申上ノ尊命ヲ拝ス、此年六月也、○先年御役御免ノ
後不正ノ筋無之段被聞召通趣有之、依願御免ト可心得ノ
命アリ、天保四巳四月廿一日、

町田監物久視

○勘解由教国子也、初壬生長門○文化十四丑七月十三日長
門ト改ム、天保四巳年美作ト改ム、○文政二卯正月十五

君家累世御城代御家老記

日島津美作伝尊命、任之、御勝手方兼文政六未四月依願
御免、同月御取返、別而被聞召通趣有之、御役御免可慎
居ノ命有之、○天保四巳四月十九日先年御役御免ノ命ア

リト雖、今般被聞召通趣有之、依願御免ト可心得ノ命ア
リ、同廿一日御城代五百石拝領、同年十月十六日於江戸
御家老勤、禄千石、一往定府公命之、齋彬公代同十一月美作ト改
名、○同五年六月一往定府御免、毎年江戸出府命セラル
○天保七申五月九日依願御免、御養料五百石外例之通、

市田美作義宜

○北郷三久十一世、初作左エ門、隱居松翁、溪山公之所賜
也、○文政七申四月廿八日島津兵庫久徳伝尊命、任之、
十一年子九月六日御免○天保二卯六月町田久視ト同様ニ
尊命ヲ拝ス、又天保六未五月十九日思召アリ、先ニ首尾
能御免ノ筋ニ可心得ノ尊命ヲ拝シ、且一世御養料百石ヲ
賜ヒ、其身拝借等惣テ賜之

北郷内記久珉

○左エ門久定ノ孫也、初長袈裟又六郎、但馬○文政七申十
月廿八日島津安芸忠厚伝、尊命而任之、宗門改掛、天保

四七一

六未八月宗門掛御免、○後天保六未八月晦日、御勝手方掛兼、天保五年九月廿三日琉球掛三島方兼、同十月十三日唐物方掛○天保八酉七月十九日御城代御家老勤、諸掛都テ是迄之通、祿二千石、天保十二年十月十五日和泉卜改ム、○同十五年甲辰六月十二日依病御免、高三百石ノ物成ヲ賜ヒ取込拝借等被下切命セラル○後又左エ門○嘉永四亥四月日卒、

島津和泉久風

二階堂主計行典

○内膳久兵ノ玄孫ニシテ豊州家十四世也、初藤次郎内膳○文政九戌五月廿八日島津山城忠實伝尊命而任之、○天保五年六月十八日御役中ニ卒、

島津丹波久長

○文政十一子十一月十七日島津啓之助忠剛伝尊命而任之、○天保五年正月殿中ニ而病氣、同二月十一日依願御免、被下方例之通○伊織佐賢子也、初伊織、

川田信濃佐摺

○元武州江戸ノ人○文政十一子十二月八日、世子斉彬公代

公而任之、祿千石○御加増五百石○弘化二年巳十二月八日御役中卒、

猪飼央尚敏

○河内行智子也、初伊豆○天保二卯五月廿八日島津忠剛伝尊命、而任之、祿千石御勝手方兼○四年巳五月十三日御役中卒、

○天保三辰十一月於江戸世子斉彬代公命之、御家老格、御側詰、祿千石、御改革方御内用掛、○四年巳二月於江戸琉球掛、十月三日於大坂唐物方掛、○九年戌八月二十五日於江戸任御家老、六十人賄料、御趣法方ノ事ヲ掌ル、御側詰元ノ如シ、○弘化四未十月朔日御軍役終奉行、○嘉永元年申十二月十九日御役中江戸ニ卒ス、七十三、

調所笑左衛門広郷

○上井伊勢守覺兼八世也、初甚六、治部○天保六未四月於江戸勘解由卜改ム、○天保四巳二月廿一日島津讚岐貴典伝尊命、而任之、祿千石○同六月廿八日御勝手方琉球掛

兼、天保五年九月廿三日琉球掛御免○天保六未七月廿六日御勝手方御免、同年九月廿七日依願御免、被下方例之通、但シ前ニ為御知有之、

諏訪勘解由武敬

○登久兼子也、初権五郎○天保十亥六月十八日島津又八郎久長伝尊命而任之、禄千石、時七十七歳矣○弘化三年四月廿六日御役中二卒、八拾四歳、

島津登久満備

○下総隆邑子也、初木工之介○天保五年九月廿三日安房卜更ム、天保五年九月十八日忠教伝尊命而任之、禄千石、

○弘化三年三月廿四日御役中二卒ス、

菱刈安房隆観

○初仁十郎、佐渡、伊勢、市成邑主筑前守久頼六世孫也、

実ニ階堂河内行智二男也、○天保七申二月九日世子斉彬

公代公而命之、禄千石、同年十二月改名伊勢○天保十二

月二日改名石見○異国船掛、嘉永元申五月唐船掛宗門掛

○斉彬公御代ニ至ル○嘉永七寅正月御軍役掛寄○安政二

卯四月廿二月御軍役掛寄御免○安政三年辰十月五日御役

中二卒、年六十六、

島津石見久明
浮ハヤ

〔頭註〕
「原本ハ久浮迄ナリ」

○豊州家十五世而丹波久長ノ子也、初藤次郎又式部又主計

○天保十一子十二月十九日於江府任、禄千石○御勝手方

琉球方掛○弘化二年乙巳三月十七日御城代勤方如故、禄

千五百石、○六月五日改豊後○同四年丁未六月海岸防禦

掛○同年十月初日御軍役副御名代ニ補ス、島津貴典代公

而命之、○斉彬公御代ニ至ル、○嘉永四亥二月廿一日宰

相様御附御家老兼務命セラル、島津久四郎貴敦代公命

之、○嘉永四亥七月御改革方御内用掛○安政四巳十二月

日於江戸五百石御加増○五年午八月御用部屋詰○九月十

五日於大坂御勝手方掛兼○同六未十月廿六日御城代一篇

島津貴敦代公命之、余ハ御城代ノ場ニアリ、

島津主計久宝
豊後

○光久公十三子頼母久記五世而頼母久英子也、初郷十郎又

頼母○弘化二年巳六月六日忠教代公任之、禄千石、十五

日老岐卜改名○嘉永三戊四月廿五日被聞召通趣有之、御役御免、隱居剃髮成被仰付、慎可罷在旨被仰渡候、

島津老岐久武

○六代太守師久公二子碓山三郎左エ門久安之後裔也○初碓

山仲左エ門、又八郎、右エ門、藤馬○弘化三丙午閏五月

廿九日於江戸世子齊彬公代公而命之、禄千石、御側詰兼

諸掛総而是迄之通、且嫡々島津御称号ヲ賜ヒ、二男以下号

碓山○嘉永元申七月御側詰御免、同二年正月御内用方御

免、○同年二月十三日九時迄御用部屋詰ヲ命セラル、○

正月琉球方○同年五月廿八日御改革方御内用掛○齊彬公

御代ニ至ル、○同四年二月三日宰相様御方兼務、御側詰

是迄通於江戸命セラル、○嘉永四亥七月七日依願御免、

一世百石ノ物成ヲ賜フ、取込拝借被下切、御三殿様へモ

御祝儀御機嫌伺等申上、大奥へモ罷上ルベキノ旨命セラ

ル、

島津将曹久徳

○島津備中貴備二子末川将監久救之孫也、初直エ又将監、

主水、久馬○弘化四年三月廿六日島津讚岐貴典代公任之

禄千石、此渥大目付心添、琉球産物掛、嘉永元年五月十三日近江卜改ム、○嘉永元御軍役掛○嘉永二正月御勝手方掛○嘉永二四月廿四日御軍役方総奉行○齊彬公御代ニ至ル、○安政三辰六月廿七日依願御免、一世百石ヲ賜フ但シ御知セ有之、○同七月十九日思召ニ叶ハセラレス御役御免ノ筋ニ相心得ヘキノ命アリ、

末川久馬久平

近江

○久馬久芳子也、初東馬○嘉永二年己酉二月十三日任、島

津内匠久徳代公而命之、禄千石○同三年庚戌正月七日筑

後卜改名○齊彬公御代ニ至ル、○安政七申正月廿一日二

百石加増、

川上東馬久尚

筑後封

齊彬公 嘉永四年二月二日立、安政五年七月廿日薨、

○以下五人伝前ニ見ユ、

島津久浮

島津久宝

島津久徳

末川久平

川上久封

○安房久福曾孫也、初多門、○嘉永四年亥七月十七日任、

初若年寄○同五年子八月、御軍役掛御勝手方掛、○嘉永

六丑十月十五日改名安房○同年十一月十九日御役中二卒

ス、

安房
喜入多門久春
通

○樺山家十二代美濃守久高二男采女久盈七代ノ孫、実ハ島

津右平太久美弟也、初權十郎○嘉永五年子正月十五日

任、禄千石、初若年寄、大目附寄時二七十七歳○安政二

年卯四月廿二日月番御免、紅裏御免○安政六年未十二月

十九日依願御免、一世百石ノ御養料ヲ賜ヒ取込拝借被下

切、以来奥江罷通御祝儀、御機嫌同等申上、大奥江モ同

断申上候様被仰付候、

樺山伊織久
成
徴

○内藏久命ノ養子、実島山式部義矩二男○初次郎四郎又内

藏○嘉永六年丑十二月六日任録千石、初若年寄○御軍役

方掛御勝手方掛寄○同七年正月御改革方、御内用掛寄後

君家累世御城代御家老記

二本掛トナル、○安政三辰七月廿二日御勝手方掛、○同

六未正月廿四日御軍役総奉行、○同六未十二月諸掛総而

御免、○同七申二月十日依病御免、一世百石ヲ賜フ、外

例ノ如シ、

新納駿河久仰

○和泉久風子也、初又六郎、下総○安政二年乙卯四月廿二

日任島津讚岐貴典代公而命之、御軍役方掛○同三年辰九

月廿五日御軍役総奉行○同四年巳月日、禄千石、左衛門

卜改名○同六未正月十五日御名代ヲモ相勤候身柄ニ付御

役御免、月次節句日ハ是迄通、於御座ノ間御礼、年頭八

朔家格之通、扣席家格通、一世百石ノ御養料ヲ賜ヒ、取

込拝借都而被下切、以来奥江罷通、御祝儀御機嫌同等申

上、大奥江も同断申上候様被仰付候、

左衛門
島津下総久徴

○豊前久邦孫也、初木工、右門○初若年寄○安政三辰七月

廿三日任、島津三次郎忠冬代公而命之○同六未十一月御

軍役掛、

島津伯耆久福

四七五

○登久備子也、初八郎又権五郎○安政四年巳正月十三日又四郎貴敦代公而命之、禄千石○初若年寄、

島津登久包

七申二月御軍役総奉行、

島津左衛門久徴

茂久公

安政五年十二月廿八日立、

○式部久重六世ノ孫、初源十郎○安政六未十二月廿日任、御軍役掛、御勝手方掛、琉球掛、禄千石、御改革御内用掛、

川上式部久美

○以下七人伝前ニ見ユ、

島津久宝

川上久封

樺山久成

新納久仰

島津久徴

島津久福

島津久包

○川上家十五世上野久尚ノ二男弥五大夫久明四世ノ孫初亘

○安政七申二月十一日任禄千石○同月改名初弥五大夫

川上矢五大夫久運但馬

○安房久通子也○初壬生主水○安政六年未八月朔日於江戸

任、川上筑後久封代公○初大目附、

喜入撰津久高

(卷)
一此一本ハ御当家御代々御家老記ト云書三冊ヲ合見テ写ス、素ヨリ書誤ノミアリ、遺漏アリ、本書モ好ラス、追テ良本ヲ得ルコト有ン時ヲ待ノミ、

大山綱丞写

○安政六未十一月九日再任、御軍役掛、御勝手方掛、琉球

掛、御改革御内用掛○同月日御役料高千石ヲ賜フ、○同

以大山氏校正本摸之、時天保十年歳次己亥春二月二十有九日、

源忠教(朱印) □ □

覺悟之卷

川上縫殿藤原久映

一 頭殿御別火之事、昔者宿許ニ而御別火有之候へ共、明曆三年酉之歲御別火所出来申候、其年之頭殿は龜山又六殿嫡子・本田市右衛門殿嫡子ニ而候事、

一 別火所ニ御直り被成候日より御棚ニ而毎日御祓御座候、但今日より二重瓶子之飭り御座候、頭屋へ御直り之跡にも毎日御祓御座候、左候而後別火迄もかさり御座候、

一 御頭屋広間へも七月朔日より廿八日迄二重之飭り有之候、御棚へは無之候、

一 別火所并頭屋御棚之飭り掛小袖ニツ・掛帯二筋・長持二竿、但御頭屋ニ而ハ棚廻り候間長持老竿、長持之上ニハ夜着をニツか三ツか其上ニ枕をかさり有之候、鏡台一通・手拭掛老ツ・挾箱ニツ、但右之飭りは旧記等ニハ不相

見得候へ共近年如斯也、

一 御棚にて常住敷皮ニ不被成御座候共不苦候得共、被成御座筈ニ而候也、落間には御下り不被成候、座中ニ間々被成御座候時も敷皮御敷被成候、常ニハ畳乃上に被成御座候、御寝成候時も御敷被成候御棚ニも畳一帖御座候、別火所棚ニも同斷、

一 別火所并頭屋棚ニ而御膳參候時は屏風相立候、勿論御休なされ候時も屏風相立候、

一 御別火中ハ四ツ椀ニ而參候御菓子上り候、御頭屋ニ而ハ三ツ椀ニ而參候御菓子三度ツ、上り候、

一 御膳參候得者諸白上り申候、

一 御頭殿へ誰人之衣裳たりといふともめさせ上ましき也、

一 頭屋広間へ頭殿御三献乃時御敷被成候新畳ニ帖常ニ有之候、御能乃時ハ床乃上ニ重瓶子かさり候而有之候、さきのかべニ立掛置なり、

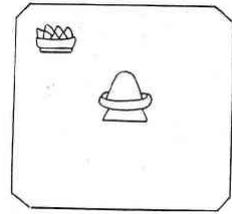
一 御棚ニ雨もり候而上ニ人上り候時者被有之事ニ候、

一 七月中頭殿御帷子ハ新敷と両日ニ老ツツ、めしかへらる筈ニ候、

一 七月御髮洗日 八日 十三日 廿五日以上三日にて候、

一 三献之事別火所并頭屋御棚ニ而御三献參候次第、

右三献之次第そへ肴共ニ四膳也、一番ニ瓶子を頭殿左之



御脇ニすへ置申候而御手掛、其次ニけつり物、其次ニ御酌、其次ニさしミ、其次ニすいり、其次ニ御酌、左候而瓶子より上候次第ニ下シ候、

一 御棚ニ而三献参候時はいつも瓶子上り候、御宮広間ニ而御三献ハ瓶子ハ御三献道具持出候、台にすへ付置瓶子ハ上ケ不申候故御手掛より上申候、瓶子乃上り候時は瓶子より下ケ申候、

一 御酌之取様ハ台之上ニ有之候かわらけニ御酒を三度入ルまねをして長柄を下ニ置台を持候而かいそへ居候方へ差出候へハかいそへかわらけを上候、

一 御三献参候時はいつニ而も左の御脇へくりこしにて候三献相濟候得者則御手水被召候、

一 御棚并広間ニ而御三献参候時者畳乃上ニ敷皮を敷候、宮ニ而御三献乃時ハ高座之上に敷皮を敷候、

一 頭殿御三献参候時者左右一度ニ参候間何時も包丁人者兩人ニ而候、一人ハ頭かゝりの庄屋也、包丁人者左右棚之間ニ罷居御三献ハ詰衆取次かいそへ相渡ス事ニ而候、一 頭殿三献ハ重信名字之人被相調候、いつも三献目にハ被参候、重信家差合候節ハ御包丁人より被相勤候、近年ハ御包丁人之内より被勤候、

一 御三献参候時者いつも神事奉行御棚へ参候、

一 七月中三献目之事、朔日 三日 七日 八日 十三日

廿一日 廿六日 廿七日 廿八日 右之日々にて候、

一 何そ公用ニ付神事奉行書付等仕候節ハ頭奉行へ兼而申達置筆者へ為書申筈にて候、

一 神事奉行より方々へ使遣候時は頭奉行へ申達名之者出ル也、

一 神事奉行七月朔日、同廿七日、同廿八日庄屋相付参候様

ニ申付、何角之用事相達事ニ候、

一 御名代二人、幣之役二人、敷皮役二人、神事奉行より公儀へ申上筈なり、

但頃日ハ右之役人神事奉行より不申上候而も公儀より

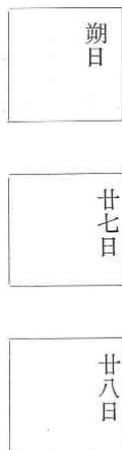
前以被仰付候間、神事奉行方へ不被仰候ハ、何某へ被仰付候哉之由御尋申上置候、祭之日遅参候へハ神

事奉行より申断也、

一 右者七月朔日之役者にて候、不被仰渡候ハ、六月廿八九日之頃ニ御尋申上可然候、

一 七月朔日御もたせ被成候幣ハ明日太夫方ニ而相調由候、

一 七月朔日廿七日廿八日御宮ニ而座配之図、



一 七月朔日幣之役の人刀鞘留之事、

一 七月廿七日・廿八日初献刀之鞘留之事、

但頭殿を守上ケ候故也、御中間刀鞘留之事、

右同断之故なり、

一 七月廿一日頭屋広間ニ重瓶あ子之饒り相替り申候、

一 同日御中間へくじとらせ候左一左二右一右二と調事に

候、一と有之候が太刀持にて候、二ハ中間役にて候、守

上ル役にて候、

一 同日座主太夫などより頭殿へ進上物被致候時分ハ御土器

被下事ニ候、其時ハ旧式ニ而候故先神事奉行御土器被

下、其後座主へ被下事ニ候、是旧式にて候誰ニ而も進上

物被致御かわらけ被下候時は先神事奉行被下候て其後進上物仕候人へ被下事仕付ニ而候、

一 神事奉行支度六月廿三日・七月朔日素袍袴着候、其外廿

七日・廿八日共ニ上下ニ而候、

一 頭殿道具直ニ鳥井より内ニ不入事、後ニ備候事、

一 殿様廿八日宮へ御参候時守塩上ル、御宮仕者御小姓衆ニ

而候、左候而御幣を安養院被為上候、御三献并御手水ハ

不参候、前以畳を敷其上ニ被成御座候くぎやう并かわら

けハ頭屋方より出候、頭殿三献被調候通包丁人重信七郎

右衛門殿仕出被申候、太夫より上可申由被申候右之道具

御諏訪へもたせ候て包丁人者不被参候、供行は別火所へ

頭殿御用外ニ一膳有之候、

一 小餅百廿八

一 松之しん廿八

一 橙四ツ

一 瓶子二双

一 右ハ別火所二重、七月廿八日ニ相替候ニ付包丁人ニ相渡

ル、

一 頭殿御鎗御長柄鎗等ハ鳥井より内ニ備置也、其外誰人之

道具たりといふとも鳥井より内には不入れ事、

一 御頭殿御大小用ニ被成御座候時御介添守上候而雪隠乃本

二 而をろし上御草履めさせ候なり、

一 に多打申者左右へ四人ニ而候、支度素袴はかまゑほし、

左候而御頭殿御供申候に多つとハ先キにつかハし候、

一 神馬ニ幣付候人者老人役ニ而候、上下着用候馬ニ付候幣

ハ太夫より調、神馬はしり候少シ前ニ竹ニはさミ被出

候、

一 神馬ハ御頭屋より御頭殿御參不被成前ニ御先キに座主へ

參候、左候而相濟候而頭殿御下向不被成内ニ御頭屋のこ

とく參候、

社役者頭殿へ三献被上次第

一二 献 御手掛被上候、

一三 献 削物被上候、

一初 献 御酌、

一三 献 さしミ被上候、

一二 献 御酌、

一初 献 酢煎被上候、

一三 献 御酌、

三献被下次第

一二 献 御手掛被下候、

一三 献 削物被下候、

一初 献 さしミ被下候、

一二 献 酢煎被下候、

一二 献 御手水被上候、但すいり被下候而直ニ御手水被上候

ニ付礼なしにて候、御手水相濟候而礼ニ而候、廿八日同

断、

一 御三献被上前ニ礼有、後礼有、礼の時素袍乃袖さばき

有、口伝、

一 廿七日・廿八日居頭衆宮ニ而戸ゐ乃間より拝殿へ被入れ

候時入口ニ而礼有、口伝、

一 長屋位之次第 一幣之役 二太刀持 三初献 四三献

五二献、

一 御頭殿御召馬并神馬鳥井より内ニ而糞溺出シ候時は唱之

事、口伝、

一 御祭ニ付幼少之人社役相勤候節ハすハう袴着ニ而候ハ、

児多ほしニ而候、

覚悟巻終

斯一冊預添加諏訪祭礼次第書之記而近年神事奉行為覚悟之卷者也

川上久馬

享保二稔丁酉六月朔日 久東判

此一冊依御望被為写候、其後旧本致糺合度旨就御頼致校合之、全無相違候、尤可被為秘之者也、仍如件、

川久馬

享保二年酉七月朔日 久東（花押）

川上縫殿殿

諏訪祭礼之次第記

川上縫殿藤原久映

六月廿三日頭殿別火所御直り之次第

但晦日御座候得者六月廿四日ニ而候、

諏訪祭礼之次第記

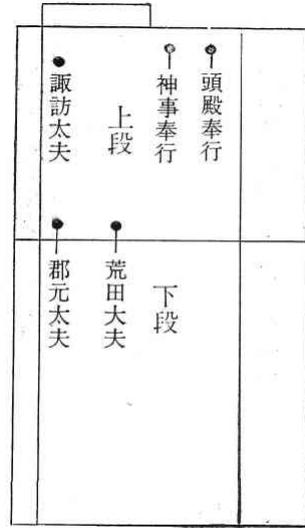
一頭殿別火所江御出之時分九ツ時あたり能御座候、遅ク候得者神事奉行より前廉親父方へ可申断候、神事奉行者へは前廉ニ罷出候用事有之候へハ別火所より申来り候太夫同断頭奉行ニ引合置候が可然候、

但神事奉行今日ハ頭殿御宿許へハ不參候、

一頭殿御宿許より別火所へ御出被成候時ハ上下ニ而御座候、左候而御棚之前ニ而御乗物をすへ右頭殿を御待合被成候、其時神事奉行茂庭へ罷出候、左候而かいぞへ守上頭殿親父被居候所へ先御入被成候而棚ニ御直り不被成内ハ新敷毛氈か畳などの上ニ被成御座候、左右同断別火所広間之上段ニ而何れも三献振廻有之内ハ頭殿御髪を児髮ニ御結被成御膳參候頭殿親類衆兩人程相伴ニ而候、宮仕者詰衆ニ而候、御膳相濟行水被召候、

但御行水湯ハ御料埋所ニ而相調也、御湯殿ハ御別火内同前之所御別火中御髪ハ御家来結申候、内侍者不參候、

一別火所広間之上段ニ而三献座之次第、上座神事奉行、其次ニ親父、一方之上座、諏訪太夫、郡元太夫、荒田太夫、左右親父、両座ニ三献有之候、神事奉行頭殿親父支度素袍袴太夫もそれく支度なり、



一如此之座配ニテ左右両座ニ三献有、但宮仕者頭殿方へ詰衆之内兩人ツ、

一三献相濟左右打込頭殿親類衆迄上段ニテ振舞有、何レも支度上下但宮仕者町人、

一右三献振舞相濟頭殿棚ニ御直り畳の上ニ敷皮を敷こてい
三献上様等別書ニ有
 三献参候、宮仕者頭殿親類中の土衆兩人ツ、但もろかうの人ニ而候
 長上下、頭殿今日被召候御帷子ハ常之御帷子ニ而半切
 袴下斗被召候、刀ハ御指不被成候、かいそへ支度素袴也

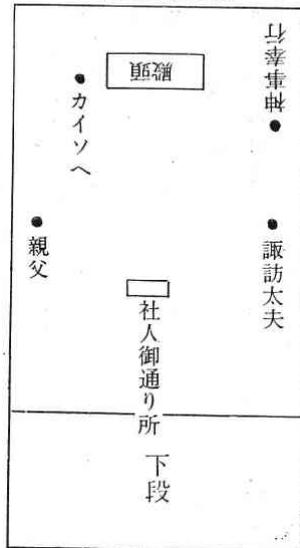
一右御三献参候時者神事奉行棚上ニ罷居候、左右一度に参候間神事奉行ハ左之棚ニ罷居候、左候而三献をもくだされず御棚上段ニ而御通り被下候、次第神事奉行、其次ニ太夫頭殿親父迄ハ頭殿参候、三方ニ而被下候、其外之社

人へハ右之土器ニ而御料理所之へぎニ取かへ候て御通り被下候、左相濟神事奉行太夫社人も右江御通りに参候、左右御通相濟候而御三献を下し御手水被召候、御通り之酌者頭殿親類衆取被申候、

但神事奉行親父支度すハう袴、太夫ハそれくの支度、社人罷出候、惣様御通り被下候、

一左頭殿親父右へハ不被参候、右頭殿親父左へハ不被参候、

棚御所火別



七月朔日

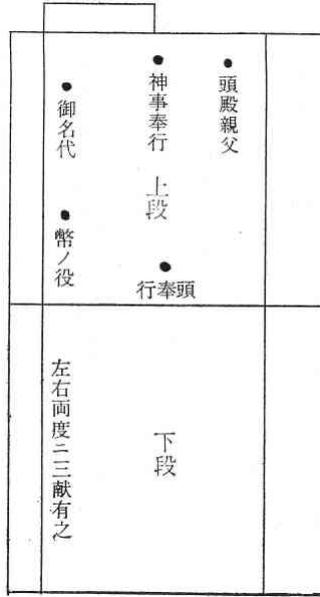
一今日名より出ル役者拾六人庄屋へ申渡筈也、
 但今日雨降候得者笠さし名より出ル、

一今日別火所広間之上段ニ而三献有之候、海手之上座御名

代、其次幣之役の人、主居上座神事奉行、其次頭殿、親父頭奉行者末座ニ而候但宮仕者町人、

- 一 御名代 兩人 但御一家衆支度すハうゑほし
- 一 幣ノ役 兩人 支度素袍袴ゑほし
- 一 神事奉行 兩人 但一人ハ子分ニ支度素袍袴ゑほしなし
- 一 頭殿親父 兩人 支度すハう袴ゑほしなし
- 一 頭奉行 兩人 但一人ハ子分ニ支度素袍袴ゑほしなし

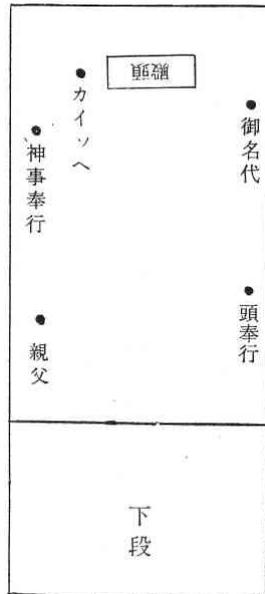
別火所間



- 一 三献相濟左右打込上段ニ而振舞有、何れも支度上下也、但右振舞相濟何れも本のこたく素袍袴ニ支度替仕候而塩井戸への御供被仕候、神事奉行も同断、
- 一 頭殿塩井戸へ御出之支度下より晒御帷子上ニハ緋縮緬之

御単物袴下斗染腰替り刀ハ御指不被成候、御髪は児髪ニ而候、末広御持なされ候、

別火所御棚



- 一 御支度相濟如此座配ニ而こてい三献参候宮仕者幣ノ役之人ニ而候、但左右一度ニ三献参候間神事奉行下知仕候故座ニ不参候而も不苦候、
- 一 御三献相濟塩井戸へ御出被成候時分ハ川口へ潮入時分ニ而候、
- 一 御先備与より被出候御供衆
- 一 御与之筆者星合被致候故神事奉行構無之候、
- 一 一对挾箱
- 一 一对鍵
- 一 一手鍵

一 御贄手籠

但はらい幣より先きに御贄手籠ニあぢかますの類の干物を入幣をさしかたげ候て參候、名の者ニ而候計着仕候、左右ニ壱人ツ、兩人、左候て神前御贄ニ上り候、

一 御になひ

但持者名より出ル支度上下也、此になひ塩井戸より直ニ別火所の様ニ參候、

一 御はらひ

持者名より出ル、支度素袍袴多ほし、

一 御敷皮

但別火中御敷不被成新敷皮ニ而候、頭屋ニ而ハ此敷皮御用被成候持者名より出ル、支度素袍袴多ほし、

一 御草履

持者名より出ル、支度素袍袴多ほし、

一 御小者団扇持

但支度丸腰ひつつり化粧ほうべに多ほしなし、

一 御手廻り御供衆

一 頭殿

一 守上候者名より出ル、支度素袍袴多ほし不着頭ニハ

手拭をかむり候、右手拭ハ頭殿親父より出ル、

一 御笠さし名より出ル、支度素袍袴多ほしなし、御笠ハ頭殿方へ有之候、

一 御太刀ハかいそへ持支度素袍袴多ほし太刀替り名より出ル、支度上下御宮并頭屋広間にてかいそへ憚入候時者御太刀持候、

一 御名代幣之役頭奉行も塩井戸へも御宮へも御供也、

右之御備ニ而別火所川の方の門より御出被成、上の馬場へ御上り被成、春日の下より御さがり被成候、塩井戸ニ而ハになひの上ニ敷皮を敷、敷皮役の人敷被申候、支度上下ニ而被勤候、敷皮の上ニ而さらしの湯帷子を召させ申、左右一度に川へかいそへ守上御供衆双方より拾人計も川ニ入水くりまで少し仕候、川へ御供之衆者皆はだかにて候、

一 水くり相済候而又本のになひの上ニ而御支度被召候、下よりさらし上ニ花染の御帷子小石畳の素袍袴夏帯召させ上候、御足袋ハ水巴たびニ而候、末広御持名之者の肩ニ被召候而直ニ御諏訪へ御参なされ候、

一 左頭殿鳥井の辺迄御参の時分太鼓ならし被申候善神王殿の前ニ而御待合なされ御草履をはかせ申候様ニ仕、三足

あゆませられ候様ニ仕、左右同前ニ宮へ御參被成候、御宮縁の間より幣之役の人いだぎ上高座の上に敷皮を敷其上ニ被成御座候、

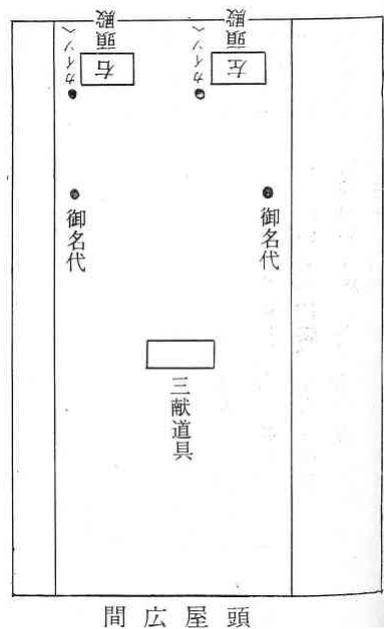
但敷皮ハ敷皮役の人敷被申候、神前座配図別紙ニ有、

一 左候而斯而御三献上ル宮仕者幣之役の人ニ而候、下候と則御手水被召候、左候而座主兩人、頭奉行兩人、太夫社人三献有、宮仕者名之者仕候、

一 右相濟候而追付頭殿御幣御取被成候、かいそへ御うしろより御幣二手かけ申候、

一 御下向被成候時も縁の間幣之役の人いだぎ上ケ被申候、左右同然ニ而候、善神王殿の前より左先きに御下向被成事ニ候、左候而頭屋広間之前ニ御待合なされ、左右同然ニ広間ニ御入被成候、広間之縁の間より、又幣之役の人いたき上被申候て畳の上ニ敷皮を敷、皮役の人敷被申候、其上ニ被成御座候而郷三献參候、宮仕亦幣之役の人也、御三献相濟御手水被召候、夫より御名代并幣之役、敷皮役之人者帰宅にて候、

一 頭役棚ニ御直り被成候而畳の上ニ敷皮を敷御三献參候、宮仕者かいそへ仕候、御三献相濟支度召替候而棚ニ而御通り被下候、盃請台亀甲、一番座主、二番神事奉行、三番諏訪太夫、四番頭奉行、五番内侍、左右同然、



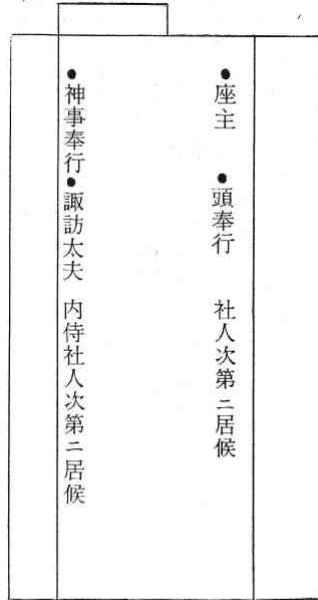
但神事奉行老人ニ而候ハ、左相濟候而右之御通りに參候、兩人の衆ハ左右ニ相わかり被申候、

一 右御通り相濟候而頭殿へ小餅四拾御老人前ニ二拾ツ、足なしわけ角ひもの二ツニ九ツ、拾八但老枚ニ三ツツ、三わたりニ置上り候、左候而又追付御かさ椀小餅二ツ入くぎやうにすへ上り候、右相濟候て御膳ハ上り候、

一 右餅相濟候て以後頭屋広間ニ而座主・神事奉行・頭奉行・太夫・社家・内侍三献也、三献相濟候而則ひもの足なし折敷二枚ニ餅三ツツ、三渡り二枚ニ拾八入出候而亦頓而かさ椀二餅二ツ入出候、社人迄相濟候而則振舞有之候

也、

但三献餅振舞之座左の上座座主、右之上座神事奉行、左之二番頭奉行、右之二番太夫、何時も右之次第也、神事奉行・頭奉行・太夫支度上下なり、



頭屋広間

七月二日

一今朝より内侍参候而御髪結申候、廿八日迄ハ結申候、但御髪そんじ候時ハ幾度も神事奉行より内侍呼寄申候、

一今日より名踊御座候、神事奉行ニ得差凶候而踊申事ニ候、町踊ハ前日ニ年行司より神事奉行へ案内申事ニ候、

七月三日

一頭殿今日御三献参候、御支度小石畳のすハう袴被召候、宮仕者かいそへ仕候、支度素袍袴着仕候、左候而神事奉行頭殿親父へ御盃被下候、但神事奉行親父の支度上下なり、

一右之御三献相濟右之御支ニ而広間ニ重之餅台所ニ而汁ニ調参候、御両人の外者不被下候、残餅其外飭道具ハ如前飭候而広間ニ有之候なり、

但餅参候時ハ神事奉行御棚ニ参候、親父御棚へ被参ニは不及候、三献上様等別紙ニ有、

一朔日ニ被召候花染の御帷子色上ケ七日ニ被召候ニ付色上ケは相濟候哉の旨今明日の間両頭殿親父方へ相尋申可然候、

七月七日

一今日早朝内侍参候而暫時間御棚の前ニ色ほし仕候、一色直シと申候而朔日ニ頭殿被召候花染の御帷子を色上ケ今日召候而小石畳の素袍袴被召御三献参候、神事奉行御棚へ参候宮仕ハかいそへ仕候、支度素袍袴、一右之三献相濟候而そうめん上り、左候而諸白并焼酎参候、

一 今日頭屋広間ニ而座主兩人・神事奉行・頭奉行・太夫・

内侍・社人へ三献并そうめん被下候、左候而焼酎并白酒
出申候、

一 頭殿親父并見舞衆へそうめん被下候由候、

一 相撲取二人 付小者老人、

一 相伴老人但名より出ル、

右之衆へ頭屋広間の後之座ニ而三献、さしミ・酔いり
そうめん・白酒被下候、神事奉行差引等仕事は無之
候、

一 神事奉行・頭奉行・太夫の内ノ者十八人、頭屋の長屋ニ
而そうめん・白酒被下候、

七月八日

一 頭殿今日御髪洗ニ付内侍参候、御髪洗相濟候而御三献参
候、御支度常の御帷子小石畳の素袍袴被召候、神事奉行
参候、宮仕へかいそへ仕候、支度素袍袴、三献上様別書ニ
有、

七月十三日

一 頭殿今日御髪洗ニ付内侍参候、御髪洗相濟候而御三献参
候、御支度等八日ニ同前、神事奉行罷出候、

諏訪祭礼之次第記

七月十八日

一 今日御能有之候ニ付日限之儀前以能奉行より問合有之候
事、

一 御能組能奉行より左右頭殿へ被上候事、

一 御名代頭屋広間へ御入被成追付御能相始り候事、

一 御名代御中入之節別火所広間之上段ニ而御通り被下候次
第御能奉行より御役之次第第二被罷出候、右相濟御盃あら
たまり神事奉行、左頭殿親父・右頭殿親父・頭奉行其次
二盃請台八寸ニ而能太夫へ御通り被下候、

一 別火所広間にて御振舞被下候、座配客居の上座、御用人
夫より御役の次第にて座配有之候、主居の上座神事奉
行、左之親父、右之親父頭奉行にて候、



一 御能三番有之候節者相濟候而御通り被下候御中入ハ
無之候、

一 御能奉行へハ御振舞屏風構ニ而一人被給候、

一 座配并御通り被下候次第等神事奉行差引仕事にてハ

無之候、

七月廿一日

一 今日居頭衆拾二人籠被申候

一 長屋拾人籠事ニ候

一 御召馬并神馬籠候

一 御中間四人籠候

一名より扇手左右二兩人籠ル頭殿へ進上物仕候、菓子酒にて候御棚へも上り候、

一 御召馬并神馬相籠候而御棚之前ニ御召馬を牽候而參候、

口牽ハ名之者神事奉行左右ニ御鬮上ケ候、何毛之馬、何

毛の馬と鬮ニツ調、先左頭殿へ上ケ候、直ニ御取被成候

而今忝ツの鬮を右頭殿へとらせ上ケ候、左候而又神馬之

鬮をとらせ上ケ候、鬮の調様御召馬ニ同前なり、

一 右之御鬮御取候而其跡ニ御中間へ鬮とらせ候、調様ハ左

一 左ニ、右一右ニと鬮四ツニ調出候へハ御中間取申候名

より相籠り候、中間ハ神馬之口を引御門より内ニ罷居候、是ハ鬮ニ不及候、

一 今日ハしめ替りちかしめと申候、御馬屋へもしめをり申候、左候而祈念御座候、

一 右しめ替り候而以後ニ頭殿へ御三献上り候、御支度小石

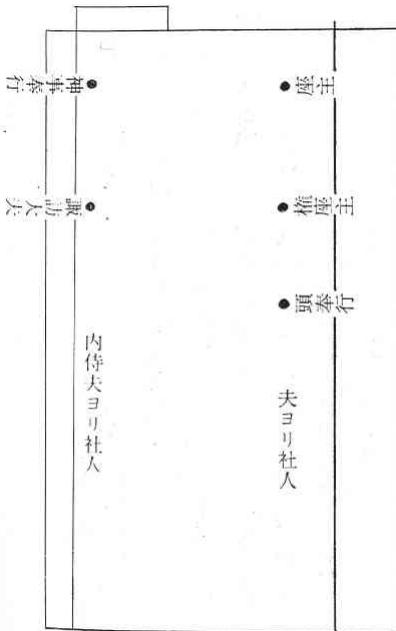
置素袍袴、宮仕者かいそへ仕候、支度素袍袴着仕候、御

三献相濟候而御支度被召替、御菜飯上り候て地諸白上ケ

被申候、

一 今日座主二人、神事奉行一人、頭奉行一人、太夫一人、

三献座配

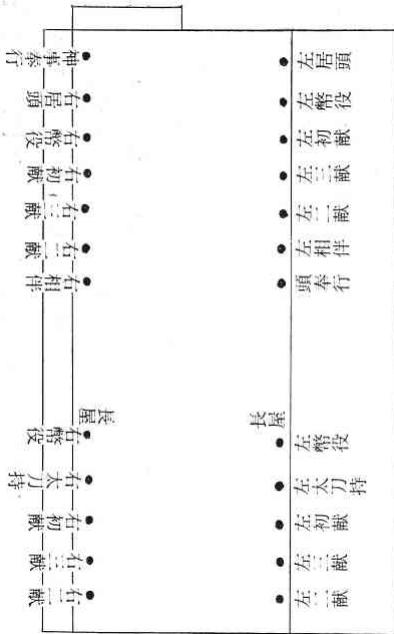


内侍三人、社人三拾二人、併例年人数参次第頭屋広間ニ而三献被下候、座配図左ニ相記ス、三献相濟候而菜飯出ル間ニ座主太夫内侍より頭殿へ白酒を瓶子志対ツ、進上にて御棚ニ被参候而御盃被下候、

一右之座配ニ而菜飯被下候、但頭殿親父ハ広間へハ不被出候、

一今日晚付候而頭屋広間にて三献有之、則振舞出候、座配左之上座左之居頭、右之上座神事奉行、右之二番右之居頭、座配図如左、

一長屋迄三献振舞有之、宮仕八名の者、



諏訪祭礼之次第記

一広間のうしろの座にて御中間四人、三献振舞くたされ候、

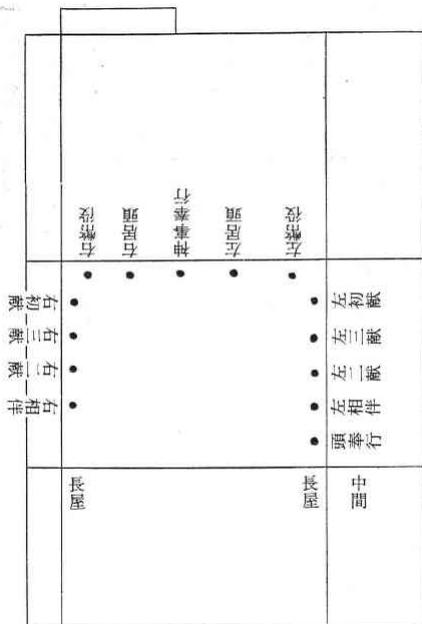
一相撲取へも広間のうしろの座にて三献くたされ候、

一御馬籠り今日より大鞍つゞミ頭屋へならし不申候、外より入候而ならし申事ハ不苦候、

一相撲取者不籠候、前々より私宅を禁シ候而罷居候、御扶持方被下候、右之手形物奉行座より出候ニ付神事奉行より御扶持申請の差紙出スなり、

七月廿二日

別火所広間ニ而振舞之座配



一 居頭衆拾二人、長屋拾人、朝夕別火所広間ニ而振舞被下候、右ニ付神事奉行老人、頭奉行老人、朝夕共ニ振廻の節者出合申候、座配之図右ニ有、

一 今日より御中間四人も御賄被下候、別火所広間ひさしの間ニ而くたされ候、

七月廿四日

一 居頭衆并神馬稽古御諏訪ニ而今日明日之間天氣次第有之候、庄屋一人三献道具をもたせ参候、太夫も被出候、

七月廿五日

一 今日頭殿御髪洗ニ付内侍参候、御髪洗相濟候而御三献参候、御支度等八月十三日・廿一日同然なり、

七月廿六日

一 今日御はくろ参候ニ付内侍参候、御齒黒相濟御三献上り候、御支度等廿五日同前、

一 七月廿七日八日御もたせ被成候はらひ幣は今日於頭屋社人相調申候、

一 廿七日八日名より出ル役者并笠さし今日庄屋方へ申渡人数但扇手神馬引者外にて候、

一 八人者 御備道具持

一 四人者 御召馬之口引

一 四人者 御馬添

一 二人者 頭殿御笠さし

一 二人者 御正躰持

一 二人者 太刀替り

一 拾二人者居頭笠さし

一 拾人者 長屋笠さし

一 六人者 両奉行親父笠さし

一 二人者 かいそへ笠さし

一 二人者 相撲取笠さし

一 四人者 中間笠さし

一 一人者 安養院笠さし

一 二人者 扇手ノ守

一 二人者 扇手笠さし但扇手へハ草履不渡候

合人数六拾四人

内頭殿外之笠さし四拾人扇手外ニハ笠并緒太之草履相渡り候、

一 緒太之草履ハ三拾八足頭奉行より庄屋請取相渡ス、

一 笠四拾本名より出ル、笠さし支度上下なり、

一相撲取中間ハ遠方へ罷居候間、笠さし早く不遣候へ共違
直り御祭之支ニ罷成候間、其段庄屋へ申渡可然也、

七月廿七日

一御与より出ル長柄鐘、赤柄黒柄左右之鬮とらせ候、老
ツ、とらせ候て相濟候、鬮ハ左右と二ツ調赤柄持老人、
黒柄持老人とらせ候なり、

一今日八ツ時分ニ頭殿御社参候ニ付御支度ハ花染之御帷子
ニ白絹之上帯立るほしニ白素袍袴合口之刀御さし被成
候、水色足袋御はきなされ候、

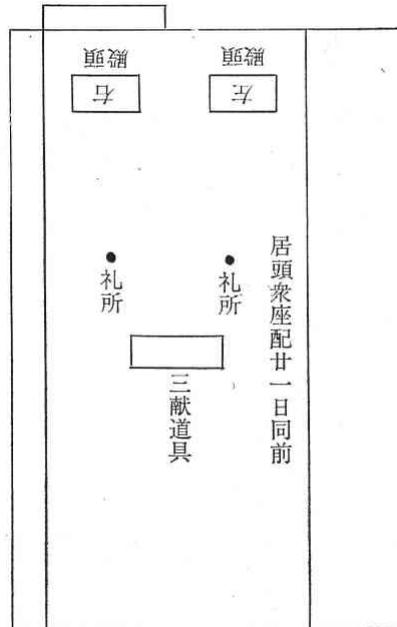
但一御支度役ニ狂言師参候明日も同断、

一白素袍袴ニハ紅にて鶴の丸の紋所書候、

一立烏帽子合口之刀ハ安養院より参候、廿七日ばか
り刀ハ御さし被成候、余日には御さしなされず候

一右之御支度相濟御棚ニ而御三献参候、宮仕者かいそへ仕
候、支度素袍袴、御三献相濟候而御棚の下より御中間左
之肩ニ守上ケ申候而広間之縁の下まで参候、初献縁の上
より又左の肩ニいだき上畳の上ニ敷皮役の人敷皮を敷置
まいらせ候て初献者本の座へ直り候、左候而御三献参候
図如左、

但敷皮役之人者朔日ニ被勤候人ニ而候、



三献上ケ様等別書ニ有

一頭殿三献相濟候而役者衆三献有之候、宮仕者長屋ニ而
候、三献相濟候而長屋へ三献有之候、宮仕者名より出る
なり、

一相撲取二人、中間四人、扇手二人、広間之後の座にて三
献、宮仕者名より出る、

一右広間三献相濟候而頭殿を又初献守上ケ縁の間迄参候、
縁の下より御中間守上ケ頭屋庭ニ而御馬に召させ申候、
一御先備与より被出候御供衆

但与之筆者衆星合被致候故神事奉行構無之候、

一 対挾箱

一 対鎗

一 手鎗

一 御贄手籠

但持者名より出ル、袴下計着ス、

一 御祓

但持者名より出ル、素袍袴ゑほし、

一 御敷皮

但持者名より出ル、素袍袴ゑほし、

一 御草履

但持者名より出ル、素袍袴ゑほし、

一 御小者団扇持

但化粧ほうべに支度ひつつりゑほし丸腰、日之祭にハ
内之祭ニ扇手着仕候、石畳之素袍袴着候、両日とも

に化粧ほうべにゑほし、

一 手廻り御供衆、

一 頭殿御馬ニ召ス、但御召馬ニ廿七日八日共ニかまひ有之

一 御正体与申候而鎌ニツ、錢三拾三文、紙ニつゝミ竹

乃さきに挾候而頭殿左ハ左の御脇、右ハ右の御脇ニ

持候、左候而神前ニ上ル、内之祭の日計日之祭にハ
無之候、持者名より出ル、支度素袍袴ゑほし、

一 御太刀中間持候而御脇ニ參候、支度大口狩衣ゑほし、
但中間憚入候節ハ太刀替り持之名より出ル、支

度上下也、

一 かいそへ支度素袍袴ゑほしなし、

一 御馬之口取名より出ル、支度素袍袴ゑほし、

一 御馬添名より出ル、支度素袍袴ゑほし、

一 御笠さし名より出ル、支度素袍袴ゑほしなし、

一 扇手名より出ル、頭殿御臨ニ肩ニ乗り參候、支度小

石畳素袍袴、七月朔日頭殿召候素袍袴にて候、日ノ

祭ニハ内之祭ニ頭殿召候、白素袍着候、両日ともに

化粧ほうべにゑほし末広持之扇手肩ニ乗せ候者ハ袴

下計着するなり、

一 長柄鎗

但与より出候横備也、与之筆者衆星合被致候ニ付神事

奉行構無之候、

一 頭殿幣之役 支度大口狩衣ゑほし、

一 初献 支度大口狩衣ゑほし、

一 三献 支度大口狩衣ゑほし、

一二献 支度大口狩衣ゑほし、
一居頭 支度大口狩衣ゑほし、

一居頭之太刀持支度大口狩衣ゑほし、

一居頭相伴 支度大口狩衣ゑほし、

一居頭幣之役 支度右同断、長屋勤之、

一居頭初献 支度右同断、長屋勤之、

一居頭三献 支度右同断、長屋勤之、

一居頭二献 支度右同断、長屋勤之、

一頭奉行 支度素袍袴ゑほし、

一頭殿親父 支度上下 列立也、此跡ニ又小者、
手道具持等也、

但頭奉行者頭殿御下向跡ニ而今月ハ三献有之候ニ付如

此之支度也、日之祭ニハ支度上下也、

備之次第匠右同断

但備左右之見舞衆下知被致候様ニ神事奉行より申達候

事、

一善神王殿之前ニ而石頭殿を御待合被成、御中間左右同前

馬より直ニ守上ながら草履召させ申まねを仕、三足あゆ

ませられ候様ニして左石頭殿御同列にて縁乃下迄中間守

上ケ候、縁乃上より初献左の肩ニ守取高座之上ニ御もた

せ候、敷皮を敷敷皮役之人敷被申候上ニ置まいらせ候而

初献者本乃ことく坂より下ニくだり役者衆同前ニ戸為之
間より西殿へ被入候、拜殿入口ニ而左右之役者ニ礼有、

但居頭并太刀持相伴長屋ハ直ニ長屋へ被入候、神前座

配図別紙ニ有、

一頭殿へ御三献上り候、
御二献上ケ様等、御三献相濟候而幣

之役初献扇手左右へ六人なふらひニ長屋へ被参候、此衆

相濟三献二献左右へ四人長屋へなふらひニ被参候、宮仕

者長屋ニ而候、長屋へ宮仕者名之者仕候、なふらひトハ

三献之事なり、

一頭殿御幣御取候時分ハ太夫より神事奉行へ申来り候ニ付

左石幣之役人幣請取ニ被参候、請取時太夫ニ礼有、左候

而御幣道筋へ絵図ニあり、頭殿御前ニ幣を振り頭殿へ為

取上ケ申候時初献御後よりトらへ左之膝を立右之膝を敷

候、左候而幣之役御幣を請取候、

但一頭殿御幣御取候時ハ役者ニ豊より下ニ下ル、

一頭殿御幣御取候内ハ神前と頭殿之間を通り不申事

二候、

一御子舞 内侍舞事也、

一御神楽相濟而候御下向之時分ハ太夫より被由上候、

一御召馬安養院へ参居候ニ付御神楽相濟前方ニ御召馬参候

様にと申遣候か可然候、

但御召馬并神馬鳥井より内ニ而糞ばり出シ候得者神事

奉行唱有、口伝、

一御下向之時も初献縁上迄ハ守上ケ被申、夫より中間守上候而善神王殿前ニ而御馬ニ召させ候、左より御下向被成

候備次第御參同前、左候而頭屋庭にて右頭殿御待合、頭

屋広間ニ而御三献參ル、何事も今朝同前にて候、

一広間にて三献相濟御棚へ御直り被成候、三献參候、宮仕

者かいそへ、

一頭殿御棚へ御直り候跡ニ而居頭衆并長屋へ三献有之候、

御中間扇手相撲取へも広間之後座ニ而三献有之候、

一今日ハ居頭御諏訪ニ而幣取不被申候、

七月廿八日

一今日名より出ル、役者昨日同前ニ而候、

一頭殿宮へ御參被成候は頭屋御仕舞次第、

但御名代御參不被成候へハ見合申事ニ而候、

一頭殿御支度ハ立烏帽子ニ狩衣、晒御帷子下より被召候白

絹乃御帶、上帯ハ石之帯を被召候、御足袋ハ水たひ也、

但立烏帽子狩衣御鞍ハ安養院より參候、

一右之御支度相濟於御棚御三献又於広間御三献參候居頭并長屋なども昨日同前の三献有之候、

一右広間之三献相濟候而御諏訪へ御參被成候、御備行列於

御宮三献參候迄ハ昨日同前ニ而候、

一神前へ御くわん上ル、

一頭殿御幣を御取候、其時昨日同前ニ役者量より下二下ル、

一追付居頭幣を被取候、

但時分ハ太夫より申來候ニ付神事奉行より居頭方へ申

遣シ候道筋等ハ絵図ニ有、

一御司參者大乘院ニ而候、御幣被取候時は敷皮上ニ而被取

候幣之役者御一家衆支度素袍袴急ほしなり、敷皮之役者

木藤・長田・染川名字より被仕候、支度上下、

但大乘院司參被成候時分ハ神事奉行より安養院へ注進

申筈ニ而候、居頭幣相濟うち脇ニ大乘院司參被成候、

一手を打 但手を打とにへ打有之、

一御子舞 但内侍舞乃事にて候、

一神馬

但幣付役者御馬乗役之内より一人被勤候、支度上下也、

一相撲

但下ノ帯を中間相撲取之肩ニなげかけ候、其後權ノ太

夫布を被渡候、ケ様之儀神事奉行ハ構無之候、

一 相撲相濟候而御下向被成候間、御召馬引来り候様にと申遣候か可然候、

一 御下向之時分ハ太夫より被申上候、左候而御下向被成、於広間御三献亦棚ニ而も御三献昨日同前、

一 頭殿人に御成候而座主へ御参之御支度新敷御惟子被召白素袍袴鶴の丸之紋所有、白絹上帯、末広御持被成候、御髪ハ兎髪、廿七日ニ同前也、刀ハ御さし不被成候、ゑほしも着不被成候、

一 守上候者名より出候、支度素袍袴頭ニハ手拭をかむり肩ニ召させ申候、

一 笠もさし申候、さし候者ハ名より出ル、支度素袍袴着仕候、

一 かいそへ人支度素袍袴、

一 御小者ひつつり丸腰ニ而候、尤団扇持申候、

一 一座主へ御参之御備ハ対挾箱・対鎗・手鎗ニ而左右御列立被成事ニ候、

但居頭衆ハ無行列打籠之御供被申候、支度素袍袴ゑほし、長屋ハ御供無之候、扇手も御供無之候、

一 安養院ニ而頭殿御入候中門ハ馬場之方ニ而候、かいそへ

御小者ハ座主之広間迄参、頭殿御側へ罷居候、

一 殿様被成御座候間へ頭殿御出被成候ニハ初献役御手を引御座へ御回道申直シ上候而初献者下座へ下り罷居候、

一 屋形座王之間一所ニ而御参献参候、其座頭殿兩人殿川上家御家老一人ニ而御座候、左候而御通り被下候次第

左之居頭、其次ニ右之居頭、其次ニ左之幣之役其次ニ右之幣之役、夫より左右入交々々相伴迄被罷出候、左候而御土器あらたまり神事奉行、左之親父、右之親父、其次ニ頭奉行迄ニ而御通り相濟候、支度上下居頭衆、支度素袍袴ゑほし、

一 右御通相濟候而直ニ別火所へ御入被成御支度のまゝにて御棚にて御三献参候、

但此三献迄ハ重信名字之人参候、宮仕者かいそへ支度素袍袴、

素袍袴、

一 神事奉行・居頭衆・頭奉行別火所迄御供仕候、左候而居

頭衆へハ別火所ニ而振舞有之候、

一 別火所広間ニ而神事奉行・頭殿・親父・親類衆迄振舞有之候、此振舞相濟候而心次第罷帰候、後別火中も神事奉行構不申候、

諏訪祭礼之次第記終

右有故使当家掌世世諏訪祭祠、故曩祖賴久以降筆之於書
伝子孫、雖然年代久遠而楮国恐損失、不違日本新贍写之
畢、夫丁于上野介久隅時祭祠之礼繁多、我家独難弁大
祭、以故氏族之内撰其器為神事奉行、每歲無闕如焉、徃
々当此職者、護斯書之旨、敢勿忽仍如件、

川上久馬

享保二稔丁酉六月朔日 久東判

此一冊依御望被為写候、其後致于旧本糺合度旨就御頼、
致校合之、全無相違候、尤可被為秘之者也、仍如件、

川久馬

享保二年酉七月朔日 久東（花押）

川上縫殿殿

薩摩風土記（抄）

一 鹿兒嶋と申候者西に山をかたとり東南ハ海なり、北は日
本の地つゞきなり、御屋かたハ山のまへ前となり通、大身
の武家方なり、図の如し、上町六町やかたの北にあり、
武家屋敷を中にして南を下町とゆふ拾二丁あり、武家多
し、此外山西を西田町あり、西目道中の入口也、あら田
町・かうらい丁・をきか村・そんた・いしきのふとう・
谷山かんをん・田の浦風景宜鋪也、天王の社・金比羅様
・天神宮の社・聖王宮・殿様御かり屋あり、此近辺みな
さくらあり、山々にさくらさき、まへハ石かんまつさく
らの磯浜なり、春ハ芸子を引つれ花見くんをなすなり、
一 正月初出し酒もあり、二月廿五日天神祭、初市より下
町大門口ひないちあり、三日より廿三日迄三月ひるなの
たいひらきとて酒さかなを持、いそへ出、花見をするな
り、四日を定日とする也、四月八日初のほりとて男子あ
れバ此日月より五月までたてるなり、五月田うへおとり、棒
おとり、先につあり、六月舟あそび、祇園祭り朔日より
十六日まで六月七日弁天祭、八日やくし、十日金比羅

様、廿三日大中公様御祭、群集也、武家町よりきりこと(燈)うろふ上る也、七月ほん、十五日・十六日はかまつり、石墓(燈)へ家毎にとろろふ五ツ七ツ、又富貴の家にて八十、二十もとぼす(も)なり、みなきりこ定紋付、いろくの造花きればりきれいななり、はかへつめ酒もりをなすなり、ま事(燈)ニおしもきらぬ人也、市のことし、八月こう神祭(うし)、九月かうらい丁・あら田ほうせい、十九日・廿二日十月内まつり、十一月三日より廿三日まで上野武家屋敷町にて市あり、古道具刀脇さしきるいななり、此三日午の時いたり様にてやぶさめあり、此朝あめにねきみ(む)そをしよくするなり、十二月年わすれせいほう酒もり、餅つきなり、

正月雑煮ハくるまゑび、もやし大こん、なもち

向付ハ塩引のさしみ(さし)

七月十四日朝(あさ)ことにとゆうをい(い)わうなり、いとこ(な)になり、年越にはくれ六ツ過に戸(を)たてて、家毎に家根のまとより錢をまく、

祭礼之記

六月天王御(に)ミ(ナシ)こし(に)し(に)ヶケ年二此十五日本社へ御かへりなり、常ハ時々まハリ(町)く(に)て(に)ます(わ)なり、此時家ごとに屋ひの酒とて江戸の濁酒のよふ成酒なり、神にまつる、祭礼

ハ山ほこ京の山ほこに似たるものなり、子供花かこにのりきやうれつあり、いつれぎをんはやしなり、十五日たちまちとてあたらしき衣類上下にて浜へいて月を海の水にうつし拝す、十五才の男女ともなり、舟遊あまたいてる、廿三日大中公御祭礼、鹿兒嶋中町家毎にてんかくあん(燈)とん(燈)(図略) 如此いてる、町々の入口木戸向より此方屋根までの大あん(燈)とん(燈)かける、画師を頼ミいろいろのゑをかかせるなり、此日昼ハのろし夜ハ火花火上がる、人くんしゆするなり、ま(い)あ(朝)き御塩(ナシ)かへとて海の塩をくミ神へそなへるなり、家内のうちふたふうふも三ふうふも一ツに居(に)なり、

塩かへの図(図略) 家内安全の文字を書、家内人の名を書付なり

ほふそふをととり、六十の老女にても十七八の女のすかたにこしらへ、おとりの者ハ五幣を持、拾人程、あとハ三味せん、たいこ、つゝミ、かねなり、またはやり病あれハ女子打より三味大鼓二而夜中はやしあるくなり、是をときといふ、

かうだい丁のどんかめ女(しよ)ほう(は)もかるいあれハよい、これハよい、かるいそくくくくとはやすなり、

六月にハ明神祭ふんとし引てはたか身にかんむりにてす
まふをとるなり、
また古の風俗のこり女のすかたたけみしかき衣類すそ

木綿そうもよふ、紋付ふり袖、尤下着ハちりめん紅板
の類なり、木綿上着を札とするなり、常に女あらい髪を
好むなり、毎月仏の当日ハはかそうしにい、其時家内

より手桶ほふき花いろく持て、めしつかひの男女に限
らず参る也、此国之酒みりんの如くあまし、せうちう

ハ上方のせうちうと違て至てのミよし、酒もりのセツ疊
のへりへさすしたむ家内ちう酒ひたし也、

夏のなりものいつさい長し、なすひ・とうがら・きうり
長キハ一尺程あり

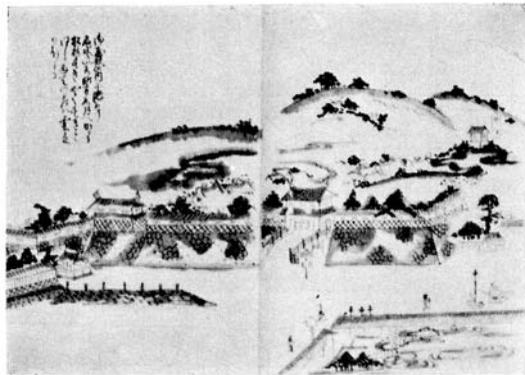
亀の玉子をこのむ、にハとりの玉子程あり、亀老度に三
百六十生むなり、月夜に海より浜へ上りすなをほりう

ミ、すなおかけ、海へかへる、亀の大き疊式疊引程あ
り、至てあふらこきものなり、少々まるし、

亀の玉子(図略)かわはざらつくなり、
町を朝々犬をとりてあるく也、右の犬を馬の先へたて

弓のけるこにはしらせるなり、能てつほうをこのむ処な
り、(第1図・第2図)

第 1 図



(鶴丸城絵図)

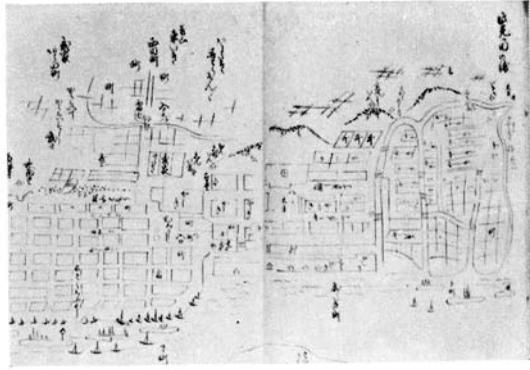
御屋形の内に池あり、名水此有、町方水道へかゝる、松杉
すきやくすきと申し、雨天の節ハ雲立のほる、

右福昌寺四月十一日開山忌なり、本堂のまへにて田うへ
おとりあり、六月中にりうきう舟をまつなり、真南の風

にて入り来る也、夏の内琉球より塩漬のぶたを下す、至
てかうぶつなり、風味宜しきものなり、うなきも近年く

いならふなり、すつほんハくわぬ人多し、かし魚がほふ

第 2 図



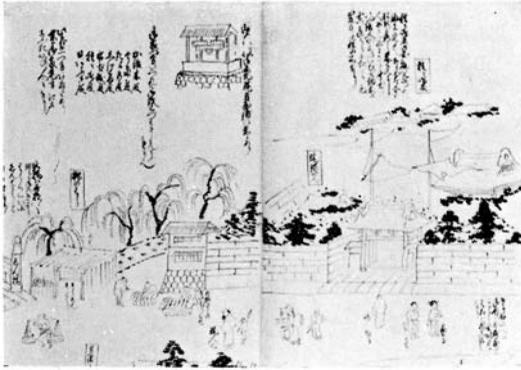
(鹿兒島城下略絵図)

しとりもしよふびせぬなり、かも一羽式百文くらゐ、
町ハ東むきにして中^(中)にやしき町前後に町家^(家)なり、御城の
後山ハミな武士^(家)なり、町ハ三分、武家ハ七分二候、公儀
様御法度の札ハ琉球屋敷の前にあり、御制法きひしく江
戸に違事無御座候、人の生質律義^(ナ)なり、なれとも飲食大
酒をこのミ、女はねたみのつよひ^(き)国なり、これ日本のは

薩摩風土記 (抄)

し^(なり)にてかたくよれる国ゆへか、へんくつの処なり、
武士方ハ江戸に少しもかわらず、鎌倉の風あり、武^(主)ハ鉄
炮を好む所也、
琉人^(形)ハ大和の殿様といふ日本一の要害の地にして入口の
番所ミな難所なり、耆人^(形)たちにてよふく通り候、旅人
ハ多く東より入るなり、
往来手かたを番所にてあらためおくり状を付也、右のお
くり状往来町役所へ上手御帳ニ役人会所にてあらため留
あ^(あ)らため問屋にと^(送り出し)うりうするなり、あしき事^(あ)あれハ役人
付^(付)て国さかへまておくる、尤死科以上にあたるつミの旅
人ハ国堺までおくり出し、其所にて此辺のにさいともあ
ふ^(を、せひ)せいよ^(を、せひ)りためしものにするなり、おくにさかへまてお
くり出すなり、六十六部ものもらい国けんぶつハ一夜と
まり^(る事)おくりヲこれらハおくり出程の事にて無慈悲の事と
もなり、これせいじのいきとゝかぬ処なり、あらためと
めぬなり、(第3図・第4図)
ほうそふのはやる時女右之すかたになり米をもらいてほう
そうまへの小兒ニあたへる也、町内の家々ほうそうせぬ母
あねうちより紅衣類を着し三味せんたいこにておとりある
く、

第 5 図



(琉球館等 絵 図)

度也、訴へてきるなり、外国の人ハ琉球人とはなしする事も法度なり、

りう人ハかかんない二居なり、外嶋の唐人ハ町とんやあり、(館内)

りう人町にて芸子遊び御法度也、唐物琉物御法度也、また

ぬけ積物天下様敷敷御法度也、

りう人もの言ハ唐人に逢へハもろこしのことハ、日本人にはなせハ日本の言葉、薩摩言葉より能わかるなり、大和言

葉とてかの国にて鳥といふなり、至て人物ハやわらかなり、琉人さつまの人をさして口大和といふ、京坂江戸おく大和

という、

りうきうにてハ日本の金銭とかやうあれとも外の嶋にてハ

しろもの二とりかへなり、さとふ五斤二米壹升(交)かふ(易)き

なり、

琉球船之図(図略)、午未の風にて日本へ来る、亥子の風に而彼地二下る、(第5図)

種ケ嶋殿

種ケ嶋殿御国ハ鹿児島より海上六七十りあり、国だんき松杉よろし、米も又よし、人物さつまとかハリ中国の風俗人のものいひも備前の国のものこしに似たり、凡四五万〇程の所なり、

御□様高札琉官屋鋪の前ニあり、

御家門方いづれも御紋(繪)くつわさ(書)りんとふきり也、

加治木殿 今泉殿 たる水殿 しけ留殿 宮古城殿 種

ケ嶋殿 日あふき殿

此外御一門方あまたあり、余ハ御家老方江戸こふたいの人々なり、

琉球かん

きり石のへい、御殿ハ外武家のことし、玄関前のはたハ風

しるしなり

芸子 二才とも 嶋人なり 琉人也 刀脇さしのるいほし
ミセ

宮古城との

柳のはし

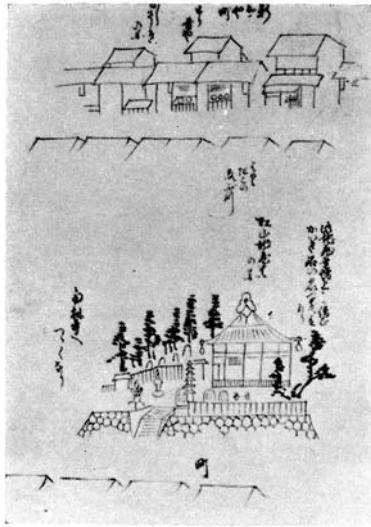
そうめん・そはきり

しん橋

新橋ハ石橋ニてからかねのきほうはしらくいにしんはしと
ほり付あり、

芝居ハ江戸の芝居より大きし、江戸松本武十郎まへり
候て座頭役者ニ而外ハ大坂の役者也、大坂竹細工見世物
もまいり大当りなり、そはハ至てよし、さるに入て出
す、したじあまし、江戸者ハくいにくし、元結ハ札を入
ていたつてよし、かの国のさハぎハ六丁ししよんがぶ
し、琉球歌なり、めくらの多い国也、米を廉末にする事
土砂の如し、芸子遊ひにハかしさしきをかりるなり、ふ
るまいもかしさしき也、料理の仕出しハ外にあり、さし

第 6 図



(松山地蔵堂等絵図)

き代ちいさき所五六百文大座敷壹貳百文より金貳百疋
位也、下町の内に新納屋町といふ処あり、此所に昔より
はりだこといふ女なり、ひと夜六百文なり、

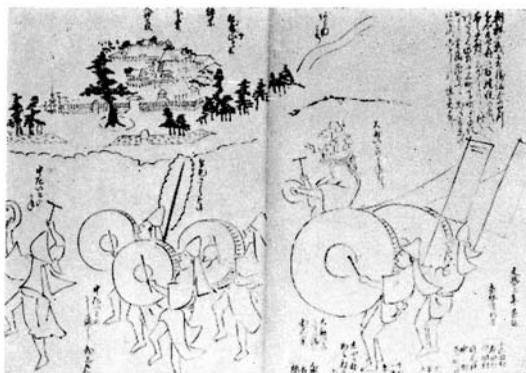
芝居札錢六十文 場十六文 風呂屋錢八文、朝六時
土間代四匁うつら七八匁 より初り大風ふるなり
二かい座敷壹貳百文 むしふるなり

新なや町 とり肴や かしさしきの図 はりだこのめいぶ
つ (第6図)

此地蔵堂増上寺僧正かつき石のめい門前二立あり、

松山地蔵堂の図 南林寺へつゝくなり、

第 7 図



(太鼓踊・南林寺絵図)

朝鮮の戦に打勝、帰国のセつ近郷廿四ヶ村の百姓悦の祭り也、右之大鼓ハしゆんまハリニ村々へあたる也、此外に上町下町より子供おとり芝居付祭り出る、吉原のにハかのことし、引道具なり、(第7図)

文政四巳年番組 南林寺行図

薩摩風土記(抄)

第 8 図



(棒踊・桜島等絵図)

廿四ヶ村之内(隔年)かくねんにあたる

永吉村
谷山村
桜嶋

小山田村
荒田村
西田村

郡元村
中村

木のひ八村

犬迫村
皆房村
上伊敷村

下田村
小野村
原良村

大だいこのかねほり 大だいこさし渡し五尺余 鳥毛さしもの 中たいこのさし渡し式三尺 中たいこのかね

あら田ミチ 南林寺松原山と云 禅宗 本堂大仲公社

此棒おどりうたニま合のかけごいあり、いろいろの法習のある事といふ、

衣笠流・心義流いろくのいやいより出ルといふおとりなり、あぶないものミなり、(第8図)

近郷村の若人より合、またハ鹿兒嶋町に勤御奉公人より合て古より同しをとりと申候事をおとる也、むかしよりならいのある事也、

桜島図

此嶋そハ二見へれとも式三里の沖にあり、いつれへいきても正面二見ゆる也、

桜嶋の女子毎朝ふねにて鹿兒嶋へくた物をうりにかよふ図大こんミかん名物也、

京の八瀬とハ大に違ひきたなし、無骨なり、

真岳寺の図(第9図)

嶋津真かく寺社ハむかししまつ義久殿金吾殿大坂秀吉と合戦の時此金吾殿兄殿を諫言し、いろくすゝめ秀吉と合戦

第 9 図



(心岳寺・秀頼古碑絵図)

をする事をとめしかハ家中の人々金吾殿ハわきはら事二二男の事とさけすミし、其とき合戦に打負、大坂にしたかひしかバ金吾殿のすゝめをもちいすかつせんなり、降参せし事(傳)をいきとおり此所へ引こミ腹かききり、此方老人大坂へしたかはつ、此御方のれいこんを祭れるれいげんあらたなり、秀吉へ鉄炮を打かけ火花をちらしかつせんをせしハ此金吾殿一人なりといふ、

大坂秀頼ノ古碑

上町地藏町ノ角ニ地藏堂あり、

第 10 図

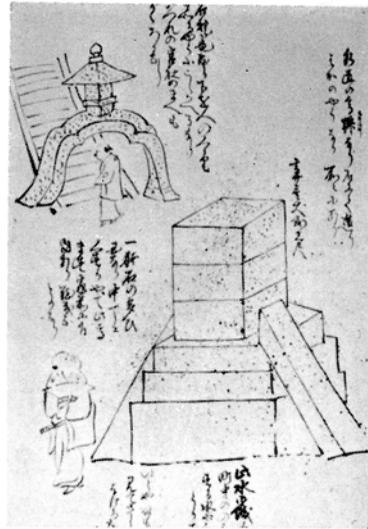


(福昌寺絵図)

薩摩風土記(抄)

秀頼石碑祭と俗にいふ、
 いづれ此地に人々おち下り身をひそめいたるとミへるな
 り、
 谷山ニも古石碑あり、
 千地藏堂
 しんかく寺の道ニ吉野山あり、はる馬とり有り、人々くん
 しゆして見物するなり(第10図)

第 11 図



(水道高栴等絵図)

水道の高栴なり、石にて造りはかのやうなり、所々にあ
 り、高サ老丈式三尺、此水御城より流る、町中のこの水と
 する、水やくミとりあるく、一体石の多ひ国なり、中丁ニ
 くすりやて此高ます家前に有内あり、難義なものなり、い
 しや殿も見てさしをなけるなり、(第11図)
 石燈籠なり、下を人のくまりまへるやうにこしらへるな
 る、いづれの宮社のまへもよくあるなり、
 御供所 石から戸内はきものならず、(第12図)
 大仲公社 松原山南杯寺本堂の南にあり、嶋津孝久公・源
 頼朝公御子孫なり、大仲公ふとん石社せんにあり、御社黒

塗極彩色なり、

第 12 図



(大仲公社絵図)

第 13 図



(南泉院絵図)

なんしゆいんば、通り図東照大権現公の社門にすい人あり、あをいの御紋黒ぬり極さいしき結構也、毎月十七日参詣ゆるす、(第13図)

谷山の町はつれ木下角きのしたかとといふ処あり、赤松の大木の下二五輪の塔あり、両面に公家束帯の像あり、こけむして誰の石碑といふをしらす、大坂の人々此辺に住浪人姿にて世を送るとみへるなり、俗にいゝつたへにハ秀頼たいでうにて町中をあはれあるくとゆふ、殿より仰渡されハ此御人に一切無礼のなきようにとの御触にて人々其なまよいを見候へハにけると云、これ大坂秀頼公なるへしと言合ふ、谷山よいくらゐにはかなわぬといふハ武家にもよらぬやうににけかくれするなり、あへハとちうにても無心をゆいかけこまるといふ事也、上町の地藏堂ハ秀頼公乳母子女老母とあとを(しだひむらひの)とむらひ、堂立朝夕回向を仕たる地藏とも言なり、上町右地藏堂の裏に池の権現とゆふ石墓あり、八ヶ年跡より京絵図人のこつをほり出す、是も大坂人の品者といふ、又下町之上方問屋に木村権兵衛と云人有り、是木村長門守跡系図有といふ、下町納屋通上に山口氏の八百屋あり、真田の末と云、紋六文銭を付也、同所仲丁にかつさや有なり、秀頼

の書物ありといふ、後藤真田の跡武家こう大侍ニあり、紋所も其儘されともいづれを本非とみふをしられつ、入てきゝてもわからず、これハはるか末に召出し扶持せしものとみへるなり、

さつまハキ大やけ

文政四年巳正月廿日くれ六ツ時過より下町の新たなや南角北風に東ましりにて下町中町家のこらず焼はらひ朝六時火しづまり申候、尤怪^(我)家人もなき様子、よく二日御屋かたより施行のかゆにきりめしのよふなるものくださるゝなり、火出し主ハ重房と申候あふらやあぶら紙に火もへ付きうに火のほり屋根へぬけきう火にてかけ付る、此とき荒き問屋にて半町わきへ間もあり候得ともうるたへまはり蔵へ荷物ヲ入申候ものハ蔵に火入てまるやけになり申候、くらの火よく日火しづめ申候へは焼けのこり^(着類)のきるひからみいて申候、あらかとんや中のけいこのこらず上町行屋もたからべ問屋へ付手そうようにてくらし申候、六月より幸行橋西角油屋池田彦七など申候ハ此度類焼ニ付池田二けん重野ゞ三軒上^(にまし)よりまりとんや被仰付候、右之宅江引うつりきちん手雑用ニ而居り申候、尤月々銀四拾匁ツの御かんせう一ケ

年間御さしゆるし御座候、外材木竹繩むしろのるい一さい直上候ものハきひしく御咎メ被成候由^(付)おたやかに候、^(なごやか也)

